

旧山本村の小字名の意味・由来

《山本地区》

【稲荷山】

イナリヤマ。

山本の二ツ山西麓にある小字。二ツ山の西端には「二ツ山堂坂稲荷社」がある。近くの中央道には稲荷橋の陸橋が架かっている。

ここには二ツ山稲荷大明神が祀られており、近くにある石碑などから江戸時代後期に勧請されたものと思われる。山神の石碑もある。

この稲荷社は日本民俗大辞典のいう“民俗的稲荷神”に属すると思われるが、「山の神・野神・水神・竜神・祖霊神・御霊神・農耕神・福神・蚕神などの宗教的要因を表出していて、人々の諸願を成就する神となって信仰を集めている」という。

イナリヤマとは「稲荷社のある山」であろう。

国土地理院の2.5万分の一全国地図には、イナリヤマ地名が21カ所に、中・大字として挙げられている。

【二ツ山・三ツ山】

フタツヤマ・ミツヤマ。

二つの山は、国道153号線と中央道を挟んで、南北に位置している。小字になると、二ツ山は南側にあるのに、フタツヤマ小字は北側にもある。

フタツヤマとは、「峰が二つになっている山」で、ミツヤマとは「峰が三つある山」であろう。

大和の二上山や近江の三上山のように、神の山として信仰の対象になっていたのかもしれない。

国土地理院の全国地図にはフタツヤマ地名は17カ所、ミカミヤマ地名は7カ

所に、中・大字として記載されている。

【六千洞】

ムチボラとしたい。一般的にはロクセンボラになるが、たくさんの洞があるほど複雑な地形ではないので、ロクセンボラでは意味がわからない。そこで、ムチボラとしたが、どうであろうか。土地の人でないと正解はでないと思われる。

ムチボラとは何か。語源辞典に依りながら、あやしいながら二説を挙げておきたい。

①ムチ←ウツと転訛した語で、「ウトウ型の谷」をいう。すなわち、「地溝状の狭い谷」のこと。これが正しいとすれば、ムチボラとは、「地溝状の谷があるところ」になる。確かに、この小字には、楔形の谷ではなくて、平行線に仕切られたような谷がある。

②ムツ←ムチと転じたか。ムツは動詞ムツケル(憤)の「衰弱する」から「湿地」を意味する。ムチボラとは、「湿地のある小さな谷のある所」であろうか。

双方とも、やや無理気味の解釈であることが気になる。

全国地図には、ムチボラ地名もロクセンボラ地名も載っていない。

【斧取】

ヨキトリ。

ムチボラ小字の北西隣にある小さな小字で、緩傾斜地になっていて、現在は大部分が果樹園になっている。

ヨキトリとは何を意味するのであろうか。これも語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ヨキは動詞ヨキル(過)の語幹から、「横に切れた地形」をいう。トリは動詞トル(取)の連用形が名詞化した語で、「切り取られたような地形」を意味する。従って、ヨキトリとは、「(河川によって)横に切り取られたような崩壊地」をいう

のであろうか。

②トリートロと転じた語で、「緩傾斜地」をいう。すなわち、ヨキトリとは、「横(水平方向)に切られたようになっている緩傾斜地」とも考えられる。

なお、ヨキトリ地名も、オノトリ地名も全国地図には記載が無い。

【コツカ山】

コツカヤマ。

この小字は三ツ山の南東麓にあるほぼ平坦な住宅地になっている。

コツカ山とは何か。これも語源辞典を参考に二説を挙げたい。

①コツカヤマとは、コ(意味のない接頭語)・ツカ(丘)・ヤマ(山林)で、「少し高くなっていて、山林のあるところ」であらうか。

②コツカはコツ(コト。異)・カ(処)で、「周囲とは著しく相違する地形」をいうか。コツカヤマとは、「周囲とは異なった地形を有する山林地」か。周囲と異なっているのは周辺が凹凸のある山地と川べりであるのに、ほとんど平坦な広い土地であることをいうものと思われる。

全国地図には、コツカヤマ地名もなぜか、載っていない。

【石原山】

イシハラヤマ。

この小字は、三ツ山の南西側傾斜地にある。

イシハラ=イシワラで、「小石の多くある平地」(広辞苑)で、この小字のように傾斜地には、この解釈は当てはまらない。そうすると、ハラは「未墾の入会草刈地」(語源辞典)であらう。

イシハラヤマとは、「たくさんの小石がある入会草刈地になっている山」であらうか。

イシハラヤマ地名は、全国地図には載っていない。ハラとヤマの矛盾のせいで

あろうか。

【新田原】

シンデンバラ。

この小字は、三ツ山の南西側山麓の平地にある。

シンデン(新田)とは、「新たに開墾した田地。特に江戸時代のものをいい、中世以前には墾田という」(広辞苑)とある。

シンデンバラとは、「(江戸時代に)新たに開墾された田地のある平坦地」をいうのであろう。

全国地図には、シンデンバラ地名が4カ所に、中・大字として記載されているが、宛てられている字は全て「新田原」となっている。

【カスガイ城】

カスガイジョウ。

この小字は、三ツ山の南側にある、標高701.1mの山頂とその周辺部にある。

カスガイジョウとは、文字通り、「カスガイ(鎧)になっている城」を意味するものと思われる。

いずれも久米ヶ城の支城と思われるが、三ツ山や二ツ山の山砦や麦種城のカスガイになっていた城を意味すると思われるが、どうであらうか。

全国地図にはカスガイ地名は4カ所に中・大字として挙げられているが、カスガイジョウ地名は無い。

【洞田】

ホラダ。

この小字はイナリヤマ小字の西隣にあり、国道153号線と中央道に跨がっている。平地が削り取られたようになった、小さな谷である。現在は、ほとんどが水田と住宅地になっている。

ホラダ(洞田)とは、「谷間の水田」(国語大辞典)である。それほど難しい地名ではない。

ただ全国地図にはホラダ地名は1カ所

に挙げられているだけである。ホラは伊那谷で使われているほどには、他の地域では多くはないのであろうか。

【ナギシリ】

ナギシリ。

この小字は、一つはバクシュジョウ光字の南端と、もう一つは広大なナカハラ小字とキネハラ小字の間にある。また、ナギジリ（ナギ尻）小字もある。

ナギ（薙）は、「山で薙ぎ落としたように崩れた地点」（広辞苑）をいう。シリは「後部」だから、ナギシリとは「崩壊地の下の方の部分」を意味する。土砂が崩れて堆積しているようなところを示すのであろう。

全国地図には、なぜか、ナギシリ地名もナギジリ地名も載っていない。

ナギシリ地名は、伊那谷（南部）特有の地名である可能性が高い。

【麦種城】

ムギタネジョウかバクシュジョウ。どちらともいえない。呼び方と絡んで由来・解釈も難しい地名になっている。

この小字は台地上にあり、久米ヶ城の支城のあったところと思われるがそれ以上のことは不明である。

「麦種城」とは何か。語源辞典を参考にし、敢えて二説を挙げたい。

①語呂はよくないが、ムギタネジョウであろうか。ムキタネジョウが転訛したのではないだろうか。ムキは動詞ムク（剥）の連用形が名詞化した語で、「むき出しになっていて良く見えること」をいうか。タニはタニ（谷）で、深い堀の役割をしていたのであろう。以上から、ムギタネジョウとは、「むき出していて周辺の谷がよく見える城」の意とすることもできるか。

②語呂のいいバクシュジョウはどうだろうか。バク←ハグ（剥）で「崩崖」のこ

と。シュ←ス（砂）と転じたか。すなわち、バクシュジョウとは「崩崖もある砂地の城」となる。この小字の南端には、上記のナギシリ小字があつて、崩崖のあったことを示している。

全国地図には、ムギタネジョウ地名はもちろんのこと、バクシュジョウ地名も記載は無い。

【桧沢】

ヒノキザワ。

二ツ山の西方にある広い小字である。この小字の間を桧木沢川が流れている。おそらく、小字発生の方が川名の誕生より時期的には早いのではないだろうか。

ヒノキザワとは何を意味しているのであろうか。これも語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①ヒノキザワは、ヒ（樋で水路）・ノ（助詞）・キハ（際）で、サハは「谷」のこと。すなわち、ヒノキザワとは、「近くに流水がある谷」を意味する。

②ヒノキはヒ（樋）・ノキ（抜）で「流水による崩壊のあったところ」で、ヒノキザワとは、「川が削って崩壊しているところのある谷」をいうか。

③ヒノキザワとは、「植物のヒノキが自生している谷」か。もっとも弱い解釈と思われるが、どうであらうか。

全国地図には、4カ所にヒノキザワ地名が、中・大字として挙げられている。

【鳴の子トコロ】

シギノネドコロ。

「麦種城」小字の西隣で、桧木沢川左岸にある。

シギはチドリ目シギ科の鳥の総称で、種類によって旅鳥であったり、冬鳥であったりする。とにかく種類が多い。

シギノネドコロとは、「シギが眠る所」を意味するものと思われる。この地名発生時には、ここでシギが群れていたのでは

あろう。

全国地図には、シギノネドコロ地名は記載が無い。

【狐塚】

キツネヅカ。

この小字は、桧木沢川右岸にある。円墳のあったところで、大正年間に石を採取するために発掘破壊されたという（山本村誌）。

どこにでもある小字であるが、もともとは、狐を神としてまつた祭場としての塚で、狐に対する信仰が基礎になっていた。その後、稲荷信仰の流布とともに狐塚に稲荷社がまつられるようになり、動物としての狐に対する信仰が薄れたという（民俗大辞典）。

この山本の狐塚も稲荷社以前の信仰であったということか。狐塚が本来は田の神の祭場であったともいう（柳田國男）。

キツネヅカとは、「田の神としての狐を祀る祭場であった塚のあるところ」であろうか。

キツネヅカ地名は、全国地図に、中・大字として4カ所に挙げられている。

【ク子ノ花】

クネノハナ。

この小字は中央道に沿うキツネヅカ小字の西側にある。現在、周辺は水田が多く、住宅地にもなっている。

クネノハナとは何を意味しているのか。とりあえず、三説を挙げておきたい。

①長野縣方言辞典によれば、クネとは、飯田・下伊那では「垣根」を意味する。この方言を活かすとすれば、クネノハナとは、「垣根に咲いた花のある所」となるが、これでは地名にはなりにくい。それでも敢えて挙げておきたい。

②クネは静岡県田方郡では「猪垣」をいう（語源辞典）。ハナはハナ（鼻）で「先端部」を指す。クネノハナとは「猪垣が

伸びてきている先端部」をいうか。この解釈には、可能性がある。

③クネには「山腹で峰のような所」（愛知県北設楽郡）をいうこともある。単純な湾曲ではなく、垂直方向の「凹凸に富んだ状態」を示す（以上は語源辞典）。クネノハナとは「山腹の緩傾斜地で少し高くなった丘の先端部」を意味するか。実際に、この小字はちょっとした高みになっている。

全国地図には、クネノハナ地名は無いが、クネ地名は3カ所にある。

【原田】

ハラダ。

この小字は、クネノハナ小字の北隣にあり、ほとんどが水田になっている。

ハラダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ハラはハラ（開）で「開墾地」のこと。ハラダとは「開墾地が水田になった所」であろうか。

②ハラはハラ（腹）で、傾斜の緩い山腹をいうのかもしれない。ハラダとは「緩傾斜地にある田んぼ」か。

全国地図には、ハラダ地名は74件も中・大字として記載がある。宛てられている字は73カ所で「原田」になっている。

【七ツ田】

ナナツダ。

キツネヅカ・ハラダ・クネノハナの小字に囲まれた小さな小字である。

ナナツには「たくさん」の意もあるが、これだけ面積が小さいと、これを活かすのは難しい。

では、ナナツダとは何を意味しているのでしょうか。これも語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

ダは「田」か「処」であるが、どちらとも決めがたい。

①ナナツは美称で、ナナツダとは「おめでたい田(処)」か。ただし、その理由は不明。この解釈もはっきりはしない。

②ナナはナナメ(斜)の下略形、ツはノ(助詞)とする。ナナツダとは、「傾斜地」あるいは「傾斜地にある田んぼ」であろうか。

全国地図にもナナツダ地名は記載が無い。

【原畑】

ハラハタ

桧木沢川右岸の広大な面積を有する小字である。

検地が行われると、畑などの等級が決められた。畑の等級は、下川路では、上畑・中畑・下畑・原畑に分けられている(川路村誌)。山本のそのような等級の分け方が行われていたのかもしれない。

ハラハタとは「原畑に該当するような肥沃で無い畑の多い所」ではなかったかと思われる。

全国地図には、ハラハタ地名は5カ所に、中・大字として挙げられている。

【頭ナシ】

カシラナシ。

この小字は大明神原の南側、桧木沢川上流部の左右両岸に、一カ所ずつある。

カシラナシとは何を意味するのであろうか。語源辞典に依りながら三つの解釈を挙げたい。

①カシラは「川などの上流」をいい、ナシは動詞ナス(成)の連用形が接尾語にかわり「～になった所」の意。従って、カシラナシとは「川の上流部になっている所」を意味するか。

②カシラはカシ(傾)・ラ(「場所」を示す接尾語)で、「傾斜地」を意味する。カシラナシとは、「傾斜地になっている所」かもしれない。

③ナシをナラシ(平)の転じた語とする

と、カシラナシは「川の上流部の緩傾斜地」となる。この解釈も可能性はある。

全国地図には、カシラナシ地名は4カ所にあるが、ズナシ地名は無い。

【殿垣外】

トノガイト。

ヒノキザワ小字の南西となりにある。

トノガイトとは、当然のことながら「貴人の邸宅のあった所」と解釈すべきではあるが、別解も示しておきたい。

トノはタナ(棚)の転じた語で(語源辞典)、トノガイトとは「棚状の段丘で屋敷のあった所」という解釈も、可能性がないわけではない。近くにはタナダ(棚田)小字がある。

全国地図には、トノガイト地名は中・大字として、10カ所に挙げられている。

【北垣外】

キタガイト。

この小字はトノガイト小字の北隣にある。

キタガイトとは、「北側にある邸宅跡」であろうが、トノガイトを貴人の邸宅跡と解すれば辻褃は合う。この関連した二つの垣外小字は「トノ=貴人」説を支持する傍証になるかもしれない。

キタガイト地名は、全国には、中・大字として10カ所に挙げられている。

【前田】

マエダ。

この小字は、キタガイト小字の南西隣にあり、現在でも水田が多い。

マエダ地名はどこにでもあり、全国地図には、139カ所で、中・大字として記録されている。

マエダとは、「何かの前方にある田んぼ」をいう。何にがいとうするのは、ここでは「北垣外」小字をいうのであろう。

【灌場】

タキバ。

この小字は、マエダ小字とキタガイト小字の南西隣にある。

タキバ小字は伊那谷南部には多いが、全国地図には1カ所に記載があるだけで、宛てられている字も「滝馬」となっている。これも伊那谷に特有の小字であろうか。

タキバとは「谷川の流の激しい場所」であろう。この小字の周辺には屋敷跡を思わせる小字が多い。今までは「滝修行の行われた所」と解してきたが、少し修正の必要があるかもしれない。

【石曾根・石曾根前田】

イシソネ・イシソネマエダ。

イシソネ小字は、マエダ小字とシンメイガイト小字の間にあり、イシソネマエダ小字はそのイシソネ小字の下流側にある。

イシソネ小字も伊那谷南部のあちこちにある。

ソネは「いそね（石根）の略。石まじりの痩せ地」（広辞苑）である。その通りの土地であろうと思われる。あるいは、山本の「石曾根」はイソネと呼んでいるのかもしれない。

それにしても、「石曾根前田」が気になる。これを素直に読めば「石曾根という小字の前方にある水田」という意味になるが、イシソネに基準になるような建物か何かがあったのだろうか、という思いにとらわれる。イシソネには、そうした“大事なところ”という意味は含まれていない。だが、地名発生当時、イシソネといえはすぐ理解できるような何か大事なものがあって、それが忘れられているということなのかもしれない。

【北原】

キタハラ。

この小字はキタガイト小字のさらに北側にある。

キタハラとは何か。二説を挙げる。

①ハラはハラ（開）で「開墾地」をいう（語源辞典）。キタハラとは「北の方にある開墾地」を意味するか。南の方には、キタガイト・トノガイト・シンメイガイトなどの小字があり、方角の基点になっているものと思われる。

②キタ←キダハシ（階）と下略した後も考えられる。キタハラとは、「階段状になっている開拓地」と取れないこともない。広大な緩傾斜地の一部にある。

全国地図には、キタハラ地名は91カ所と多い。

【野井】

ノイ。

キタハラ小字の西隣にある。現在、一部は居住地になっている。

ノ（野）は、「自然の広い平地。多く、山すその傾斜地。のら」と広辞苑にはある。

ノイ（野井）は、字面通りに解釈して、「山すその緩傾斜地で、川が流れている所」で間違いはないであろう。流水は東原沢川の上流部になっている。

全国地図に挙げられているノイ地名は5件と意外に少ない。単純で意味のはっきりしている小字と思うのであるが。

【若林】

ワカバヤシ。

広大な山本北平の緩傾斜地の西端にある。現在は主に、果樹園、畑、桑園などになっている。

ワカバヤシとは何を意味するのか。これも語源辞典によりながら、二説を挙げる。

①ワカは形容詞わかい（若）の語幹で、「新しい」の意。ハヤシは「植林した所」をいう（水窪）。以上から、ワカバヤシとは「新しく植林した土地」をいうのであろうか。

②ワカ（若）には、「みずみすしい」意味もあって「湿地」をいうこともある。ハヤシは「原野」のことか。すなわち、ワカバヤシとは、「しけっぼい原野」を意味するのであろうか。この小字には、桧木沢川が東端を、観音沢川が西端を、真ん中を東原沢川が流れている。

全国地図には、ワカバヤシ地名が36カ所にあり比較的が多い。

【家ノ軒】

イエノノキ。

二ヶ所にある。一つはワカバヤシ小字の南隣にある。隣にシャクヤノキ小字あり、小さなノキ小字が並んでいる。もう一つはイシソネマエダ小字の南隣にある、これも小さな小字である。

イエノノキとは何か。語源辞典に依って三説を挙げる。

①イエはイへ（家）で、「家屋」のこと。ノは助詞。ノキは「家の裏手の土地」（伊那郡、水窪）をいう。イエノノキとは、「家屋の裏手の土地」をいう。一般的な解釈であらう。

②ノキは動詞ヌク（抜）の連用形が名詞化した語。イエノノキとは、「家屋が土台ごと崩れ落ちた所」であらうか。隣のナガヤノキとも関連するか。

③イエは井（井）・エ（江）で「水汲み場」と考える。イエノノキとは、「水汲み場が崩壊した所」も考えられる。

全国地図にはイエノノキ地名は記載が無い。

【長屋軒】

ナガヤノキ。

イエノノキ小字の西隣に並んでいる小字で、イエノノキ小字よりも少し横に長い。

ナガヤノキとは何か。三説を挙げる。

①ナガヤとは「棟を長く建てた家。細長い形の家」（広辞苑）である。一般的な解

釈に従えば、ナガヤノキとは「細長い形の家の裏手にある所」となる。“細長い形の家”とは南の下流側にあるシンメイガイ小字にあった建物をいうのであろうか。

②ノキをヌキ（抜）の転じた語であるとすると、ナガヤノキは「細長い形の建物があった所で、土台とも崩れた土地」となる。

③ナガヤはナギ（薙）・ヤ（野）が転じた語であらうか。とすれば、ナガヤノキとは、「崩壊地のあった所で、更に崩れた土地」になる。この付近は崩れやすいところだったということも考えられる。

ナガヤノキ地名は、全国地図には載っていない。

【借家畑】

カリヤバタ、あるいはシャクヤバタの可能性もある。

この小字はナガヤノキ小字の北西、上流側にある。現在、一部は建物に、大部分は荒地になっている。

カリヤバタとは何か。字面通りに考えれば、「借家をしていた人が耕作していた畑」となるが、この地に借家があって、それが地名になっているとは、考えにくい。では、カリヤバタとは何であらうか。あるいは、シャクヤバタかもしれない。ともかく、二説を挙げておきたい。

①カリは動詞カル（刈）の連用形が名詞化した語で「草木を刈り払った所」（語源辞典）をいう。ヤはヤ（野）で、「山すその傾斜地」（広辞苑）のこと。バタはハタ（端）であらうか。以上から、カリヤバタとは「焼畑が行われた山すその緩傾斜地の末端部」であらうか。

②シャクヤバタであったらどうなるか。シャクヤはシャ・クヤが転じた語か。シャは動詞シャル（曝）の語幹で「崩壊地形」をいい、クヤは動詞クヤス（崩）の

語幹で、これも「崩壊地形」を示す。以上から、シャクヤバタとは、「崩壊地の末端部」を意味するか。

全国地図には、カリヤバタ地名もシャクヤバタ地名は記載が無い。

【千鳥畑】

チドリバタ。

この小字は、シャクヤバタ小字と観音沢川に挟まれている。

チドリバタを「千鳥がよく来る畑」であるとするのも、地名としては考えにくいので、他に二説を挙げる。

①チドリはチ(千)・トリ(鳥)で「たくさんの小鳥」の意か。バタはハタ(端)で「末端部」であろうか。チドリバタとは「小鳥がたくさんやってくる斜面の末端部」とすることはできないだろうか。西隣の赤山山地には鳥屋場であったのかもしれない。

②チはフチ(縁)の上略形で、「段丘の縁」をいい、トリはトロの転で「緩傾斜地」をいう(以上は語源辞典)。すなわち、チドリバタとは、「段丘の末端部になっている緩傾斜地」を意味するかもしれない。

チドリバタ地名も全国地図には無い。

【赤山・赤山洞】

アカヤマ・アカヤマボラ。

山本北平の大明神原の西端を画する山地にある。

アカヤマとは、字面のとおりで、「赤土に覆われたところの多い山」であろうか。アカヤマボラとは、「赤山にある小さな谷」をいう。

アカヤマ地名は、全国地図に、8カ所の記載がある。珍しい地名ではない。

【金比羅横】

コンピラヨコ。

北平大明神原の西端にあり、チドリバタ小字とカンノンザワバタ小字に挟まれている。観音沢畑には北御堂があり、そ

こに嘉永六年建立の金比羅大権現の石碑がある。

コンピラヨコとは、文字通りで「金比羅大権現を祀ってある土地の横」を意味するのであろう。

国土地理院の全国地図には、コンピラヨコ地名は記載が無いが、コンピラ地名は5カ所に挙げられている。

【紙屋敷】

カミヤシキ。

カミヤバタ小字とともに、カンノンザワバタ小字の南東側にあり、シンメイガイト小字と観音沢川との間にある。

カミヤシキとは何か。三説を挙げる。

①一般的な解釈によれば、カミヤシキとは、「紙の製造・販売を営んでいた屋敷のあったところ」となる。実際に、紙漉きをしていたかどうかは明らかではないが、広く製造された紙を集め販売していた業者であったろうと思われる。

②シキは動詞シク(頻)の連用形が名詞化した語で、「段丘」をいう(語源辞典)。カミヤシキとは、「紙屋のある棚状の段丘」をいうのかもしれない。

③隣には北御堂がある。あるいは、この御堂と関わる「カミ(神)に繋がる屋敷があった所」かもしれない。祀られていたのは観世音菩薩を思われるが、神仏習合の時代に生まれた地名である。ありえない話ではない。

全国地図には、カミヤシキ地名は22カ所に挙げられているが、宛てられている字は、「上屋敷」が18カ所、「神屋敷」が4カ所となっている。

【ワル田】

ワルダ。

この小字はトノガイト小字とタナダ小字に挟まれている。現在は住宅地と畑になっている。

ワルダとは何を意味しているのか。語

源辞典を参考にしながら二説を挙げる。

①ワルは動詞ワル(割)に関連し、「割れたような裂けた状態」をいう。ダはタ(処)で「場所」を示す接尾語。すなわち、ワルダとは、「土砂などの堆積で割れたようになっていた所」であろうか。はっきりしないが、下流側にあるので、裂けて崩壊した状態ではないだろう。地名発生時に土石流があったのかもしれない。

②ワルは形容詞ワル(悪)の語幹で「痩せ地」を示す。ワルダとは「よくない土地」をいうか。水田にできなかった土地をいうのかもしれない。

全国地図には、ワルダ地名は一つもない。おめでたい地名ではないからであろうか。

【三反田・二反田】

サタンダ・ニタンダ。

これらの小字は、山本北平の広大な緩傾斜地の下流側にある。

いずれも面積を表していると思われる。現在でも、ニタンダ小字はほとんど水田になっており、サタンダ小字は一部が畑で他は水田である。

全国地図には、ニタンダ地名が16カ所、サタンダ地名が7カ所、中・大字として記録されている。

【南前田】

ミナマエダ。

この小字はイシソネマエダ小字とカミヤシキ小字に挟まれている。

ミナマエダとは、字面通りで「南の方にある前田」を意味するのであろう。北側にはマエダ(前田)小字がある。

【神明垣外】

シンメイガイト。

この小字はイシソネ小字とカミヤシキ小字の間にある。

シンメイガイトとは「神明社があったところ」であろう。しかし、その痕跡が

残っているのかどうか。神仏習合の時代には、各地に勧請された伊勢神宮の末社は明治になって、すべて排除されたという。現在、何も見えてこないのはその結果であろうか。

全国地図には、シンメイガイト地名は無いが、シンメイ地名は36カ所に残っている。

【榎林】

マキバヤシ。

この小字は二ヶ所にある。一つは中央道と国道153号線の間であり、もう一つは北の方の、トノガイト小字に囲まれた小さな小字である。

マキバヤシとは何か。二説を挙げる。

①マキはマキ(牧)で「牧場」のこと。ハヤシは水窪で使われているように「植林地」か(語源辞典)。マキバヤシとは「牧場であったが、植林された所」をいうか。現在は、住宅地と田んぼと畑で三分されている。

②マキ(榎)は「立派な木」を意味し、「建築材料の最上の木の意。多くはヒノキの美称」であるという(以上は広辞苑)。マキバヤシとは、「マキが自生して林になっていた所」であろうか。

不思議なことに、マキバヤシ地名は全国地図には載っていない。

【乳母田・姥母田】

ウバタ。

「乳母田」小字はこれもトノガイト小字に囲まれている、東原沢川左岸の小さな小字であり、「姥母田」小字は観音沢川右岸の久門地山山麓にある。

ウバタとは何をいうのだろうか。分かりにくい地名である。三通りの解釈を示したい。

①字面の通りとすれば、ウバダとは「ウバ(乳母)への謝礼として貸し与えた水田」であろうか。この地域で、こうした

ことが行われたことがあったのかどうか
も未確認。

②田んぼの収穫物をウバガミ（姥神）を
祀る費用に当てたということも考えられ
る。水神信仰と関わりがあるとされてい
るが、この地に、貴い御子を養育する乳
母（姥）にまつわる伝承の痕跡があるの
かどうか。

③ウバは動詞ウバウ（奪）の語幹で「崩
壊地形」を示す（民俗地名語彙事典）。つ
ずれば、ウバタとは「崩壊したことのあ
る田んぼ」を意味する。

全国地図には、ウバタ地名は1カ所に
だけ中・大字として挙げられており、「姥
田」の字が宛てられている。

【稲荷尻】

イナリジリ。

中央道添いの北西側にあり、東隣には
キツネヅカ小字があり、さらに東方 450
mほどのところには稲荷社がある。

イナリジリとは何か。三説を挙げる。

①イナリジリとは、字面通りに考えれば、
「稲荷神を祀った所の末端部」か。しか
し、こうした場合に、シリ（尻）の語を
使うだろうかという疑問はある。

②イナリはイ（接頭語）・ナリ（均）。イ
は語調を整え、意味を強める接頭語で、
ナリは「緩傾斜地」をいう（以上は語源
辞典）。以上から、イナリジリとは、「緩
傾斜地の末端部」になる。

③イナリはイ（井）・ナ（土地）・リ（場
所）を示す接尾語。ジリは「湿地」をい
う（以上は語源辞典）。すなわち、イナリ
ジリとは「川に沿った湿地」を意味する。

全国地図には、イナリジリ地名は記載
が無い。

【百田】

ヒャクダ。

この小字は、「麦種城」西側、桧木沢川
右岸にある。緩傾斜地で、ほとんどが棚

田状の水田になっている。

ヒャクダとは何を意味するのか。これ
も二説を挙げたい。

①ヒャクは数が多いことをいう。ヒャク
ダとは「たくさん水田がある所」か。

②ヒャク←ビャクと転じたもので、「山崩
れ。崖」をいう（語源辞典）。ヒャクダと
は「崩壊地のある水田地帯」という可能
性もある。隣にはナギジリ小字がある。

全国地図には2カ所に中・大字として、
ヒャクダ地名が挙げられており、いずれ
も「百田」の字が宛てられている。

【大田】

オオタ。

ヒャクダ小字の下流側にある小さな小
字である。

オオタも分かりにくい小字である。語
源辞典に依りながら、二通りの考え方を
示したい。

①オオタはオホ（大）・タ（処）で「重要
な所」を意味するという。しかし、ここ
で何が重要なのかははっきりしていない。

②オオタ←アフ（アブ）・タ（処）と転じ
たもので、「崩崖」をいう。隣にナギジリ
小字があるので、崩れた所があったこと
は、はっきりしている。

全国では、162カ所にオオタ地名が
中・大字として挙げられている。

【保田添】

ホダゾイあるいはボタゾイ。

この小字は桧木沢川とその支流に三方
を囲まれている。

ホダといえば、この地域でも、囲炉裏や
カマドなどで燃やす木材などをいういが、
この場合は、通らない解釈になってしま
う。ホダゾイとは何を意味するのか。

ホタ（ホダ）は、「土手。畦畔」をいう
（語源辞典）。特に水田と接する畑地では
ホタが崩れないように気を配ったという
（民俗地名語彙事典）。

ホダゾイとは、「畑に接した畦畔のある水田」としておきたい。

全国地図には、ホダゾイ地名もホタゾイ地名も記載されていない。

【石塚】

イシヅカ。

この小字は山本に三ヶ所にあり、うち二ヶ所は近くにあり、小字発生時には繋がっていたと思われる。三ヶ所目は南西方向に500mほど離れたところにある。

「いずれも塚の形がない、開墾または耕作中に出てきた石を集積した塚から起こった地字である」（山本村誌）という。その通りと思われる。

全国地図には、24カ所に中・大字として挙げられている。

【平沢・平澤】

ヒラサワ。

二つの小字は繋がっており、桧木沢川支流と観音沢川の間にある。

ヒラサワとは何か。ヒラには「平坦地」と「坂」の二つの意味があるが、ここでは「緩傾斜地」としておきたい。

とすれば、ヒラサワとは「緩傾斜地で流水のある所」となるか。

全国では、ヒラサワ地名は、中・大字として65カ所にも挙げられている。一般的な地名といえようか。

【平岩】

ヒライワ。

この小字は二ヶ所にある。一つは、ヒラサワ小字の南隅にある小さな小字で、もう一つは少し大きい。ヒラサワ小字の北西隅にある。

ヒライワとは「表面が平らで、板のような岩」（国語大辞典）であるという。だから、ヒライワ小字の意味は「表面が平らで板のような岩があった所」であろうか。

ヒライワ地名は、全国地図には、22カ所にあり、意外に多いように思われる。

【四通り田】

シトオリダ。

この小字は国道153号線の東側で、観音沢川左岸にある。現在は住宅地になっている。

シトウリ＝シトリで、シトリダとは何か。二通りの解釈を挙げておきたい。

①シトオリダはシトリ（倭文）・ダ（処）で、シトリは古代の織物の一種で梶の木や麻などで筋や格子を織り出したものだという（国語大辞典）。以上から、シトリダとは、「古代のシトリ織の名残のある土地」であろうか。織物を作り出していたのか、原料を栽培していたのか。わかりにくいことは多いが、可能性はゼロとはいえない。

②シトリはシトリ（湿）で「しめり」をいう（広辞苑）。シトリダとは「しけっぼい土地」か。この小字の長い両端を檜尾沢川支流と観音沢川の二本の川が流れている。

全国地図には、シトオリダ地名もシトウルダ地名も載っていない。

【竹腰・竹コシ・竹ノ腰】

タケコシ・タケノコシ。

これらの小字は、四カ所、ほぼ中央道付近にある。現在は、ほとんどが畑地と住宅地になっていて、水田は一部にしかない。

タケ（ノ）コシとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①タケはタケ（岳）で「山」のこと。ノは助詞で、コシは「麓」あるいは「付近」をいう。タケ（ノ）コシとは、「久門地山の麓」をいうか。

②コシは動詞コス（漉）の連用形が名詞化した語で「水が湧き出る地」をいう。つまり、タケ（ノ）コシとは「久門地山の水が湧き出る所」であろうか。

全国地図には、タケコシ地名は記載が無いが、タケノコシ地名は2カ所にある。

【石粒】

イシツブ。

この小字は中央道沿いの北側にあり、トノガイト小字の西隣になる。

イシツブとは何か。語源辞典に従いながら二説を挙げたい。

①ツブは動詞ツブ（禿）の連用形ツビが転訛した語で「ちびた状態。すり切れた様子」をいう。イシツブとは「摩滅した石の多いところ」をいうか。観音沢川の上流から激しく流下した土石の石が堆積した所であろうか。

②あるいは、逆に浸食を受けた所かもしれない。ツブは動詞ツブル（潰）の連用形が名詞化した語で、「崩れ地」をいう。すなわち、イシツブとは、「石の多い崩壊地のあった所」であろうか。

全国地図には、イシツブ地名は無い。

【廣田】

ヒロタ。

イシツブ小字の南西側の隣にあり、タケ（ノ）コシ小字群の中にある小さな小字である。

ヒロタとは何か。小さな面積だから、「広い田んぼ」ではない。では、何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①ヒロはヒロ（従）で「低い地」をいう。タは接尾語タ（処）。ヒロタとは「少し周辺より低いところ」か。広い緩傾斜地にあり、少し凹んでいたのかもしれない。

②ヒロはヒラ（平）の転じた語で「緩傾斜地」をいう。ヒロタとは、「緩い傾斜地になっている所」とも解することができる。

ヒロタ地名は、全国地図に中・大字として25件が挙げられている。

【棚田】

タナダ。

山本の北平のタナダ小字は四カ所に分散している。全てが広大な緩傾斜地にある。

タナダとは「山腹などの傾斜地に作られた段丘をなす水田」（国語大辞典）であるという。北平の四カ所のタナダ小字には、現在、水田はない。ほとんどが住宅地になっている。

北平のタナダとは「扇状地の緩傾斜地にある棚状の土地」ということになるか。

全国地図には、タナダ地名は11カ所にある。

【紙屋畑】

カミヤバタ。

東隣にはカミヤシキ（紙屋敷）小字があり、上流側には北御堂がある。そして観音沢川がすぐ西側を流れている。

カミヤバタとは何か。語源辞典によりつつ三説を挙げたい。

①文字通りで、カミヤバタとは「紙を製造販売するところで栽培している畑」であろうか。

②カミはカミ（神）で「神聖な地」、ヤバタ←ヤハ（柔）・タ（処）で「湿地」のこと。以上から、カミヤバタとは「神聖な土地でもある湿地」を意味するか。

③カミは動詞カム（噛）の連用形が名詞化した語。カミヤバタとは「観音沢川に激しくえぐられたことのある湿地」かもしれない。

カミヤバタ地名は、全国地図には無い。

【観音沢・観音沢畑】

カンノンザワ・カンノンザワバタ。

カンノンザワ小字は二ヶ所で、いずれも観音沢川右岸にあり、カンノンザワバタ小字は左岸にある。

近くには北御堂があり、観世音菩薩が祀られていたという。

カンノンザワとは「観音様が祀られていた土地を流れる沢筋」を意味するのであろう。カンノンザワバタとは「観音沢川の沿岸にある畑」、あるいは「観音沢川の沿岸」であろう。ハタは「畑」か「端」のどちらかはっきりはしない。

全国地図には、カンノンザワバタ地名は無いが、カンノンザワ地名とカンノンザワ地名がそれぞれ2カ所ずつ記載されている。

【所家田】

ショケダ。

この小字は、久門地山と観音沢川に挟まれていて、現在はほとんどが水田になっている。

ショケダとは聞き慣れない地名であるが、同名の小字は三穂にもある。

ショケダとは何か。ショ←シホ←シオと転訛した語で、シオは動詞シオル(霑)の語幹で「濡れ湿った状態」すなわち「湿地」をいい、ケダはキダ(刻)が転じた語で「段差のある所」をいう(以上は語源辞典)。

以上から、ショケダとは「棚田状になっている湿地」を意味する。

全国地図にはショケダ地名は記載が無い。これも伊那谷南部固有の小字であろうか。

【砂田】

スナダ。

北平にはスナダ小字が二ヶ所にあり、二ヶ所のカンノンザワ小字と、方言でいえば、いれいちになっている。

スナダとは、字面の通りで「砂地の田んぼ」か「砂地の土地」であろう。

全国地図にはスナダ地名は16カ所に、中・大字として挙げられており、すべてに「砂田」の字が宛てられている。

【石原・石原田・石原前田】

イシハラ・イシハラダ・イシハラマエ

ダ。

いずれも中央道にほぼ添って、その西側にある。イシハラ小字は棚田で面積も小さくはないが、イシハラダ小字もイシハラマエダ小字も非常に小さい。

イシハラは「小石の多い緩傾斜地」、イシハラダは「小石の多い水田(または土地)」、イシハラマエダは「イシハラ小字の下流側の土地」を意味するのであろうか。

全国地図には、イシハラ地名は78カ所にあり、イシハラダ地名は4カ所にある。

【観ノ森】

カンノモリ。

北平には、この小字は二ヶ所にある。いずれも北東側の上流にはカンノンザワ小字がある。現在は水田と住宅地になっている。

カンノモリとは何か。二説を挙げる。

①カンノモリ←カンノンノモリ(観音ノ森)と転じたものか。モリは神聖な場所である。カンノモリとは「観音菩薩に関わる神聖な森のあった所」か。カンノモリを「神ノ森」の転じた語と解しても同じ意味になる。

②カンノモリはカム(噛)かカマ(釜)の転じた語で、「浸食された地形」をいう(語源辞典)。カンノモリとは「川に浸食されたが神聖な森のあった所」であろうか。

全国地図には、カンノモリ地名は記載が無い。

【栃ヶ洞】

トチガホラ。

観音沢川右岸になるが、久門地山に食い込んでいる谷である。

トチガホラとは何か。二説を挙げる。

①トチノキは日本各地の温帯や低山帯に生え、高さ30m位になる落葉高木。種子は晩秋に熟し種子は食用とする、とい

う(牧野植物図鑑)。トリガホラとは、この「高木で目立つトチノキが自生している洞」であろう。

②トチは動詞トヅ(閉)と関係し、「山などが取り囲んだ所」という(語源辞典)。トチガホラとは「山に囲まれた洞」となる。当然すぎて、果たして地名になるのかどうか、という疑問は残る。

全国地図には、トチガホラは1カ所に、中・大字として挙げられている。

【トドメキ】

この小字は、北平観音沢川右岸の、久門地山山麓に三カ所ある。

トドメキは動詞トドメク(轟)の連用形が名詞化した語であろうが、広辞苑には「とどろくこと」とある。

少し離れているが、観音沢川の川音が轟き響く場所であったと思われる。

全国地図には、トドメキ地名は1カ所にだけ中・大字として挙げられている。この地域のトドメキ小字の数に比して少ないように思えるが、これも伊那谷南部特有の小字であろうか。

【角田】

スミダ。

北平久門地山山麓の水田地帯にある小さな小字である。

スミダとは何か。

スミダはス(砂)・ミ(辺)・ダ(田)か。ミは「場所」を示す接尾語で「辺」の転じた語ではないかという(以上は語源辞典)。以上から、スミダとは「砂の多い田んぼ」であろうか。

全国地図には、スミダ地名は、中・大字として5件が挙げられている。

【アタカ】

この小字は北平久門地山の山麓に沿って二ヶ所に分布している。

アタカとは、ア(接頭語)・タカ(高)で「平地の中の微高地」をいう。アには

意味のない、語調を整える接頭語ではないか、という(語源辞典)。

以上から、アタカとは「緩傾斜地で少し高くなっている所」を意味するものと思われる。

アタカ地名は、全国地図に2カ所が記載されている。

【澤ノ田】

サワノタ。

この小字は、久門地山の山麓にあり、傾斜地も含む場所にあり、現在、一部は水田になっている。

サワノタとは何か。解釈を二通り。

①サワは「山麓の湿地」か。ノは助詞、タは「田」か「処」であろうか。すなわち、サワノタとは「山麓の湿地」あるいは「山麓の湿地にある田んぼ」ということになるだろうか。久門地山の山麓で自然湧水もある所か。

②ノタはノタ(野田)で、下伊那では「山間の湿地」(語源辞典)をいう。サワノタとは「山間の湿地」の意味を重ねた小字であろうか。これも「山麓の湿地」としておきたい。

全国地図には、サワノタ地名は載っていない。

【屋敷田】

ヤシキダ。

北平久門地山の山麓で、クモンジ小字の下流側にある小さな小字である。

ヤシキダはヤシキ(屋敷)・ダ(処)か。ヤシキは「家を造るべき地所」(広辞苑)とすれば、ヤシキダとは「家を造るべき地所だった所」か。

全国地図には、ヤシキダ地名は、5カ所に、中・大字として挙げられている。

【久門地・久門地畑・久門地山】

クモンジ・クモンジバタ・クモンジヤマ。

前二つの小字は、いずれも久門地山の

山麓にある小さな小字である。

クモンジとは何か。二説を挙げる。

①クモンジ←クモンジョと転じた語で、クモンジョ（公文所）とは、荘園制で文書の取り扱い、年貢の徴収に従事した下級荘官のいた役所をいうのであろう。

②クモンジとはクモンジ（公文地）で、下級荘官に与えられていた給地とも考えられる。

クモンジバタとは「下級荘官に与えられた給地としての畑」か。それにしても小さな畑である。

クモンジヤマとは、「下級荘官に与えられた山地」で、刈敷にする草木を採取した山だったのかもしれない。

全国地図には、クモンジョ地名は1カ所あるが、クモンジ地名は一つもない。

【山ノ下】

ヤマノシタ。

北平の久門地山の麓にある小さな小字である。

ヤマノシタとは、字面の通りで「久門地山の山麓の地」を意味するが、久門地山に他の一般の山とは、何か異なるニュアンスを感じていたのかもしれない。

全国地図でも、ヤマノシタ地名は、13カ所で中・大字として記録されている。

【林ノ腰】

ハヤシノコシ。

この小字は、久門地山の麓を300m近く細長く取り巻いている。

ハヤシノコシとは、「樹木の茂っている場所の麓の土地」をいうのであろうか。

ハヤシノコシ地名は全国地図には載っていない。

【沢町張】

サワマチバリ。

北平久門地山山麓の広大な扇状地の西端にある、小さな小字である。現在は住宅地で一部が畑になっている。

サワマチバリとは何を意味するのであろうか。むずかしい地名である。二説を挙げる。

①サワは「流水のあるところ」、マチは「特定の日の人々が集会し、忌み籠もって一夜を明かすこと」（広辞苑）か。ハリはハ（端。縁辺）・リ（「場所」を示す接尾語）で、「縁辺になる所」か（語源辞典）。以上から、サワマチバリとは、「中沢川の岸にあって人々が忌み籠もりをする場所」であらうか。そのための建物もあったと思われるが、どうであらうか。

②マチはマチ（襠）で、袴の内股の部分をいい、「山間のかくれ地」をいう（語源辞典）。サワマチバリとは、「中沢川の川岸にある小さなかくれ地」をいうのであろうか。

もちろんサワマチバリ地名は全国地図にはない。

【番城免】

バンジョウメン。

この小字はサワマチバリ小字の上流側にある。

バンジョウメンとは「バンジョウ（番匠）と呼ばれていた大工に与えられていた年貢課役免除の田地」をいう。

この地方には多い小字名であるが、全国地図には、バンジョウメン地名は、1カ所にだけ、中・大字として挙げられている。

【石田】

イシダ。

この小字は、中央道と国道153号線付近に三ヶ所ある。現在も、ほとんどが水田になっている。

イシダとは、「小石混じりの田（処）」であらう。扇状地の中腹にあり、それほど大きな石は堆積していないのではないだろうか。

イシダ地名は全国では80カ所に、

中・大字として挙げられている。

【清水・清水田】

シミズ・シミズダ。

これらの小字は北平扇状地の西より中腹部にある。シミズ小字が二カ所、シミズダ小字が四カ所にある。

シミズ（清水）は「清い水が湧き出るところ」であろうか。従って、水田が多いので、「清水畑」より「清水田」が多くなっているのだらうと思えた。

しかし、国土地理院の全国地図をみると、シミズ地名は236ヶ所、シミズバタ地名も3カ所が中・大字として挙げられている。

【竹腰前田】

タケコシマエダ。

この小字は、国道153号線を挟んでタケコシ（竹腰）小字の南側にある。扇状地の下流側である。

タケコシマエダとは、字面の通りで、「タケコシ（竹腰）小字の前方にある土地」であろう。前方とは下流側とみていい。

当然であるが、タケコシマエダ地名は全国地図にはない。一般の小字名を二つ重ねて長くしてあるためであろうか。

【中沢・中沢端・中沢畑】

ナカザワ・ナカザワバタ。

ナカザワ小字は二カ所、ナカザワバタ小字は二カ所、それぞれが中沢川沿岸にある。現在はいずれも水田が多くなっていて、一部に畑や住宅がある。

ナカザワとは、「二本の川に挟まれた、少し水量の少ない川」を意味するものと思われる。北には観音沢川が、南には久米川が流れている。その間の川をいうのであろう。

ナカザハバタには、解釈を二つ。

①「中沢川の縁にある土地」であろうか。「端」という字にとらわれた解釈である。

②バタは「畑」かもしれない。ナカザワバタとは「中沢川に沿った畑」をいうのかもしれない。

全国地図には、ナカザワバタ地名は無いが、ナカザワ地名は96カ所も、中・大字として挙げられている。

【社久地・南社久地】

シャクジ・ミナミシャクジ。

これらの小字は、山本の竹佐境にあって、観音沢川と久米川に挟まれており、かなりの面積をもっている。

シャクジ小字も諏訪から伊那谷を中心とした地域に広がっている。全国地図にはシャクジ地名は一件の記載もない。

シャクジは「イシガミ（石神）とは異なる。シャクジ系の社祠・神座の分布からシャクジ信仰の淵源は古代諏訪信仰にかかわるものだとする見方もある」（民俗大辞典）と歯切れが悪い。村境にあるので、オノ神ではないかという説もあるが、山本には他にオノ神もあるし、オノ神の分布の中心は三遠南信にはない。

ミナミシャクジ小字は、シャクジ小字の南側にある。

【畑田】

ハタダ。

この小字は、山本と竹佐の二ヶ所にある。一つは山本の竹佐境に近い、中沢川が久米川に合流する地点にあって二本の川に挟まれている。もう少し久米川の下流の右岸にあるのが、竹佐のハタダ小字である。いずれも、現在は、住宅地と畑と田んぼになっている。

ハタダとは何か。解釈を二つ。

①ハタダとは文字通り、畑と田んぼで「耕作地」をいうか。

②ハタダはハタ（端）・ダ（処）で、「河川の縁、すなわち川の沿岸」をいうか。

全国地図には、ハタダ地名は12カ所に、中・大字として挙げられている。

【ツボガシリ】

中沢川を挟んで、タケコシマエダ小字の対岸にあたる右岸にある。

ツボガシリとは何か。各地にある小字であるが、意味のはっきりしない地名である。

ツボは動詞ツボム（窄）の語幹で「わずかに低くなった窪地」をいうのであろうか。ツボノシリとは、「窪地の末端部」をいうか。その末端部が河川に接しているということかもしれない。

ツボガシリ地名は、全国地図には一件も記載が無い。この小字名も伊那谷に特徴的な地名かもしれない。

【畑中屋敷・畑中前田・畑中前】

ハタナカヤシキ・ハタナカマエダ・ハタナカマエ。

これらの小字は久米川左岸の沿岸添いに並んでいる。ほとんどが、現在は水田になっているが、ハタナカヤシキ小字の上流側は畑が多い。

ハタナカマエダとは「畑中屋敷の前方下流側にある田んぼ(あるいは土地)」で、ハタナカマエは「畑中屋敷の前方、下流側」をいうのであろうか。

では、ハタナカヤシキとは何か。二説を挙げたい。

- ①ハタナカヤシキとは、文字通り、「周りに畑が多い屋敷のあったところ」か。屋敷には有力者が住んでいたのであろう。
- ②ハタナカは固有名詞か。とすれば、ハタナカヤシキとは、「畑中氏が居住していた屋敷のあった所」となる。

全国地図には、ハタナカ地名は17カ所に、中・大字として挙げられているが、ハタナカマエ地名となると記載は無い。

【藪腰】

ヤブコシ。

山本国道153号線の東側にあり、ワルダ小字とハタナカヤシキ小字の間にある。

ヤブは雑木や竹などが密生している所をいう。コシは「付近」(語源辞典)をいう。すなわち、ヤブコシとは「雑木や竹などが繁茂している場所の付近」ということになる。開墾もしないで放置されていた場所が、ここにあったのだろうか、という疑問もあるが、あるいは藪神がいて手が入らない場所であったかもしれない。

藪神は由緒のわからなくなった屋敷神などで、祠のない神格の低い神であるが、藪に入ったりすると激しく崇るとされている。

全国地図には、ヤブコシ地名は記載されていない。

【向田】

ムカイダ。

この小字は、南北は中沢川と久米川の間、東西は中央道と国道153号線の間にある。現在もほとんどが水田になっている。

ムカイダとは、「向かい側の田んぼのあるところ」か。

どこを基準にした“向かい側”であるのか。断定はできないが、恐らくは、南方の久米川を越えたイヤシキ(居屋敷)小字ではないかと思われるがどうであらうか。

全国地図には、ムカイダ地名は41カ所に中・大字として挙げられており、一般的な地名と思われる。

【竹ヶ花】

タケガハナ。

この小字は山本の中央道と国道153号線の間であり、中沢川の右岸になる。

タケガハナとは何か。タケは「高くなった所」をいい、ハナはハナ(端)で「末端部」を意味する(以上は語源辞典)。

以上から、タケガハナとは「ちょっとした高みの末端部」をいうのであろうか。

この小字から中央道を北西に越えたナカザワ小字には標高 638.2m の高みがある。なお、タケガハナ小字の最高点は標高 634.6m になっている。

全国地図には、タケガハナ地名は10カ所にある。

【京田】

キョウデン。

この小字は中央道付近、久米川と中沢川の間、二ヶ所ある。

キョウデンとは何か。語源辞典によりながら、二通りの解釈を挙げる。

①キョウデン←キュウデン（給田）と転訛した。給田とは「中世、領主から荘官に給与された土地で、年貢や各種の公事が免除された」という。すなわち、キョウデンとは「領主から給与された土地」をいうのであろうか。

②キョウデンとはキョウデン（経田）の意で、「寺院に寄進された田」をいう。どこの寺院に寄進されたのか、はっきりしないが、北御堂という可能性はあるのだろうか。

国土地理院の全国地図には、キョウデン地名は14カ所に記載されている。

【深田】

フカダ。

山本のフカダ小字は、中央道の西側に二ヶ所あり、インダ小字を挟んでいる。かつては繋がっていたのであろうか。

フカダとは「泥の深い田」（広辞苑）である。扇状地の中で流が緩やかで泥の溜まった所であらうか。

全国地図には、中・大字として、フカダ地名は15カ所にあり、いずれも「深田」の字が宛てられている。

【桜屋】

サクラヤ。

久門地山の山麓で久米川左岸にあり、シミズダ・ナカジマ・ナカミゾマエダの

小字に囲まれている小さな小字である。

サクラヤとは何か。語源辞典に依りながら、三説を挙げる。

①サクラヤは、サ（狭）・クラ（刳）・ヤ（屋）で、「小さくえぐられた家のあった所」か。久米川が荒れてここを削ったことがあったのかもしれない。

②サクラヤは「有名な桜の木があった家の跡」であらうか。

③ヤ（屋）はヤツ（菴）の略で、サクラヤとは、「久米川にえぐられた湿地」をいうのであらうか。

全国地図には、サクラヤ地名は、中・大字として2カ所に挙げられている。

【北前田・南前田】

キタマエダ・ミナミマエダ。

これらの小字は、キョウデン小字を挟んで、北と南にある。

“前”の基準になっているのは、クラヤシキ小字と思われる。中御堂も考えられるが、南北前田と正三角形になるので、やや離れている感じがする。

キタマエダとは、「北側にある前田」か「北側にある前方の土地」であらう。

全国地図には、キタマエダ地名は3カ所に、中・大字として記載されている。

【長岡田】

ナガオカダ。

「竹コシ」小字と「北前田」小字の間にある。現在は住宅地になっている。

ナガオカダとは何か。三説を挙げたい。

①オカダは「畑」のこと（広辞苑）。ナガオカダとは、「長く延びた畑」か。ハタといわないでオカダとした意味がはっきりしないのが、やや難か。

②オカダはオカ（丘）・ダ（処）か。ナガオカダとは「長くのびた丘」をいうか。

③ナガは動詞ナガル（流）の語幹で「傾斜地」をいう（語源辞典）。静岡県榛原郡で使われている語だという。ナガオカダ

とは「傾斜地にある畑」か。

全国地図に、ナガオカダ地名は載っていない。

【中溝道・中溝・中溝前田】

ナカミゾミチ・ナカミゾ・ナカミゾマエダ。

これらの小字は、中沢川上流部の右岸にあって一列に並んでいる。

ミゾ（溝）は「地を細長く掘って水を流す所」（広辞苑）である。ナカミゾ（中溝）とは中沢川のことを表しているのではないだろうか。あるいは、中沢川に人の手を加えて水を流れやすくしたこともあるのだろうか。ナカは久米川と観音沢川のナカをいうのであろう。

ナカミゾミチとは「ナカミゾに沿った道のあるところ」であり、ナカミゾマエダは「ナカミゾが通っている、北御堂の前の水田」をいうのであろう。

全国地図には、ナカミゾ地名は5カ所に挙げられているが、ナカミゾミチ地名は載っていない。

【井ノ口】

イノグチ。

この小字は久門地山の山麓にあって、ミゾグチミチ小字とハヤシノコシ小字に囲まれている。

イノグチとは「用水などの取入れ口」（広辞苑）をいう。この小字も、おそらくかつては中沢川から水を取り入れていたと思われるが、はっきりはしていない。

イノグチ地名は全国にも多く、地図には35カ所に中・大字として記録されている。

【矢殿】

ヤドノ。

山本西部の山地で久米川支流の最上流部になる。広大な土地で、谷の口には水田がある。

ヤドノとは何を意味するのか。語源辞

典に依りながら二説を挙げたい。

①ヤドノはヤド・ノ（野）で、ヤドはヤト、ヤツと同源で「谷間」をいう。神奈川県で使われているという。ノ（野）は「入会地の草刈場」か。以上から、ヤドノとは「主に入会地の草刈場になっている谷間」であろうか。

②ヤドノはヤ（藪）・トノ（棚）で、ヤはヤツの略で「湿地」をいい、トノはタナ（棚）の転じた語で「棚所の地」をいう。すなわち、ヤドノとは「棚田になっている湿地のあるところ」か。ヤドノ小字のごく一部にすぎないが、最も利用されている場所を代表的な地名にしているのだろうか。

③ヤはイハ（岩）の約で、「岩の多いところ」、トノは「高くなっている所」か。ヤドノとは、「岩が多い所や高くなっているところがある土地」か。やや曖昧か。

全国地図には、ヤドノ地名が1カ所、挙げられており「宿野」の字が宛てられている。

【足ノ澤・芦ノ沢】

アシノサワ。

「足ノ澤」小字は久米川最上流部にある支流でヤドノの谷の一つ南側に谷になっている。また、「芦ノ沢」小字は、「足ノ澤」小字の北隣に広がり、側稜の峰二つもある大きな面積を有している。

アシノサワとは何か。解釈を二つ。

①アシはアシ（芦）で「芦の生えているような湿地」か。アシノサワとは「芦の生えているような湿地を流れる川のあるところ」か。

②アシはアシ（悪）で、「禁忌を伴う葬地」（語源辞典）をいうのであろうか。アシノサワとは「葬地のある沢」かもしれない。末端部には墓地がある。

全国地図には、アシノサワ地名が、1カ所だけ中・大字として挙げられている。

【上ノ】

ウエノ。

この小字は久門地山の山麓にあり、北平扇状地の西端になる。

ウエノはウエノ（上野）で、「最上流部にある、ほぼ平坦な緩傾斜地」をいうのであろう。この小字はゴリン小字の尾根筋が尽きたところに繋がっている。

全国地図に挙げられている、ウエノ地名は187カ所にも及ぶ。

【忠治坂】

チュウジザカ。

この小字は、久門地山山麓の久米川上流部左岸の沿岸にある。

チュウジザカとは何か。チュウジは動詞ツブス（潰）の連用形ツブシが転じた語で「崩壊地形、浸食地形」をいう（語源辞典）。チュウジザカとは、「久米川の浸食を受けたことのある傾斜地」であろうか。

全国地図には、チュウジザカ地名は記載が無い。

【川端】

カワバタ。

久米川上流部の左岸にあり、字面の通りで、「川のほとり」を意味する。

全国地図には、カワバタ地名は、69カ所に、中・大字として挙げられている。

【屋敷畑】

ヤシキバタ。

久米川上流部の左岸にあつて、カワバタ小字の北隣にある。現在は畑地になっている。

ヤシキバタとは、「有力者の屋敷があつた所で、現在は畑になっている」ことを意味するのであろう。

全国地図には、ヤシキバタ地名は載っていないが、ヤシキハタ地名は1件だけ記載がある。

【千合畑】

チゴウバタか、チアイバタか。

久米川上流部左岸の沿岸にあり、チュウジザカ小字の下流隣になる。現在は住宅地になっている。

チゴウであれば何を意味するのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①チはフチ（縁）の上略形で、ゴウはゴウ（川）か。チゴウとは、「川のほとりにある土地か畑」を意味するか。

②チゴウはチガヒ（違）の転じた語で、「高さの食い違った地形」をいう。つまり、チゴウとは「棚状の地形になっている所か畑」をいうのであろうか。

チアイバタであればどうか。チはミチ（道）の上略形で（語源辞典）、チアイバタとは、「川沿いの道とそれと直行する道が合う辻になっている所が畑」であろうか。

全国地図にはチゴウバタ地名も、チアイバタ地名も記載されていない。

【五輪・五輪原】

ゴリン・ゴリンバラ。

これらの小字は、久米川上流部左岸の氾濫原と山地にあり、特にゴリン小字は左岸側稜の尾根までも含む広大な面積を有している。

ゴリンとは「五輪塔のある所」で、ゴリンバラとは「五輪塔のある神聖な場所」あるいは「ゴリン小字の中腹部に当たる所」もありうる。

五輪塔は密教で大日如来を象徴しており、中世の後半から機内を中心に一石で小さく造る一石五輪塔が多くなり、一人か夫婦の法名が刻まれるなど、墓標的色彩が濃い。中世の石塔の中では最も一般的な石塔だという（民俗大辞典）。

ここでは、二基の五輪塔が確認されている。

国土地理院の2.5万分の1地図には、

ゴリン地名が11カ所、ゴリンバラ地名が1カ所、中・大字として記録されている。

【中島】

ナカジマ。

この小字は久米川上流部の左岸ある。

ナカジマとは「周辺に水路があり、水に囲まれたようになっていた場所」であるか。地形を島に見立てたものか。

全国地図には、ナカジマ地名は262カ所も中・大字として挙げられている。大変な数である。

【川原畑・川原田】

カワラバタ・カワラダ。

山本のこれらの小字は、いずれも久米川上流部の沿岸に、ニヶ所ずつある。「畑」は左岸に、「田」は右岸にある。左岸の方が高いためと思われるが、現在の利用状況をみると、「畑」に水田が多かったり、「田」が畑地であったりしている。

カワラバタとは何か。二通り考えられる。

①一般的には、カワラバタ（川原畑）で、「川原にある畑」をいう。

②カワラバタとはカワラバタ（川原端）で、「川のほとり」とも考えられる。

カワラダも、解釈は二通り。

①普通に考えれば、「川原にある田んぼ」である。

②カワラダはカワラダ（川原処）で、「川原」とすることもできる。

全国地図には、カワラバタ地名が5カ所、カワラハタ地名が2カ所、カワラダ地名は18カ所に、中・大字として記載がある。

【藪下】

ヤブシタ。

久米川上流部左岸の少し川から離れた所にあり、サクラヤ小字の下流側になる。小さな小字である。

ヤブシタ地名は、全国地図には載っていない。ヤブコシ地名も無かった。しかし、伊那谷南部には多い。

ヤブは単に「雑草・雑木の密生している所」（広辞苑）ではないと考えている。語源辞典のいうように藪神とも関わりがあるのではないだろうか。祟りがあるというので、藪を切ることを怖れて放置すれば、藪らしい藪になっていく。そんな藪が伊那谷南部には多かつたとするのは言い過ぎであろうか。

ヤブシタとは、「祟りのありそうな藪の下側の所」をいうか。

【藏屋敷】

クラヤシキ。

久米川上流部の左岸にあり、ヤブシタ小字の下流側になる。現在は水田と宅地になっている。

藏屋敷とは大名が大阪などに設けた藏付きの屋敷をいうのであるが、ここでは、クラヤシキとは、「穀物を保管する倉庫とそれを管理する有力者の屋敷のあった所」を意味するものと思われる。

全国地図には、クラヤシキ地名は7カ所に、中・大字として挙げられている。

【中沼】

ナカヌマ。

久米川上流部の左岸にあって、上流側隣にはクラヤシキ小字がある。現在は、主に水田と住宅地になっている。

ナカヌマとは何か。「間の沼地」を意味するが、何の間かというのと、恐らくは久米川と中沢川の間をいうのではないだろうか。そして、隣の藏屋敷を守るために役立っていた沼地であったかもしれない。

全国地図には、ナカヌマ地名は8カ所に中・大字として挙げられていて、全てに「中沼」の字が宛てられている。

【道城田・道城畑】

ドウジョウダ・ドウジョウバタ。

ドウジョウダ小字は久米川上流部左岸にあり、ナカヌマ小字と並んで、クラヤシキ小字の下流側にある。現在は住宅地になっている。ドウジョウバタ小字は赤羽根川右岸にあり、現在は住宅地と畑地になっている。

ドウジョウダとは何を意味しているのか。これも難しい地名である。二説を挙げる。

①ドウジョウダとはドウジョウ（道上）・ダ（処）で、ウエ（上）は「ほとり」の意。すなわち、ドウジョウダとは、「道路の近くにある場所」をいうか。

②ドウは川音による音響地名、ジョウはデフで「～になった所」（以上は語源辞典）。ドウジョウダとは、「（大雨のとき）川音が響くようになった所」か。久米川が大きくカーブするところで、河川工事で川音が大きくなったのかもしれない。

ドウジョウバタとは、上記のドウジョウダと同様に考えて、

①「道路の近くにある畑」

②「川音が響く畑」

ということになりそうだ。

全国地図にドウジョウダ地名は無いが、ドウジョウ地名は31カ所と当然ながら多い。

【向川原田】

ムカイカワラダ。

この小字は、久米川上流部左岸の沿岸にある。現在は、ほとんどが水田になっている。

ムカイカワラダとは、「カワラダ（川原田）の向かい側の土地」をいうのであろう。久米川の対岸の右岸にはカワラダ小字がある。

当然ながら、ムカイカワラダ地名は全国地図には無い。

【焼消根田】

ショウショネダか、あるいはショウシ

ョウネダか。

久米川上流部左岸にあって、久米川とムカイカワラダ小字に囲まれている。

ショウショ（ウ）ネダとは何か。全く分からない小字の一つであるが、空欄にしておくわけにはいかないので、仮説を挙げておきたい。

ショ（ショウ）はシホが転じた語で、これは動詞シホル（霈）の語幹で「湿地」をいう（語源辞典）。ショウショ（ショウショウ）は、同じ意味の語を重ねたものか。ネダはネダ（根太）で「根底」から、「末端部」を意味するか。

以上から、ショウショウネダとは「湿地の末端部」を意味するのであろうか。久米川に接しているのだから、地下を流れる湧水も含めて、ここで久米川に抜けていることをいうのかもしれない。この解釈はやや無理気味か。

むろん、この地名は全国地図には載っていない。

【火焼・日焼】

ヒヤケ。

この小字は、中央道の西側で久米川左岸にある。周辺部はほとんど水田になっているが、この小字だけは住宅地と畑地になっている。

ヒヤケとは、ヒヤケ（日焼）で、「水の涸れ易い土地」であろう。

全国地図には、ヒヤケ地名は、2件と、意外に少ない。

【足中免】

アシナカメン。

この小字は、南北方向は中央道と国道153号線の間であり、東西方向は久米川と中沢川の間にある。現在は住宅地になっている。

アシナガメンとは何をいうのか。意味の分からない小字が続く。それでも先へ進めなければならない。敢えて二説を挙

げる。

①アシナカ（足中）とは「草履の一種で踵の部分がなく足の半分くらいの短いもの」（広辞苑）である。踏ん張りが利く草履で武士も履いていたらしい。また熱病除けや疱瘡除けに足中を吊し供える風習もあったという（民俗大辞典）。さて、アシナガメンとは何か。「年貢が半分が免除された土地」とするのは行き過ぎであろうか。

②メン←メ←ベ（辺）の転で（語源辞典）、アシナカは「芦の生えている二つの川の間の辺にある土地」をいうのであろうか。二つの川とは、久米川と中沢川のことか。

全国地図には、アシナカメン地名は記載が無い。

【角垣外・角垣外川原畑】

スミガイト・スミガイトカワラバタ。

二つの小字は並んで、久米川左岸の沿岸にある。

スミガイトとは何か。語源辞典によりながら解釈を二つ。

①スミ（角）とは「曲がり角」のことをいう。スミガイトとは「曲がり角にあった住宅跡」をいうか。曲がり角は道路と思われるが、あるいは久米川であったかもしれない。現在、久米川は大きく曲がってはいないが、小字名の発生時にはもう少し曲がっていたことも考えられる。

②スミはス（砂）・ミ（接尾語）か。ミは漠然とした「場所」を示すという。スミガイトとは「砂地になっている居住跡のあるところ」か。

スミガイトカワラバタは、「スミガイト小字の近くにある川原の畑」か、「川原の端」か。

全国地図には、スミガイト地名は1カ所にだけある。

【松ノ木田・松廻木田】

マツノキダ。

これらの小字は中沢川が久米川に合流する地点の右岸にある。

マツノキダとは何を意味しているのか。語源辞典を参考にしながら、三説を挙げる。

①マツ←マタ（股）と転じたもので、キダはキダハシ（階段）で棚状の地形をいう。以上から、マツノキダとは、「川の合流点があり、棚状の地形になっている所」であろうか。

②マツは動詞マツハル（纏）から「巻いたような地形」をいい、ノキダはノキ（軒）・ダ（処）で「川が纏わるようになっている家の裏手の土地」であろうか。伊那郡や水窪ではノキはこのように使われているという。

③マツノキダとは、「アカマツが自生していた階段状の土地」であった可能性もあるか。

全国地図には、マツノキダ地名は3カ所に、中・大字として挙げられている。

【桜垣外】

サクラガイト。

この小字はマツノキダ小字の南西隣にある。現在は、水田と住宅地になっている。

サクラガイトとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら三説を挙げたい。

①サは語調を整える接頭語、クラはクラ（藏）で「倉庫」をいう。サクラガイトとは「倉庫のあった跡地」であろうか。貢租の穀物か、備蓄用の穀物を保管したところであったか。

②サクラはサク（抉）・ラ（「場所」を示す接尾語）で、サク動詞サクルの語幹で「えぐる。決壊する」の意。すなわちサクラガイトとは「決壊した場所がある居住地跡」を示すか。小字の南西端を宮沢川が流れている。

③サクは動詞サクル（抉）の語幹で「耕す」ことをいう。サクラガイトとは、「耕す」

地もあった居住地跡」か。

全国地図にはサクラガイト地名もサクラカイト地名も記載されていない。

【田府】

タブ。

山本中平の宮澤川左岸にある大きな小字である。現在は、ほとんどが水田と住宅地で、畑はごく一部にあるだけ。

タブとは何か。これも語源辞典によりながら二説を挙げる。

①タブ←タフと転じた語で、タ(田)・フ(生)から「水田になった所」を意味する。フ(生)は「~のある所」をいう。

②タブは副詞タブタブの語幹で「(傾斜の)ゆったりしているさま」をいう。すなわち、タブとは「緩傾斜地」をいう。

全国地図には、タブ地名は3カ所が、中・大字として挙げられている。

【大麦田】

オオムギタ。

この小字は、宮沢川左岸の沿岸にあり、サクラガイト小字の上流側にある。

ムギタとは、二毛作田のことをいう。オオムギタとは「比較的大きな二毛作田があるところ」であろう。

ムギタ(麦田)は、「特に冬に麦を栽培する水田のこと。ムギタは冬季乾燥する乾田でなくてはならず、そのためさまざまな排水法が考案された。日本でムギタが行われるようになるのは12世紀にまでさかのぼることができる。租税など公的な性格の強い米に対して、二毛作で栽培される麦は農民の自給的食料として重要で、二毛作麦に税をかけることに対して早くは13世紀に禁令が出されている」(民俗大辞典)という。

全国地図には、オオムギタ地名が1カ所に記載がある。

【文化田】

ブンケダあるいはブンカダ。

この小字は宮沢川と久米川の間部分にあつて国道153号線を挟んだ緩傾斜地にある。

ブンケダであれば、ブンケ(分家)・ダ(処)で「分家した家のある所」であろうか。

ブンカダであれば、ブン(分)は「新開地を分けた所」で、カダは動詞カタグ(傾)の語幹で「傾斜」をいう(以上は語源辞典)で、ブンカダとは、「新開地を分けた所で傾斜地である土地」をいうのであろうか。

全国地図には、ブンカダ地名もブンケダ地名も記載が無い。

【他田】

オサダ。

ブンケダ小字のまわりに二ヶ所ある小さな小字である。現在は、一つは田んぼに、もう一つは住宅地になっている。

オサダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①オサは「水田一枚」のこと。ダはダ(処)か。オサダとは「水田一枚の土地」をいうのであろうか。

②オサとは「多くの中で最もすぐれていること」をいう。オサダとは「上田の最もいい田んぼ」をいうのかもしれない。

オサダ地名は、全国地図に、11カ所に中・大字として挙げられている。

【下島・南下島】

シモジマ・ミナミシモジマ。

ミナミシモジマ小字は二ヶ所に、ミナミシモジマ小字は一カ所にあり、いずれも久米川と宮沢川の間にある。現在は主に住宅地であり、一部が畑になっている。

シモジマとは何か。考えられることは二つ。

①シモ(下)は上流に対する「下流側」をいうか。シマ(島)は「微高地」を川や湖の島に見立てたものであろう。シモ

ジマとは「下流側で微高地がある土地」であろうか。上流側に何があるのかはつきりしないが、上流側にあるマエダ小字群に関わる有力者の屋敷であろうか。

②シモは中心から離れた、あるいは新たに開墾され土地を意味するのかもしれない(語源辞典)。シモジマとは「新たに開墾されたところにある微高地」だろうか。水田地帯では、こうした微高地に住居を定めていたということも考えられる。

ミナミシモジマとは、一般的には「南の方にあるシモジマ」であるが、位置関係からみて、「南の方」と言い切ることが難しいそうでもある。であれば、ミナミはミ(接頭語)・ナミ(滑)で「緩傾斜地」であることから(語源辞典)、「緩傾斜地になっているシモジマ」を意味すのかもしれない。

全国地図には、中・大字として、シモジマ地名は11カ所に記載があるが、ミナミシモジマ地名は無い。

【焼柿】

ヤキガキ。

この小字は、山本の二カ所にあり、久米川と宮沢川の間になる。一つは久米川右岸の沿岸にある。

焼柿は焼いて食べても、干し柿にしてもうまいといわれている柿であるが、焼柿発祥の地でもないかぎり、このままでは地名にはなりにくいのではないだろうか。

ヤキ←ヤケ(宅)と転訛した語で、「住居」を意味し、ガキ←カキの濁音化した語で、「住居の区画を限る囲い」をいう(以上は語源辞典)。ヤキガキとは、「住居の区画」をいうのであろうか。新しい開墾地に分家などの住居が建てられていたのであろうか。

やや不安な解釈で他にありそうにも思えるが、考えつかないでいる。

全国地図には、ヤキガキ地名の記載は無い。

【小池】

コイケ。

久米川と宮沢川の間で、国道153号線と中央道に挟まれた土地にある、小さな小字である。

コイケとは、文字通り、「小さな池のあった所」であろう。

全国地図には、コイケ地名は中・大字として60カ所にもある。小字になり易い地名ともいえる。

【檜林】

ヒノキバヤシ。

この小字は、久米川右岸沿岸にあり、西側には中央道が接している。

ヒノキガヤシとは何か。二説を挙げる。

①ヒノキバヤシとは、字面の通りで、「檜の林があった土地」であつたろうか。檜は「諸材中最も用途が広く、建築材として最良」(広辞苑)とされている。

②ヒノキは、ヒ(樋=水路)・ノ(助詞)・キハ(際)の略で「水路のほとり」をいう(語源辞典)。ヒノキバヤシとは「川の沿岸にあった林」か。川は久米川をいうのであろう。

全国地図にヒノキバヤシ地名は記載が無い。

【保田下】

ボタシタか。

この小字は、宮沢川左岸の沿岸にある。すでにボタヅイ(保田添)小字で触れたように、ボタは下伊那や愛知県北設楽郡で使われているように、「田畑の畦」をいう(国語大辞典)。

ボタシタとは、「田畑の畦の下側にある土地」をいうのであろう。

ボタというのは、三遠南信地域特有の地名であろう。

【居屋敷】

イヤシキ。

この小字は、南北は宮沢川と久米川の間に、東西は中央道と国道 153 号線の間にある。

イヤシキとは何か。語源辞典を参照しながら二説を挙げたい。

①イにはイ（斎）で「神聖な」の意味がある。イヤシキとは「神聖なものに関わる有力者の屋敷跡」か。上流側の西隣にはミヤガイト（宮垣外）小字がある。上位の神官が住んでいたのかもしれない。

全国地図には、イヤシキ地名は 4 カ所にあり、いずれも「居屋敷」の字が宛られている。

【町張】

マチハリ。

この小字は宮沢川左岸にあり、西側には中央道が接している。

マチハリもこの地域には多い小字であるが、全国地図には、マチハリ地名もマチバリ地名も記載されていない。

マチバリとは何を意味しているのか。以前に触れたサワマチバリとはやや意味を異とするが、語源辞典に依りながら二説を挙げてみたい。

①マチは「市場が開かれていた所」かもしれない。バリ←ハラ（原）と転じた語で、マチハリとは、「市が開かれていたこともある平地」か。市場は、神社の門前や川原で開かれることが多かったという。

②マチとは、「建物がいくつもある所」か。ハリはハ（端）・リ（場所を示す接尾語）で、「縁辺」のこと。マチハリとは、「（川の）縁にあって建物が集まっている所」か。門前町になっていたのであろうか。

【鳥居前】

トリイマエ。

この小字は、マチバリ小字とボタシタ小字の間にある。

トリイマエとは、「鳥居があった所の前方の所」をいう。七久里神社の鳥居がここにあったのであろうか。

全国地図には、トリイマエ地名は 3 カ所に、中・大字として挙げられている。

【宮垣外】

ミヤガイト。

山本の宮沢川左岸の沿岸にある。中央道の西側に接している。

ミヤガイトとは、当然ながら「七久里神社に関わる神官の住居があった所」であろうか。

全国地図には、ミヤガイト地名は中・大字として 6 カ所に挙げられている。

【北木戸】

キタキド。

この小字は、ミヤガイト小字の北隣にある。

キドとは「キ（柵）・ト（門）で、柵につくった門、城門、関所の門、牧場の出入口」をいう（語源辞典）。

キタキドとは、「北側にある木戸」であろう。七久里神社の近くには近藤氏の陣屋があったという。この陣屋を守るための木戸であったのだろう。

全国地図には、キド地名は 4 7 カ所にもあるが、キタキド地名は一つも無い。

【宮ノ腰・宮ノ越】

ミヤノコシ。

この小字は、いずれも七久里神社の下流方向にある。

コシ（腰）は人体の腰の部分に見立てたもので、ミヤノコシとは「お宮のある場所の中腹ないし麓の部分」をいうのであろう。

全国地図には、ミヤノコシ地名は、中・大字として 5 カ所に挙げられている。

【道下苗代】

ミチシタナワシロ。

この小字は宮沢川左岸にあり、七久里

神社に近い。

ミチシタナワシロとは何か。二説を挙げる。

①ミチシタナワシロとは、字面の通りで、「道路下にある苗代をつくっている田」かもしれない。苗代専用の水田のあった所もあるという。ここがそうなのかどうかは不明。

②ナワシロとはナエ（萎）・シロ（シル）が転訛した語で、「周囲より低い湿地」を意味するという（語源辞典）。

ミチシタナワシロという長い地名は、全国地図には無い。

【前田三通】

マエダミトオリ。

この小字は宮沢川左岸にあつて、ミチシタナワシロ小字の北側にある。

マエダは七久里神社の前の方を意味するが、ミトオリはミトリが転じた語であろうか。

ミトリとは「近世、一定の石高によるのではなく、年毎の収穫を検見して年貢を定めた田畑」（語源辞典）をいうものと思われる。ただ、毎年検見しなければならない理由が明瞭ではない。恐らくは、旱魃に遭いやすい土地であったのではないかと想像している。あるいは宮沢川の氾濫があつたか。

全国地図には、マエダミトオリ地名は、当然ながら記載はない。

【前田向】

マエダムカイ。

この小字は、七久里神社の近くで、マエダ小字群の中にある。

ムカイをムケ（剥）の転訛した語であるとして、「崩壊地形」と解釈することもできる（語源辞典）が、ここでは採らない。素直に解釈して、ムカイは「向かい側」を意味すると考えたい。

すなわち、マエダムカイとは、「神社の

前方にあるマエダの向いにある土地」をいう。この小字もマエダではないか、ということになるが、ここでは問わない。

マエダムカイ地名は、全国地図に1カ所だけ記載がある。

【島・中ノ島】

シマ・ナカノシマ。

シマ小字は久米川上流部の右岸沿岸にあり吉中林独立峰の東麓に位置し、ナカノシマ小字はそれより下流の久米川右岸の沿岸にある。

シマ小字は、宮沢川支流と久米川に挟まれている微高地と思われ、その微高地を川の中の島に見立てたものであろう。

ナカノシマはシマ小字の下流側にあり、更に下流部にあるシモジマ小字と対比して、“ナカ”としたものであろう。

ナカノシマとは、「久米川上流域にあるシマと中流域にあるシモジマの間にある微高地」を意味するものと思われる。

全国地図に記載されているナカノシマ地名は55カ所と少なくはない。シマ地名だと93カ所に及ぶ。

【高越】

タカゴシ。

久米川上流部右岸の沿岸にあり、シマ小字の下流側にある。

ゴシ＝コシは「中腹部」を意味する。タカゴシとは「扇状地の中腹部の高い方の所」を意味するのであろうか。

全国地図には、タカゴシ地名は無いが、タカゴシ地名は一カ所に記載がある。

【沼田】

ヌマダ。

宮沢川支流の左岸沿岸にあり、右岸にあるオオミドウ小字の対岸に当たる。現在は、水田と畑が半々ぐらいになっている。

ヌマダとは、この地域では最近までよく使われていた語で、「泥ぶかい田」をい

う（広辞苑）。このヌマダは、この付近にあったと思われる近藤氏の陣屋を守る意味もあったのかもしれない。

全国地図には、ヌマダ地名は12カ所に中・大字として記載されている。

【庄司場】

ショウジバ。

この小字は、吉中林独立峰の北東側山麓にあって、シマ小字の上流側にある。

庄司は「領主の命を受けてその荘園を管理した職」であり、バ（場）は、「物事の行われる広いたころ」をいう（以上は広辞苑）。

ショウジバとは、「荘官の執務場で、年貢などが集められた所」だったのであろうか。

ショウジバ地名は、全国地図には無いが、ショウジ地名は43カ所もある。「小路」が過半数居所を占めるのも当然と思われる。

【眞鳥山】

マトリヤマ。

この小字は、吉中林独立峰の北西側にある山地になっており、北側には久米川が、南側は宮沢川が取り巻いている。

マトリとは国語大辞典によれば、「見事な鳥。立派な鳥」のことをいうが、多くは鷺のこと。鷹狩りでは雉子をいい、梟や木菟を指すこともあるという。ここでは鷺は考えられないし、夜鳥はどこにもいる。

マトリヤマとは「鷹狩りが行われる場所で、雉子の多い山」を意味するのであろうか。

全国地図にはマトリヤマ地名は載っていない、マトリ地名は2カ所にあるが、いずれも「馬取」の字を宛てている。

【山原】

ヤマハラ。

この小字は、吉中林独立峰の南西麓に

ある。現在、一部に水田や畑地、それに住宅地もある。

ヤマハラとは「山の中の平地」（国語大辞典）である。

この谷には二本の沢が流れていて、比較的広い氾濫原になっている。谷川の一つは宮沢川で、もう一つは坊主川か。

全国地図にも、ヤマハラ地名は、中・大字として、4カ所に記載されている。宛てられている字は全て「山原」となっている。

【吉中林】

ヨシナカバヤシか。

七久里神社西方の独立峰で標高 755.0 m。眞鳥山の南東方向に連なる。

ヨシナカバヤシとは何を意味しているのか、よくわからない地名である。

ヨシは葦で、「葦の生えている所」であろうか。葦の生えているところは流水のあるところ、すなわち谷川が流れているところである。ナカ（中）は、「谷川の間」と解することができそうだ。

以上から、ヨシナカバヤシとは、「二本の谷川の間にある樹木の密生しているところ」であろうか。二本の谷川とは、久米川と宮沢川である。

全国地図には、ヨシナカバヤシ地名はもちろんのこと、ヨシナカ地名もキチナカ地名も載っていない。

【牛首】

ウシクビ。

この小字は、二ヶ所にあり、ほぼ繋がっている。一つは城山山地の北側にある細長い尾根になっており、もう一つはその東側の細長い谷になっており二本の沢に挟まれている。いずれも坊主川の支流と思われる。

ウシクビとは、「牛の首状の細く長い尾根」をいう（語源辞典）。二つの小字の、尾根と谷の双方に当てはまる解釈である

か。

全国地図には、ウシクビ地名は、5カ所に中・大字として記録されている。

【金堀塚】

カナホリヅカ。

この小字は、吉中林独立峰の南麓にある。

カナホリヅカとは何をいうのか。二説を挙げておきたい。

①山本村誌には、「近くに古墳があって、鏡・玉類・刀剣などが発掘され、このことから、カナホリヅカという地名が起った」という。どうだろうか。

②地元に残る口碑では「信玄が金を試掘したところ」ではないかという。

全国地図には、カナホリヅカ地名は載っていない。

【山口】

ヤマグチ。

この小字は、カナホリヅカ小字の東隣にある。

ヤマグチとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ヤマグチとは「山への入口」であるが、ここで、山へ入るための神事か、それに近い行いをした場所ではなかったか。山の神を祀ったところかもしれない。

②ヤマグチとは「鷹狩りのためにまず狩り場に入った所」をいうこともあるらしい。眞鳥山も近くにある。狩り場に入るための神事がここで行われた可能性はある。

ヤマグチ地名は全国的にも非常に多く、2.5万分の1地図には、233カ所に記載されている。

【荒神畑】

コウジンバタ。

この小字は、吉中林独立峰の南西麓にある。

一枚の畠にあれもこれもと、いろいろ

な作物をつくることをコウシンバタケ（庚申畠）というが、このこととは関係がないだろう。

では、コウジンバタとは何を意味しているのか。一般的には「荒神様を祀っていたことのある畑地」をいうのであろうか。

荒神は荒ぶる神の性格を持ち、崇りやすい神霊で、外来の宗教者が来る以前の地主神の様相があり、修験者は地域社会に入り込む際に、在地の竈神や屋敷神を荒ぶる神であるとし、日常生活の不幸や病気がこれらの神によってもたらされると説き、荒神祭・荒神供などを行って庶民の不安の解消に努めた、という（修験道辞典）。

全国地図にはコウジンバタ地名は無いが、コウジン地名は中・大字として10カ所に挙げられている。

【大御堂】

オオミドウ。

この小字は吉中林独立峰の東麓にあり、大御堂寺のあったところ。

大御堂寺は、古くは釈迦堂と称せられた。宝永8年(1711)の創建で、明治7年(1874)に廃堂になっている(山本村誌)。

全国地図には、オオミドウ(大御堂)地名は1カ所にある。

【グミノキ】

この小字も吉中林独立峰の東麓にあって、オオミドウ小字の北隣になる。

グミノキとは、「茱萸が自生している所」ではないだろう。地名にはなりにくいのではないだろうか。

グミークミと濁音化した語で、クミとは動詞クムの連用形が名詞化した語で、クムはこの方言で「崩れる」の意。ノキもこの方言で、「家の裏手」をいう。

以上から、グミノキとは「崩れ地のある家の裏手」をいうのであろう。

全国地図には、グミノキ地名が、2カ所に中・大字として挙げられている。

【中垣外】

ナカガイト。

この小字はオオミドウ小字の東隣にあり、宮沢川とその支流に挟まれている。

ナカガイトとは何か。二説を挙げたい。

①ナカとは大御堂寺と七久里神社の間のことをいうのではないだろうか。つまり、ナカガイトとは「寺院と神社の間にあった住居跡のあるところ」であろうか。

②ナカとは「二本の川の間のこと」とも考えられる。ナカガイトとは「二つの川に挟まれた住居跡のある所」であろうか。

全国地図には、ナカガイト地名は12カ所に中・大字として採用されている。

【宮ノ原】

ミヤノハラ。

北平扇状地の七久里神社の南に広がる、広い小字。

ハラ（原）は「平らで広く、多く草などが生えた土地。特に、耕作しない平地」をいう（広辞苑）。“耕作しない”のは、神聖な土地でもあるからであろうか。

全国地図には、12カ所にミヤノハラ地名が中・大字として記載されている。

【東畑】

ヒガシバタ。

北平の大小二つのミヤノハラ小字に挟まれている。

ヒガシバタは「東にある畑」あるいは「東の端」であろうが、基準になるもの、“何の”東になるのか、はっきりしない。

この近くには「荒神畑」「大畑」「畑田」それにこの「東畑」とハタ小字が固まっている。ヒガシバタとは、「ハタ小字群の東端にある土地」をいうのであろうか。それほどハタ小字が重視だれていたとも思えないが、それ以外は考えられないので、このままにしておきたい。

全国地図にヒガシバタ地名は8カ所で、中・大字として拾われている。

【北山街道・山街道・山街道出口】

キタヤマカイドウ・ヤマカイドウ・ヤマカイドウデグチ。

カイドウ（街道）は、「広い道。または陸上の道路」（日葡辞書）を意味する。特別の道路と考えなくてもいいようだ。

山街道小字は三ヶ所にある。山街道出口だけははっきりしているが、山街道と北山街道は別々の街道なのか、あるいは一つの街道で呼び名が二つあるのか。山街道が北山街道に繋がっている部分があり、これを見ると、一つの道路とすることもできそうだ。

これらの道路の痕跡は、現在もなお使われている道であったり、地形などにも残っているはずであるが、比定はできないでいる。

【南田】

ミナミダ。

二つのヤマカイドウ小字の間にある。

ミナミダは「（大御堂寺の）南の方にある土地（田）」か。

あるいは、ハタ小字群の南側とすることも考えられないわけではないが、やや無理気味か。

全国地図には、ミナミダ地名は、15カ所に記載されている。

【大畑】

オオハタ。

この小字は、ミヤノハラ小字の一部を挟んで二ヶ所にある。

この二ヶ所が繋がっていたとすれば、文字通り「大きな畑」になる。オオはお宮の前ということで、美称かもしれない。とすれば、オオハタとは「いい畑」ぐらいか。

全国地図には、オオハタ地名は多く、中・大字として、75カ所に挙げられて

いる。

【中屋敷】

ナカヤシキ。

この小字は、ミヤノハラ小字の南隣にある。

ナカヤシキとは「中心になるような有力者の屋敷があった所」であろうか。

全国的にもナカヤシキ地名は多く、120カ所にも、中・大字として挙げられている。

【町屋・町屋畑】

マチヤ・マチヤバタ。

これらの小字は、二ヶ所ずつある。いずれもミヤノハラ小字に接してその周辺部にある。

マチヤは「商人・職人など、町人の住居の多い地」(広辞苑)とある。街道筋にあって生産・流通を担っていたものであろうか。

マチヤバタには二通りの解釈がある。

①字面を読んで、マチヤバタとは「町屋で耕作している畑」となる。しかし、可能性はどうであろうか。田畑を耕す時間的な余裕があったかどうか。

②バタ＝ハタ(端)で、マチヤバタとは、「町屋の外れ」をいうのかもしれない。町屋の端である。

全国地図には、マチヤ地名は、中・大字として44カ所にも記載がある。

【袋垣外】

フクロガイト。

この小字は、ミヤノハラ小字の南隣にあって、現在は居住地と水田と畑地になっている。

フクロとはヒク(低)・ド(所)の転じた語で「低湿地」をいうこともある(語源辞典)。フクロガイトとは、「低湿地もある居住地であった所」であろうか。

全国地図には、フクロガイト地名は載っていない。

【久保畑】

クボバタ。

この小字は、フクロガイト小字の下流側にある。

クボバタとは「周辺よりやや凹んだ所にある畑地」か。

やや意外であるが、全国地図には、クボバタ地名は1カ所、クボハタ地名は2カ所にしかない。

【木戸在家・木戸在家与八田・与八田】

キドザイケ・キドザイケヨハチダ・ヨハチダ。

これらの小字は宮沢川右岸にあって、マチヤ小字の下流側に当たる。

宮沢川左岸の北側には、キタキド小字があり、これとも関連があると思われるが、キドとは近藤陣屋の木戸を管理する役割が与えられていた在家であろう。

キドザイケとは「木戸役を課せられていた者の居住地」を意味するものと思われる。

ヨハチダとは木戸役の与八が耕作していた耕作地であろうか。

ザイケ(在家)とは、「中世、領主の所領内に屋敷を与えられて居住し、領主に隷属して在家役を負担した農民。また、その住居・園地を含めてもいう。(中略)はじめは隷属性が強かったが、次第に耕作権などをもとに自立性を強めた」(国語大辞典)という。

全国地図には、キドザイケ地名は記載が無い。

【サイカチ】

この小字はマチヤ小字の下流側にある。

サイカチとは、「植物のサイカチが自生していた場所」であろうか。敢えて二説を挙げたい。

①サイカチ(皂莢)は、本州中南部・四国・九州に分布。山野や川原に自生し、栽植もされる落葉高木で10mほどにな

る。果実の煎汁を古くは染剤にし、漢方では利尿・去痰薬に使い、材は器具・薪炭用にするという。

②サイはサ(語調を整える接頭語)・イ(井)で、「泉」の出るところ。カチはカヂ(鍛冶)の清音化した語。サイカチとは「泉の出る所にある鍛冶職の住んでいた場所」か。しかし、まだ泉の確認はしていない。

全国地図には、サイカチ地名が5カ所に、中・大字として挙げられている。

【天王前】

テンノウマエ。

サイカチ小字の南隣にあり、中央道を挟んでいる。

テンノウマエとは、「天王を祀った場所の前方」を意味するのであろう。

テンノウ(天王)とは「牛頭天王ないし素戔鳴尊をいう。行疫神・徐疫神の神格を持つ。疫病が流行る夏に祭りが行われ、祇園祭りといっている所が多い。水神祭であるところもあるという(仏教民俗辞典)。

どこで天王を祀っていたのかは明らかではない。

テンノウマエ地名は、全国地図に8カ所もあり、意外に多い感じがする。

【矢矧】

ヤハギ。

この小字は、サイカチ小字とテンノウマエ小字の下流側にある。

ヤハギとは何か。二説を挙げたい。

①ヤハギ(矢矧)とは「竹に羽をつけて矢を作ること。また、それを職業とする人。矢師」(国語大辞典)であるという。ここでいうヤハギは「矢師が住んでいた場所」であろうか。

②ヤはヤツ(菴~)の略で「湿地」をいい、ハギは動詞ハグ(剥)の連用形が名詞化した語であるという(語源辞典)。以上から、ヤハギとは「土石流の流れた跡

のある湿地」かもしれない。

全国地図には、ヤハギ地名が18カ所に中・大字として記録されている。

【禅門田】

ゼンモンダ。

この小字は、ヤハギ小字の一部を挟んで南北両側の二ヶ所にある。

ゼンモン(禅門)とは「禅宗」のこと(広辞苑)で、タは「寺田」をいうのであろう。ジデン(寺田)とは「寺院所有の田。律令制では不輸租田で、班田収受から除外。中世にもある」(広辞苑)という。

以上から、ゼンモンダとは「禅宗寺院が所有していて、免租の対象であった水田」をいうのであろう。禅宗の寺院とは西林寺のことか。

全国地図には、ゼンモンダ地名もゼンモン t 地名も記載が無い。

【沢ノ田】

サワノダ。

この小字は、宮沢川左岸の沿岸にあって、ゼンモンダ小字の北側になる。

サワノダとは、字面の通りで「流水のあるところ」あるいは「流水のある傍の田んぼ」であろう。

全国地図には、サワノダ地名もサワノタ地名も記録されていない。

【南沼】

ミナミヌマ。

この小字は宮沢川右岸の沿岸にあって、ゼンモンダ小字に接している。

ミナミヌマとは何を意味しているのか。二説を挙げたい。

①北の方にあるナカヌマ(中沼)小字に対応したミナミヌマで、「南の方にある湿地」を意味するか。

②ミナミはミ(水)・ナ(助詞)・ミ(廻)としたい(語源辞典)。であれば、ミナミヌマとは「川が曲がって流れるところに

ある湿地」となる。宮沢川はここで曲がっていたと思われる。

全国地図には、ミナミヌマ地名は1件も載っていない。

【樋口】

トヨグチ。あるいはトイグチかもしれない。

この小字は、ヤハギ小字とタブ小字に挟まれている。

トヨグチといえば、「井水の取り入れ口」ということになるが、ここではそれが通らないようだ。沢が近くを流れていないからである。

トヨグチとは何か。途方にくれそうな小字である。とはいっても仮説を二つ語源辞典を参考にしながら挙げておきたい。

①トヨ←ドヨの清音化した語で、耳にしたことはないが、下伊那では「井戸」をいうらしい。トヨグチとは「井戸から水が出ていく所」であろうか。この井戸も未確認。

②クチは動詞クチル(朽)の語幹で、「湿地」をいう。トヨグチとは「湿地で井戸のあるところ」にならないだろうか。

全国地図には、トヨグチ地名が中・大字として、2カ所に挙げられている。

【ヌッチ原】

ヌッチハラ。

あっちこっちで切れそうになりながら繋がっている大きな小字である。

ヌッチとは何だろうか。辞典類にも語源辞典類にもない。それでも二説を挙げておきたい。

①ヌッチ←ヌレチ(濡チ)の促音便化した語。チは「場所」を示す接尾語。ヌッチハラとは「湿地のある緩傾斜地」をいうのであろうか。

②ヌッチ←ヌルチ(温チ)の促音便化した語。ヌッチハラとは「広い緩傾斜地」を意味するか。

全国地図には、ヌッチハラ地名もヌッチ地名も記載は無い。

【乃き】

ノキ。

この小字は二ヶ所にある。一つはヌッチハラ小字に囲まれている、一部でフルヤシキ小字に接している。もう一カ所はタケウチ小字とカイト小字の上流側にある小さな小字である。

ノキは何回か出てきている。下伊那や水窪では「家の裏手の土地」をいう(語源辞典)。ここでもフルヤシキ(古屋敷)の裏手になっているので、この解釈で通るだろう。古屋敷は前方に低い方をみるようになっているので、裏手は当然、少し高い土地になっている。小さい方のノキ小字も、住居跡を思わせるタケウチ小字やカイト小字の裏手に当たっている。

こんな簡単な二字の小字であるが、全国地図には記載されていない。

【茶屋】

チャヤ。

この小字はヌッチハラ小字とムカイクボ小字に挟まれており、国道153号線に跨がっている。

チャヤとは「路傍で休息する人に湯茶などを出す店」(広辞苑)であろう。この道は地名発生時にも人馬の往来する街道であったのであろう。

全国地図には、チャヤ地名は、40カ所も、中・大字として挙げられている。

【知喜利田】

チキリダ。

この小字はヌッチハラ小字に取り囲まれ、南端を坊主川が流れている。山本公民館がある小字である。

チキリダ←チギリダを清音化した語で、チギリは動詞チギル(搦)の連用形で「崩壊地形、浸食地形」をいう(語源辞典)。

以上から、チキリダとは「坊主川の浸

食を受けた土地」をいうのであろう。

全国地図には、チキリダ地名もチギリダ地名も載っていない。

【清水畑】

シミズバタ。

この小字は中平の中央道西側にある。近くにはシミズダ小字もある。

シミズバタには二通りの解釈がある。

①シミズバタはシミズバタ（清水端）で、「清水が湧いて出ている所」を意味するか。

②シミズバタはシミズバタ（清水畑）で「清水が湧き出ている畑地」であろうか。

全国地図には、シミズバタ地名が3カ所があり、中・大字として記録されている。

【粟田】

アワタ。

この小字は中央道を挟んで二ヶ所にある。一つは中央道と国道153号線の間であり、チキリダ小字の北隣に、ヌッチハラ小字には挟まれて位置していて北側には坊主川が流れている。もう一つは、中央道の西側にあり、中を坊主川が流れている。

アワタとは何か。語源辞典に依りながら三説を挙げたい。

①アワは動詞アハク（暴）の語幹から「崩壊地」をいう。アワタとは、「崩れ地のあった場所（あるいは田んぼ）」か。

②アワはアワ（泡）で、「湿地」をいうこともある。アワタとは「湿地になっている所」とも考えられる。

③穀物のアワ（粟）を作っていた可能性もないわけではない。アワタとは「粟を栽培していた場所」であろうか。

全国地図には、二ヶ所にアワタ地名があり、いずれも「粟田」の字が宛てられている。

【名々嶋】

ナナシギ。

国道153号線沿線にある小さな小字である。竹佐にもナナシギ小字がある。

ナナシギとは何か。二説を挙げる。

①ナナはナナメ（社）の下略形で「傾斜地」をいい、シギハシギ（棧）に通じ「階段状の地形」をいう（語源辞典）。以上からナナシギとは「傾斜地で階段状の地形になっている所」となる。

②ナナシギは「名無し木」ではないだろうか。“名無しの木”とは「依代であった樹木が神そのものであるかのように思われるようになると、樹木自体に霊的な力を認める場合が生じる。神社の神木などを特に、なんじゃもんじゃの木とか名なしの木などと呼ぶ例があるが、これはその樹木を神聖視して名前を呼ぶことを忌んだ結果と思われる」（民俗大辞典）という。以上から、ナナシギとは「名無しの木がある場所」をいうのではないだろうか。

龍江の今田にも「七嶋」小字がある。これには「シチシギ」と仮名が振られているので「清水の出る階段のような地形」としておいたが、これも“名無しの木”ではなかったかと、考えている。今田のは小学校の校地近くでミヤモト小字があるので、お宮のあったところではないかと思われる。

全国地図には、ナナシギ地名もシチシギ地名も載っていない。

【中原】

ナカハラ。

山本の竹佐境にあり、中央道と国道153号線の間にある、広い小字である。

ナカハラとは「中心となるような地域にある広い平坦地」であろう。

全国地図には、ナカハラ地名は125カ所も中・大字として挙げられている。目度い地名でもあるからか。

【水口】

ミズクチ。

この小字も山本の二ヶ所にある。一つは、中央道西沿いであって、アワタ小字に囲まれている小さな小字である。もう一つは、国道 153 号線の東側であってナカハラ小字に囲まれている小さな小字である。

ミズクチ（水口）とは、「水の出る口」（広辞苑）で、ここでは自然湧水のある場所であろうか。

全国地図には、ミズクチ地名は 8 カ所に、中・大字として挙げられている。

【町屋中道下】

マチヤナカミチシタ。

この小字は、山本の中平になるのか、マチヤ（町屋）小字が並んでいる街道沿いにある。この街道を“町屋中道”と呼んでいたのかもしれない。この道は東にある国道 153 号線と西にある大きな道（北街道？）の間にある道であろうか。

マチヤナカマチシタとは、この「町屋中道の東側の下流側になる土地」をいうのであろう。

【中田】

ナカタ。

この小字は、先の町屋中道と中央道のほぼ東側にある。現在は住宅地が 3 割ぐらいで、残りは水田と畑地が半々ぐらいになっている。

ナカタとは「中心地に近い所、またはそこにある田んぼ」であろう。

全国地図には、ナカタ地名は、中・大字として 35 カ所に挙げられている。

【太田】

オオタ。

国道 153 号線に面した小さな小字であり、マチハリ小字の南隣にある。

オオタはオオ（大）・タ（処）で、「重要な所」とあるという（語源辞典）。しか

し、どうして重要なのか、判断がつかないでいる。

全国地図に中・大字として記録されているオオタ地名は、162 カ所と非常に多い。

【石子原】

イシギョウハラ。

町屋中道と国道 153 号線の間広がる、大きな小字である。

イシギョウハラとは何を意味するのか。国語大辞典によりながら、二説を挙げたい。

①ギョウはギョウ（行）で「ながくつらなること」をいう。イシギョウハラとは「小石が長く連なっている平坦な野原」か。土石流が扇状地を流れるときに同じぐらいの大きさの石が並ぶことがある。そのことを意味しているのかもしれない。

②ギョウはギョウ（仰）で「甚だしいさま」をいう。イシギョウハラとは、「小石ばかりの平坦の土地」をいうのであろうか。

全国地図には、イシギョウハラ地名は記載されていないが、イシギョウ地名は 3ヶ所に中・大字として挙げられているが、宛てられている字は「石行」が 2ヶ所、「石経」が 1ヶ所となっている。

【板橋】

イタハシ。

この小字は、中央道とイシコハラ小字に囲まれていて、南端を赤羽根川が流れていたようだ。現在は三遠南信道工事で地形が変わっている。

イタハシとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①イタハシとは、字面の通り、「板で作った橋」をいう。南側の赤羽根川に架けられていたものであろう。

②イタハシはイタ（損。傷）・ハシ（端）で、「端の部分が崩れ地になっていたこと

のある場所」を意味するのであろう。

全国地図には、関連する地名が多く、イタハン地名は5カ所、イタバシ地名は51カ所が、中・大字として挙げられている。

【法正防】

ハウショウボウ。

この小字は、ナカハラ小字とイシコハラ小字に挟まれている。

ハウショウボウとは何か。ボウはボウ(坊)であろう。「僧侶の住居」(広辞苑)である。考えられることを二つ。

①ハウショウは宝生如来をいうのであろうか。ハウショウボウとは「宝生如来を安置した坊」ということになる。宝生如来とは「金剛界五仏のうち南方の如来」だという(仏教辞典)。この小字から北の方には大御堂寺があった。このことと関係があるのかどうか。

②ハウショウ←ハウジョウ(放生)と清音化したのであろうか。ハウショウボウとは「放生会が行われた場所」であったかもしれない。放生とは「捕らえた生物をはなちにがすこと。仏教で慈悲の行いをする」ことだという(広辞苑)。

全国地図にはハウショウボウ地名は載っていない。

【並松・なみ松】

ナミマツ。

この小字は山本に二ヶ所、竹佐には「並松」が二ヶ所、「なみ松」が一カ所にある。

ナミマツとは、字面の通りで、「並んで松が生えている所」であろうか。自生したものか、植樹したものかは分からない。山本のナミマツ小字は、国道153号線に沿っているが、竹佐のナミマツ小字は東西に並んでいる。

全国地図には、ナミマツ地名は、5カ所に、中・大字として挙げられている。

【折敷田】

オリシキダ。

この小字は、国道153号線に西沿いにあり、イシコハラ小字の南隣に当たる。

オリシキダとは何か。二説を挙げる。

①オリシキダ←カリシキダ(刈敷田)と転訛したと考えることはできないだろうか。刈敷とは、「山野の草・樹木の茎葉を緑のままで水田や畑に敷き込むこと」(広辞苑)である。「折り敷く」のはもっと広い意味で「木の枝などを折って敷く」(広辞苑)ことだという。以上からオリシキダとは「山野の草木を敷き込んだ田んぼ」を意味するものと思われる。

②オリはオリ(下)で「傾斜地」をいい、シキはシコ(凝)の転で「湿地」のこと(以上は語源辞典)。オリシキダとは、「湧水のある傾斜地、または水田」かもしれない。

全国地図には、オリシキダ地名は記載されていない。

【外原】

ソトハラ。

この小字は、オリシキダ小字の南西側隣にある。

ソト(外)とは、「空間的、平面的に、ある範囲や区画、限界などから出ている部分、すなわち内側でないほうをいう語」(国語大辞典)をいう。

ソトハラ(外原)とは、ナカハラ(中原)小字に対応する語で、「中心から離れた場所にある広い平坦地」をいうのであろう。

ソトハラ地名は、全国地図に、1カ所にだけ、中・大字として挙げられている。

【辻原・辻田・辻前田】

ツジハラ・ツジタ・ツジマエダ。

山本東部の竹佐境にある辻小字群である。ツジハラ小字とツジマエダ小字は二ヶ所ずつあり、ツジタ小字は一カ所にだけある。いずれも四～五叉路になってい

る。

これらの辻小字群が関連すると思われる辻は三カ所にあるが、いずれも「町屋中道」が関係している。

ツジハラは「辻のある平坦地」、ツジタは「辻のある所（田んぼ）」、ツジマエダは「辻の前にある田（ところ）」であろうか。

民俗大辞典には次のようにある。「辻には、境界性と公共性という二つの特性がある。境界の場としての辻は、他界への出入口として認識され、祖霊や妖怪との出会いの場となった。辻の境界性と公共性は一見矛盾するようでありながら、深層において通底する面をもち、辻での市や芸能などには、両方の性格が見られる。辻にまつられる神には、境界にあって外界からの厄災を防ぐ地蔵・道祖神・塞の神などが多い」と。

全国地図には、ツジタ地名とツジマエダ地名は載っていないが、ツジハラ地名は2カ所に記載がある。

【東田】

ヒガシダ。

この小字は、東端の山本の阿智村境にある。

ヒガシダとは、字面の通りで、「東の端に当たる阿智村境の田んぼのある所」であろうか。

全国地図には、ヒガシダ地名は9カ所が中・大字として記録されている。

【蟹田・蟹田前】

カニダ・カニダマエ。

この二つの小字は、山本南平の赤羽根川左岸に並んでいる。カニダ小字が上流側になる。

カニダマエは「カニダ小字の前の方の土地」となるが、カニダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。
①カニ←カナ（搔痒）と転訛した語で、

「崩壊地形」をいう。カニダとは「河川の増水で削られた土地（水田）」であろうか。カニダ小字は、山地から流れ出た赤羽根川の水勢が残る扇状地の上流部にある。

②あるいは、字面の通りで、カニダとは「沢蟹が多かったところ」かもしれない。生物が地名になることは少ないのかもしれないが、可能性がないわけではない。

全国地図には、カニダ地名はないが、カニタ地名は6カ所に中・大字として挙げられている。

【寺ノ前】

テラノマエ。

この小字は、浄玄寺の下流側である東側にある。

テラノマエとは、文字通りで「浄玄寺の前の方にある土地」をいう。

全国地図には、テラノマエ地名は14カ所に挙げられている。

【三ノ沢・三ノ澤】

サンノサワ。

吉中林独立峰と城山・鎮守山の間を流れる、山本南平の赤羽根川上流部にある。小字名だけでなく、赤羽根川上流部をサンノサワと呼んでいるのであろう。

サンノサワとは、「数本の谷川が流れているところ」か。扇状地の上流部で、山地境付近から流れる川がいくつかあったということであろうか。それらが集まって赤羽根川を形成していたのであろう。

全国地図には、中・大字として、サンノサワ地名は3カ所に記載がある。

【二反田】

ニタンダ。

この小字は山本南平の扇状地に2カ所ある。

ニタンダとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ニタンダとは「面積が二反歩あった田

んぼ」であろう。むろん、小字名発生当時である。

②もう一つ、ニタン=ヌ（沼）・タ（処）で、ニタンダとは「自然湧水のある水田」も考えられる。あるいは、水の処理に関わってサンノサワ小字が生まれたのかもしれない。

ニタンダ地名は、全国地図には16カ所に中・大字として挙げられている。

【藪ノ越】

ヤブノコシ。

山本南平のニタンダ小字の下流側にある。現在は、周辺がほとんど水田であるのに、この小字だけ畑地になっている。

ヤブノコシとは「人手が入りにくい藪の付近」を意味する。藪神がいる所という認識があったのであろう。この小字の北東方向にもヤブコシ（藪腰）小字があり、同じように解することができる。

全国地図にはヤブノコシ地名もヤブコシ地名もないので、あるいは伊那谷南部の特徴的な小字とも考えられるが、あるいは、小さい地名でそれほど目出度くない地名だから、中・大字に昇格していないのかもしれない。

【小田】

コタ。

この小字はカニタマエ小字の北東隣にある。現在は、ほとんどが水田になっている。

コタとは何を意味するのか。語源辞典に従って、二説を挙げる。

①コタ←ゴタと清音化した語で「どろ」をいう。コタとは「泥の多い所」であろうか。

②コタ←コウ・タ←カワ（川）・タ（処）と転訛したもので、コタとは「川の傍」をいう。この小字の端を赤羽根川支流が流れている。

全国地図には、6カ所にコタ地名が、中・大字として記載されている。

【五郎作】

ゴロウサク。

この小字は、コタ小字の北東隣にあり、間に赤羽根川の支流が流れている。現在は、全てが水田になっている。

ゴロウは固有名詞であろう。ゴロウサクとは、「五郎が耕作していた所」であろうか。

さすがに、全国地図にはゴロウサク地名の記載は無い。

【銭亀田】

ゼニカメダ。

この小字は、山本南平の中央道と国道153号線の間にある。水田と荒地であったと思われるが、三遠南信道路の工事で今はわからない。

ゼニカメダとは何か。二説を挙げる。

①ゼニガメはイシガメやクサガメメの幼期のものをいう（広辞苑）。ゼニカメダとは「ゼニガメがいた田んぼ（場所）」をいうのであろうか。ダムのなかった頃は亀がよく遡行してきたという。

②ゼニガメはゼニガメ（銭瓶）で、「銭を入れるのに用いる瓶」（国語大辞典）ではないだろうか。すなわち、ゼニカメダとは、「銭瓶を掘り出したことのある場所（水田）」である可能性も否定できない。

全国地図には、ゼニカメダ地名もゼニガメダ地名も載っていない。

【坪ガ尻】

ツボガシリ。

この小字は、山本南平の扇状地にあり、両端を赤羽根川の支流が洗っている。比較的、面積の大きな小字である。

ツボガシリとかツボノシリという小字は、伊那谷南部には多い。山本南平ニモツボシリ小字が二ヶ所にある。しかし、全国地図には、中・大字として一カ所も

挙げられていない。

悩まされ続けている小字であるが、ここでも解釈を挙げなければならない。

ツボガシリとは何か、二説を挙げたい。

①ツボは動詞ツボム（窄）の語幹で「つぼんだような地形」をいう（語源辞典）。言い換えれば、ツボは「谷地形」を表しているのではないだろうか。ツボガシリとは「谷の口からあふれ出た土石流が扇状地に広がった土地」をいうのではないだろうか。

②ツボには「建物あるいは垣で囲まれた一区画の土地」（広辞苑）という意味がある。この小字の上流側にはフルヤシキ（古屋敷）小字がある。ここでいうツボとは「古屋敷があった土地」をいうのかもしれない。とすれば、ツボガシリとは、「屋敷の下流側に広がっている田んぼのある土地」を意味するのかもしれない。

【外市場】

ソトイチバ。

この小字は、ツボガシリ小字の北隣の上流側にある。南西端には赤羽根川支流が流れている。

ソト（外）は、この場合、ナカ（中）に対応する語で、ナカタ（中田）小字やマチヤ（町屋）小字があり、ナカミチ（中道）が通っている地域から外れた場所を示しているのであろう。

ソトイチバとは、「中心地区でない所で開かれた市があった場所」ではないだろうか。ここには、小さいながら川もあるし、三叉路もある。

全国地図には、ソトイチバ地名は記載が無い。

【石田】

イシダ。

この小字は、山本南平の扇状地の中程にある。現在は住宅地と畑で水田は多くはない。

イシダとは「小石の多いところ」をいうのであろう。

全国地図には、イシダ地名は、80カ所も中・大字として挙げられている。あまり珍しくはない地名である。

【久保田】

クボタ。

この小字はイシダ小字の上流側にある。この地名もありふれており、全国地図には81カ所が中・大字として記載されている。

クボタとは「周辺よりやや凹んだ土地」ということになるが、地形はどうであろうか。

現在は宅地と畑で、一部が田んぼになっている。

【岩澤】

イワサワ。

この小字は、イシダ小字とサワド小字に挟まれている。北の縁を坊主川が流れている。

イワサワとは、「小石混じりの自然堤防があった川が流れている所」であろうか。

全国地図には、15カ所にイワサワ地名が、中・大字として記録されている。

【澤渡】

サワド。

山本南平には、この小字が二ヶ所にある。いずれも坊主川の両岸にかかっている。

サワドには二通りの意味がある。

①サワ（澤）・ド（処）で、「谷川が流れている所」をいう。

②サワ（澤）・ド（渡）で、「谷川を渡る場所」もいう。

全国地図には、サワド地名は、5カ所にある。因みにサワンドと撥音便化した地名も5カ所に、中・大字として挙げられている。

【北田】

キタダ。

この小字は中屋中道とサワド小字に挟まれている。現在は、住宅地と畑地になっていて、田んぼはない。

キタダについても二説を挙げたい。

①キタダとは「北の方にある場所」か。南の少し離れた所にナカタ（中田）小字があるので、それに対応して名付けられたのであろうか。

②キタはキダハンシ（階）の下略形で、「階段状の地形になっている所」をいうか。

キタダ地名は、全国地図に29カ所、中・大字として挙げられている。少なくともない数である。

【鋤八丁】

スキハッチョウ。

坊主川左岸にある水田地帯であるが、一部には畑地もある。

スキハッチョウとは何か。語源辞典を見ながら三説を挙げたい。

①スキハはス（砂）・キ（接尾語）で「砂礫地」をいう。ハッチョウは面積で約8万㎡。この小字の方が広いかもしれない。以上から、スキハッチョウとは、「砂地が8町歩もあるところ」か。水漏れのことにも気になるがどうであろうか。

②スキは動詞スク（剥）の連用形が名詞化した語で、「薄く切り取られた状態」をいう。スキハッチョウとは、「坊主川によって削り取られた所もある8町歩」を意味するか。

③ハッチョウ←バンジョウ←バジョウメン（馬上免）と転じた語で、「検注使が立ち入らない砂礫地」か。耕作状況を調べなくてもいい土地で、仏田・神田に多かったというが、荒れ地も馬上免になっていたらしい。この解釈はやや無理気味か。

全国地図には、スキハッチョウ地名は無い。面積が入ると、中・大字にはなりにくのかもしれない。

【斧磨】

オノトギ。

この小字は、坊主川上流の左岸にあって、ヤマグチ小字の南隣になる。

オノトギ小字も伊那谷南部には多いが、全国地図には、オノトギ地名は記載が無い。現在は棚田になっている。

オノトギとは何か。二説を挙げる。

①オノトギとは「斧を研ぐ場所」であろうか。作業小屋があったのか、それとも研師が住んでいたかもしれない。斧は大型の鋸が普及するまでは、伐採から製材までのすべての作業を斧で行っていたので、山仕事をする人々にとって最も重要な道具の一つで大切に扱われたという（民俗大辞典）。

②オノはオ（尾）・ノ（野）で、「山すその野原」か。トギ←トキは動詞トク（解）の連用形で名詞化した語で「崩れ地」をいう（語源辞典）。以上から、オノトギとは「崩れ地のある山すその野原」をいうのであろうか。

【山田】

ヤマダ。

この小字のほぼ中心を坊主川が流れている。現在、氾濫原は水田になっているが、山麓の傾斜地は、荒れ地・住宅地・森林になっている。

ヤマダとは、広辞苑にあるように、「山にある田。山間の田」をいう。

全国地図には、296カ所もの数になるが中・大字として、ヤマダ地名が挙げられている。

【金山】

カナヤマ。

この小字は、坊主川と赤羽根川上流の三ノ沢との間に細長く伸びた側稜にある。

カナヤマといえば、金属に関わる地名に思えるが、このカナヤマについては、わずかに信玄についての口碑が残ってい

るくらいで、金属を採掘した跡はない。では、カナヤマとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①カナは雑草などを焼き払って作られた畑をいう。焼畑である。つまりカナヤマとは「焼畑耕作が行われたところ」をいう。

②カナはカク(掻)・ナグ(薙)と同じく「掻き薙がれたような土地」をいう。すなわち、カナヤマとは「崩壊地のある山地」をいうのであろうか。

カナヤマ地名は、全国地図に、78カ所も、中・大字として挙げられている。

【高松】

タカマツ。

この小字は、カナヤマ小字の側稜の先端部に当たる。半分以上は山地になっているが、残りは畑・田んぼ・居住地である。

タカマツとは何か。二説を挙げる。

①タカには「限度」の意があり「台地の端」をいう(語源辞典)。タカマツとは、「台地の末端部で松が自生している所」か。

②タカはタカ(鷹)で、タカマツとは「鷹を待つ場所」、つまり鷹狩りそするところかもしれない(日下部新一)。

全国地図には、タカマツ地名は、69カ所と多い。

【三ツ田】

ミツダ。

フルヤシキ小字の北隣にある小さな小字で、現在は畑になっている。

ミツダは三枚の田んぼをいうのではない。では何を意味するのか。語源辞典に依りつつ、二説を挙げる。

①ミツはミヅ(水)の濁音化した語で、ミツダとは、「自然湧水のあるところ」か。

②ミツは動詞ミツル(満)の連用形が名詞化した語で、「ぎりぎりのところまで迫

る」の意。ミツダは「崩壊が、ぎりぎりの所まで迫っている土地」と考えることはできないだろうか。

全国地図に、ミツダ地名は、中・大字として、1カ所に記載がある。

【古屋敷】

フルヤシキ。

この小字は二ヶ所にある。一つは、ツボガシリ小字とマエダ小字の間にあり、現在も住宅地になっている。もう一つは阿智村境にありサガリ小字の東隣にある。

フルヤシキとは、「古くからあった有力者の居住地跡」であろう。

フルヤシキ地名は、全国地図に67カ所も、中・大字として記載がある。ヤシキ地名としては多いと思われる。

【埋入】

ウメイリ。

大きな面積をもち、鎮守山小字の側稜と大嵐小字の側稜の間にあり、小さな側稜を含む谷全体にわたる小字になっている。

ウメイリとは、大きな土石流が発生して「土砂で埋まったことのあるところ」を意味するのであろう。小字名発生時にも大きな災害として、人々の記憶にとどめられていたものであろうか。

ウメイリ地名は全国地図には無い。伊那谷南部でも珍しい地名なのであろうか。

【寺ノ上】

テラノウエ。

この小字は浄玄寺の上流側傾斜地にある。

テラノウエとは、字面の通りで、「お寺の上流側にある土地」をいう。

テラノウエ地名は全国地図には5カ所に、中・大字として挙げられている。

【家ノ軒】

イエノノキ。

この小字は、浄玄寺周辺となっている。

イエノノキとは、「家屋の裏手の土地」を意味する。この場合、家屋とは浄玄寺に関わる建物であろう。ノキは繰り返して出て来るように、伊那郡や水窪で使われている語で、「家の裏手の土地」をいう。

全国地図には、イエノノキ地名は記載が無い。

【井端山】

イバタヤマ。

この小字は二ヶ所にある。一つは、山本南平の西部山地に最東端にある峰を含む傾斜地にある小字。もう一つは、その独立峰の一つ谷を越えた山地にある。

イバタヤマとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①イは語調を整え意味を強める接頭語、バタ＝ハタで「焼畑」をいう。イバタヤマとは、「焼畑耕作が行われていた山地」をいうのであろうか。

②イは「高くそびえた所」で、バタはハ(端)・タ(処) えおいい、「周辺」を意味する。イバタヤマとは、「高くそびえて峰の周辺の山地」の意か。

全国地図には、イバタヤマ地名は無い。イバタ地名も記載が無いのは、やや意外。

【鳥ヶ久保】

トリガクボ。

井端山独立峰の西側に一つ谷を越えた山地にある。西側にある井端山小字を取り囲んでいる。

トリガクボとは何か。二説を挙げる。

①トリは動詞トル(取)の連用形が名詞化した語で「切り取られたような地形」をいう(語源辞典)。以上から、トリガクボとは、「崩壊地のある窪地のある山地」であらうか。

②トリガクボとは字面の通りで、「鳥屋のある窪地」であることも考えられる。

全国地図には、トリガクボ地名は一つも無い。

【大廻り】

オオマワリ。

この小字は、山本南平に二ヶ所ある。

オオマワリとは何か。意外に分かりにくい地名である。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①オオは接頭語で美称、マハリはマ(真)・ハリ(墾)で「開墾地」をいう。オオマワリとは、「焼畑が行われた土地」であらうか。

②オオはヲ(峰)で、マワリは「周辺部」をいう。オオマワリとは、「独立峰の周辺部」をいうか。

全国地図にはオオマワリ地名は、1カ所、中・大字として挙げられているが、宛てられている字は「大丸」になっている。意味不明である。

【猿垣外】

サルガイト。

この小字は南平に二カ所ある。一つは、赤羽根川と井端山の間に大きな小字で南第一生活センターがあり、もう一つは小さくて浄玄寺の南側の小さな沢の右岸にある。

サルガイトは、「住宅近くまで猿が出て来るところ」ともしたいが、地名にはなりにくい。では何を意味するのか。

サルはサラ・サリ・サレなどの転訛した語で、「崖地」をいう(語源辞典)。すなわち、サルガイトとは「近くに崖地のある居住地跡のある土地」であらうか。

【丸山・丸山後】

マルヤマ・マルヤマウシロ。

マルヤマ小字は、サルガイト小字の南隣にあり、北西方向には井端山独立峰がある。この小字には、大きな丸い堤はあるが、独立峰はない。マルヤマウシロ小字はマルヤマ小字の西隣で、上流側になる。

マルヤマとは「円錐形の独立峰である

井端山をのぞむことのできる場所」をいうのであろうか。山神を祀るところであったとも思われるが、はっきりした跡はない。

マルヤマウシロとは、「丸山小字の裏側、つまり上流側の土地」をいう。

マルヤマ小字は各地にあるが、全国地図には352カ所という膨大な数が、中・大字として挙げられている。

【赤羽根・赤羽原】

アカハネ・アカハネハラ。

これらの小字は、山本南平の町屋中町・中央道周辺にまとまっている。

アカハネもアカハネハラも「テフラで赤褐色をしている土の広がっている土地」をいうのであろう。

全国地図には、アカハネ地名は6カ所に中・大字として挙げられているが、アカハネハラ地名は載っていない。

【大垣外】

オオガイト。

この小字は、赤羽小字群の間にある。

オオガイトとは、「大きな住宅のあった場所」であろうか。住んでいたのが有力者であった可能性がある。

オオガイト地名は、全国地図には13カ所が中・大字として記録されている。

【七久里】

ナナクリ。

山本南平の阿智村境にある細長い小字である。七久里神社とは、かなり離れた所にある。

ナナクリとは何か。七本の栗が自生していた場所ではあるまい。それほど長命とも思われないので、地名にはなりにくいからである。

ではナナクリとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ナナはナナメ（斜）の下略形で、「傾斜地」をいい、クリは古語でクリ（小石）。

すなわち、ナナクリとは「小石の多い傾斜地」をいうのであろうか。

②ナナは「傾斜地」で、クリはクリ（涅）で「湿地」のこと。つまり、ナナクリとは「傾斜地になっている湿地のある所」か。

全国地図には、ナナクリ地名が1カ所だけ中・大字として記載があるが、その地図は『時又』。

【川久保】

カワクボ。

この小字は湯川左岸の沿岸にあり、ほぼ中央道と国道153号線の間にある。

カワクボとは、「川が流れている窪地」をいうのであろう。川は湯川のことをいう。

カワクボ地名は、全国地図に、46カ所が中・大字として採用されている。

【タナ田】

タナダ。

この小字は湯川周辺の緩傾斜地にある。タナダとは、文字通り、棚状になっている田んぼのことで、「階段状の地形につくられた水田」であろう。

全国地図に、中・大字として挙げられているタナダ地名は11カ所になり、宛てられている字はすべてが「棚田」となっている。

【橋場】

ハシバ。

この小字は、湯川上流部の左岸沿岸にある。

ハシバは辞書類には記載が無いが、「橋が架かっていた場所」に相違は無い。ここには、単に橋があっただけではなく、市も開かれる場であったかもしれない。

全国地図には、ハシバ地名は、中・大字として38カ所に記載がある。

【番匠田】

バンジョウダ。

この小字は湯川左岸で、ハシバ小字の北隣にある。

バンジョウ（番匠）とは、中世の大工のこと。バンジョウダとは「大工に給付された免田」であろう。

免田とは、「荘園制のもとで、荘官・地頭や手工業職人などに与えられた年貢課役免除の田地」をいう（広辞苑）。手工業者だけではなくて、運送業者や寺社にも、荘園領主から給付されていたらしい。

なぜか、全国地図には、バンジョウダ地名は記載されていない。

【内垣外】

ウチガイト。

この小字は山本南平の大嵐山稜と井端山の間谷間に二ヶ所あり、一つは湯川に接している。

ウチガイトとは何を意味するのか。ウチはウチ（内）で、「山谷の小平地」をいう（語源辞典）。すなわち、ウチガイトとは、「山稜に挟まれた小平地で、居住地跡のある所」であろう。

全国地図には、ウチガイト地名は一つも無い。

【樋下】

トヨシタ。

大嵐山稜と井端山の間にある谷が、この小字になる。

トヨシタあるいはトイシタかもしれない。解釈の難しい小字である。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①トヨシタであるとする。トヨは動詞トヨム（響）の語幹で、「水音の響く所」、シタは「山の麓」か。以上から、トヨシタとは「(湯川の)川音がとどろく山麓」をいうか。

②トイシタであればどうか。トイはドエが転じた語で、ドエルや副詞ドエロウから「崩崖」を意味するという。すなわち、トイシタとは「崩崖のある谷底部」をい

うのであろうか。この解釈は、やや無理気味か。

全国地図には、トヨシタ地名もトイシタ地名も記録されていない。

【三次屋敷・三字屋敷】

サンジヤシキ。

この二つの小字は一緒になっていて、湯川左岸の傾斜地にある。大嵐山稜の南向き斜面になる。

サンジヤシキとは、「サンジが住んでいた屋敷跡のあった所」となるが、家屋があったとすれば、最も傾斜の緩い麓部分であろう。

ヤシキだからある程度の有力者ということになる。湯川の谷は意外に広く、水田も多い。

全国地図には、サンジヤシキ地名は載っていない。

【湯川澤・湯川山】

ユカワサワ・ユカワヤマ。

ユカワサワ小字は山本の南部で阿智村境に近い、湯川山山稜の北東麓にある。

ユカワヤマとは、「湯川に近い所にある山」で、ユカワサワとは「湯川が傍を流れている湿地」をいうのであろうか。

では、ユカワとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ユ←キ（井）と転訛した語で、「泉」をいう。すなわち、ユカワとは「湧水の多い川」か。湯川は山間地を流れるが、氾濫原が広い。あちこちに水田があり、自然湧水の多いことが目についたのではないだろうか。

②ユは形容動詞ユル（緩）の語幹で「緩傾斜地」をいう。ユカワとは「緩傾斜地を流れる川」であろうか。氾濫原が広いので、川はゆったりとした流れになる。

全国地図には、ユカワ地名は25カ所の中・大字として挙げられている。

【牛殺】

ウシゴロシ。

南平湯川の氾濫原にある広い小字である。現在は、住宅地と荒地と水田になっている。

ウシゴロシとは何か。国語大辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ウシゴロシとは、文字通りで、「牛の屠殺場があった所」であろうか。牛を殺すことを業とする人もいたのであろう。

②ウシゴロシという樹木がある。「バラ科の落葉低木、または小高木。牛に引き綱を通すために鼻の隔壁を破るのに用いた。各地の山野に生える」という。ウシゴロシとは、「ウシゴロシが自生していた所」ということになるが、地名にはなりにくい感じがするが、どうであろうか。

全国地図には、ウシゴロシ地名もウシコロシ地名も載っていない。

【カニ又】

カニマタ。

この小字は湯川山山地の北西側傾斜地にある、広い面積をもった小字である。

カニはカナ（搔薙）の転じた語で「崩れ地」をいい、マタは「沢の支流」をいう（語源辞典）。

以上から、カニマタとは「支流が深く入り込んで崩れ地のある土地」をいうか。この小字内には一本の深い谷がある。

全国地図には、カニマタ地名は載っていない。

【平林】

ヒラバヤシ。

この小字は、湯川山山稜の北東側斜面の山麓に近い所にある、緩傾斜地となっている。

ヒラバヤシとは、「山腹の緩い傾斜地で樹木の茂った所」をいうのであろう。現在は、居住地もあり、一部は畑になっている。

全国地図には、ヒラバヤシ地名は多く、

中・大字として41カ所に記載がある。

【上ノ原】

ウエノハラ。

この小字は、湯川山山稜の北東側山麓と傾斜地からなる。山麓には現在、居住地や水田がある。湯川氾濫原から見て、一つ上の段になる。

ウエノハラとは、字面の通りで、「上の段の広い緩傾斜地」をいうのであろう。

全国地図には、ウエノハラ地名は81カ所に中・大字として挙げられている。

【山岸】

ヤマギシ。

この小字は、湯川山の東側山麓に近い傾斜地にある。

ヤマギシとは「山中のがけ」（広辞苑）である。地名発生時には、大きな崖のある傾斜地であったのだろうか。現在は住宅地になっている。

全国地図には、ヤマギシ地名は37カ所に挙げられている。一般的な地名であろう。

【タキバ】

この小字は、湯川山山稜の北東側山麓にあり、湯川右岸の氾濫原にもなっている。

タキバとは何か。伊那谷南部に多いのは、滝行の場であった可能性が強い。しかし、ここのタキバは半分ほどが現在は居住地になっており、扇状地の先端部で滝修行の場とは考えにくい。

ここのタキバとは、「大雨のとき激しく流れる川で、土石流が発生した場所」としておきたい。小字発生時には、まだ語り継がれていたのであろう。

【家ノ後・家ノ横】

イエノウシロ・イエノヨコ。

これらの小字はタキバ小字に囲まれている。

イエノウシロは「有力者の家の後ろ側

の場所」をいい、イエノヨコは「有力者の家の横手の場所」をいうのであろう。現在も、有力者の家があった場所には住宅がある。

全国地図には、イエノウシロ地名もイエノヨコ地名も中・大字の中にはない。

【柳田】

ヤナギダ。

中央道を挟んで、東西に広がる比較的に大きな小字である。緩傾斜地で、現在、住宅地以外のほとんどが水田になっている。

ヤナギダとは何を意味するか。意外と難しい。二説を挙げたい。

①ヤナギダとは、「柳が自生していた場所（田んぼ）」であろうか。やや小字になりにくいのではと思われる。ありふれた光景であるから。しかし田んぼの畦に柳があったような気もする。

②ヤナギには、ヤナ（斜面）・ギ（処）という解釈もある（語源辞典）。これが正しいとすれば、ヤナギダとは、「傾斜地にある田んぼ」を意味することになる。やや無理気味の解釈ではある。

全国地図には、ヤナギダ地名は、20カ所が、中・大字として記載されている。

【平畑】

ヒラバタ。

中央道と国道153号線の間であり、湯川右岸になる。

ヒラハタとは何か。二説を挙げる。

①ヒラは「平坦な土地」、バタは「畑」か。すなわち、ヒラバタとは「平坦な地にある畑」か。

②バタは「端」で、「川端」を意味するのではないだろうか。ヒラハタとは「平坦地の縁で、川端になっている所」としたいが、どうであろうか。

全国地図には、ヒラバタ地名は4カ所、ヒラハタ地名は12カ所に、中・大字とし

て記載されている。

【ひし田】

ヒシダ。

この小字は、湯川右岸にあり、ヒラバタ小字の下流側になる。小さな小字であるが、中を国道が通っていて、現在は住宅地と水田になっている。

ヒシダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①小字の形が菱形か。ヒシダとは「菱形の田んぼ」であろうか。この小字発生時と現在では、境も変わっているはずであるが、どうであろうか。

②ヒシ←ヒジ(泥)と清音化したもので、ヒシダとは「湿地にある田んぼ」をういのであろうか。

全国地図には、ヒシダ地名は7カ所に中・大字として記載がある。

【溝端・溝バタ】

ミゾバタ。

ミゾバタ小字は二ヶ所にある。一つは中央道と国道の間であり、ヒシダ小字の南隣、ヤナギダ小字の下流側にある。もう一つは扇状地の上流部にあるミヤノマエ小字に囲まれている。

下流側のミゾバタについては、ミゾ(溝)は「人工の水路」をいうが、治水工事で近くを流れる湯川にも手を加えられており、ここでは、ミゾは湯川のことと思われる。

上流側のミゾバタについては、現在は明瞭な人工の流水は無いが、小字発生時にはミゾがあったと思われる。

以上から、ミゾバタとは、「湯川の川端の土地」をいうか。

全国地図には、ミゾバタ小字は2カ所に挙げられている。

【下田】

シモダ。

この小字は国道に沿うようにして、そ

の西側に二カ所ある。

シモダとは、扇状地の「下流側にある水田（土地）」であろう。阿智村境に近い所にある。

全国地図には77カ所に、シモダ地名が中・大字として挙げられている。

【洞田】

ホラダ。

この小字は、山本南平では四カ所にある。

ホラ（洞）とは、あちこちにある「小さな谷」をいうのであろう。

ホラダとは、「小さな谷にある田んぼ」を意味するものと思われる。現在は住宅地になっている所もあり、全てを水田にしているものかどうか、多少は気になる。

全国地図には、ホラダ（洞田）地名と、ホラタ（洞田）地名が、1カ所ずつ、中・大字として挙げられている。

【田忠バ】

タッシュウバ。

この小字は、中央道と国道の間にあり、現在も墓地が二ヶ所ある。

タッチウバ（塔頭場）とは、静岡・群馬の方言で「墓地」をいう（国語大辞典）。ラントウバ（卵塔場）と共に、伊那谷南部にもある地名である。

全国地図には、タッチウバ地名は記載が無い。

【寿阿い】

スアイと呼んでいると思われるが、はっきりしない。

中央道を挟んで、ミナミダ小字の下流側になる。

スアイとは何を意味しているのか、よく分からない地名の一つ。二説を挙げたい。

①スはス（砂）で「押し流されて堆積した土砂」（語源辞典）で、アイ（間）は「物、事柄などについて、二つのもの間」（国

語大辞典）であるという。スアイとは「土石流で土砂が堆積した所」であろうか。微高地の間に土砂が堆積したことを示しているのであろう。やや無理な解釈か。②アイは動詞アユク（揺）の語幹で「地這り地」をいう（語源辞典）。つまり、スアイとは、「地這りが起きたことのある砂地」か。

全国地図にはスアイ地名は1カ所に中・大字として挙げられており、「数合」の字が宛てられている。

全国地図には、スアイ地名は1カ所があり、「数合」の字が宛てられている。

【洗米田】

センマイダ。

この小字は中央道沿いのスアイ小字の南隣にある。

センマイダとは、「洗米用の米を作っていた田んぼ」であろう。センマイ（洗米）とは、「神仏などに供えるために、洗ってきれいにした米」（広辞苑）である。中央道を西へ越えたところに湯川神社がある。

全国地図には、センマイダ地名は1カ所に、中・大字として挙げられているが、「千枚田」の字が宛てられている。

【日やけ・日焼】

ヒヤケ。

「日焼け」小字は南平の阿智村村境に近い所に三ヶ所あり、「日焼」小字は一ヶカ所にある。現在は住宅地になっている所が多い。

ヒヤケは動詞ヒヤケル（冷）から水温の低い所も考えられるが、ここでは採らない。

ヒヤケは「早に弱いところ」であろうか。田畑のことである。

全国地図には、ヒヤケ地名は2ヶ所と少ない。歓迎すべき地名ではないからであろう。

【日丁・日丁道上・日丁大田】

呼びかたが分からないが、ヒアタリにしておく。漢和大字典によれば、「丁」はアタルと呼ぶことがある。アタルの連用形が名詞化した語と考えたがどうであろうか。他はヒアタリミチウエとヒアタリオオタか。

これらの小字は湯川山山麓から扇状地の中程まで、広い廃範囲に分布している。多くはヒヤケ小字の近くにある。

ヒアタリは、「日光の当たること。また、その場所」（広辞苑）である。

ヒアタリ（日丁）とは「日当たりがよく早になり易い土地」をいうのであろうか。

ヒアタリミチウエとは、「早になり易い場所の道路上にある土地」か。

ヒアタリオオタのオオタはアフ（アブ）・タ（処）の転訛した語で、「崩崖」をいう。すなわち、「日当たりのいい、崩れ地のある所」であろう。木槌沢川が曲流する左岸にある。

全国地図には、ヒアタリ地名は、中・大字として、1カ所に記載がある。宛てられている字は「日当」。

【下リ畑】

サガリバタ。

この小字は国道153号線の西側にあるが、湯川に近い。

サガリバタとは、「傾斜地（扇状地）の下の方にある畑」であろう。現在は国道と住宅地になっているが、小字名発生時には畑であったと思われる。

全国地図には、サガリバタ地名は無い。

【下リ】

サガリ。

この小字はサガリバタ小字の下流側にあり、湯川に接している。

サガリは動詞サガル（下）の連用形が名詞化した語で、「傾斜地の最も下がった所」としたい。

因みに、語源辞典では、サガリとは「下がった地形。すなわち傾斜地をいうか」とあるが、不十分と判断した。

全国地図には、サガリ地名は、8カ所で中・大字として挙げられているが、宛てられている文字は様々である。

【古島】

フルシマ。

この小字は、国道153号線添いに2ヶ所ある。

フルシマとは何か。これもはっきりしない小字名であるが、語源辞典に従って、三説を挙げる。

①フルシマとは、字面の通りで、「以前から微高地になっていて島に見立てられていたところ」であろうか。

②フルシマとは、「以前から川が流れていて島に見立てられていた場所」か。川は木槌沢川と湯川か。

③フルは動詞フルフ（振）の語幹で「揺り動かされた地」、すなわち「崩壊地」をいう。フルシマとは「崩れたことのある島地形のところ」であろうか。

全国地図には、フルシマ地名は3ヶ所に、中・大字として挙げられ、そのすべてに「古島」の字が宛てられている。

【向前田】

ムカイマエダ。

この小字は、中央道の東側にあり、ヒヤケ小字やヒアタリ小字に囲まれている。

ムカイマエダとは、「マエダ小字の向かい側にある土地」をいうのであろう。マエダ小字の方は、湯川右岸にあり、ちょうど湯川神社と、ほぼ正三角形の頂点に三者が位置するようにみえる。

マエダ小字もムカイマエダ小字も、湯川神社の“前の方”にある所（田）を意味しているものと考えたいが、どうであろうか。

【木槌・木槌山】

キヅチ・キヅチヤマ。

これらの小字は木槌沢川の最上流部にある。木槌山は独立峰で、その麓の低地に木槌沢川に沿ったキヅチ小字がある。キヅチヤマ小字は二ヶ所にあるが、かつては繋がっていた物であろう。

キヅチヤマは「キヅチ小字の近くの山」を意味するのであろう。ではキヅチとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①キヅチはキ（割）・ツチ（泥）であり、「階段状になっている湿地」をいう。古くはツチにドロの意があったという。この小字は、大きな土砂の崩落と堆積があったことを思わせる地形になっている。

②キヅチはキズ（傷）・チ（接尾語）が転じた語で、「多くの傷跡のある土地」を意味するか。

全国地図には、キヅチ地名もキズチ地名も載っていない。

【山ノ田】

ヤマノタ。

この小字は、湯川山・牛ヶ久保山地の東側山麓に近い傾斜地にある。現在も、三割ぐらいは水田になっている。

ヤマノタとは、「山間に水田があるところ」を意味するのであろう。

全国地図には、ヤマノタ地名は、13カ所に、中・大字として挙げられている。

【半ノ木】

ハンノキ。

この小字は、ヤマノタ小字の南隣にあり、牛ヶ久保山地の山麓に近い緩傾斜地にある。現在は荒地と竹林になっている。

ハンノキとは「榿（はり）の木が植えられていたことのある土地」を意味するものと思われる。焼畑が行われていたのだろうか。

ハンノキはカバノキ科の落葉高木で榛の木ともかき榿（はりのき）ともいう。

湿地に自生し、成長が早いため、田畑のあぜ、ワサビ田、焼畑などに人為的に移植されてきた。ハンノキを植えると地がこえると認識されていて、江戸時代の中ごろにはその植栽が大いに奨励されていたという（民俗大辞典）。

全国地図には、ハンノキ地名は、6カ所に中・大字として記載されている。

【妻ノ神】

サイノカミ。

この小字は牛ヶ久保山地の山麓にある。阿智村境までは、まだ少し距離があるようにも思えるが、ここに塞の神を祀ったのであろう。

サイノカミとは「妻ノ神を祀ったところ」を意味する。

妻ノ神はオノ神ともいい、塞神あるいは道祖神のことをいう。

サイノカミ（サエノカミ）は、「境にあって外部から村落へ襲来する疫神や悪霊などをふせぎ止めたり、追い払ったりする神。また、行路の神、旅の神。生殖の神ともされる」（国語大辞典）という。

【青木田】

アオキダ。

中央道の西側にあり、ホラダ小字やヒアタリ小字の南隣になる。現在は、住宅地、荒地、水田になっている。

アオキダとは何を意味するのか。語源辞典に依りつつ二説を挙げる。

①アオキダとは、字面の通りで、「青々と常緑樹が茂っている場所」をいうか。

②アオキ←オギ←ウキと転訛した語で「湿地」を意味する。アオキダとは「湿地のあるところ」であろうか。沼津地方の方言とういが、ここでも使われていたどうかは不明。

全国地図には、アオキダ地名は、中・大字として、2ヶ所に記載がある。

【牛ヶ久保】

ウシガクボ。

この小字は、大きいのと小さいのがある。大きいウシガクボ小字は、湯川山・牛ヶ久保山稜の最高点を含む広大な面積を有しており、小さなウシガクボ小字は山稜の麓にある。かつてはこの小さい小字も大きなウシガクボ小字に含まれていたと思われる。

ウシガクボとは何を意味しているのだろうか。二説を挙げたい。

①ウシガクボ山稜を牛に見立てたのかもしれない。顔を南東側に向けており二本の側稜を角と見たのであろうか。クボは「山の側稜と側稜のあいだの沢」をいう(語源辞典)。以上から、ウシガクボとは、「牛に似た山稜で、複数の深い谷のある所」であらうか。

②もしかしたら、ここで牛を放牧していたのかもしれない。とすれば、ウシガクボとは、「牛を放牧していた山地で沢が目立つところ」か。

全国地図には、ウシガクボ地名は載っていない。

【イナバ】

この小字は、広大なウシガクボ小字に取り囲まれている。牛ヶ久保山稜の小さいが幅のある側稜の南東に向かう尾根筋にある。

稲はざができる前の「稲干場」で刈り取った稲を草原に拡げて乾燥させた。イナバ小字の下流側には、今でも水田がある。

イナバは伊那谷南部には多い小字であるが、全国地図にも、中・大字として、32カ所に挙げられている。

【大洞】

オオボラ。

この小字は、イナバ小字に並んでおり、イナバ小字が尾根の部分に、隣の谷の部分がオオボラ小字になっている。オオボ

ラ小字の周辺はウシガクボ小字になっている。

ホラは「小さい谷」で、オオは本来は「大きい」の意であるが、ここでは単に美称としてつけられた接頭語であらう。オオボラとは、「小さな谷になっている所」であらうか。

全国地図には、オオボラ地名は、20カ所に挙げられており、意外に多い感じがする。全国的にはホラ地名は多くはないので。

【桧ノ澤】

ヒノキノサワ。

木槌沢川上流部左岸にあつて、タルノサワ小字の下流側にある、小さな小字である。

ヒノキノサワとは何か。二説を挙げておきたい。

①ヒノキノサワとは「桧が自生している沢」と考えるのが、一般的か。最高の建築材だから、注目されていたのであらうか。

②ヒノキはヒ(樋)・ノキ(除)で「川崖」をいう(語源辞典)。ヒノキノサワとは「川崖のある沢」かもしれない。崩れやすい場所であるので、この解釈が成立する可能性はある。

全国地図には、ヒノキノサワ地名は無いが、ヒノキサワ地名は5カ所、ヒノキザワ地名は4カ所に、中・大字として挙げられている。

【弥市田】

ヤイチダ。

この小字は木槌沢川左岸にあつて、氾濫原の下流部に当たる。現在は、ほとんどが水田になっている。

ヤイチは固有名詞で、ヤイチダとは「弥市が所有し耕作していた田んぼ」であらうか。

【迎田】

ムカエダ。

この小字は木槌沢川右岸にある。

ムカエダ＝ムカイダで、「向かい側にある場所（田んぼ）」である。基準になっているのは、湯川神社であろうか。木槌沢川を越えた北の方にお宮はある。

全国地図には、ムカエダ地名は7カ所、ムカイダ地名は41カ所にある。

【赤畑・赤畑土手】

アカハタ・アカハタドテ。

アカハタ小字は、阿智村村境に近い山地にあり、もう一つ小さな飛び地が木槌沢川右岸にもある。アカハタドテ小字は中央道とアカハタ小字の間にあり、赤畑山地の裾部分の傾斜地にある。

アカハタドテとは、「アカハタ小字の裾の部分で崩崖のあったところ」であろうか。中央道の工事前がどうであったのか、はっきりはしないが。

アカハタとは何か。二説を挙げる。

①アカは「赤土」をいうか。ハタは山地だから「焼畑」であろう。すなわち、アカハタとは、「赤土に覆われているところもある焼畑耕作をした土地」となるか。

②アカは動詞アカツ（散）の語幹で、「まき散らす」の意から、「崩崖」をいう（語源辞典）。アカハタとは、「崩崖のある焼畑であった土地」をいうのかもしれない。

全国地図には、アカハタドテ地名は無いが、アカハタ地名は3カ所にある。

【百田】

ヒャクダ。

この小字は、国道153号線と阿智村村境に挟まれた棚田地域にある。

ヒャクダとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①ヒャクは「百」で「数が多いこと」をいう。ヒャクダとは「田んぼがたくさんある所」であろう。棚田状になっておれば、田んぼの数は多くなる。

②ヒャク←ビャクで、関東地方の一部で「土の崩れた所」をいう（国語大辞典）。ヒャクダとは「崩崖のある水田地域」をいうかもしれない。

ヒャクダ小字は伊那谷南部の各地にあるが、全国地図では、ヒャクダ地名は2カ所で中・大字に挙げられているにすぎない。伊那谷南部には棚田が多いということであろうか。

【山カゲ田】

ヤマカゲダ。

この小字は、南平南端の阿智村村境にある。阿智村春日神社の北側になる。境界には川が流れている。

ヤマカゲダとは、文字通りで、「山の蔭になる所（田）」であろう。阿智村側には小さいが、尾根が境界沿いに続いている。

全国地図には、ヤマカゲダ地名は記載が無い。

【堤入】

ツツミイリ。

この小字は、南平の阿智村村境に近く、サカイヤマ小字に含まれている。

ツツミとは、「水を溜めてある池」である。ここはヤマカゲダ小字にある、大きな池を指しているものと思われる。

イリは「上流。奥」をいう。長野県や北設楽郡の方言になっている（国語大辞典）。

以上から、ツツミイリとはヤマカゲダ小字にある「池の上流側にあり、池に水を供給する場所」であろう。

ツツミイリ小字も伊那谷南部には多い小字であるが、全国地図には一つも挙がっていない。

【境山】

サカイヤマ。

南平の阿智村村境にある大きな小字である。

サカイヤマとは字面の通りで、「境界に

ある山地」で、この場合はもちろん阿智村境の境界である。

全国地図にはサカイヤマ地名は、4カ所の中・大字として記録されており、いずれも「境山」の字を宛てている。

【小屋場】

コヤバ。

この小字は木槌沢川最上流部にあり、キヅチャマ小字の北隣にある。これも広い面積をもつ小字である。

コヤバとは何を意味するのか。この小字も難しい。二説を挙げる。

①コヤバとは、「仮小屋を作る場所」であろうか。小屋が使えなくなれば、新しい小屋を同じ場所に作っていたと思われる。それが、バ（場）の意味ではないだろうか。その仮小屋は鳥屋場であったか、あるいは焼畑を行うためのものであったのではないだろうか。開墾も考えられるが、傾斜地ばかりの山地では難しいかもしれない。

②コヤはコエ（越）の転で（語源辞典）、あるいは「会地を経て清内路に越えていく影の道のあった場所」と考えるのは、やや飛躍しすぎか。

全国地図には、コヤバ地名は、12カ所の中・大字として記載されている。

【扇山】

オウギヤマ。

この小字は、湯川山の奥にある山稜である。

オウギヤマとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①オウギヤマとは「地形が扇のようになっている場所」をいうのであろう。峰の部分を扇の要とすると、北側の斜面が扇の開いた面になるのであろうか。

②オウギのオウはアフ（アブ）の転じた語で「崩崖」をいい、ギはキ（処）で接尾語であるという（語源辞典）。以上から、

オウギヤマとは、「崩れ地のある山地」をいうのであろうか。

全国地図には、オウギヤマ地名が15カ所に載っている。

【樽ノ沢】

タルノサワ。

この小字も湯川山山稜の西側にある谷である。急勾配の谷になっている。

タルノサワとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①タルは下伊那の方言で「滝」をいう。タルノサワとは「滝となっている所がある谷川」であろうか。

②タルは動詞タル（垂）と関係し、崖・滝などの崩壊地形をいう。タルノサワとは「崩崖のある谷川」をいうのか。

タルノサワ地名は、全国地図に1カ所しかないが、タルガサワ地名は3カ所にある。

【井戸入】

イドイリ。

この小字は湯川山と牛ヶ久保の間の山地にある。この小字の下流側には、湯川神社の南東側に池がある。

イドイリとは、イ（井）・ド（処）・イリ（奥）で、「水のある所の奥、上流側にある土地」をいうのであろう。“水のある所”とは下流側にある池を指している。

全国地図には、イドイリ地名はなぜか1カ所もない。

【天宮松】

テングマツであろうか。

南平西部の湯川最上流部の山地にある。

天宮松＝天狗松か。天狗松とは「天狗が住んでいるところ、天狗が遊ぶところ」といわれるが、この種の木はふつうあえて伐るようなことはしない。天狗松は傘状に枝の下がった木のことでもあるが、一方で枝ぶりの下がった木は山の神の木として山中いたるところに知られ忌避さ

れている」(修験道辞典)という。

テングマツとは、「天狗松があった所」をいうのであろう。

全国地図には、テングウマツ地名はないが、テングマツ地名は1ヶ所にあり、「天狗松」の字が宛てられている。

【深澤】

フカザワ。

この小字も、南平西部山地にあり、湯川の支流がある。

フカザワとは「フカ(深)・サワ(沢)で「奥行きの深い沢」(語源辞典)であろう。湯川の支流のある谷は延々と奥地まで続いている。広辞苑にあるような「水の深い沢」ではない。

全国地図には、フカザワ地名は中・大字として25ヶ所に挙げられていて、そのすべてに「深沢」の字が宛てられている。

【山神原】

ヤマガミハラ。

この小字も、南平西部の山地にあり、テングマツ小字の北隣にある。湯川の右岸になる。

ヤマガミハラとは、「神聖な土地で山の神を祀る山腹」をいう。

山の神は天狗との関わりが深い。「天狗は山の異人および山の神霊の中世的な表現」(修験道辞典)だという。中世には、山の神と天狗のイメージが重なることが多かったと思われる。

山の神には、猟師や木樵などの山人が祀る山の神と、農民が祀る山の神があったというが、この小字の山神は前者の山人が崇めた山神であったのであろう。

全国地図には、ヤマガミハラ地名は載っていない。

【ササラ平】

ササラダイラであろうか。

この小字も南平西部山地にあり、湯川

右岸の広い面積に広がっている。

ササラダイラとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら三説を挙げたい。

①ササはササ(細)で「砂地」をいい、ラは「場所」を示す接尾語。ダイラは「山頂または中腹の平らな場所」をいう。以上から、ササラダイラとは、「砂地で、山頂が平らな土地」をいうか。

②ササラ(細)は「さらさらと音をたてる」の意を含ませる語だという(国語大辞典)。とすれば、ササラダイラとは、「(湯川が)さらさらと音をたてて流れている土地で、山頂部が平らになっている所」か。

③ササラはササ(笹)・ハラ(原)の略で、「笹原で山腹にも平らなところがある土地」と考えることもできる。

全国地図には、ササラダイラ地名の記載は無い。

【ホウノ木洞】

ホオノキボラ。

湯川右岸にあり、ササラダイラ小字の北隣に当たる、こおれも大きな小字である。

ホオノキボラとは、「朴の木が自生していた小さな谷」を意味する。

植物名が地名になるのは珍しいといわれているが、この場合には、これ以外には考えられない。

朴の木は「モクレン科の落葉高木。日本の固有種で山地に自生。材は細工しやすく、版木・建築・器具・木炭に用いる。葉は食物を包むのに用いられた。樹皮は漢方生薬の厚朴で、健胃・整腸・去痰・利尿薬」(広辞苑)であったという。注目されていた樹木だったのであろう。

全国地図には、ホオノキボラ地名は記載が無い。

【目切石】

メキリイシ。

南平西部山地にあり、ホオノキボラ小字に囲まれている。標高 811.3mの独立峰がある。

メキリとは「石臼の目を立てること。また、その人」（国語大辞典）である。

メキリイシとは「石臼に目を立てる石のある場所」をいうのであろう。目切石は辞書類にも見当たらないが、鑿ではなく石を使っていた時代もあったものと思われる。

家で見た石臼は花崗岩でできていた。この花崗岩に目を立てる緻密で固い石が目切石だったろうと思うが、目切石についての資料をみることができなかったので、なんともいえない。

阿智村にある春日の試掘跡にはホルンフェルスがあるので、メキリイシ小字にもあっても不思議では無い。このホルンフェルスを目切石にしていたのではないだろうか。

全国地図には、メキリイシ地名は載っていない。

【大平】

オオダイラ。

南平西部山地のヤマガミハラ小字の奥にある。伊那谷南部のあちこちにある小字である。

オオダイラとは、「中腹部に平らな場所のある広い土地」で、どこでも当てはまりそうな地名である。

全国地図にもオオダイラ地名は103ヶ所と多い。

【石原山】

イシハラヤマ。

この小字も山本南平の西部山地にあり、オオダイラ小字の更に奥になる。阿智村にも跨がる小字になっている。もう一つ小さなイシハラヤマ小字が北の方にもある。

イシハラ（イシワラ）は、広辞苑では

「小石の多くある平地」となっているが、日葡辞書には「石だらけの所」とあり、こちらを採用したい。現地に合っているからである。

すなわち、イシハラヤマとは「石だらけの山地になっている所」であろう。

全国地図にはイシハラヤマ地名は記載が無い。

【ジャバミ】

この小字も南平の西部山地にある。オオダイラ小字の北西隣にある谷になっている。

ジャはザレ、ゾレに通じ「崖地」を示すものが多い（語源辞典）といわれているが、やはりジャ（蛇）からでているのであろう。ハミはは動詞ハム（食）の連用形が名詞化した語。

以上から、ジャバミは「蛇が噛み取った跡のように崩れた土地」をいう。

全国地図にも、ジャバミ地名は、8ヶ所に中・大字として挙げられている。

【蛇洞】

ジャボラ。

この小字も南平西部の山地にあり、ホオノキボラ小字の奥で、ジャバミ小字との間の側稜にある。

ジャボラは「蛇の多い谷」ではなく、「崩壊地のあった谷」を意味する。

近くにはジャナギ（蛇薙）小字もあるが、位置を特定できないでいる。この付近にはジャ（蛇）小字群があり、断層との関わりが考えられるがどうであろうか。

全国地図には、ジャボラ地名が1ヶ所、中・大字として挙げられていて、同じ「蛇洞」の字が宛てられている。

【青木・青木沢・外青木】

アオキ・アオキザワ・ソトアオキ。

いずれも、南平の西部山地にあり、湯川最上流部周辺に分布している。

アオキは、「青々と樹木の茂っている土

地」をいう。瑞祥地名でもあろう。

アオキザワは、「青々と樹木の茂っている谷川」で、アオキと連動して発生した地名であろう。

ソトアオキは「アオキ小字の外側にある土地」をいうのであろう。アオキ小字には、今でも住宅があるので、アオキ小字からみてソトとなる場所を指しているものと思われる。

全国地図には、アオキ地名は79ヶ所、アオキザワ地名は4ヶ所に、それぞれ中・大字として挙げられているが、ソトアオキ地名は載っていない。

【須具坂】

スグサカ。

この小字も、山本南平の西部山地で阿智村境に、二ヶ所ある。村境の尾根筋に沿っている。

スグサカとは何を意味するのか。これも分かりにくい地名である。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①スグは動詞スグル（勝）の語幹で「秀でる」の意から「高所」をいい、サカ（坂）は「峠」を示す古語。従って、スグサカとは「尾根筋で峠のある所」であろうか。現在、地図には山道が示されていないが、陰の道があったのであろうか。

②サカはサガ（嵯峨。嶮）の清音化した語で「嶮しい地形」をいう。スグサカとは、「尾根筋で嶮しい地形のところ」を意味することも考えられる。

③スグは動詞スグル（選）の語幹で「抜き取る」意から「崩崖」をいう。すなわち、スグサカとは、「崩崖のある嶮しい地形のところ」をいうのであろうか。

全国地図には、スグサカ地名は1ヶ所に中・大字として挙げられているが、宛てられている字は「直坂」になっている。

【セバ石】

セバイシ。

この小字も南平西部山地の阿智村境にある。二ヶ所のスグサカ小字に挟まれており、阿智村にも跨がっている。

セバイシとは何か。セバはセマ（狭）の古形で「狭くなった所」をいう（語源辞典）。セバイシとは、「尾根の鞍部」をいうのであろうか。山道はこうした峠を通ることが多かった。

全国地図にはセバイシ地名は記載が無い。

【蟻子塚】

アリゴヅカ。

これも山本南平西部山地にある。

山本村誌によれば、アリゴヅカは「赤蟻のこしらえた蟻の塔が幾つもあったことからおこった字名である」という。

全国地図には、アリゴヅカ地名もアリコヅカ地名も記載されていない。

【社田地原】

シャエンジハラ。

山本南平西部山地に、二ヶ所ある。湯川の最上流部になる。

シャエンジハラとは何を意味するのか。分からない地名の一つ。二説を挙げておきたい。

①シャエンジハラは、シャ（蛇）・エン（笑）・ジ（地）・ハラ（原）であろうか。シャはジャ（ジャ）の清音化した語で、「崩れ地」をいい。エンは動詞（笑）の連体形で、「果物が熟して裂け開く」から「崩れること」をいう。同じ意味の語を重ねている。シャエンジハラとは、「崩壊地のある山の中腹部になっている土地」か。

②シャはジャ（蛇）で、エンジは「丸い形の地形」をいう。シャエンジハラとは、「円形の崩壊地がある山地の中腹部」であろうか。ハラ（原）は「山腹」を意味するという（語源辞典）。

全国地図には、シャエンジハラ地名も

シャエンジ地名も、載っていない。

【豊ヶ沢】

トヨガサワ。

吉中林独立峰の西の山麓にある。小さな小字である。

トヨガサワとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①トヨ←トヒ (樋) と転訛した語で、「水路」をいう。サワは「谷」のこと。以上から、トヨガサワとは、「流水のある谷」をいうか。当然にすぎるだろうか。

②トヨは動詞トヨム (響) の語幹で「水音の響くところ」をいう。すなわち、トヨガサワとは、「水が出たとき、水音の轟くところ」を意味するか。

全国地図には、トヨガサワ地名は、1件だけ、中・大字として記載がある。

【弟平】

オトダイラか。

この小字は、大嵐山稜の南向き傾斜地にあり、湯川の左岸になる。もう一カ所西部の山地の最奥部にあるが、位置は特定できないでいる。

オトダイラとは何か。語源辞典を参考にしながら二説を挙げる。

①オトは動詞オトス (落) から「傾斜地。崖」をいう。オトハラとは、「崖地のあるところで、尾根に平坦部がある土地」であろうか。

②オトはヲ (峰)・ト (処) で、「尾根には峰もあって平坦な場所もあるところ」となるが、やや複雑にすぎるか。

全国地図には、オトダイラ地名は記載が無い。

【中尾】

ナカオ。

この小字は、山本南平の西部山地にある大きなのと、小さな飛び地がある。かつては繋がっていたものであろう。

ナカオとは何か。ナカ←ナガ (長) の

清音化した語で、「長く延びた地形」をいう (語源辞典)。オはヲ (峰) で「尾根」を示すか。

以上から、ナカオとは「長く延びた尾根のある土地」をいう。

全国地図にはナカオ地名は、148ヶ所に、中・大字として記録されている。

【小ノ川沢】

オノガワサワ。

この小字も南平西部山地の湯川上流部の支流に沿っている。

オノガワサワとは何か。二説を挙げる。

①オはヲ (峰) で「高い所」をいう。オノガワサワとは、「側稜の尾根を含めた傾斜地で川も流れている谷」をいうか。

②オはオ (小) で「細い」の意 (語源辞典)。オノガワサワとは、「細い川が流れている谷」であろうか。

全国地図には、オノガワサワ地名は記載が無い。

【赤根洞】

アカネボラ。

この小字は湯川上流部に沿う細長い部分と湯川左岸の北西部の広い傾斜地の部分がある。

アカネボラとは何か。二説を挙げる。

①ネ (根) は裾の部分を用いる。アカネボラとは「出口が赤土に覆われている谷」をいうのであろうか。

②ネにはヲネ (尾根) の意もあるという (語源辞典)。そうだとすれば、アカネボラとは逆に「尾根の部分が赤土に覆われている洞」になるが、現地はどうであろうか。

全国地図には、アカネボラ地名もアカネボラ地名も記載が無い。

【大嵐】

オオアラシ。

赤羽根川上流の三ノ沢と湯川の間で側稜にあり、尾根とその南西側傾斜地を含

む広大な面積となっている小字である。

オオアラシとは何を意味するのか、全く分からないので、三説を挙げておく。

①オオアラシとは「規模の大きな、伐採した材木のおろし場」であろうか。アラシは「山の急斜面の上から木材などを投げ下す場所、又はそうする為に出来た溝。信州や相州などで」（分類山村語彙）であるという。

②アラシはアラシ（荒）で、焼畑の休耕地のこと（焼畑民俗文化論）。この再生を待つ期間が15年未満である地をアラシといった（岐阜）。オオアラシとは「規模の大きな焼畑が行われた土地」か。

③オオアラシとは、「風の強いところ」を意味していたかもしれない。巽の風を受けやすい所である。炭焼きで炭窯の通風口をアラシといった。通風口で空気を調整した。アラシは風のことをいうらしい（分類山村語彙）。

全国地図に中・大字として挙げられているオオアラシ地名は3ヶ所で、多い数ではない。

【姥懐】

ウバフトコロ。

この小字は、南平の大嵐山稜の南向き斜面にある。

ウバフトコロ＝ウバガフトコロで、「日当たりのよい暖かい所」をいい、奈良県吉野郡の方言であるという（国語大辞典）。この小字名は伊那谷南部には多い。

この小字名のある場所には粘土が出て、瓦や陶器の生産が行われているところが多いというが、ここではどうだろうか。

全国地図には、ウバフトコロ地名は2ヶ所、ウバガフトコロ地名は4ヶ所にある。

【鎮守山】

チンジュヤマ。

この小字は大嵐山稜の東側の山稜にな

り、二つの峰と深い谷をもっている。

チンジュは「その地を鎮め守神。またその社」をいう（広辞苑）。

従って、チンジュヤマとは「この地を鎮め守る神のおわす山」である。しかし、その社は見えない。隣にあるジョウヤマ小字と何らかの関連がありそうだが、はっきりしない。

全国地図には、チンジュヤマ地名は載っていない。

【城山】

ジョウヤマ。

この小字は、チンジュヤマ小字の北西隣の山地にあり、尾根の頂上部は平坦になっている。ここにも山城があったのであろう。久米の支城であろうか。

辞典類にはジョウヤマは無く、シロヤマになっている。しかし、全国地図には、ジョウヤマ地名は、中・大字として97ヶ所にも記載がある。

【城沢】

ジョウサワと呼んでいるのだろうか。それとも、シロサワか。

この小字はジョウヤマ小字の北東側にあり、大きな面積になっている。坊主川の支流をジョウサワと呼んでいたのであろうか。

ジョウサワとは「城山に関わる谷」であろう。この坊主川支流の下流側が堀の役割を果たしていたのであろうか。

全国地図には、ジョウサワ地名は記載が無い。シロサワ地名は4ヶ所にあるが、宛てられている字は、全て「白沢」になっている。

【蛇塚】

ヘビツカ。

この小字は南平西部山地にあり、ウシクビ小字とウエヤマハラ小字の間にある。

ヘビツカは、「蛇が多い土石で高くなった所」であろうか。単にこれだけのこと

とは考えにくい。

山陰地方で行われる祭りで、蛇神が焼畑農耕に関わるのではないかという指摘もある(民俗大辞典)。あるいは、ここ南平の山地でも蛇神を祀ることがなかったとはいえない。すぐ近くには氏神様を思わせる祠もあるようだが、まだ確認はしてない。

全国地図には、ヘビツカ地名は、5ヶ所で、中・大字として挙げられており、すべてに「蛇塚」の字が宛てられている。

【山原・上山原】

ヤマハラ・ウエヤマハラ。

これらの小字は山本南平の西部山地にある。二つの小字は南北に隣り合っているが、高さの上下はない。二つの小字はほぼ水平になっている。

この付近の山地は、一帯が緩傾斜地になっている。

ヤマハラとは「山の中の平地」をいう(国語大辞典)が、それは全体が緩い傾斜地であることを示しているのであろう。

ウエヤマハラのウエ(上)には、「あたり。ほとり」という意味もある。だから、ウエヤマハラとは、「ヤマハラの近くにある土地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ヤマハラ地名は4ヶ所が中・大字として記録されているが、ウエヤマハラ地名もカミヤマハラ地名も載ってはいない。

【丸山沢】

マルヤマサワ。

この小字は、ウエヤマハラ小字の西隣にある。この小字の南端を流れているのは赤羽根川の支流であるが、これをマルヤマサワと呼んでいるのであろうか。

マルヤマにふさわしい独立峰は標高819.5mで、丸山沢の対岸でジョウザワ(城沢)小字にある。

マルヤマサワとは、「沢を挟んで丸山を

崇めることのできる場所」をいうのであろうか。丸山には祠はなくても山神が鎮座していたのであろうか。

全国地図には、マルヤマサワ地名が、1ヶ所、中・大字として記載がある。

【清水通り】

シミズドオリ。

この小字は山本南平の西部山地の緩傾斜地にある。現在は住宅地の周辺は畑地になっているが、住宅地を離れたところは針葉樹林帯である。

シミズドオリとは「周りに自然湧水のある道路」を意味するのかわ。

全国地図には、シミズドオリ地名もシミズトオリ地名も載っていない。

【コブ尻】

コブジリ。

この小字は、山本南平の西部山地にある。

コブは「瘤状の突起。高所」(語源辞典)をいうのであろう。すなわち、コブジリとは、「瘤状に高くなった山の裾の土地」をいうのであろう。

コブジリ小字の南隣にウエヤマハラ小字があって、その南西にマルヤマサワ(丸山沢)小字がある。そこには、この付近では最も高い標高847.3mの独立峰がある。その峰をコブに見立てたものと思われる。コブジリ小字から、ほぼ南西方向に直線距離で200m余の距離にある。

全国地図には、コブジリ地名もコブシリ地名も記載は無い。

【瘦ツルネ】

ヤセツルネ。

山本西平の久米川上流部の支流沿岸にある。

ヤセツルネとは、「瘦せたように細い尾根筋」であろう。国語大辞典には「蔓のように長く伸びて連なっている小高いところ」とあり、長野・山梨・静岡磐田郡

の方言であるとしている。

【日返り】

ヒガエリ。

山本西平の久米川上流部の支流沿岸の南向き傾斜地にある。近くには居住地がある。

この名前を最初に見たときに、日光を照り返す岩があって目立っていたのかな、と思ったが、可能性は薄いようだ。

ヒガエリとは何か。二説を挙げる。

①ヒ(日)は「日当たりがいい所」をいうのであろう。カエリは動詞カヘル(反)の連用形で「傾斜地」のこと(語源辞典)。以上から、ヒガエリとは「日当たりのいい傾斜地」をいうのであろうか。

②カエリはカハ(川)・ヘリ(縁)の略と考えることもできるという(語源辞典)。すなわち、ヒガエリとは「日当たりのいい川っぶち」となるが、どうであろうか。

全国地図には、ヒガエリ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「日帰」の字が宛てられている。

【七谷】

ナナタニ。

この小字も山本西平の久米川最上流部の支流沿いにある。その右岸のことと思われる。

“伊那は七谷”というが、ここのナナタニは規模がずっと小さい。タニとは「波形の凹んだ所」(広辞苑)ぐらいの谷である。

ナナタニとは、「波形の凹んだ小さな谷がたくさんある所」を意味するのであろうか。

全国地図には、ナナタニ地名は載っていない。

【ハル洞】

ハルボラ。

この小字も山本西平の久米川上流部の支流右岸にある。北向きの傾斜地になっ

ている。急な斜面をもつ深い谷で、下流部には30mにもならない距離に二ヶ所も堰堤が築かれておち、上流部には今なお崩壊地が何カ所もある。

ハルボラのハルは動詞ハル(張)の連体形で、「いっぱい押しひろがる」の意である(広辞苑)。すなわち、ハルボラとは「大雨のとき流水がいっぱい押し広がる谷」を意味するものと思われる。谷いっぱいの流水は兩岸を崩しながら流れてくだったのであろう。

全国地図には、ハルボラ地名もハルボラ地名も記載されていない。

【天神岩・天神岩川向】

テンジンイワ・テンジンイワカワムカイ。

これらの小字は、山本西平の久米川上流部の左右兩岸にある。

テンジンイワとは何か。二通りの解釈ができそうだ。

①イワ(岩)には、「大きさが石と土との間のもの。砂利の類」の意がある(国語大辞典)。従って、テンジンイワとは「天神が祀られている土地」をいうか。しかし、その痕跡が確かめられないでいる。

②大きな岩を天神様に見立てたか。つまり、テンジンイワとは「天神像に見立てた岩のある場所」を意味するか。

いずれにしても、その証しは確認していない。

テンジンイワカワムカイとは、「テンジンイワ小字の川向にある土地」をいう。川とは久米川である。

全国地図には、テンジンイワ地名もテンジンイワカワムカイ地名も載っていない。

【桃ヶ久保】

モモガクボ。

この小字は西平の久米川右岸にあって、テンジンイワ小字とテンジンイワカワム

カイ小字に挟まれて位置する。ここも山地であるが、現在、一部に住宅と畑がある。

モモガクボとは何か。二説を挙げたい。
①モモは美称と思われるが、あるいは日本の暖地には自生しているといわれるヤマモモが自生していたかもしれない。モモガクボとは「ヤマモモが自生している窪地」をいうのかもしれない。

②モモはママの転じた語で、「崖」をいう（語源辞典）。すなわち、モモガクボとは「崖地の多い窪地」か。

全国地図には、モモガクボ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられているが、瑞祥地名としては、やや少ないか。

【赤坂】

アカサカ。

この小字は吉中林独立峰の西側にあり、坊主川右岸に当たる。

アカサカとは「赤土で覆われた傾斜地」をいうのであろう。

全国地図に、中・大字として採られているアカサカ地名は、135ヶ所に及ぶ。全国的にも多い地名であらう。

【中島原】

ナカジマハラ。

この小字はアカサカ小字の北隣にある。坊主川左岸にある緩傾斜地である。

この小字名も難しい。一方の南側は、坊主川で流水になっているが、もう一方の側が微低地になっているのかどうか。いずれにしても、島に見立てた微高地になっているものと考えている。他に解釈のしようがないからである。

以上から、とりあえず、ナカジマハラとは、「微高地になっている緩傾斜地を島に見立てたところ」としておきたい。

全国地図には、ナカジマハラ地名は載っていない。

【神ノ木平】

カミノキダイラ。

この小字は久米川左岸の側稜にあり、ゴリン小字とテンジンイワ小字に東西から挟まれている。もう一つ小さな飛び地になっているカミノキダイラ小字もある。

カミノキダイラとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①カミノキはカミノキ（紙の木）で、コウゾ（楮）をいう（広辞苑）。カミノキダイラとは「紙の原料である楮を栽培していた緩傾斜地」を意味するか。楮はクワ科の落葉低木で、暖帯に分布しているが、栽植することが多かったという。この小字には今でも桑が残っている。

②カミノキダイラはカミ（神）・ノキ（軒）・ダイラ（平）ではなかったか。テンジンイワは「神聖な神のおわす地」であり、ノキは「その裏手の地」で神聖な地の北東側の土地になる。ノキ（軒）は下伊那・水窪でよく使われている地名である。以上から、カミノキダイラとは、「神聖な神の地の裏手にある緩傾斜地」とみることでもできると思うのであるがどうであらうか。

全国地図には、カミノキダイラ地名は無いが、カミノキ地名は9ヶ所が中・大字として挙げられており、宛てられている字は6ヶ所に「神・木」がある。あるいは、カミノキ（神木）そのものが存在したんかもしれないが、辞書類には見えない。

【角石谷・角石薙】

カドイシタニでいいのかどうか。よければ、もう一つはカドイシナギか。

二つの小字は、アシノサワ小字の奥の山地にあり、ナカネ小字を挟んで、その両側にある。

カドイシとは、信州や愛知県北設楽郡で使われている方言で、「火打ち石」を意味する（国語大辞典）。これに火打金を打

ち合わせれば発火する。火を発生させる道具だった。火打石の材料は主に石英。

カドイシタニとは、「火打ち石の原料となる石英が採れた谷」をいい、カドイシナギは「火打ち石（石英）を採取することができた崩壊地のあるところ」であろう。

全国地図には、カドイシタニ地名は無いが、カドイヂ地名は5ヶ所に中・大字として採られており、うち4ヶ所は「角石」の字が宛てられている。

【中根】

ナカネ。二つのカドイシ小字の間にある。南北の両端を久米川の支流が流れている。

ナカネとは、ナカ（中）・ネ（嶺）で、「二本の流水の間に尾根があるところ」であろう。

全国地図には、ナカネ地名は4ヶ所も、中・大字として記載がある。

【鳥ノ子】

トリノコあるいはトリノネか。

この小字は山本西平のテンジンイワカワムカイ小字の北隣にある。尾根になっている。

トリノコであれば、「鳥の卵」を意味するが、トリはこの付近であれば雉子であろうか。すなわち、トリノコとは「雉子の卵が多い場所」であろうか。雉子の卵を集めることを生業とする人がいたのかもしれない。

トリノネであればどうか。トリ（鳥）・ノ（助詞）・ネ（嶺）で、「小鳥が越えていく尾根」であろうか。

全国地図には、トリノコ地名は3ヶ所に、中・大字として挙げられているが、トリノネ地名は無い。

【北ノ沢】

キタノサワ。

この小字は、久米川に北から流れ下っ

て合流する、その合流点にある。

北から合流する支流は、恐らくはキタノサワと呼んでいるのではないだろうか。

キタノサワとは、「北から久米川に合流する地点のある土地」をいうのであろう。

全国地図には、キタノサワ地名は21ヶ所にあつて、中・大字として記載されている。

【松坂】

マツザカ。

この小字は、山本西平のナナタニ小字の北隣にある。現在は住宅と畑と荒地になっているが、森林も多い。

マツザカとは、「アカマツが自生していた緩傾斜地」をいうのであろうか。

全国地図には、マツザカ地名が12ヶ所に、中・大字として記録されている。

【獅塚】

シシヅカ。

久門地山稜の西向きの細長い傾斜地にあり峰の部分まで含む小字である。

シシヅカとは何か。じっくりしない解釈ではあるが、やっとなつだけ挙げる。

シシはイノシシ（猪）のこと。ヅカ＝ツカ（塚）は、猪が穴を掘ったあとがやや盛り上がっているの、それを塚に見立てたのかもしれない。狸などの糞の塊も塚と呼んでいるので、それほど間違っではないだろうと思う。

つまりシシヅカとは「猪が穴を掘って盛り上げた土」のことと結論したが、どうであろうか。

全国地図には、シシヅカ地名は載っていない。

【赤山】

アカヤマ。

この小字は、ヤドノ小字の側稜の東隣にあり、尾根の峰を含む東向きの斜面にある。

アカヤマとは「赤土に覆われた部分の

ある山稜」であろうか。

全国地図には、アカヤマ地名は、8ヶ所が中・大字として挙げられている。宛てられている文字は、すべて「赤山」となっている。

【广虫洞】

マムシボラ。

この小字はヤドノ小字とアカヤマ小字の北隣にある。

マムシボラとは「マムシ（蝮）の多い谷」をいうのであろう。

全国地図には、マムシボラ地名も、マムシボラ地名も、全く記載は無い。

【押ノ沢】

オシノサワ。

この小字は、観音沢川の支流の上流部にある。

オシノサワとは、「支流の最上流部で土砂が押し出してきた場所」をいうのであろう。

全国地図には、オシノサワ地名は記録が無い。

【小丸山】

コマルヤマ。

この小字は観音沢川右岸の山地にある。オシノサワ小字の南隣になる。

この小字には、標高 803.5mの独立峰がある。この独立峰を指してコマルヤマと呼んでいたと思われる。

このコマルヤマにも山神が鎮座していると思われていたのかもしれない。山人達の崇める山神である。

全国地図には、コマルヤマ地名は、4ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「小丸山」の字が宛てられている。

【前坂】

マエザカ。

この小字は、標高 803.5mの小丸山の南にある。

マエザカとは、「前方にある傾斜地」を意味する。基準になっているのは、小丸山と思われる。言い換えれば、マエザカとは「小丸山の前方にある傾斜地」となる。漠然とではあるかもしれないが、小丸山を聖なる山とみていたのであろう。

全国地図には、マエザカ地名が3ヶ所、マエサカ地名も3ヶ所、挙げられており、そのすべての6ヶ所に「前坂」の字が宛てられている。

【二本木】

ニホンギ。

観音沢川の上流部にある。コマルヤマ小字の東隣になる。

ニホンギとは「二股に分かれた樹木のあったところ」であろうか。二股の木は神木として崇められてきたという。榎、杉、松に多いというが、ここの二股樹はなんであったのか。

全国地図には、中・大字として記載されているニホンギ地名が40ヶ所にも及ぶ。うち、「二本木」の字を宛てているのは36ヶ所ある。

【女男石】

メオトイシか。

山本の大明神の西側にある。

メオトイシとは、「メオトに見立てた二つ並んだ石のあるところ」であろう。伝説が関わることが多いというが、ここのメオトイシはどうであろうか。

全国地図には、3ヶ所にメオトイシ地名が中・大字として記載されている。

【大森】

オオモリ。

大明神原小字や三ツ山小字が北側に接している大きな小字である。

オオモリは一般的には「樹木の茂った深い森」をいうが、「神聖な場所」という意味がついてまわる。ここにお宮があった可能性は高い。

全国地図には、オオモリ地名は、中・大字として98ヶ所も挙げられている。

【大明神原】

ダイミョウジンバラ。

この小字は伊賀良大瀬木との境界に接しており、沢城沢川・茂都計川の右岸になる。

ダイミョウジンバラとは、「大明神に関わる緩傾斜地」をいう。

延喜式によれば、南信で名神（明神）の社格を有するのは諏訪神社だけである。その上の大明神であるから、ここでいう大明神は諏訪大明神ということになる。

七久里神社には建御名方神が配祀されており、特別神事として御柱祭も行われている（山本村誌）。大明神原に関係するお宮は七久里神社としていいのかもしれない。

あるいは、オオモリ小字に諏訪神社に繋がるお宮があったことも十分に考えられるし、隣村の大瀬木にある矢抜神社（祭神が建御名方命）は近い。

ダイミョウジンバラ地名は、1ヶ所にだけ中・大字として記載があるが、その2.5万分の1地図は『時又』で川路の「大明神原」になっている。ここにも建御名方命が祀られている。

【梅ヶ平】

ウメガダイラ。

この小字は二ヶ所にある。一つは、ダイミョウジンバラ小字の上流側に、もう一つはmamshibora小字やアカヤマ小字の近くにある。

ウメガダイラとは何を意味するのか。ウメは動詞ウム（埋）の連用形が名詞化し語で、「土砂に埋もれたところ」をいう。以上から、ウメガダイラとは「土石流などで土砂が堆積した緩傾斜地」を意味する。

全国地図には、ウメガダイラ地名も1

ヶ所に挙げられている。

【合ノ沢高戸屋】

アイノサワタカトヤ。

この小字は、観音沢川の上流で、mamshibora小字とニホンギ小字の間にある。観音沢川の支流が三本合流しているところにある。

アイノサワとは「沢が合流するところ」をいう。タカトヤは二通りの解釈がある。

①タカとは、山の中腹も含めた「高い所」をいう。タカトヤは「山の中腹などの高い所に設けたトヤ（鳥屋）」をいうか。

②タカはタカ（鷹）で、タカトヤとは「鷹を捕らえるための鳥屋」であろうか。対象はオオタカやハイタカか。あるいは、「鷹狩りをするための鳥屋」も可能性はある。

【かじ山】

カジヤマ。

この小字は竹佐にあり、箱川原台地の北端の北向き傾斜地となっている。

カジヤマとは何を意味するのか。「鍛冶職人の居住していた山」かと最初は思ったが、地図をみてから、傾斜地になっていること、北向きであることなどから、ここでの鍛冶の仕事は難しいと判断した。

カジは動詞カジル（嚙）の語幹で「引っ搔かれたような地形、つまり「崖などの崩壊地形」をいう（語源辞典）。

以上から、カジヤマとは「崩れた崖のあった山林」としたい。

全国地図には、カジヤマ地名は13ヶ所に中・大字として記録されている。宛てられている字は、「梶山」が9ヶ所、「鍛冶山」が4ヶ所となっている。

【橋詰】

ハシヅメ。

竹佐の箱川氾濫原にある。

ハシヅメは「橋のつきるところ。橋のもと」（広辞苑）である。この小字のと

ころに箱川を渡る橋が架けられていたの
であろう。大水で流されては架け直すこ
とを繰り返してきたものと思われる。

ハシヅメとは「橋が架かっていた場所」
をいうのであろう。

全国地図には、ハシヅメ地名は、33ヶ
所に、中・大字として挙げられていて、
「橋詰」の字が21ヶ所に、「橋爪」の字
は12ヶ所に宛てられている。

【梶田・かじた・かじや畑】

カジタ・カジヤハタ。

これらの小字は、ハシヅメ小字の上流
側で、箱川左岸の氾濫原と傾斜地にある。

カジタ・カジヤハタとは何か。語源辞
典に依りつつ二説を挙げる。

①カジタはカジタ（鍛冶田）の可能性も
ある。カジタとは「鍛冶職人に給与され
た年貢・課役免除の田畑」か。

②カジは動詞カジル（嚙）の語幹で「崩
壊地形」をいう。カジタ・カジヤハタと
は、「崩壊地のあった田畑」であろうか。

全国地図には、カジタ地名は、4ヶ所
に中・大字として載っている。

【向田】

ムカイダ。

この小字は、竹佐の箱川左岸にある。

ムカイダとは「向こう側にある田んぼ」
を意味するものと思われるが、どこから
みて“向こう側”なのか、基準がはっき
りしない。上流側にある、ヤシキ・ヤ・
イエ小字群の中心になっている有力者の
屋敷か、それとも箱川の対岸にあるミナ
ミガイト小字にある家であろうか。

全国地図には、ムカイダ地名は多く、
41ヶ所に中・大字として記載されてい
る。

【井戸尻・井戸上】

イドジリ・イドウエ。

これらの小字は竹佐の箱川氾濫原にあ
り、箱川に沿って並んでいる。

イドは井（井）・ド（処）で「川が流れ
ているところ」をいう。

イドジリとは「川の下流側の場所」で、
イドウエとは「川の上流側の場所」をい
うのであろう。

全国地図には、イドウエ地名は載って
いないが、イドジリ地名は5ヶ所に中・
大字として挙げられている。

【南垣外】

ミナミガイト。

この小字は、竹佐箱川右岸の氾濫原よ
り一つ上の台地にある。

ミナミガイトとは、「南の方にある居住
地跡」であろう。方角に基準は、対岸に
あるヤシキ・ヤ・イエ小字群の中心にな
っている屋敷であろうか。

全国地図には、ミナミガイト地名は3
ヶ所に中・大字として記載がある。

【観音山】

カンノンヤマ。

この小字は、ジロウサクヤマグロ小字
の北東隣にあると思われるが、はっきり
していない。

カンノン（観音）は阿弥陀如来の脇侍
である観世音菩薩のこと。カンノンヤマ
とは「観音様を祀ってあった山」であろ
う。観音霊場の一つで、村かこの地域の
観音巡りが行われたところかもしれない。

全国地図には、カンノンヤマ地名は、
中・大字として31ヶ所に挙げられてお
り、観音信仰の広がりをおもわせる。

【那留志・ナルシ・なるし】

ナルシ。

これらの小字は、竹佐の箱川やその支
流周辺にある。「那留志」小字が四ヶ所、
「ナルシ」小字が三ヶ所、「ナルシ」小字
が一ヶ所にある。

ナルシとは形容詞「なるい」の古語で
「なだらかである」ことを意味する。ナ
ルシ小字は、一部に傾斜地はあるものの、

ほとんどは箱川やその支流の氾濫原になっている。

ナルシとは「緩傾斜地」を意味しているものと思われる。

なお、コナルシは「面積の小さな緩傾斜地」をいうのであろう。

全国地図にはナルシ地名は1ヶ所にしかないが、それも「鳴石」の字が宛てられている。

【早稲田】

ワセダ。

竹佐の箱川に支流が合流する地点に近いところにある。

ワセダとは、「早稲をつくる田」である(広辞苑)。あるいは、神米に用いるために、早稲田が決められていたのかもしれない。

全国地図には、ワセダ地名は9ヶ所と意外に少ない。

【治郎作山ぐる・治郎作山クロ】

ジロウサクヤマグ(ク)ロ。

前者の小字は竹佐にあるが、後者は箱川にある。いずれも箱川とその支流の間にある段丘の頂上部の平坦地にある。

この小字は何を意味するのか。二説を挙げたい。

①クロ(グロ)は、「物のかたわらの小高くなったところ」をいうか(語源辞典)。ジロウサクは固有名詞であろう。以上から、ジロウサクヤマグ(グ)ロとは、「治郎作が所有している山の頂上部の平坦地」を意味するか。

②固有名詞はジロウまで。ジロウサクヤマグロとは、「治郎が耕作している山地の頂上部平坦地」をいうのかもしれない。

【平林】

ヒラバヤシ。

この小字は、竹佐の阿智村境にある台地にある。

ヒラ(平)は、「山の一部が平らになっ

ている所」(語源辞典)であろう。すなわち、ヒラバヤシとは、「台地の上は平らになっており、台地の端に樹木が茂っているところ」をいうのであろうか。

全国地図には、ヒラバヤシ地名は、中・大字として、41ヶ所に記載があり、うち39ヶ所に「平林」の字が宛てられている。

【森林】

モリバヤシ。

この小字は竹佐の箱川とその支流の間にある段丘上にあり、ハチオウジ小字と接している。現在、段丘の上の平坦地は住宅と畑に、北東傾斜地は林地になっている。

モリバヤシとは「樹木の茂り立つ丘と先端部の傾斜地で、人の入りにくい場所があった土地」としておきたい。隣のハチオウジ小字には荒ぶる神が祀られていて、祟りも怖れられていたということもあったのかもしれない。

全国地図には、モリバヤシ地名は、1ヶ所、中・大字として挙げられている。

【中原】

ナカハラ。

竹佐の阿智村境から三遠南信道のインターチェンジに跨がる広大な面積をもつ小字になっている。

ナカハラとは「段丘の中段にある広大な平坦地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ナカハラ地名は125ヶ所に、中・大字として挙げられており、ごく一般的な地名といえよう。

【長山】

ナガヤマ。

ナルシ小字とハチオウジ小字の間にある、段丘上の細長い独立峰になっている。標高は605.4m。

ナガヤマとは、字面の通りで「細長く低い山稜」であろうか。

全国地図にも、ナガヤマ地名は多く、中・大字として40ヶ所に挙げられている。

【丸山・向丸山】

マルヤマ・ムコウマルヤマ。

マルヤマ小字は、竹佐のナカハラ小字に囲まれた微高地で標高は608.3mで、周辺より2~10mほど高くなっている。ムコウマルヤマ小字はマルヤマ小字の東隣にあって、浅い谷を間にしている。

マルヤマとは「丸い形をした丘」で、ムコウマルヤマとは「マルヤマ小字の向かい側にある土地」をいうのであろう。マルヤマには、農民の山神が鎮座しており、祖霊であったり田の神であったりする、修験道成立以前の神であったらしい（修験道辞典）。身近な神という印象がある。

マルヤマ地名は、全国地図には非常に多く、中・大字として挙げられている数は352ヶ所にも及ぶ。しかしムコウマルヤマ地名は一つもない。

【山ノ神】

ヤマノカミ。

この小字はナカハラ小字の隅にあり、箱川氾濫原に近い所にあったと思われるが、三遠南信道のインターチェンジができて、地形が分からなくなっている。

山の神の祠があって、大山祇神が祀られていたのかもしれない。ここの山の神も春に山から里に下って田の神となり、秋の収穫がすむと山に帰って山の神となるのだろうか。

【大畑】

オオハタ。

段丘の平坦地にある小字で、隣にはモリバヤシ小字やハチオウジ小字がある。

オオハタとは、文字通り、「大きな畑」を意味するのであろう。今でも建物の他は畑地になっている。

全国地図にも、オオハタ地名は75ヶ所にも中・大字として採られている。

【長田山】

ナガタヤマ。

この小字は、オオハタ小字の南東に隣接していて、一部は台地の上にあるが、多くは、箱川との間の傾斜地になっている。現在、水田は見当たらない。

ナガタヤマとは何か。語源辞典に従って二説を挙げる。

①ナガタはナガ・タ（処）。ナガは動詞ナガル（流）の語幹で「傾斜地」をいう。静岡県榛原郡で使われている語だという。以上から、ナガタヤマとは、「傾斜地になっている山地」をいうのであろうか。

②ナガ←ナギ（薙）が転じた語で「崩壊地」をいう。すなわち、ナガタヤマとは「崩れ地にある山地」を意味するか。

全国地図には、ナガタヤマ地名は2ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【上手】

ワデ。

竹佐のワデ小字は二ヶ所にある。一つは、箱川氾濫原の一段上の平坦地に、もう一つは、少し上流の箱川氾濫原にある。

ワデとは「上の方。かみて」をいう（語源辞典）。基準になるのは、はっきりしないがミナミガイト（南垣外）小字ではないかと思われる。

以上から、ワデとは「南垣外にあった屋敷の上流側の土地」をいうのではないだろうか。

ワデ地名は、全国地図には、18ヶ所が中・大字として挙げられている。

【深田】

フカダ。

箱川左岸の氾濫原にあり、現在はほとんどが水田になっている。

フカダとは「泥の深い田」をいう（広辞苑）。

全国地図には、フカダ地名は、中・大字として、15ヶ所に記載があり、いずれも「深田」の字が宛てられている。

【ウルシ久保・うるし久保】

ウルシクボ。

二つの小字は繋がっており、箱川左岸氾濫岸の一つ上の段で、孫兵衛山の山麓にある。

ウルシクボとは、「漆を植栽してある、高低差のあまりない窪地」をいうのであろうか。漆を栽培していた跡は今でも小字に残っていて、竜丘にもウルシバタ(漆畑)小字があり、そこから逸出したと思われるホンウルシが今でも鷲流峡に育っているという。

全国地図には、ウルシクボ地名は、4ヶ所にある。

【屋下・屋下前・屋敷前・家ノ上】

ヤシタ・ヤシタマエ・ヤシキマエ・イエノウエ。

これらはイエ小字群と呼んでもいいほどに、一軒の屋敷に関係すると思われる小字の一群れである。

イエ小字群の中心になるような有力者の屋敷があり、そこを基準にして、マエとかシタとかウエと位置をしめしているのであろう。その屋敷がどこにあったのか、はっきりしない。イエ小字群の中か、あるいはアオキド小字にあった可能性もある。

【由里ふび】

ユリフビ。

この小字は竹佐に二ヶ所ある。一つは箱川左岸の氾濫原に、もう一つは北側の山稜の北西向き傾斜地にある。二つ目は三遠自動車道の工事で地形が分かりにくくなっている。

ユリフビとは何を意味しているのか。分かりにくい地名である。二ヶ所のユリフビは同じ意味を表していると思われる

ので、そのことに留意しながら、語源辞典を参考に三説を挙げる。

①ユリはユリ(弛)から「崩壊地名」を示す地名用語だという。フはフ(生)で「~になっている所」で、ビはベ(辺)の転訛した語。以上から、ユリフビとは「崩壊地のある辺りの土地」になる。やや曖昧にすぎるか。

②ユリはユリ(緩)から「湿地」をいい、フビはフ(生)・ビ(辺)で、「~になっている所の付近」。すなわち、ユリフビとは「湿地になっている所の周辺」をいうか。

③ユリフはユリ(緩・フ(生)で「傾斜の緩やかになっている所」をいう。ビ←ヒと濁音化した語で、動詞ヒウ(轟)の語幹から「削り取られたような地形」をいう。以上から、ユリフビとは「緩傾斜地で崩崖のあるところ」とすることもできそうだ。

全国地図には、ユリフビ地名は無い。

【竹ヶ花】

タケガハナ。

この小字は、箱川左岸の氾濫原で、箱川がほぼ直角に曲がる場所にある。現在は居住地跡になっており、隣が畑であることから、氾濫原のなかでも微高地になっているものと思われる。

タケガハナとは、「左岸山麓から氾濫原に伸びて微高地になっている所」をいう。山本区にも同名の小字がある。

【石花田】

イシハナダ。

この小字は箱川左岸の氾濫原にあり、現在は田んぼになっている。

イシハナダとは何か。分からないなりに語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ハナは動詞ハナツ(放)から、「崩壊地」を示すこともある。イシハナダとは「崩れ地のある、小石混じりの田んぼ」をい

うのであろうか。

②イシハナダはイシ（石）・ハナ（端）・ダ（処）で、「石が混じった山裾の飛び出た末端部が近くにあるところ」か。末端部がこの小字から少し離れているので、無理か。

全国地図には、イシハナダ地名は記載が無い。

【こせ】

コセ。

この小字は箱川左岸の氾濫原の山側の山麓斜面にある。

コセとは「長野県の一部で、一方が山側になった道をいう」（国語大辞典）。現地はその通りになっている。一方は杵原段丘の傾斜地になっており、他方には箱川が流れている。

コセの語源については、はっきりしていないが、「小瀬」か「川瀬」ではないかという（語源辞典）。

全国地図には、コセ地名は17件が、中・大字として記録されている。

【ナギジリ】

この小字は、箱川氾濫原にあり、ユリフビ小字の上流側になる。現在、水田と荒地が半々ぐらいになっている。

ナギジリとは何か。語源辞典に依って二説を挙げる。

①ナギ（薙）は「崩壊地」をいい、ジリはシリ（後）で「末端」のこと。すなわち、ナギジリとは、「崩壊地の末端部の土地」をいう。ここも三遠南信道の工事で地形の一部が変わっていて判断がしにくい。

②ジリは形容詞ジルの略で「湿地」をいう。ナギジリとは「崩壊地のある湿地」か。ジリは西日本で使われることが多いというが、どうであろうか。

全国地図には、ナギジリ地名もナギジリ地名も記載は無い。

【原添】

ハラゾエ。

この小字は箱川氾濫原の平坦地にあり、ナギジリ小字の上流側になる。現在はほとんどが水田になっている。主に箱川左岸にある。

ハラゾエとは何か。この地名も簡単ではない。ハラは「平らで広く、多く草が生えた土地。特に、耕作しない平地。野原。原野」だという（広辞苑）。

従って、ハラゾエとは「広い原野に沿った水田地帯」を意味するのであろうか。箱川対岸の右岸は水利がよくなって、田んぼになりにくい土地になっている。ここがハラ（原）だったのではないだろうか。

全国地図には、ハラゾエ地名は、1ヶ所が中・大字として記録されている。

【番匠免】

バンジョウメン。

この小字は、竹佐原平に2ヶ所ある。いずれもハラゾエ小字の隣にある。

バンジョウメンとは「荘園領主から大工職人に与えられた免田」で、年貢や課役が免除されていた田地をいう。

全国地図には、バンジョウメン地名は1ヶ所にしかない。中字にはしにくい内容であるためか。

【杵原】

キネハラ。

杵原段丘上の広い小字である。小さな飛び地も1ヶ所ある。

キネハラとは何か。三説を挙げる。

①キネ←キレ（切）と転訛した語で、「(谷間など)切断されたような空間」を示す（語源辞典）。キネハラとは、「縁が急傾斜地になっている原野」をいうのであろうか。この小字名発生当時は、まだ開墾されていない草刈地であったかもしれない。

②キネ←クネ（曲）と転じた語か（語源辞典）。キネハラとは、「縁が曲がりくねっている台地で野原になっているところ」か。

③この台地をキネ（杵）に見立てたということは考えられないであろうか。すなわち、キネハラとは「台地の平面を杵の形に見立てた、その野原」を意味するかもしれない。近くにはキネクビ小字やモチダヤマ小字、それにコシキ小字もある。

全国地図には、キネハラ地名は、中・大字として、3ヶ所に記載されている。

【ナナシギ】

この小字には竹佐原平農業生活改善センターがある。

山本区にもあった小字であるが、ナナシギとは何か。繰り返しになるが、二説を挙げておく。

①ナナはナナメ（斜）の下略形で、シギはシギ（棧）に通じ「階段状の地形」をいう（以上は語源辞典）。すなわち、ナナシギとは「傾斜地で階段状の地形になっているところ」であろうか。

②ナナシギは「名無し木」で、「その名前を呼ぶことを忌み嫌った聖樹」をいう（民俗大辞典）。ナナシギとは「聖樹ナナシギがあったところ」かもしれない。

全国地図には、ナナシギ地名の記載は無い。

【岡本】

オカモト。

この小字は、小さな小字で、ナナシギ小字の北隅にある。

オカモトとは、「段丘の麓」をいうのであろう。

全国地図には、オカモト地名は33ヶ所に、中・大字として載っている。

【並松・なみ松】

ナミマツ。

竹佐原平のナミマツ小字は、東西にほ

ぼ一列に並んでいる。山本中平？のナミマツ小字は南北に並んでいた。

ナミマツとは「並び立っている松の樹。並木の松」（広辞苑）である。この原平のナミマツは国道153号線と直交する方向に、松並木が並んでいたものと思われる。

【白隠石】

ハクインセキ。

この小字は、竹佐原平のナミマツ小字に挟まれている。

この小字には、白隠石があるが、白隠和尚自筆の「南無観世音」の石碑がある。宝暦七年（1757）に書かれたものであるという（村誌）。

全国地図には、ハクインセキ地名は無い。

【いなば】

イナバ。

伊那谷南部であれば、どこにでもある小字名である。

竹佐原平のイナバ小字は、杵原段丘の西側山麓の斜面に沿った細長い南向き傾斜地にある。

イナバとは「稲干場」をいう。稲架以前には、南向きの緩傾斜地にある草原に、稲を干して乾燥させてから、千歯で脱穀したのであろうか。千歯は元禄ごろから大正頃まで広く使われていたという（広辞苑）。

【桔梗ヶ原】

キキョウガハラ。

この小字は、杵原段丘の西側の段丘上にある。現在は住宅団地になっている。

キキョウガハラとは、「盆花であるキキョウが咲いていた野原」であろうか。

全国地図にも、キキョウガハラ地名は、3ヶ所に中・大字として挙げられている。

【キノコ・きのこ】

これらの小字は、杵原段丘北麓の平坦

地にある。坊主川が開析した浅い谷になっている。

各種の辞典類を調べたが、キノコは茸しかなかった。何かありそうな予感があったが、結局見つけることはできなかった。

キノコとは「食用の茸を採集することができた場所」であろうか。

全国地図にも、キノコ地名が中・大字として4ヶ所もあったのは、やや意外であった。

【寺澤】

テラサワ。

柞原段丘から坊主川に合流する小さな谷川に付けられた名前であるか。それが小字になっている。

テラサワといえば、寺院か関与している谷川であると考えるのは当然である。しかし、この場合、寺院は出てこない。かつて近くに寺院があり、テラサワが名付けられ、ボウズガワの名称も同時期に発生した、と考えることもできる。しかし、これも気配がない。そこで寺院を離れることにした。

では、テラサワとは何を意味するのか。テラ←タヒラ（平）と転じたもので、「緩やかな地形」を意味する（語源辞典）。すなわち、テラサワとは「勾配の緩やかな谷を下る沢」であろうか。ここには西平にあるような急勾配の谷ではない。荒れることの少ない沢である。

全国地図には、テラサワ地名が、38ヶ所も、中・大字として挙げられ、すべてに「寺沢」の字が宛てられている。この中に、寺院がかかわるテラサワは何カ所ぐらいあるのだろうか。興味が惹かれる。

【赤蟻山】

アカアリヤマ。

この小字は柞原段丘の北縁で、キキョウガハラ小字の東隣にある。

アカアリヤマとは何か。二説を挙げたい。

①一般的には、アカアリヤマといえば、「赤蟻の多い山」で、山本の青木のように赤蟻の蟻塚が作られたことがあったかもしれない。

②アカは「赤土に覆われた」の意で、アリ←アラ（開墾する）と転訛した語で、「新墾地」をいう（語源辞典）。以上から、アカアリヤマとは、「赤土に覆われた新たに開墾された山地」をいうか。

③アリは副詞アリニ（斜）に通じ「斜面」をいう。すなわち、アカアリヤマとは「赤土に覆われた傾斜地のある山」か。

全国地図には、アカアリヤマ地名は載っていない。

【柞くび】

キネクビ。

この小字は柞原段丘端の南西向き斜面にある。

キネクビとは「柞原段丘を支える首の部分に相当する場所」をいうのである。

全国地図には、キネクビ地名は無い。

【青木戸】

アオキド。

柞原段丘の南部にある大きな小字である。ここに木戸があったと思われる。久米ヶ城に通じる道があったはずで、そこを通る者のチェックをしていたのであろう。

アオキドとは、「樹木の茂ったところにある木戸」であろうか。木戸は「城への入口」とするか、それとも「関所」なのか、決められないでいる。

全国地図には、アオキド地名は記載が無い。

【長田】

ナガタ。

アオキド小字の南西側斜面にある小字

な小字である。

ナガタとは何か。二説を挙げる。

①ナガタとは「細長い場所」か。意味のはっきりしない狭い小字である。

②ナガタはナカ(中)・タ(処)かもしれない。「(イエ小字群の)中にある土地」を指すのかもしれない。

全国地図には、ナガタ地名は、108ヶ所が、中・大字として記載されている。

【雨堤・外雨堤】

アマツツミ・ソトアマツツミ。

杵原段丘の南部にあり、アマツツミ小字は竹佐と箱川に一カ所ずつ、ソトアマツツミは竹佐に一カ所が固まっている。

アマツツミとは、「雨や湧水を当てにしての貯水池、すなわち堤のある土地」を意味する。そこには、現に水を湛えた池があったり、池の痕跡があったりする。

ソトアマツツミとは、「アマツツミの傍にある土地」を意味するか。

アマツツミは伊那谷南部には多い小字であるが、全国地図には、中・大字として2ヶ所にしか挙げられていない。

【堤洞】

ツツミボラ。

この小字は、竹佐のアマツツミ小字に囲まれている。

ツツミボラとは「アマツツミがある小さな谷」を意味する。

全国地図には、ツツミボラ地名は記載が無い。

【孫兵衛山・庄左衛門山・長十山・平内山】

マゴベエヤマ・ショウザエモンヤマ・チョウジュウヤマ・ヘイナイヤマ。

これらのヤマ小字群は、いずれも竹佐の箱川境にあり、固有名詞と思われる名前がついている。山林を分けて所有するようなことがあったのかどうか。面積はほぼ同じようになっている。

もちろん、こうした固有名詞がついた地名が全国地図には無いのだが、マゴベエヤマだけは、1ヶ所だけであるが中・大字として載っている。マゴベエという名前はどこにでもあったのだろう。

【由ふくり】

ユウクリ。

この小字は、マゴベエヤマ小字の南隣にある。

ユウクリとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ユフは繊維が強いユフ(木綿)をつくるシナノキのことか。クリはクリ(涅)で「湿地」をいう。ユフクリとは「シナノキが自生する湿地」をいうか。

②ユウは動詞ユブルの語幹から「崩崖」をいう。クリはクリ(礫)。ユフクリとは「崩崖のある小石まじりの土地」をいうのかもしれない。

【土橋】

ツチバシ。

この小字はアマツツミ小字とゲンキチヤマ小字に囲まれている。

ツチバシとは「土を高く盛って道を通したところ」とであるという(村誌)。続けて村誌は次のように書いている。「この土橋は(久米ヶ城の)築城と同時につくられたもので、これから源太郎坂にかかる道筋は、生産地帯の山本と城とを連絡した大道であったと考えられる」と。

全国地図には、ツチバシ地名は、21ヶ所が中・大字として挙げられている。

【源太郎坂】

ゲンタロウザカ。

この小字は竹佐と箱川に跨っており、ジョウヤマ小字の下方隣にある。久米ヶ城への登る道になっている。

ゲンタロウザカとは「源太郎が関わった坂道」ということになるが、どのよう

に関わっていたのかは不明。

むろん、全国地図にはゲンタロウザカ地名は記載が無い。

【城山】

ジョウヤマ。

久米ヶ城跡の周辺にあり、竹佐・箱川・久米の三地区に分布している。

ジョウヤマとは、「久米ヶ城に関わる土地」をいうのであろう。

全国地図には、中・大字となっているジョウヤマ地名は97ヶ所になる。

【境ヶ洞・境ノ洞】

サカイガホラ・サカイノホラ。

久米境の竹佐と久米の竹佐境にサカイガホラ小字が一ヶ所ずつ、久米の竹佐境にサカイノホラ小字が一ヶ所ある。

サカイガホラもサカイノホラも、「昔の村境にあった小さな谷」をいう。

全国地図には、サカイガホラ地名もサカイノホラ地名も記載は無い。

【たいこが洞】

タイコガホラ。

この小字は杵原段丘にある。

タイコガホラとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①タイコは太鼓の形に見立てた地名が多いという。弓形とか楕円状とか、いろいろな形を太鼓と見なしているようだ。小字名発生当時には太鼓の形だったかもしれない。ということで挙げておく。タイコガホラとは「太鼓型の洞になっているところ」か。

②タイコはタヒ(平)・コ(処)である。タイコガホラとは「平坦地もある洞」かもしれない。東北地方に多い使い方であるのが弱点か。

全国地図には、タイコガホラ地名は記載されていない。

【ゑんの花】

エンノハナ。

この小字は、竹佐の箱川境で、杵原段丘の北麓付近に、二ヶ所ある。

エンは動詞エム(笑む)の終止形で、「(果実が熟して)裂け開く」さまをいう(国語大辞典)。ハナはハナ(端)か。以上から、エンノハナとは、「崩壊地の末端部」を意味していると思われる。

全国地図には、エンノハナ地名が、中・大字として1ヶ所にあり、「椽の鼻」の字が宛てられている。

【横山】

ヨコヤマ。

この小字は竹佐にあり、久米川とその支流の氾濫原の三ヶ所に分布している。かつては、三ヶ所が繋がっていたのかもしれない。

ヨコ(横)とは、「上下の方向に対して、水平の方向」をいい、ヤマは「林」のことで、上伊那・愛知の方言であるという(国語大辞典)。

以上から、ヨコヤマとは、「久米川とその支流の河原林のあるところ」を意味するのであろう。

全国地図には、ヨコヤマ地名は96ヶ所に中・大字として挙げられているが、河原林を意味している所は少ないであろう。

【角畑】

スミハタ。

杵原段丘が久米川氾濫原に突き出した末端部付近にある。現在は荒地になっている。

スミハタとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①スミはスミ(隅)で、「氾濫原の山際のところ」をいい、ハタはハタ(端)で「端っこ」のこと。以上から、スミハタとは「川原の山麓周辺の土地」をいうのであ

ろうか。

②スミはス(砂)・ミ(接尾語)。ミはベ(辺)の転訛した語ではないかという。すなわち、スミハタとは、「段丘の麓の砂地になっているところ」か。

全国地図には、スミハタ地名は載っていない。

【冷洞】

ヒエボラ。

竹佐の杵原段丘の近くにある大きな小字であり、尾根と久米川支流の氾濫原からなる。

ヒエボラとは何か。二説を挙げたい。

①ヒエボラは「稗洞」で、「稗を栽培していたことのある洞」であろうか。焼畑であったと思われる。現在も田んぼはない。

全国地図には、ヒエボラ地名は、1ヶ所に中・大字として記載され、「日吉洞」の字が宛てられている。

【餅田・餅田山】

モチダ・モチダヤマ。

これらの小字は杵原段丘の南東側傾斜地にあり、坊主川右岸になる。現在は水田になっている面積は少ない。

モチダヤマは「モチダ小字の近くにある山林地」のことか。

モチダとは何か。語源辞典に依って二説を挙げる。

①モチダは「宮持田」の上略形だという(語源辞典)。モチダとは「神社の所有する田」をいうのであろうが、租税を免除されていた田であったと思われる。近くにある伊奈神社の所有であったろうか。以上から、このモチダとは「お宮の所有する田んぼのあった土地」であろう。

②モチは副詞モチモチに関連して「湿地」を意味するという。ダはタ(処)で「場所」を示す接尾語。すなわち、モチダとは「自然湧水のある土地」を意味することになるが、どうであろうか。

全国地図には、モチダ地名は、中・大字として、23ヶ所が記載されている。

【寺田・寺畑】

テラダ・テラハタ。

テラダ小字も竹佐の杵原段丘の北向き傾斜地にあり、坊主川に接している。現在、モチダ小字よりも水田の面積は広い。

テラダ=ジデン(寺田)で「寺院所有の田」で、不輸租田であるという(広辞苑)。

このテラダも「寺院所有の不輸租田があった土地」をいうのであろうか。寺院というものは、近くにある観音寺であろうか。

テラハタ小字は白山丘陵の西麓にある。テラハタも「寺院所有の不輸租の畑のあったところ」であろう。この寺院とは、近くにあった観音寺であろう。

全国地図には、テラダ地名は多く、中・大字として、55ヶ所に記載されている。しかし、テラハタ地名は6ヶ所と比較的に少ない。

【下洞】

シモホラ。

この小字は、竹佐の坊主川が屈曲しているところの右岸にある。

シモホラとは何を意味するのか。これも語源辞典に依りながら、解釈を二つ。

①シモは「低地」のこと。すなわち、シモホラとは、「低地にある小さな谷」をいうのであろうか。

②シモは、動詞シモル(滲)の語幹で「湿地」をいう。シモホラとは「湿地にある小さな谷」をいうのであろうか。

全国地図には、シモホラ地名は無い。

【塚のこし】

ツカノコシ。

この小字は二ヶ所、坊主川の左右両岸にあるが位置は少し離れている。杵原段丘の北麓と麓に近い傾斜地にある。

ここには円墳があって多数の土師器を出土している。かつては大森林だったという（以上は村誌）。

ツカノコシとは、「円墳の近くの土地」を意味するものと思われる。コシは「側。そば。付近」をいう（語源辞典）。

ツカノコシ地名は、全国地図に、2ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【こしき】

コシキ。

この小字は、二ヶ所、竹佐原平のツカノコシ小字の西隣にある。

コシキとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①コシキはコシ・キ（接続詞）で、コシは「麓」をいう。コシキとは「麓のあたり」であるが、何の“麓”なのか。杵原段丘の方が近いが坊主川の対岸になる。あるいは、同じ坊主川左岸の観音寺や伊奈神社のある白山丘陵であろうか。

②コシキのコは「ほとんど意味をもたない接頭語」で、シキはシキ（敷）で「河川敷」をいう。コシキとは「(坊主川の)河川敷であったところ」か。かつては坊主川が流路を移していた平地であろうか。

全国地図にはコシキ地名は、中・大字として7ヶ所に記録されている。

【尾賀本】

オガモト。

アガモト小字は、竹佐原平の山本境にある。コシキ小字の西側になる。

オガモト＝オカモトでオカはヲ（峰）・カ（処）で。「丘陵。側稜」をいう（語源辞典）。

従って、オガモトとは、「(杵原)段丘の麓」を意味する可能性が高い。

全国地図には、オガモト地名は無い。

【日うけ】

ヒウケ。

この小字は、オガモト・ツカコシ小字

の北隣にある。

ヒウケはヒウケ（日受）で「日の当たる場所」をいう（国語大辞典）。奈良・愛媛の方言であるが、全国的に使われているのであろう。

ここのヒウケは「日当たりのいい場所」を意味するものと思われる。

全国地図には、ヒウケ地名は記載されていない。

【久保・久保畑・久保田・向久保】

クボ・クボハタ・クボタ・ムカイクボ。

これらのクボ小字群は白山丘陵の南西方向にある。国道153号線と三遠南信道路インターチェンジ道との間になる。

クボは「窪地」のこと。クボハタは「畑のあった窪地」、クボタは「水田のあった窪地」、ムカイクボは「クボ小字の向かい側」を意味するのであろう。

【通下】

トオリシタ。

この小字はムカイクボ小字とクボハタ小字の間にある。

トオリとは「人や車などの通行する道」（国語大辞典）をいう。

従って、トオリシタとは、「道路の下側の土地」をいうが、この場合の道路とは小字の北西端にある道のことをいうのであろう。地名発生時には、重要な道路であったと思われる。

全国地図には、トオリシタ地名は記載が無い。

【土城垣外】

トジョウガイト。

この小字は、杵原丘陵と白山丘陵の間にある。

トジョウ（外城）は城の外側に設けた別の城であるが、この場合には該当しない。では、トジョウとは何か。

トはソト（ソト）の上略で「遠く離れた所」をいう（語源辞典）。であれば、ト

ジョウとは「(本城から)遠く離れた場所にある柵を設けた程度の簡単な城」であろうか。続くカイトの意味とも整合性がある。

以上から、トジョウガイトとは、「本城の外の方にある、簡素は砦を兼ねた屋敷のあった所」であろうか。

トジョウガイト地名は、全国地図には無い。

【家ノ前・家の前】

イエノマエ。

前者はトジョウガイト小字の隣にあり、後者はヤシキ小字がすぐ近くにある。

いずれの小字も、「有力者の居住地の前の方の土地」を意味する。

【セリ・せり・せりの上】

セリ・セリノウエ。

セリ小字は白山丘陵周辺の川に近いところに四ヶ所ある。セリノウエ小字は一ヶ所。

セリノウエとは、「セリ小字の上流側の土地」をいう。

セリについては、国語大辞典に従って二説を挙げたい。

①セリとは「川が曲流して岩に打ちつける所」という。静岡県榛原郡の方言らしい。セリ小字四ヶ所のうち、宮沢川右岸にある三ヶ所がこれに該当すると思われる。ハクサン小字の隣にあるセリ小字は、坊主川とやや離れている。しかし、いずれも、大雨のときの川音の激しさは聞き取れる所に位置している。

②セリとは下伊那の方言で「端。隅」を意味する。ここでいうセリとは「山稜の末端部」をいうのであろうか。

全国地図には、セリ地名が、5ヶ所で中・大字として挙げられている。

【ゼリ】

宮沢川沿岸のセリ小字群の上流側にある。これもセリ小字群に入れるべきかど

うか迷うところであるが、セリ小字群の解釈②から遠のくので別扱いとした。

ゼリは「山の小石の多い所」(語源辞典)をいう。静岡県周智郡の方言だあるという。ここでいうゼリは「小石の多い土地」としておきたい。

【大塚】

オオツカ。

この小字は白山丘陵の南西側山麓にある。

オオツカとは、「大きな円墳があった所」であろう。封土の型は3.5mに近い円墳で、直刀が発掘されており、土師器の破片が散乱しているという(村誌)。

全国地図にはオオツカ地名が、なんと110ヶ所で中・大字として採られている。

【前田・前畑】

マエダ・マエハタ。

竹佐中平のマエダ小字四ヶ所、マエハタ小字は二ヶ所にある。

ここにはヤシキ小字が二ヶ所にあるので、ヤシキ小字に住んでいた有力者の居住地のマエを指しているものと思われる。

全国地図には、マエハタ地名が17ヶ所に中・大字として挙げられている。

【清水・南清水】

シミズ・ミナミシミズ。

シミズ小字は白山丘陵と坊主川の間であり、ミナミシミズ小字は屋敷小字群の南側にある。二つの小字は南北方向でいえば、シミズ小字の方が南側になる。

シミズとは「自然湧水のある所」である。ではミナミシミズを何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ミナミはミ(水)・ナミ(ナメの転で「緩傾斜地」をいう)であろうか。すなわちミナミシミズとは「水辺にある緩傾斜地で自然湧水のあるところ」を意味するか。この小字の南端を坊主川支流が洗ってい

る。

②ミナミはミ(水)・ナ(助詞ノ)・ミ(廻)で、「自然湧水のある所で、川が曲流している土地」をいうのであろうか。

全国地図には、ミナミシミズ地名は2ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【中西】

ナカニシ。

この小字は竹佐の中平にある。竹佐西端の山本境にある。

ナカニシとは何を意味しているのだろうか。ナカは竹佐の中心部を示しているのであろうか。そうであれば、ナカニシとは「竹佐の中心部にあり、その西端の土地」をいうのであろう。

全国地図には、中・大字として挙げられているナカニシ地名は46ヶ所と比較的に多い。

【屋敷・古屋敷】

ヤシキ・フルヤシキ。

竹佐中平の中心部にある。ヤシキ小字は二ヶ所、フルヤシキ小字が一ヶ所ある。

ヤシキは「有力者の居住地跡」であり、フルヤシキは、「かつて有力者の屋敷があったところ」であらうか。

全国地図には、フルヤシキ地名は67ヶ所も中・大字として記載されている。

【竹内】

タケウチ。

竹佐中平の西端で山本境にある小さな小字で、ナカニシ小字の北隣になる。

タケウチとは何か。語源辞典に沿って見ていきたい。

タケは「高い所」をいう。中平の中心部から見れば西側にあるから、高く見えるはずである。ウチ←フチ(縁)と転じた語で、ここでは「西端」を意味する。すなわち、タケウチとは、「やや高い所にあり西側の縁になっているところ」であらうか。もう少し、まじな解釈があれば

いいのであるが、思いつかない。

全国地図には、タケウチ地名は、8ヶ所が、中・大字として記載されている。

【阿弥陀前】

アミダマエ。

この小字は竹佐の白山丘陵の南麓にある。

アミダについては、平安中期から阿弥陀信仰が盛んになり浄土宗真宗などで本尊とされ、その仏像と安置する阿弥陀堂が各地に建立されたという(語源辞典)。

具体的なことははっきりしないが、アミダマエとは、「阿弥陀堂の前のところ」というのであろう。

全国地図には、アミダ地名は3ヶ所にあるが、アミダドウマエ地名はひとつもない。

【宮下】

ミヤシタ。

竹佐のミヤシタ小字は、白山丘陵の南麓に二ヶ所ある。

ミヤは神社または仏堂のことをいう。ここでいうミヤが何を指しているのかははっきりしないが、伊奈神社か阿弥陀堂ではないかと思われる。

従って、ミヤシタとは「お宮か御堂の下の方にあるところ」をいうのであろう。

ミヤシタ地名は、全国地図に、84ヶ所が中・大字として記載されている。

【中屋】

ナカヤ。

この小字は白山丘陵の西側の平坦地にある。陣屋はすぐ北側にあり垣外小字群や屋敷小字などに囲まれており、竹佐地区の一つの中心地であったと思われる。

ナカヤとは「中心的な役割を果たしていた屋敷のあった所」であらうか。

【阿し又】

アシマタ。

この小字は杵原丘陵の北東部山麓にあ

る。

アシマタとは何か。アシはアシ（芦）で「湿地」をいう。マタはマタ（股）で「二つの谷が合流する場所」であろうか。ここもまた堀の役割を果たしていたかもしれない。

全国地図には、アシマタ地名は1ヶ所だけ中・大字として挙げられており、「足又」の字が宛てられている。

【沼ノ口】

ヌマノクチ。

この小字も杵原段丘の北東側山麓にある。

ヌマノクチとは、「湿地帯への出入口」を意味するか。ここも防禦用の地形として利用されたかもしれない。

ヌマノクチ地名は、全国地図には載っていない。

【桑原田】

クワハラダ。

この小字は、杵原段丘と久米川の中の湿地にある。

クワハラダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①クワ←クエ（崩）・ハ（端）と転じたもので「崖」をいい、ハラダは「広い平坦地にある田んぼ」であろうか。すなわちクワハラダとは「小さな崖のある広い平坦地にある水田」を意味するのかもしれない。

②クワ←キハ（際）と転じた語で「きわそば」のことをいう。従って、クワハラダとは「(段丘の) 際にある平坦な広い水田のあるところ」をいうのであろうか。

全国地図にはクワハラダ地名は記載が無い。

【ませ口】

マセグチ。

久米川右岸の氾濫原になっている細長い小字である。

マセグチとは何か。これも語源辞典を参考にしながら二説を挙げたい。

①マセはマセ（真瀬）で「浅い瀬になっている所」で、久米川を指していると思われる。クチ←フチ（縁）と転訛したもので、「沿ったところ」か。以上から、マセグチとは「浅い瀬になっている川に沿った土地」をいう。

②マセ←マゼ（交）と清音化した語で、「川などの交わった所」をいう。クチは「川の合流点」を意味する。つまり、マセグチとは「川の合流点がある所」をいう。この小字では、久米川に支流が合流している。

全国地図には、マセグチ地名は、6ヶ所が中・大字として採用されている。

【棚田】

タナダ。

竹佐のタナダ小字は二ヶ所にある。一つは久米川の右岸沿岸に、もう一つは久米川に合流する坊主川左岸沿岸にある。

タナダは「急な傾斜地を耕して階段状に作った田。膳棚田」（広辞苑）とある。

ここでいうタナダとは「階段状に作った膳棚田のある所」であろう。

全国地図には、タナダ地名は、11ヶ所に中・大字として挙げられている。

【木ノ本】

キノモト。

この小字は竹佐のフカダ小字とタナダ小字の間にある。

キノモトとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①キはシキ（敷）の略で「台地。段丘面」をいう。すなわち、キノモトとは「(杵原) 台地の麓の土地」をいうのであろうか。

②キはサキの上略形で、「(丘陵の) 末端部」をいう。つまり、キノモトとは「丘陵末端部の麓のところ」をいう。

全国地図には、キノモト地名は、中・

大字として、8件が挙げられている。

【下モ田・下田】

シモタ・シモダ。

これらの小字は、久米川右岸の川沿いにある。

シモタ(ダ)とは何か。これも解釈を二つ。

①一般的には、シモダとは「下の方にある田んぼ」となる。「下の方」とは久米川の下流部ということにもなるが、基準がはっきりしないのが難点。

②シモは動詞シモル(滲)の語幹で「湿地」をいう(語源辞典)。これだと、シモダとは「湿地にある田んぼ」でいいのであるが、秋田で使われている語だということが気になる。

全国地図には、シモダ地名が77ヶ所、シモタ地名が7ヶ所に、それぞれ中・大字として記載がある。

【とかげ畑】

トカゲハタ。

この小字は、坊主川と久米川の間にある。

トカゲハタとは何か。爬虫類のトカゲが多い畑ではないだろう。語源辞典に依りながら解釈を二つ。

①トカ＝トガで「川沿いの野」をいう。ゲ＝ケは「場所」を示す接尾語。以上から、トカゲハタとは、「川沿いの野で畑になっている所」をいうのであろうか。

②ト＝ドで「沢の合流点」をいい、カゲはカハ(川)・ゲ(接尾語)の略形という。従って、トカゲハタとは、「沢の合流点にちかい所にある畑」かもしれない。

全国地図にはトカゲハタ地名モトカゲバタ地名も記載が無い。

【田中】

タナカ。

竹佐の杵原段丘の北東麓にあり、トカゲハタ小字の西隣になる。

タナカといえば、「田んぼの中」ということになるが、地名発生時でも畑の方が多かったと思われる。そこで、別解を求めたい。

タナカはタナ(棚)・カ(処)で、「棚状になっている土地」ではないかと思われる。

タンカ地名は、全国地図に、339ヶ所という、とんでもない数字が挙げられている。

【山さき・山ざき】

ヤマサキ・ヤマザキ。

いずれも竹佐白山丘陵の東麓にあり、互いに隣り合っている。

ヤマサ(ザ)キとは、「山稜の末端部の土地」をいうのであろう。

全国地図には、ヤマサキ地名も77ヶ所に中・大字として挙げられており、少なくはない。

【久米川端】

クメガワバタ。

この小字は、竹佐ヤマサキ小字の東隣にあつて、久米川右岸に接している。

クメガワバタとは、字面の通りで、「久米川の沿岸の土地」をいう。

もちろん、全国地図には、クメガワバタ地名は載っていない。

【日やけ田】

ヒヤケダ。

竹佐の白山丘陵の東麓にある。現在、周辺は水田であるが、この小字だけは荒地になっている。

ヒヤケダとは、「旱で水が涸れてしまったことのある田んぼがあった所」か。

全国地図には、ヒヤケダ地名が、1ヶ所だけ中・大字として記載がある。

【若ノ田】

ワカノタ。

この小字も、竹佐の久米川右岸にある。ワカノタとは何か。語源辞典を参考に

して二説を挙げたい。

①ワカは動詞ワカル(分)の語幹で「分かれた地」をいう。従って、ワカノタとは「(支流によって)分断されている田んぼ」をいうのかもしれない。現在、分断されて、水田と荒地になっている。

②ワカは形容詞ワカイ(若)の語幹で「みずみずしい」こと。つまりワカノタとは「湿地に田んぼのある所」となるか。

ワカノタ地名は、全国地図には載っていない。

【柳田】

ヤナギダ。

この小字は久米川支流の宮沢川右岸にある。山本にもこの小字はある。

ヤナギダとは何か。二説を挙げたい。

①ヤナギダとは、文字通り「田んぼがありヤナギが自生していた土地」か。

②ヤナギはヤナ(斜面)・ギ(接尾語)で「傾斜地」をいう(語源辞典)。すなわち、ヤナギダとは「緩傾斜地で水田になっている所」をいう。

【坂ノ下】

サカノシタ。

この小字は、竹佐白山丘陵の北麓にある。現在は水田と住宅地になっている。

サカシタとは、字面の通りで、「斜面の麓の土地」をいうのであろう。

全国地図には、サカノシタ地名は57ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【榎田】

エノキダ。

この小字は、白山丘陵の北東麓に二ヶ所ある。久米川とその支流が合流しているところである。

エノキダとは何か。

①エノキダとは、「畦の自生榎が目立っていた田んぼ」であろうか。この説明が成立する可能性は少ない。

②エノキはエ(江)・ノキ(抜)で、「崩

崖のある川辺の田んぼ」であろうか。大きな崩壊はないようだが、小字名発生時にはどうであったか。

③エノキはエ(江)・ノ(野)・キ(処)とみる(語源辞典)。従って、エノキダとは「川辺の緩傾斜地で水田のある所」か。細かく分けすぎか。

全国地図には、エノキダ地名は、13ヶ所に中・大字として記載されている。

【溝こし】

ミゾコシ。

この小字は竹佐白山丘陵の北東側の麓にある。

ミゾとは「細長い窪地もいう」(語源辞典)らしい。丘陵とミゾコシ小字の間には道路が通っており、このことをミゾと呼んでいるのであろうか。

ミゾコシとは「(白山丘陵から)ミゾを越えた土地」を意味するのであろう。

全国地図には、ミゾコシ地名は記載が無い。

【向山】

ムカイヤマ。

ムカイヤマ小字は三ヶ所にあり、いずれも白山丘陵の北～東側の麓で道路(ミゾ)を越えた所にある。丘陵末端部の高みが残っている部分にある。

ムカイヤマとは、「(白山丘陵から見て)向かい側の高み」を指しているものと思われる。

全国地図には、ムカイヤマ地名は、中・大字として、104ヶ所が挙げられている。手っ取り早い地名だったのかもしれない。

【そな山】

ソナヤマ。

竹佐白山丘陵の南東側半分と麓の部分を占めている。

ソナには「ソノ(園)」の意があり、ナ⇔ノの転訛はあると考えることができる。

ソナヤマはソノヤマではないだろうか。では、ソノヤマとは何を意味するのか。三説を挙げておきたい。

①ソノ（園）は「神社に属する薬園」である（語源辞典）。すなわち、ソノヤマとは「伊奈神社に属する薬園のある丘」であろうか。その内容については不明。

②ソノ（園）には「主要農作物以外に、茶・楮・桐・漆などを植える所」の意もある。北設楽郡で使われている語であるという（以上は国語大辞典）。ソノヤマとは「茶・楮・漆などを栽培していた丘」か。お宮とどう関わっていたのかは不明。

③ソノ（園）は「特定の場所。何かが行われる場所」という（広辞苑）。観音寺や伊奈神社に関わる何かが行われていたのであろう。奉納される芸能が行われた場所であったか、あるいは一揆の集まりが行われたのか。これもはっきりしない。

全国地図にソナヤマ地名は載っていないがソノヤマ地名は1ヶ所にある。

【平五郎畑】

ヘイゴロウハタ。

この小字は竹佐の二ヶ所にある。一つは、白山丘陵の北麓にある。現在は、畑と荒地が半々ぐらいになっている。もう一つは、宮沢川とその支流の間にある。

ヘイゴロウハタとは、文字通り「平五郎が耕作していた畑」であろうか。

【白山こし】

ハクサンコシ。

この小字は佐竹白山丘陵の北麓にある。

「白山こし」とは「白山小字のある丘陵の麓」をいうのであろう。

全国地図にはシラヤマコシ地名もハクサンコシ地名も記載は無い。

【平澤】

ヒラサワ。

竹佐の宮沢川右岸にある小さな小字である。

ヒラサワのヒラには「縁。へり」の意がある（語源辞典）。従って、ヒラサワとは「沢の縁にある土地」をいうのであろう。沢は、むろん宮沢川のことを指す。

全国地図には、ヒラサワ地名は、65ヶ所も中・大字として記録されている。

【ハバ垣外】

ハバガイト。

この小字も宮沢川右岸にあり、「白山こし」小字の北隣にある。

ハバはハバ（岨）で「崖。傾斜地」を意味する（国語大辞典）。群馬・山梨・信濃・岐阜の方言であるという。すなわち、ナバガイトとは、「近くに崖のある居住地跡」をいうのであろう。

全国地図には、ハバガイト地名は無い。ハバとカイトは相容れないためであろうか。

【観音寺裏】

カンノンジウラ。

この小字は白山丘陵の北側斜面にある。小さくて細長い小字になっている。

カンノンジウラとは、字面の通りで「観音寺の裏側にある土地」をいう。表は南側をいうのであろう。

カンノンジウラ地名は、全国地図には無い。

【白山】

ハクサン。

この小字は白山丘陵の西半分を占め、観音寺と伊奈神社がある。観音寺は神宮寺であったのだろうか。

伊奈神社には、八幡社・諏訪明神の他に、白山・牛頭天王が合祀されている（村誌）。それで、ハクサンと呼ばれていたのであろう。

全国地図には、シラヤマ地名は18ヶ所に記載があるが、ハクサン地名になると、41ヶ所が中・大字として記載がある。

【八郎垣外・庄司垣外】

ハチロウガイト・ショウジガイト。

ハチロウガイト小字は、竹佐の白山丘陵の北西麓にある。現在は水田・畑以外に墓地はあるが、住宅はない。ショウジガイト小字はハチロウガイト小字の西方にある。

ハチロウガタも、文字通りで「八郎が住んでいた居住地跡」となり、ショウジガイトは、①「ショウジが住んでいた居住地跡」か、あるいは②「庄司・荘官が住んでいた住居跡」の可能性もある。庄司とは「荘園の領主の命を受けて、その荘園を管理した職」(広辞苑)であるという。中世になっても、荘園の名残はあったのであろうか。

【北垣外】

キタカイト。

この小字は竹佐の白山丘陵の北側と西側に一ヶ所ずつある。いずれも、現在、住宅地となっている。

キタカイトとは、「北の方にある居住地跡」を意味するものと思われる。方向の基準になるのは、竹佐の中心地と思われる屋敷(家)小字群のある場所であろう。方角からみて、白山丘陵ではないと思われる。

全国地図には、キタカイト地名は1ヶ所、キタガイト地名は10ヶ所に、中・大字として記載されている。

【東・東ノ下】

ヒガシ・ヒガシノシタ。

ヒガシ小字は白山丘陵の西麓に、ヒガシノシタ小字はそのヒガシ小字の北側である下流側にある。

ヒガシとは「東の方にある土地」をいうのであろう。基準になるのは、竹佐の中心地と思われる屋敷(家)小字群のある場所と思われる。

ヒガシノシタとは「ヒガシ小字の下流

側にある土地」をいうか。

全国地図には、ヒガシノシタ地名は無いが、ヒガシ地名は196ヶ所もある。

【尾東】

オヒガシ。

この小字は竹佐のヒガシ小字に二方向が隣り合っている。

オヒガシとは何か。これが、意外と分かりにくい。二説を挙げたい。

①オは接頭語オ(小)で「小さい」の意。オヒガシとは、「隣のヒガシ小字よりも小さな土地」をいうのだろうか。

②オはヲ(尾)で「山裾の末端」をいう(語源辞典)。つまり、オヒガシとは「白山丘陵の末端部にあるヒガシ小字の隣接地」をいうか。

全国地図には、オヒガシ地名は載っていない。

【田府・だぶ】

ダブ。

これらの竹佐の小字は白山丘陵の北西方向にあり、山本区のタブ(田府)小字に続いている。竹佐のダブ小字は山本のタブ小字に比べると、まるで小さな面積の小字になっている。

竹佐のこれらのダブ小字は、どれも宮沢川の沿岸にある。

ダブとは、「湿地」をいうのであろうか(国語大辞典)。神奈川・広島の方言であるというが、この地域でも使われた可能性はある。

山本のタブ小字にくらべると、面積が小さいので、ニュアンスの多少異なる解釈を示したが、どうであろうか。

全国地図にはダブ地名は載っていない。

【陣屋】

ジンヤ。

この小字は白山丘陵の北方に、二ヶ所ある。

ジンヤとは竹佐の郡代が置かれていた

場所をいう。村誌によれば、天和元年八月（1615）に置かれている。

全国地図には、ジンヤ地名は12ヶ所にある。中・大字である。

【中垣外】

ナカカイト。

竹佐白山丘陵の北方で宮沢川を越えた所に2ヶ所あり、ジンヤ小字と混じり合っている。

ナカカイトとは「中心となる有力者の居住地跡」をいうのであろう。

全国地図には、ナカカイト地名は12ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【観音免】

カンノンメン。

この小字は白山丘陵北方の宮沢川支流の沿岸にある。

カンノンメンとは「観音寺所有の田地で、租税を免除された土地」をいうのであろう。

全国地図には、カンノンメン地名は記載されていない。

【石見堂】

イシミドウ。

宮沢川左岸の沿岸にある長い小字である。

イシミドウとは何を意味するのか。語源辞典を見ながら二説を挙げたい。

①イシミドウはイシ（石）・ミ（廻）・ドウ（擬音語）で、ドウは川音による音響地名である。以上から、イシミドウとは「小石の多い川が屈曲していて、川音が響くところ」を意味するものと思われる。

②イシミドウはイシ（石）・ミ（水）・ドウ（堂）で、「小石の多い水辺で御堂があった所」と考えることもできる。陣屋の隣接地だから、ちょっとした僧堂があったかもしれない。

全国地図には、イシミドウ地名は記録されていない。

【井垣外】

イガイト。

この小字も宮沢川左岸にあり、イシミドウ小字の東隣になる。

イガイトとは何か。イは井（井）で「流水」のこと。つまり、イガイトとは「川の傍にある居住地跡」をいうのであろう。

全国地図には、イガイト地名も記載が無い。

【砂田】

スナダ。

この小字は3ヶ所にある。一つは観音沢川右岸にあって、現在は、田んぼが多くはない。もう2ヶ所は、久米川右岸にある。

スナダとは、字面の通りで「砂地の土地」あるいは「砂の多い田んぼ」をいうのであろう。

全国地図には、スナダ地名は、16ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【だい】

ダイ。

この小字は久米川右岸にあり、二つのスナダ小字に挟まれている。また宮沢川支流の左岸にもなっており、二本の沢の間の高みになっている。

ダイはダイ（台）で、「周辺より少し高い緩傾斜地」をいうのであろうか。

全国地図には、ダイ地名は多く149ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【栗ノ木田】

クリノキダ。

この小字は、宮沢川支流の左岸にあり、カンノンメン小字の対岸にある。

クリノキダとは何か。語源辞典によりながら、二説を挙げたい。

①クリはクリ（礫）で「小石」をいう。ノは助詞。キダはキダ（段）で「階段状の地形」をいう。以上から、クリノキダとは「小石混じりの階段状の土地」をい

うのであろうか。

②クリはクリ(涅)で「湿地」をいう。ノキはヌキ(抜)が転じた語で「崩れ地」をいう。すなわち、クリノキダとは「崩れ地のある湿地になっている土地(田んぼ)」とすることもできそうだ。

全国地図には、クリノキダ地名は1ヶ所、中・大字として挙げられている。

【畑田】

ハタダ。

この小字は、久米川右岸にある。

ハタダとは何か。解釈を二つ。

①ハタダとはハタ(端)・ダ(処)で「川辺にある土地」をいうか。

②あるいは、単純に、「畑と水田のあるところ」であらうか。

【八通り田】

ヤトオリダ。

この小字は竹佐にあって、久米川と山本境に近いところにある。

ヤトオリダとは何を意味するのか。ヤ(八)は「数の多いことをいう接頭語」(語源辞典)で、トオリは動詞トオル(通)の連用形が名詞化した語で「つきぬけること」を意味する(広辞苑)。以上から、ヤトオリダとは「ほぼ真っ直ぐに通っている田んぼが並んでいるところ」であらうか。

全国地図には、ヤトオリダ地名は記載がひとつもない。

【道下】

ミチシタ。

山本境にある、竹佐の小さな小字である。

ミチシタとは、文字通りで「道路の下側」をいう。山本境には道路が通っているので、その低い方の土地をいうのであろう。

全国地図には、ミチシタ地名が21ヶ所の中・大字として載っている。

【もり】

モリ。

竹佐の山本境にあり、微高地になっている。

モリは「少し高くなった所」をいい、しばしば神聖な場所であったところが多い。ここではどうであったのか、はっきりしていない。

全国地図には、中・大字として記載のあるモリ地名は、128ヶ所と多い。

【塚ノ越】

ツカノコシ。

竹佐のこのツカノコシ小字は、山本境にある。微高地になっているか。

どんな塚があったのかははっきりしないが、ツカノコシとは「塚の麓の所」か「塚に近い所」をいうのであろう。

【四五平裏】

シゴヘイウラ。

竹佐の山本境に近い所にあり、カイト小字群の中にある。

シゴヘイは固有名詞であらうか。とすれば、シゴヘイウラとは「シゴヘイが住んでいた所の裏手」を意味する。

むろん、全国地図には、シゴヘイ地名は載っていない。

【殿垣外】

トノガイト。

竹佐のモリ小字の東隣にある小さな小字である。

トノガイトとは「有力者の居住地跡」をいう。有力者とはトノと呼ばれた人かもしれない。陣屋も遠くはない。

【清之丞田】

セイノジョウダ。

この小字もカイト小字群にある。

セイノジョウは固有名詞であらう。現在は、ほとんどが畑地になっている。

セイノジョウダとは「セイノジョウが所有していた土地」をいうが、具体的な

意味は不明である。

【志ぎの免ん】

シギノメン。

山本境の竹佐にあつて、久米川の左右両岸に一ヶ所ずつある。

シギはシキの濁音化した語であろう。シギノメンとは何か。語源辞典などに沿いながら二説を挙げたい。

①シキは「河川敷」をいう。つまり、シギノメンとは「河川敷の滑らかな緩傾斜地」をいうのだろうか。メンは「平たいもの」をいう（広辞苑）。

②シキは「段丘面」をいう。すなわち、シギノメンとは「段丘面になっている緩傾斜地」をいうのかもしれない。

全国地図には、シギノメン地名もシキノメン地名も記載されていない。

【高屋】

タカヤ。

この小字は竹佐の山本境にあつて、観音寺沢川と久米川の間であり、三ヶ所に分布している。かつては一体の小字であった可能性はある。

タカヤとは何を意味するのか。広辞苑に依りながら二説を挙げたい。

①タカヤは「高殿のあつたところ」のことをいうか。単なる住居ではなくて、砦の役割をしていたのかもしれない。

②「鷹を飼っておく小屋」もタカヤという。鷹狩りよりの施設があつたのであろうか。

全国地図には、タカヤ地名が44ヶ所にある。うち29ヶ所に「高屋」の字が、10ヶ所に「高谷」の字が宛てられている。

【駒城】

コマシロ。

この小字は竹佐の山本境にあり、タカヤ小字に混じって位置する。

コマシロとは何を意味するのか分から

ないが、迷いつつ二説を挙げる。

①コマ（駒）は馬のことであろう。コマシロとは、「馬を飼育していた防禦施設のあつた所」か。

②コマはコ（小）・マ（間）で狭小な土地をいう（語源辞典）。従つて、コマシロとは「小さな防禦施設のあつたところ」であろうか。

全国地図には、コマシロ地名もコマジョウ地名も載っていない。

【屋敷】

ヤシキ。

この小字は竹佐の久米川と観音沢川の間二ヶ所あり、一つのタカヤ小字の両隣にある。

ヤシキとは「武家屋敷のあつたところ」であろう。

全国地図にはヤシキ地名は73ヶ所に中・大字として挙げられており、うち72ヶ所で「屋敷」の字が宛てられている。

【物作り】

モノヅクリ。

この小字は竹佐の観音沢川右岸にあり、タカヤ小字とスナダ小字に囲まれて二ヶ所にある。

モノヅクリとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①モノ←モロと転訛した語で「浸食地形」をいい、ツクリはツク（漬）・リ（場所）の接尾語）であるという。以上から、モノヅクリとは「河川の浸食作用を受け、水が漬きやすい場所」をいうのであろうか。

②モノ←モモと転じた語でママ（壙）と同じ意味があり「崩れ地」をいう。ツ（津）・クリ（涅）で「水辺の湿地」のこと。以上から、モノヅクリとは「崩れ地のある水辺の湿地」をいう。

二つのモノヅクリ小字のうち、一つは観音沢川に田府沢川が合流する所にあり、

浸食を受けやすいところに位置している。
全国地図には、モノヅクリ地名は記載が無い。

【島垣外】

シマガイト。

この小字は久米川に観音沢川が合流する地点にあり、三角形になっているがその二辺を沢が流れている。

シマガイトとは、「沢に囲まれて島のようにになっている所」であろう。

全国地図には、シマガイト地名が1ヶ所、中・大字として挙げられており、「島垣外」の字が宛てられている。

【川原】

カワラ。

久米川左岸にある小さな小字である。

カワラとはカハハラの約で「川辺の、水がなくて砂石の多い所。川沿いの平地」をいう（広辞苑）。

全国地図には、中・大字として挙げられているカワラ地名は、126件と多い。

【溝下川向】

ミゾシタカワムカイ。

この小字は、田府沢川が観音沢川に合流する地点の下流側にある。

ここでいうミゾは田府沢川を指していると思われるが、ミゾは本来「地を細長く掘って水を通すところ」（広辞苑）というから、人工の水路をいうのであろう。田府沢川に人の手が加わったかどうかはわからないが、ここではミゾは田府沢川のこととしておく。

カワムカイのカワは観音沢川をいう。

以上から、ミゾシタカワムカイは「観音沢川の向かい側にある、田府沢川の下側にある土地」をいう。

なお、ミゾシタ小字も原資料には記載があるが、ブルーマップには地番が見当たらないので、その位置を確かめることができなかった。

【水たり】

ミズタリ。

この小字は、田府沢川に桧木沢川が合流する地点にある。

ミズタリとは、「水が激しく流れ落ちている場所」をいうのであろう。タリは動詞タル（垂）の連用形が名詞化した語。

全国地図には、ミズタリ地名は、中・大字に3ヶ所挙げられており、いずれも「水垂」の字が宛てられている。

【岩下】

イワシタ。

この小字は、竹佐の観音沢川と桧木沢川に三方を囲まれた細長い地形になっている。現在はほとんどが田んぼになっている。

イワは「小石まじりの地」であろう（語源辞典）。従って、イワシタとは「小石まじりの土地の下流側にあるところ」をいうのであろうか。

全国地図には、イワシタ地名は中・大字として、48ヶ所が挙げられており、その全てに「岩下」の字が宛てられている。

【上石原田・下石原田】

カミイシハラダ・シモイシハラダ。

これらの竹佐の小字は山本境にあり、観音沢川や桧木沢川に囲まれており、現在はほとんどが水田になっている。カミイシハラダ小字が北側に位置する。

イシハラ＝イシワラで「小石の多くある平地」を意味するという（広辞苑）。

従って、イシハラダとは「小石の多くある緩傾斜地で、水田になっているところ」であろうか。あるいは、ダはダ（処）の可能性もある。

なお、イシハラダ（石原田）小字も原資料にはあるが、その地番をブルーマップから探し出すことはできなかった。

全国地図には、イシハラダ地名は4ヶ

所に中・大字として記載されている。

【大沼・上大沼・下大沼】

オオヌマ・カミオオヌマ・シモオオヌマ。

これらの小字は竹佐にあり、田府沢川右岸に並んでいて、現在はほとんどが水田になっている。

オオヌマとは、文字通りで「大きな沼地」をいうのであろう。あるいは、オオは美称かもしれない。

オオヌマ小字の上流側にあるのがカミオオヌマ小字で、下流側にあるのがシモオオヌマ小字である。

南にあるタカヤ（高屋）小字やコマシロ（駒城）小字に防御的な役割があったとすれば、このオオヌマ小字群は堀の役割があったのかもしれない。

全国地図には、オオヌマ地名は、53ヶ所に中・大字として採り挙げられている。

【四通り田】

シトオリダ。

この小字は竹佐の田府沢川右岸にありカミオオヌマ小字の上流側水田の中にある。

シトオリ＝シトリで、動詞シトル（湿）の連用形が名詞化した語。

つまり、シトオリダとは「湿地にある田んぼ」を意味する。

全国地図には、シトオリダ地名は載っていない。

【城山】

ジョウヤマ。

箱川の小字である。久米ヶ城から南西に伸びる二本の側稜に、ジョウヤマ小字が乗っている。他にも箱川のあちこちにジョウヤマ小字がある。

ジョウヤマとは「久米ヶ城にかかわる側稜」のことを意味するのであろうか。あちこちにあるジョウヤマは「久米ヶ城

に関わる土地」をいうのであろう。

【庚申洞】

コウシンボラ。

この小字は、箱川の県道田中・乱橋線の西向き斜面の平坦地にある。

コウシンボラとは「庚申様が祀られていた洞」を意味する。近くの集会所で庚申講が行われいたことがあるのか。近くのどこかに青面金剛石像が祀られていたのか。

全国地図には、コウシンボラ地名もコウシンボラ地名も記載は無い。

【洞】

ホラ。

この箱川のホラはコウシンボラ小字の上隣にあり、傾斜地になっている。

ホラは「小さな谷」であろう。伊那谷南部には比較的、多い小字である。

全国地図には、ホラ地名は、26ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【向沢】

ムコウザワ。

この小字は、箱川のコウシンボラ小字の西隣にあつて、沢に沿うように長く延びている。

ムコウザワとは、「向こう側にある沢」を意味するのであろう。基準になるのは、久米ヶ城であろうか。それともすぐ西側にあるコノツ小字かもしれない。ここでは、近い所にアルコノツ小字としたいが、どうであろうか。

全国地図にはムコウザワ地名は無い。

【コノツ】

箱川のコノツ小字は二ヶ所にある。一つは、ムカイザワ小字の西隣にある洞で、もう一つは、その西側にある側稜つきの洞にある。

コノツとは何か。コはコ（此）で、ノツ←ノチ←ヌ（沼）・チ（場所を示す接尾語）ではないかという（語源辞典）。

以上から、コノツとは「ここの湿地」ということになりそうだが、“ここ”にどんな意味があるのか掴めないでいる。

全国地図には、コノツ地名は記載が無い。

【ククツ】

クグツ。

箱川の竹佐境にある側稜付近に三ヶ所分布している。

クグツといえば傀儡で「歌に合わせて舞わせるあやつり人形をあやつる芸人」(広辞苑)をすぐに思い出すが、近くにお宮もないし、この小字が広すぎることからあきらめた。

クグは動詞クグル(潜)の語幹で「砂地など水もちの悪い地」をいい、チはト(処)と同系で「場所」を示す接尾語であるという(以上は語源辞典)。

以上から、クグツとは「水もちの悪い土地」を意味するのであろう。そのためかどうか、この側稜には雨堤小字がある。

全国地図には、クグツ地名は無い。

【くるみ・クルミ洞】

これらの小字は箱川にあり、コノツ小字やクグツ小字に囲まれている。

クルミは動詞クルム(包)の連用形が名詞化した語で、谷底などの「小平地」をいう(語源辞典)。

以上から、クルミとは「山間の小平地」を意味するものと思われる。

クルミホラとは「小平地のある洞」であろう。

全国地図には、クルミ地名は7ヶ所に中・大字として記録されている。

【中尾・中尾峠・中尾中・中尾下】

ナカオ・ナカオトウゲ・ナカオナカ・ナカオシタ。

これらの小字は、主に箱川の竹佐境にある側稜の南東側斜面にあるが、一部は谷低地にある。

ナカオとはナカ(間)・ヲ(尾)で、「尾根と山麓の間の斜面で長く延びた土地」をいうのであろう。

ナカオトウゲはナカオ小字に続く傾斜地にあり、峠路にも繋がっている。

一対のナカオナカ小字とナカオシタ小字が、ナカオ小字に続く傾斜地にあり、もう一対のナカオナカ・ナカオシタ小字は谷底部にあり、これらは「側稜の間の谷底部の地」を意味するのであろうか。

全国地図には、ナカオ地名は、148ヶ所が、中・大字として挙げられており、うち143ヶ所は「中尾」の字が宛てられている。

【圓六山】

エンロクヤマ。

この小字は箱川の竹佐境の側稜の尾根頂上部にある。

エンロクは、それ以外に考えられないので固有名詞と思われる。

エンロクヤマとは、「圓六が所有している山地」をいうのであろう。

全国地図には、エンロクヤマ地名は載っていない。

【アタゴ・アタコ山】

アタゴ・アタゴヤマ。

箱川地区の箱川左岸の山地にある。

アタゴとは何か。それでも二説を挙げざるをえないか。

①アタゴあるいはアタゴヤマとは「愛宕権現が祀られていた場所」ではないだろうか。現在はその痕跡はないかもしれないが、それは明治元年の神仏分離令によって跡形もなくなったと思われるがどうであろうか。愛宕権現は早くから神仏混淆が行われ、愛宕信仰は地蔵信仰と表裏一体となって全国各地に流布されたといっているので、神仏分離のターゲットとなっていた可能性がある。

②アタゴ←ア(接頭語)・タコ(高)と転

じた語で「高所」をいう（語源辞典）。アタゴとは「高い所」を意味する。アタゴヤマは「高い所（峰）のある山地」となるのか。

全国地図には、アタゴ地名が31ヶ所、アタゴヤマ地名は106ヶ所が、中・大字として記録されている。

【由ふくり・ユフグリ】

ユフグリ。字地名大鑑ではウチフグリ（内ふぐり）となっている。

「由フクリ」小字は二ヶ所、箱川の竹佐境にある尾根続きの頂上部に、ユフグリ小字は、尾根の北西向き傾斜地にある。少し離れているが、大須川の上流部にもある。

ユフグリとは何をいうのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ユフはユフ（木綿）を織るシナノキのこと、クリ＝グリはクリ（礫）をいう。以上から、ユフグリとは「シナノキが自生している小石まじりの土地」をいうのではないか。

②ユフは動詞ユブル（揺）の語幹から、「地這りなどのあった所」をいう。すなわち、ユフグリとは「地這りがあった小石まじりの土地」となるが、どうか。

全国地図にユフグリ地名は載っていない。

【トウゲ】

この小字は、竹佐境の尾根続きにあり、二つのユフクリ小字の間にある。

県道田中・乱橋線から箱川流域に抜ける道の峠であったのだろう。トウゲは「峠」しか考えられない。

全国地図には、トウゲ地名は、88ヶ所も中・大字として挙げられている。

【細洞】

ホソボラ。

箱川の側稜の尾根から川原まで達する小字で、さらに中腹の長い平坦地を含む

という大きな面積を占めている。

ここでのホソボラの意味がはっきりしないが、あるいは、流水のある部分にだけ注目して、「細い洞」と命名したのであるのか。後にホソボラ小字の面積が拡大する事情があったのかもしれない。

全国地図には、ホソボラ地名は載っていない。

【タイ】

箱川ホソボラ小字と谷底の間の傾斜地にある。

タイとはタイ（田井）で「田に引く水をためたところ」という（広辞苑）。しかし、この傾斜地には水を溜めるような場所はない。しかし隣の大きなホソボラ小字には、現在でも池があり、池であったと思われる凹地もある。こうしてみると、今のホソボラ小字の一部がタイ小字であったことは十分に考えられる。

そしてタイ小字の麓にある箱川氾濫原で、箱川の水を利用できない田んぼに池の水を供給していたのかもしれない。

全国地図には、タイ地名は48ヶ所に、中・大字として挙げられており、うち38ヶ所で「田井」の字が宛てられている。

【下モ田・上下田・中下田・下モ田山】

シモダ・カミシモダ・ナカシモダ・シモダヤマ。

シモダとは何か。語源辞典によって二説を挙げておきたい、

①シモダとは「低地にある田んぼ」をいうか。

②シモは動詞シモル（滲）の連用形が名詞化した語で「湿地」を意味する。すなわち、シモダとは、「湿地にある田んぼ」か。

カミシモダとは、「(箱川の)上流側にある低地の田んぼ」か、「上流側の湿地にある田んぼ」をいう。

ナカは上流側のシモダと下流側のシモ

ダとの間にあるシモダをいうのであろう。シモシモダはシモダとしているようだ。

シモダヤマは「シモダ小字のある低地より高い所にある山地」をいうのであろう。

【砂子田・砂子田山】

スナコダ・スナコダヤマ。

これらの小字は箱川地区の細洞丘陵の西向き傾斜地と麓にある。スナコダ小字は箱川氾濫原左岸に位置する。

スナコはスナゴともいい、「砂」のこと（広辞苑）をいう。従って、スナコダとは「砂地の田んぼ」か「砂の多いところ」のどちらかであろう。

スナコダヤマとは「スナコダ小字より高い所の山地」を意味するのであろう。

スナコダ地名は、全国地図に、4ヶ所が中・大字として挙げられている。

【鶴巻・鶴牧】

ツルマキ。

これらの小字は、箱川の細洞丘陵の尾根から東側斜面、さらに麓を流れる大須川氾濫原を越えて、さらに東側の水晶山丘陵にまでかかる、広い面積になっている。

ツルマキは一般の辞書には記載がないが、伊那谷南部には多い小字である。

ツルマキはツル（鶴）・マキ（巻）で、ツルは「細長く曲がった」意、「マキで似た語を重ねた語か」とある（以上は語源辞典）。しかし、ツル（蔓）のように「長く曲がって延びている地形」と考えることもできる。

以上から、ツルマキとは「山麓線や等高線などが、曲がって長く延びている場所」をいうのであろう。

全国地図には、ツルマキ地名は中・大字として21ヶ所に挙げられているが、ありふれた地形のわりには少ないかもしれない。

【坂尻・坂尻山】

サカジリ・サカジリヤマ。

これらの小字は、箱川細洞丘陵の東向き傾斜地にある。

サカジリとは「坂道の登り口」をいう、山梨や上伊那の方言であるという。確かに、この小字には、大須川の氾濫原から細洞丘陵に登る坂道の登り口がある。

サカジリヤマはサカジリ小字より高い所にあるので、「サカジリ小字より高い山地」をいうのであろう。

全国地図には、サカジリ地名は、4ヶ所が、中・大字として記録されている。

【治郎渕】

ジロウブチ。

この小字は二ヶ所にある。一つは、箱川の細洞丘陵の西向き斜面に、もう一つは大須川の氾濫原にある。

ジロウブチとは何を意味するのか。これも語源辞典に依りながら、三説を挙げたい、

①フチはフチ（縁）で「段丘の縁、すなわち崖」や「川べり」をいう。ジロウは固有名詞であろう。従って、ジロウブチとは「治郎が何らかの形で関与している崖地」と「治郎の所有している川べりの地」をいうのであろうか。

②ブチは動詞ブツ（打）の連用形が名詞化した語で、「山の急に峻しくなった所」を意味する。すなわち、ジロウブチとは「治郎の所有する山地で山が急に峻しくなっている所がある土地」と「治郎が所有する川べりの水田地帯」を意味するのであろうか。

③ジロウが固有名詞でないとすれば、ジロウ←シロと転訛したもので、「緩やかな傾斜地」や「山頂や中腹の平坦地」をいうこともある。とすれば、ジロウブチとは、単に「平坦地の縁の崖」とか「緩傾斜地の川べり」という意味になりそう

であるが、どうであろうか。

全国地図にジロウブチ地名は記載が無い。とすれば、やはりジロウは固有名詞であろうか。

【墓場ツルネ】

ハカバツルネ。

この小字は、箱川の細洞丘陵の尾根を含めた西向きの傾斜地にある。

墓場ツルネとは何を意味するのであるか。解釈は二通り。

①ハカバといえは「墓地」のこと。従って、ハカバツルネとは、「墓地のあるところで、尾根筋などが長く延びているところ」ということになる。しかし、現在、この小字には墓地はない。ただ、この小字発生時には、墓地があったということも考えられるので、一応、挙げておく。

②ハカ←ハガと転じたもので、ハガは動詞ハガス（剥）の語幹で「崩壊地」をいう（語源辞典）。すなわち、ハカツルネとは「崩壊地のある、尾根などが長く延びている土地」を意味するか。現在、この小字には大きな崩壊地がある。

全国地図には、ハカバツルネ地名は記載が無い。

【三反田】

サンタンダ。

この小字は箱川の大須川が開析した谷にある。

サンタンダとは「面積が合わせて三反田ほどの水田のあるところ」であろう。

全国地図にもサンタンダ地名は7ヶ所に中・大字として挙げられており、それらの全てに「三反田」の字が宛てられている。

【カニ山】

カニヤマ。

この小字は箱川の大須川右岸で細洞丘陵の東向き傾斜地にある。

カニヤマとは何か。語源辞典を借りな

がら二説を挙げる。

①カニ←カネ（曲）と転訛した語、動詞クネル（曲）と同じで「曲がった地形」をいう。カニヤマとは「川に沿って曲がった地形になっている所」か。大須川が曲流していることも含んでいるのであろう。

②カニ←カナ←カハ（川）・ナ（土地）と転じた語で、「川辺」をいう。すなわち、カニヤマとは、「川辺にある山地」か。

全国地図には、カニヤマ地名は2ヶ所あり、中・大字として記載されている。

【ツク田・ツク田山】

ツクダ・ツクダヤマ。

これらの小字は箱川の大須川氾濫原とその北側の山地にある。

ツクダヤマとは「ツクダ小字に近い山地」と思われる。

ツクダとは何か。二説を挙げておきたい。

①ツクダとは、「荘園領主が直接に経営する田。種子・農具などを領主が負担し、全収穫を取得」（広辞苑）もありうる。

②ツクは動詞ツク（漬）の連体形で、「水につかる所」をいう。すなわち、ツクダとは「水に漬くこともある田んぼのある所」かもしれない。

全国地図には、ツクダ地名は14ヶ所で中・大字として挙げられている。

【以ほり・イホリ山】

イホリ・イホリヤマ。

これらの小字は、箱川氾濫原とその東側にある細洞丘陵にある。

イホリヤマとは、「イホリ小字の近くにある山地」で通用するか。

イホリとは何か。分かりにくい地名で三通りの解釈を挙げておきたい。

①イホリといえは、すぐに思い浮かぶのはイホリ（庵）である。広辞苑には「草や木を用いるなどして作った粗末な家。

仮小屋。隠遁者の仮住居など」とある。しかし、この場所に耕作用の仮小屋は考えられないので、あったとすれば隠遁者の住居か。

②イホリ＝イオリでイ(接頭語)・オリ(降)で「傾斜地」をいう(語源辞典)。すなわち、イホリとは「傾斜地のある所」をいうか。

③イホリ＝イエリで、「雲霧のたちこめることをいうか」とある(国語大辞典)。すなわち、イホリとは「霧が立ちこめることのある所」だろうか。

全国地図には、イホリ地名は1ヶ所にだけ、中・大字として記録されているが、宛てられている字は「井折」。

【山オキ】

ヤマオキ。

この小字は箱川のイホリ・イホリヤマ小字に囲まれて、細洞丘陵西側傾斜地の麓近くにある。

ヤマオキとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①オキは「同じ平面で遠く離れたほうをいう」(国語大辞典)。ヤマオキとは「こちらから見て離れた東側にある山地」をいう。「こちら」とは川(箱川)の西側にあるキタガイト小字やイエノウラ小字に関係する有力者の居住地のことをいうのであろうか。

②オキには「山寄りに対して川に面する低い方」の意がある(語源辞典)。従って、ヤマオキとは、「(細洞丘陵の)川に面する低いところ」をいうのであろうか。

全国地図には、ヤマオキ地名は記載が無い。

【中島】

ナカジマ。

この小字は、大須川が箱川に合流する氾濫原にある。

ナカジマとは「二つの川に囲まれて島

のようになっている所」を意味する。

【カキセ】

この小字は、大峰沢川が大須川に合流する平地にある。

カキセとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①カキは動詞カク(欠)の連用形が名詞化した語で、セはセ(早瀬)をいう。カキセとは「浸食を受けたところもあり、瀬の速い川のある所」をいうのであろうか。

②カキにはカキ(垣)で「土地の区画を限る囲」の意味もある。カキセは「川によって区画を限られた土地」という意味もあるかもしれない。

全国地図には、カキセ地名は1ヶ所、中・大字として挙げられており、「垣瀬」の字が宛てられている。

【イナバ・いなば】

イナバ小字は箱川には二ヶ所にある。一つは、箱川の細洞丘陵最南端の末端部南向きの傾斜地にあり、もう一つは南東方向にあり、同じような地形になっている大峰沢川とその支流が合流する地点にある。

イナバは伊那谷南部のどこにでもある小字名で、「稲干場」をいう。

【橋場】

ハシバ。

箱川の大峰沢川右岸の沿岸にあり、県道田中・乱橋線と交叉する地点にある。

ハシバは文字通りで、大峰沢川に架かる橋のあったところであろう。

ハシバもよくある小字で、全国地図では、38ヶ所も中・大字として挙げられている。

【垣外】

カイト。

箱川のあちこちにある小字で、いずれも、「居住地跡」とみることができそうだ。

【サラタ】

箱川地区の大須川左岸にあり、氾濫原のすぐ上の段に位置している。

サラタとは「水を干すことのできる田。乾田」で、下伊那・愛知・岐阜の方言であるという（国語大辞典）。

伊那谷南部ではところどころで見かける小字名であるが、全国地図にはサラタ地名はひとつもない。

【前田】

マエダ。

この小字も、箱川は非常に多い。

いずれも、有力者の居住地の前の方とか、お宮の前の方ということになるものと思われる。

【ナギ尻・なき尻・なぎじり】

ナギジリ。

この小字も、箱川地区のあちこちにあって、ナギジリなども加えると数は多い。

ナギジリとは「山などが崩れた、その土砂の末端部のところ」をいう。

全国地図には、ナギジリ地名もナギジリ地名も載っていない。ということは、この小字が多いということは、伊那谷南部の特徴かもしれない。

【タイザ・タイザ山・タイサ・田井座】

この小字も箱川には複数ある。

タイザとは何か。『旧下久堅村の小字』に書いた内容をここで繰り返しておきたい。タイザとは

- ①芸能集団が田をつくりながら居住していた場所か。
- ②段丘などの平坦な場所で貴人が住んでいたか神仏が祀られていた所か。
- ③寺院や神社とは別棟の離れ屋で、仏事や祭を行うために組織された集団が使用した場所であろうか。

タイザ山は「タイザ小字に近い山地」をいうのであろう。

全国地図にはタイザ地名は2ヶ所だけ

にあり、「間人」の字が宛てられている。

【古屋敷】

フルヤシキ。

箱川の細洞丘陵南東向き傾斜地に二ヶ所あって、いずれも大須川に面している。二ヶ所のナギジリ小字と互い違いに並んでいる。

フルヤシキとは、「古い屋敷跡があった所」であろうか。住んでいた人のことははっきりと分からないほどに古いことを意味しているのであろうか。

【細田】

ホソダ。

この小字も箱川地区の大須川左岸の微高地にある。現在も水田地帯になっていて、東隣にはミドウジ（御堂寺）小字がある。

ホソダとは、字面の通りで「細長い田んぼ」を意味する。等高線に沿うように細長くなった水田が今でもある。

ホソダ地名は、全国地図に、35ヶ所が中・大字として挙げられている。

【石原田】

イシハラダ。

竹佐にもあったが箱川にもある。

三穂境の丘陵地にある広い小字である。イシハラダとは「小石の多い緩傾斜地のある土地」か。山地の急傾斜地も含まれている土地である。

【畑添】

ハタゾエ。

この小字は、大須川が開析した谷の底部にある。現在は水田になっている。

ハタゾエとは何か。三通りの解釈を挙げておきたい、

①ハタゾエは字面の通りに考えれば「畑に沿った土地」になる。周辺の一部に畑があるが、すっきりしない解釈ではないだろうか。

②ハタはハタ（端）で「末端部」をいう。

この小字は、伊那谷道中山地（ここにもジョウヤマ小字がある）の麓になっている。ハタゾエとは、「(山稜の) 末端部に沿っている土地」となる。これだとはっきりしている。

③ハタには動詞ハタク（叩）の語幹から「崩壊地」の意味もある（語源辞典）。これだと、ハタゾエは「崩壊地に沿った土地」ということになる。

全国地図には、ハタゾエ地名は記載が無い。

【邊り田】

ヘリダ。

箱川の大須川の谷底部に二ヶ所ある。この二ヶ所は、かつては繋がっていたと思われる。現在はほとんどが水田になっている。

ヘリダとは文字通り「末端部にある田んぼ(土地)」であろう。末端部とは、「城山」小字のある山地を基準にして、その末端部を意味しているのであろうか。

全国地図には、ヘリダ地名も載っていない。

【坂下】

サカシタ。

この小字は箱川に二ヶ所ある。一つは大須川谷底部で北西側の県道田中・乱橋線に沿っており、もう一つは大須川の谷底部の上流部で側稜の東向き傾斜地にある。

サカシタとは文字通りで、「斜面の麓」をいうのであろう。竹佐境の山稜南東側傾斜地で、坂道がある。

全国地図には、サカシタ地名は、中・大字として83ヶ所にも記載がある。

【ワル田】

ワルダ。

この小字は山本にもあったが、箱川のワルダ小字は竹佐境の山稜南東向き傾斜地にある。二股の洞になっていて、最末

端部が、現在は水田である。

ワルダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ワルは動詞ワル（割）に関連し「割れたような状態」をいう。この場合は、谷が二つに割れていること示しているのかもしれない。すなわち、ワルダとは「二股に分かれた谷のある所」か。

②ワルは形容詞ワル（悪）の語幹で「よくない」意から「嶮岨な地形」をいう。以上から、ワルダとは「嶮岨な地形のある所」を意味しているのであろうか。

ワルダ地名は、全国地図には無い。

【六反田】

ロクタンダ。

この小字は、箱川大須川の谷底部にある。現在は、ほとんどが水田になっている。

ロクタンダとは何か。解釈を二つ。

①ロクタンダとは、文字通り「六反歩の田んぼがあった所」であろう。おおざっぱな計算でも、現在9反歩ぐらいになっているので、小字名発生時に6反歩という水田はありうる。

②別解もある。ロクタはロク(陸)・タ(処)で「平坦地」をいい、ノタは下伊那の方言で「山間の湿地」をいう（以上は語源辞典）。すなわち、ロクタンダハロクタ・ノダから転じたもので、「山間の平坦地で湿地になっている所」を意味する。面白いがどうであろうか。

全国地図には、ロクタンダ地名は、中・大字として、8ヶ所に挙げられており、その全てに「六反田」の字が宛てられている。

【深田】

フカダ。

竹佐にもあった小字であるが、箱川にもある。大須川の谷の上流部になり、現在も半分ほどは田んぼになっている。

フカダは「泥の深い田。沼田」(広辞苑)だから、ここのフカダも「泥の深い田んぼのあるところ」であろう。

【タナダ】

この小字は、箱川のフカダ小字の周辺に、二ヶ所ある。

ここのタナダは、一般にいわれているように「急な傾斜地を耕して階段状に作った田」(広辞苑)ではない。

ここのタナダはタナ(棚)・ダ(処)で、タナは「全体の地形が階段状をなす中で、ゆるい傾斜の部分」をいう(国語大辞典)。

以上から、ここでいうタナダは「全体の地形が階段状をなす中で、緩い傾斜の土地」を意味する。

全国地図には、タナダ地名は11ヶ所あり、いずれも同じ「棚田」の字を宛てているが、意味にはニュアンスの違いはあると思われる。

【又北】

マタキタ。

箱川の大須川の谷底部の最上流部にある。

マタは「二股状に分かれた谷の分岐点」をいい(語源辞典)、キタはキダで「棚状の地形」をいうのであろう。

以上から、マタキタとは「二股に分かれた谷の分岐点で棚状地形になっている所」を意味するものと思われる。

全国地図には、マタキタ地名もマタギダ地名も記載されていない。

【田入】

タイリ。

この小字は箱川の大須川上流部にある。タイリとは「沢の上流部の田んぼのある所」であろうか。

全国地図にはタイリ地名も載っていない。

【本洞】

ホンボラ。

この小字は、箱川の久米ヶ城南西側の傾斜地にあり、ジョウヤマ小字に挟まれている。

ホンボラとは、「中心になるような洞」をいうのであろうか。久米ヶ城に最も近い洞という意味が込められているものと思われる。

全国地図には、中・大字となっているホンボラ地名は2ヶ所にあり、「本洞」の字が宛てられている。

【扇平】

オウギヒラ。

この小字は箱川二ヶ所、水晶山西側の山地にある。

オウギヒラも分かりにくい地名である。語源辞典に依りながら、解釈を二つ。

①オウギヒラとは「等高線で区切られた土地が扇形になっている斜面」か。果たして扇形になっているのかどうか迷うが一応、挙げておきたい。

②オウギはアフ(崖地)・キ(処)で、オウギヒラとは、「崩れ地のある傾斜地」になる。

全国地図には、オウギヒラ地名は1ヶ所、オウギダイラ地名は2ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【久保畑】

クボバタ。

この小字は箱川の久米ヶ城から南西に延びる尾根のジョウヤマ小字の中にあり、小さな谷になっている。

クボバタとは「窪地になっている畑」であろう。焼畑であった可能性もある。

クボバタ地名は、全国地図に1ヶ所だけ記載がある。

【大須】

オオス。

この小字は大須川谷底部の上流部にあり、フカダ小字と隣り合わせている。

オオスとは何か。語源辞典を参考にし

ながら二説を挙げる。

①オオは接頭語で「程度の甚だしい」ことをいい、ス（砂）は「押し流されて堆積した土砂」のこと。従って、オオスとは「激しい土石流があった所」か。

②オオは美称。スはス（栖）で「住み処」をいう。すなわち、オオスとは「居住地であった所」をいう。現在も居住地になっている。対照的ではあるが、どうであろうか。

全国地図には、オオス地名は6ヶ所に中・大字として挙げられている。

【屋下】

ヤシタ。

この小字は、箱川大須川谷底部のオオス小字に隣接している。現在、北側には家屋が並んでいて、カイト小字になっている。

ヤはヤ（屋）で「家屋」を意味する。ヤシタは「家屋が並んでいる場所の下流側の土地」をいうのであろう。

全国地図には、ヤシタ地名は4ヶ所に記載されている。

【芋久保】

イモクボ。

この小字は箱川の伊豆木境にある側稜の北西側の山地にある。

イモクボとは何を意味しているのか。語源辞典に添いながら二説を挙げる。

①イモはウモ（埋）の意で「（土砂に）埋もれた地」をいう。すなわち、イモクボとは「土砂に埋もれた窪地（谷）のある所」であろうか。

②イモ←イボ（疣）と転訛した語で、「突起した地形」をいう。イモクボとは「高い峰もあり、窪地もある土地」か。この小字には、標高 665.6mの二つの峰がある。

全国地図には、イモクボ地名は、2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【梅ノ木田】

ウメノキダ。

箱川のウメノキダ小字は二ヶ所にある。一つは伊豆木境の側稜の北西面にあり、もう一つは少し離れた所にある。県道田中・乱橋線の両側になる。

ウメは動詞ウム（埋）の連用形が名詞化した語で、ノは助詞、キダはキダハシ（階段）のことをいう。

以上から、ウメノキダとは「崩れた土砂が堆積し、階段状の地形になっている所」であろう。

全国地図には、ウメノキダ地名は1ヶ所に、中・大字として挙げられているのみ。

【カリ山】

カリヤマ。

この小字は、箱川の伊豆木境の側稜の西側傾斜地に二ヶ所あるが、かつては繋がっていたものであろう。

カリヤマとは何か。解釈を二つ。

①飯田市付近でカリヤマといえは、「山畑」を意味する（方言大辞典）。あるいは、焼畑も行われたのかもしれない。現在は、ごく一部分が畑になっている。

②カリヤマとは「刈敷用の草木を刈り取った山」ではなかったか。柴山と呼んでいるところが、伊那谷南部にはある。

③カリはカリ（刈）で「刈り払われたような地形」をいい、「崩壊地形」をいう（語源辞典）。すなわち、カリヤマとは「崩れ地のある山地」であろうか。

全国地図には、カリヤマ地名は、9件が中・大字として挙げられている。

【四通田】

シトオリダ。

箱川の大須川谷底の上流部にあり、ウメノキダ小字の下流側にある。

シトオリダ小字は山本地区にもあって、そこで解釈も示してあるので、ここでは省く。

【才神・オノ神】

サイノカミ。

箱川のサイノカミ小字は二ヶ所にある。一つは箱川の伊豆木境にあり、近くを県道田中・乱橋線が通っており、もう一つは大峰沢川右岸にあって上平集会所の近くにあるが、こちらは伊豆木境までは距離が少しあるのが気になる。

サイノカミ小字は山本地区にもあり、由来解釈についてはそこで触れているので、ここでは省きたい。

【丸山】

マルヤマ。

山本にも竹佐にもある小字。箱川のマルヤマ小字はカリヤマ小字に挟まれていて、標高 622.3m の独立峰がある。

由来解釈については省く。

【平林】

ヒラバヤシ。

この小字も山本・竹佐にはある。箱川のヒラバヤシ小字は伊豆木境に近い北向きの緩傾斜地にある。

由来解釈については省く。

【姥カフトコロ・姥ヶふところ】

ウバガフトコロ。

箱川には、この小字が二ヶ所にある。一つは下平の大峰沢川と箱川の間、山地の北西側斜面にあり、もう一つは伊豆木境の尾根と大須川の間、北向きの傾斜地にある。いずれも大きな面積をもっている。

ウバガフトコロとは、「姥に抱かれているところ」の意から、「安全で、風のこない暖かい場所」をいう。しかし、箱川のウバガフトコロ小字は二ヶ所とも北向きの谷になっているのが、気になる。この地方は、冬でも南よりの風が強いことを意味しているのだろうか。

ウバガフトコロ地名のところは、製陶が盛んだということが伝えられているが、

箱川については、未確認。

全国地図には、ウバガフトコロ地名は 4ヶ所に、中・大字として挙げられており、全てに「姥ヶ懐」の字が宛てられている。

【平稲葉】

タイライナバ。

この小字は、大須川左岸の山地に二ヶ所あり、いずれもウバガフトコロ小字に接している。

イナバは「稲干場」で一般的には南向きの緩傾斜地にある草地をいう。タイライナバとは「山中に平らな場所もある稲干場」であろう。

前項地図にはタイライナバ地名は記載が無い。

【墓場ツル子】

ハカバツルネ。

既に箱川のハカバツルネ(墓場ツルネ)小字については触れているが、同じ箱川のハカバツルネ小字ではあるが、由来・解釈が少しことなるので、改めて触れておきたい。

ツルネはツルネ(鶴嶺)で「山の峰」をいう(語源辞典)。

ハカバツルネとは「高い嶺があって墓地もある所」を意味する。ここには標高 625.1m の独立峰があり、現在でも墓地がある。

【大峰・大峰峠】

オオミネ・オオミネトウゲ。

オオミネ小字は箱川の水晶山山地の北東側にあり、二ヶ所に分かれているが、かつては繋がっていたと思われる。オオミネトウゲ小字はオオミネ小字の南隣にある。

オオミネとは「大きな尾根のある山地」を意味するか。

オオミネトウゲは現在は峠になってはいないが、小字名発生時には、峠があった所であろう。

全国地図には、オオミネ地名は、48ヶ所に中・大字として挙げられている。一般的な地名であろう。

【イボタケ山】

イボタケヤマ。

この小字は、箱川の伊豆木境にある水晶山山系の尾根にある。

イボタケヤマとは何を意味するのだろうか。語源辞典によって二説を挙げたい。

①イは「語調を整え、意味を強める接頭語」で、ボ=ホ(秀)で「高い所」をいう。タケも「高くなった所」。イボタケヤマとは、同義語を重ねて「高くなっている所」をいうか。

②タケ=ダケで「崖地」の意もある。イボタケヤマとは、「高所で崖地もあるところ」であろうか。

全国地図には、イボタケヤマ地名もイボタケ地名も載っていない。

【古城】

フルジョウ。

この小字は、箱川に二ヶ所ある。水晶山の尾根沿いの西側斜面と更に西方の山地にある。

フルジョウとは文字通り「古い城のあった所」で、久米ヶ城以前の城と思われる。

全国地図には、フルジョウ地名は12ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「古城」の字が宛てられている。

【三味線松】

サミセンマツ。

水晶山山系の西向き傾斜地にある小さな小字である。

サミセンマツとは何をいうのか。よく分からない地名である。松風を三味線の音とするのは無理がある。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①サミ←シャミは動詞ジャミル(「こわれる」意)の連用形で「崩壊地」をいう。

セン←セ(背)で「山の側稜」をいう。以上から、サミセンマツとは「崩壊地のある側稜斜面にある松」をいうか。

②サミはサミズ(真水)の下略形で、マツ←マツチ(真土)で「粘土」のこと。

以上から、サミセンマツとは、「側稜斜面で粘土層があり泉の湧き出ている所」であろうか。未確認ではあるが。

全国地図には、サミセンマツ地名もシャミセンマツ地名も記載はない。

【水晶山】

スイショウザン。

箱川の伊豆木境にある山であるが、スイショウザン小字の飛び地もあって西側に延びる尾根にある。

スイショウザンとは「水晶が出る山」であろうか。

全国地図には、スイショウザン地名が7ヶ所に中・大字として挙げられている。

【鍋フタ山】

ナベフタヤマ。

この小字は、箱川の大須川左岸にあり、水晶山山系の側稜の末端部にある。

ナベフタヤマとは何か。これも語源辞典に依りながら三説を挙げたい。

①ナベはナメラカ(滑)の意で「緩傾斜地」をいい、フタは副詞フタフタの「液体のしたたり落ちる様子」から「自然湧水のある所」をいう。以上から、ナベフタヤマとは、「自然湧水のある緩傾斜地になっている山地」であろうか。

②ナベは動詞ナメル(舐)が転じた語で「切り落とす」意もあり「崩壊地形」をいい、フタは副詞フタフタの「急ぐ様子」から「断崖」をいう。以上から、ナベフタヤマとは「崩れている断崖のある山地」を意味するのでであろうか。

③この小字の地形をナベフタに見立てたとうい可能性もある。ナベフタヤマとは「鍋蓋に似た地形になっている場所」で

あろうか。

全国地図には、ナベフタヤマ地名は載っていない。

【屋リ田】

ヤリダ。

大須川右岸の伊那谷道中のある小字である。

ヤリダとは何か。ヤリはヤ(菴)・リ(接尾語)で「湿地」をいうのであろう。ダはダ(田)かダ(処)。以上から、ヤリダとは「湿地」か「田んぼのある湿地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ヤリダ地名は、1ヶ所が中・大字として挙げられており、宛てられている字は「鑓田」となっている。

【ムクタイ】

この小字は大須川左岸の沿岸にある。

聞いたことのない、珍しい小字である。

ムクタイとは何か。下伊那の方言にムクタイがあるというが、地名には使えない。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ムクはムク(尨)で「樹木などの生え茂っているさま」をいい、タイはタヒラ(平)で「平坦地」をいう。以上から、ムクタイは「樹木が茂っている平坦地」をいうのであろうか。

②ムクは動詞ムクル(剥)の語幹で「むき出しになった地形」をいう。タイはタ(接頭語)・キ(泉)で「湿地」をいう。すなわち、ムクタイとは「崩壊地のある湿地」であらうか。

全国地図に、ムクタイ地名は載っていない。

【寺屋敷】

テラヤシキ。

この小字は、ミドウジ(御堂寺)小字の北隣に二ヶ所ある。

テラヤシキとは「寺に関わる人達の住居跡」であらう。御堂寺関係の小字であ

る。

テラヤシキ地名は、全国地図に10ヶ所が中・大字として挙げられている。

【惣蔵山】

ソウゾウヤマ。

御堂寺周辺に二ヶ所ある小字で面積も広い。

ソウゾウは固有名詞であらうか。ソウゾウヤマとは「惣蔵が所有していた山地」か。惣蔵は御堂寺にかかわる人物であったのだらうと思われる。

全国地図にはソウゾウヤマ地名はない。

【御堂寺】

ミドウジ。

現在は、ミドウジ小字内に八幡宮がある。御堂寺は八幡宮の神宮寺であったのだらうか。

【今ナギ】

イマナギ。

箱川には、この小字は三ヶ所にあり、うち二ヶ所はミドウジ小字の東西両側に、もう一ヶ所は大峰沢川の上流にある。

イマナギとは、字面の通りで「最近になって崩壊したところ」であらう。

全国地図には、イマナギ地名は記載されていない。

【前田】

マエダ。

箱川にもマエダ小字はたくさんある。マエダ小字の近くには「屋下」「家上」「家下」「○垣外」などの小字があり、いずれも「有力者の居住地であった場所の前方の土地」を意味している。

【ま以】

マイ。

この小字は、御堂寺・八幡宮の南の谷を越えた側稜の北向き斜面にある。

マイとは何か。はっきりはしないが、二説を挙げたい。

①マイ小字は、「神社に奉納する神楽など

をもっぱらにする集団に関わる土地」だったのではないだろうか。すぐ北側にある八幡宮だけではなく、他の地区へも出向いて神事に参加したかもしれないし、あるいは、農作業にも従事したことがあるかもしれない。竜丘の長野原にあるサルガク（猿楽）小字を思い出している。あるいは、タイザとも関わりがあるかもしれない。

②マイ←マエ（前）と転じたもので、「（お宮の）前の方にある土地」の可能性もある。

全国地図には、マイ地名は、1ヶ所にだけ中・大字として記録されている。

【峠】

トウゲ。

この小字も箱川には、いくつかある。側稜の尾根の鞍部であることが多いが、中には、「こんな所に峠があるのか」と不思議に思うこともあるが、それはトウゲ小字の飛び地であることが多い。

トウゲ地名は全国的にも多く、全国地図には、中・大字として、88ヶ所にも挙げられている。

【石ノ坪】

イシノツボ。

ミドウジ小字に囲まれた洞にある小さな小字である。

ツボとは、動詞ツボム（窄）の語幹で「つぼんだような地形。窪地」をいう（語源辞典）。すなわち、イシノツボとは「小石まじりの窪地」であろうか。

全国地図には、イシノツボ地名は1ヶ所ある。

【黒岩】

クロイワ。

水晶山の南西側斜面に広がる大きな小字である。

クロイワとは何か。単に「黒い岩のあるところ」ではあるまい。語源辞典に依

りながら二説を挙げる。

①クロは「山などの斜面」をいう。新潟の方言であることは気になるが、現状には添った解釈である。クロイワとは「山地の傾斜地にある小石まじりの土地」となる。

②クロはクリ（涅）に通じ「泥土。湿地」をいう。すなわち、クロイワとは「小石まじりの土地で湿地のある所」となる。自然湧水も多いようで、かなり高いところから川が流れ出している。

クロイワ地名は、全国地図の中・大字に66ヶ所も挙げられている。うち64ヶ所で「黒岩」の字が宛てられている。

【野田市場】

ノダイチバ。

水晶山山系の尾根と西向き傾斜地にある広い小字になっている。尾根道もあり、麓から登る道と合流している。

ノダイチバとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①ノダ（野田）は「山間の湿地」をいう下伊那の方言であるという（語源辞典）。イチバはイチバ（市場）としたい。こんな山の上に市がたつことがあったのだろうか、という疑問はある。しかし、古代社会では高所で物品交換をし歌垣も行われており、中世、市が立つといわれている境界地の中には峠も入っていることなどから、この尾根で市が立った可能性を否定はできない。

②念のため、語源辞典によって別解も示したい。イチバはイ（接頭語）・チバで、イは「語調を整え、意味を強める接頭語」、チバは動詞ツバユ（崩）の語幹ツバの転訛した語で「崖」をいう。以上から、ノダイチバとは「崩崖もある湿地」をいうのであろうか。

全国地図には、ノダイチバ地名は記載が無い。

【白なき】

シロナギあるいはシラナギか。

この小字はノダイチバ小字の西側山地にある。

シロナギとは、文字通り、「白い色の崩壊地があるところ」をいうのであろう。花崗岩地帯の岩盤が顕れているのであろうか。

全国地図には、シロナギ地名は無いがシラナギ地名は1ヶ所にある。

【イモジ(シ)洞・芋地洞・いもじ洞】

イモジボラ。

これらの小字は、箱川の御堂寺・八幡宮のある丘陵の南側の洞にかたまっている。

イモジボラとは「イモジ(鋳物師)が住んでいた洞」を意味する。

鋳物師は鋳物を造る職人であるが、山梨・水窪などの方言で「金属器具の修理をする業者」(国語大辞典)であるという。

これらの箱川のイモジ小字群には、鍛冶も居住していたと思われる。語源辞典には「中世に鍛冶屋を鋳物師と呼んだ」とあるのは、地方によっては鍛冶と鋳物師を区別していなかった。箱川のイモジ小字群でも鍛冶は住んでいたのであろう。

寺社では大量の釘を必要としていたので、鍛冶の仕事も多かったと思われる。

全国地図には、イモジバラ地名が無いのは不思議ではないとしても、イモジ地名も1ヶ所しか、中・大字として挙げられていないのは、なぜなのかわからない。

中世以降、各地に多くの金屋が見いだされるようになるが、それは鋳物師の諸国への定着と並行しており、金屋が鋳物師の活動拠点となっていたという(網野善彦)。箱川の鋳物師も諸国に定着した鋳物師たちと同じように箱川に定着したのであろうか。

【宮ノ上・宮裏・宮ノ越・ミヤシロ・宮ノ下・宮下】

これらの宮小字群は箱川八幡宮の周辺にあり、八幡宮に関わる小字である。

ミヤノコシは「お宮を祀る地の麓にある土地」をいうのであろうか。他は文字通りの解釈が成立するものと思われる。

因みに、全国地図には、ミヤノコシ地名は5ヶ所、ミヤシロ地名は17ヶ所に、中・大字として記載がある。

【井口】

イグチ。

この小字はイモジ小字群の下流側にある。

イグチと何か。二説を挙げる。

①イグチは、一般的には「田んぼへ引く水の取り入れ口のある場所」を意味する。大須川支流がほぼ直角に屈曲している場所でもあり、そのどこかに取り入れ口があるのだらうと思われる。

②イグチは、井(井)・フチ(縁)の転訛した語で、「川のほとり」をいう(語源辞典)。これも可能性はありそうなので挙げた。

全国地図には、イグチ地名は12ヶ所にあり、いずれも中・大字として記録されている。

【栗原・下栗原】

クリハラ・シモクリハラ。

これらの小字は大峰沢川沿岸にあり、クリハラ小字の中で大峰沢川に支流が合流している。

クリハラとは何か。語源辞典に従って二説を挙げる。

①クリはクリ(礫)で「小石まじりの地」をいう。すなわち、クリハラとは「崖地のある平坦地」をいうか。

②クリはクリ(繰)デクル(転)と同じ。すなわち、クリハラとは「川が曲流している平地」を意味するか。大峰沢川はここで曲流している。

シモクリハラとは、「クリハラ小字の下

流側にある土地」を意味するのであろう。

全国地図には、クリハラ地名は、26ヶ所に中・大字として記載があるが、シモクリハラ地名は載っていない。

【樋ツルネ】

トヨツルネ。

この小字は、大峰沢川右岸の独立峰にある。

トヨツルネとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①トヨはトヒ（樋）の伊那谷南部の方言で、「水路。川」をいい、ツルネは「峰」をいう。以上から、トヨツルネとは、「麓に川が流れている峰のあるところ」か。

②トヨは動詞トヨム（響）の語幹で、「水音の響く所」をいう。従って、トヨツルネとは「川音が響く峰のある所」であらうか。近くで、大峰沢が大須川に合流している。それだけ響きも強いのか。

全国地図には、トヨツルネ地名は載っていない。

【垣外】

カイト。

箱川のカイト小字は二ヶ所にある。いずれも県道田中・乱橋線に沿うか近い所にある。

カイトは繰り返しているように「居住地跡」をいうが、有力者が住んでいた可能性は高い。

【道下日カケ】

ミチシタヒカゲ。

この小字は、箱川の大峰沢川を挟んで峰の末端部と麓の氾濫原にかかっている。

ミチシタヒカゲとは、字面の通りで「道路下になる日の当たる土地」をいう。この道路は県道田中・乱橋線から分かれて伊豆木に向かう道である。ヒカゲ（日影）とは「日の光」をいう（広辞苑）。

【井ノ下】

イノシタ。

この小字は、箱川の大峰沢川左岸の氾濫原にある。

イノシタとは、文字通り「流水の下側」をいう。正確には、流水である大峰沢川はイノシタ小字よりやや低いところを流れているはずであるが、対岸は傾斜地であり、感覚的には「川より下の方」になるのであろうか。あるいは、小字発生時には、まだ川の浸食が進んでいなかったため、氾濫原の水田は、堤防によって保護されていたのかもしれない。

全国地図には、イノシタ地名は載っていない。

【平栗】

ヒラグリ。

この小字は、箱川の大峰沢川左岸の氾濫原と南西側の傾斜地も含む広い面積になっている。

ヒラグリとは何を意味するのか。ヒラは黄泉平坂のヒラで「傾斜地」をいい、グリはクリ（礫）で「小石まじりの地」をいう（以上は語源辞典）。以上から、ヒラグリとは「小石まじりの傾斜地」をいうのであろう。

全国地図には、ヒラグリ地名は5ヶ所の中・大字として挙げられており、すべてに「平栗」の字が宛てられている。

【家下】

イエシタ。

箱川には、複数ある小字で、いずれも「有力者の屋敷の下にある土地」を意味するのであろう。

全国地図には、ヤシタ地名は4ヶ所が中・大字として記載がある。

【ソリ田】

ソリダ。

この小字は、箱川のクリハラ小字に接しており、栗原丘陵の一つの洞に位置している。

イリダとは何か。語源辞典に依りなが

ら二説を挙げる。

①ソリは「焼畑の跡地」をいう。ダはダ(処)で「場所」を示す。従って、ソリダとは「以前には焼畑であった所」をいうか。

②ソリは動詞ソル(反)の連用形が名詞化した語で、「急傾斜地」をいう。以上から、ソリダとは「急傾斜地になっているところ」をいうのであろうか。

【北久保】

キタクボ。

箱川の八幡宮の一つ南の尾根に、三ヶ所ある。

キタクボとは何か。解釈を二通り。

①キタクボとは、「北の方にある窪地」をいうのであろうか。方角の基準になっているのは、ヤシタ小字やイエシタ小字に関わる有力者の屋敷と思われる。

②キタはキダハシ(階段)のキタで「階段状の地形」をいう。すなわち、キタクボとは「階段状になっている窪地」ではないだろうか。

全国地図には、キタクボ地名は14ヶ所に中・大字として採られている。

【小垣外】

コガイト。

箱川のキタクボ小字に囲まれるように位置している。

コガイトとは何を意味しているのか。

語源辞典に依りながら解釈を二つ。

①コはコ(古)で、コガイトとは「昔からあった屋敷の跡」か。古い屋敷があったのであろうか。

②コは親に対するコ(子)で「分家のあった所」かもしれない。本家は南側にあるヤシタ小字・イエシタ小字に関わる家であったとみるのが順当か。

コガイト地名は、全国地図に3ヶ所が中・大字として記載されている。

【井戸入】

イドイリ。

この小字は、箱川の水晶山系の尾根に達する、西側斜面に広い面積をもっている。

イドとはキ(井)・ド(処)で、「水が流れている所」をいい、イリ(入)は「上流部」をいう。すなわち、イドイリとは「沢の上流部」を意味すると思われる。

全国地図には、なぜか、イドイリ地名は記載されていない。

【天王洞】

テンノウボラ。

この小字は箱川の二つのキタクボ小字とクロイワ小字に囲まれた比較的幅の広い洞になっている。現在は墓地もある。

テンノウボラとは、素直に「天王を祀っていた洞」と考えたい。

天王信仰とは牛頭天王と素戔鳴尊に対する信仰で、祇園社と関わる。平安前期に疫病や災害の原因は怨霊だといわれ、これをなだめるために御霊会を行うようになったという(仏教民俗辞典)。祇園の御霊会は6月15日か、川路のように月遅れの7月15日に行われるところも多い。疫病が流行る時期であり、農村では病虫害に悩まされる季節である。この時期は水神祭が行われることもあって、天王祭といっても実は水神祭である場合も多いらしい。

全国地図にはテンノウ地名は49ヶ所も中・大字として挙げられているが、テンノウボラ地名は無い。やはりボラが付いているためであろうか。

【入・イリ】

イリ。

箱川の水晶山山系の西側の山地にイリ小字が二ヶ所、「入」小字が一ヶ所ある。

イリとは、「谷の上流部」をいう。

全国地図には、イリ地名は22ヶ所に中・大字として記載されている。

【大平】

オオヒラ。

この小字は、箱川の水晶山系西側の山地に四ヶ所もあり、大きな面積を有している。

ヒラは黄泉平坂のヒラで「傾斜地」の意もある（語源辞典）。すなわち、オオヒラとは「広い傾斜地」を意味するものと思われる。

オオヒラ地名は、全国地図には137ヶ所が中・大字として挙げられている。

【外垣外】

ソトガイト。

箱川のヤシタ・イエシタ小字集落の東端にある。水晶山系の尾根寄りということになる。

ソトガイトとは、「集落の最も外れにある居住地跡」を意味するのであろう。

全国地図には、ソトガイト地名は記載されていない。

【日向林】

ヒナタバヤシ。

この小字は、箱川の水晶山系側稜の最先端部の緩傾斜地にある。

ヒナタバヤシとは、「樹木が生えていて日当たりのいい土地」をいうのか。

全国地図には、1ヶ所にだけヒナタバヤシ地名が中・大字として挙げられており、「日向林」の字が宛てられている。

【山ザキ】

ヤマザキ。

この小字はヒナタバヤシ（日向林）小字の側稜先端部のさらに末端にある。

ヤマザキとは、字面の通りで「山稜の最先端部」をいう。麓を大峰沢川の支流が取り巻いている。

全国地図には、ヤマザキ地名は、中・大字として125ヶ所に挙げられており、さすがに多い。

【桃ノ木田】

モモノキダ。

この小字は、側稜先端部のヤマザキ小字の南側山麓にあり、谷底部で緩傾斜地になっていて、大峰沢川とその支流の間にある。

モモノキダといえば、「山桃の自生しているところ」となるが、谷底部であるので、山桃の自生地とは考えにくいので、採らないことにしたが、どうであろうか。

モモノキダとは何をいうのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①モモノキダはモモ・ノキ・ダ（処）で、モモはママ（壙）の転じた語で「崖」をいい、ノキはヌキ（抜）の転で「崩壊地形」をいう。以上から、モモノキダとは「崩壊した崖のあるところ」をいうのだろうか。

②モモノキダはモモ（壙）・ノ（助詞）・キダ（階段）で、「崖のある棚田状の土地」をいうのかもしれない。

モモノキダ地名は、全国地図には記載が無い。

【出口】

デグチ。

この小字は、ヤシタ・イエシタ小字辺りを中心とする集落の南端にあり、峠を越えて伊豆木に向かう道路が近くを通っている。

デグチとは「外へ出る口」（広辞苑）をいう。すなわち、デグチとは、「集落から外へ出ていく出入口がある場所」を意味するものと思われる。

全国地図には、デグチ地名は46ヶ所も中・大字として記録されている。

【大鹿】

オオジカ。

この小字は、ヤシタ・イエシタ小字のすぐ上流側にある。

オオジカとは何か。分かりにくく難しい小字名である。語源辞典に依りながら

三説を挙げておきたい。

①オオ（大）は「中心となる」の意か。ジカはシ（砂）・カ（処）で、「砂地で中心になる所」か。周辺の小字名から察して、ここに有力者の居住地があっても不思議ではない。

②オオジカはオオジ・カ（処）で、オオジはオン（隠）・ヂ（接尾語）で「湿地」をいう。オオジカとは「湿地になっているところ」の可能性もある。小字内を小川が流れている。

③オンヂは「隠地」で、「貢租をのがれるための隠地」であったことも考えられないわけではない。

全国地図には、オオジカ地名が5ヶ所の中・大字として記録されている。

【カド・かど】

この小字は、箱川のヤシタ・イエシタ小字集落の北東端に二ヶ所ある。この二ヶ所はかつては繋がっていたと思われる。

カドとは何か。これもはっきりしない地名であるが、語源辞典を参考にしながら二説を挙げる。

①カドはカハ（川）・ド（処）の約で、「川の傍」を意味する。物洗い場でもあったのであろう。二ヶ所の小字が繋がっていたとすれば問題はないが、現在は離れていて、上の小字には流水がないことが気になる。

②カドはカド（門）で、「門のある家」をいうのかもしれない。有力者の家ということになるが、どうであろうか。

全国地図にはカド地名は、26ヶ所の中・大字として挙げられている。

【上ノ垣外・家ノ上】

ウエノカイト・イエノウエ。

これらの小字は、ヤシタ・イエシタ小字集落の北端にある。

ウエノカイトは、「有力者の屋敷の上にある居住地跡」をいい、イエノウエとは

「有力者の屋敷の上にある土地」を意味しているのであろう。

【高越】

タカコシ。

この小字は箱川のヤシタ・イエシタ小字の集落の東端にある。

タカには「限界」の意があり「台地の端」などをいい、コシはコシ（腰）で「中腹部」をいうか（以上は語源辞典）。

従って、タカコシとは「山稜末端部の中腹にあるところ」をいうのであろうか。

全国地図には、タカコシ地名は1ヶ所にだけ記載されている。

【腰前】

コシマエ。

この小字も、箱川のヤシタ・イエシタ小字集落の東端にある。

コシマエとは何か。国語大辞典に寄りながら、解釈を二通り。

①コシ（腰）は「山の麓に近い所」をいう。従って、コシマエとは、「山の麓の土地」をいうのではないだろうか。

②コシはコシ（古祠）で「年を経た古いほこら」をいう。つまり、コシマエとは「古い祠の前の方にある土地」をいうのかもしれない。この小字の東の方の高所には氏神様と思われるお宮がある。小字発生時の祠はありえないと思うが、祭祀は受け継がれてきているのであろう。

全国地図には、コシマエ地名が3ヶ所に記載されている。

【はんのき田】

ハンノキダ。

この小字も箱川のヤシタ・イエシタ小字集落の東部にある。

ハンノキダとは、素直に考えれば、「榛の木が自生している田んぼのあるところ」になる。

榛の木は焼畑で植えられることが多いが、この小字では、集落のなかであるか

ら、ここで焼畑耕作が行われたとは考えられない。そこで上記のような解釈にしたのであるが、どうであろうか。疑問は残る。

ハンノキダ地名は、全国区地図には記載されていない。

【畑尻】

ハタジリ。

箱川のヤシタ・イエシタ小字集落の南部にある。

ハタジリとは何を意味するのか。語源辞典に添って二説を挙げる。

①ハタは「焼畑」か。従って、ハタジリとは「焼畑の末端部」をいう。この小字から南側の山地で焼畑が行われていたのであろうか。

②ハタはハタ（端）で、ジリは形容詞ジルの略で「水気の多い状態」をいう。以上から、ハタジリとは「段丘の末端部で湧水のある土地」をいうか。

全国地図には、ハタジリ地名は3ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【長塚】

ナガツカ。

箱川のヤシタ・イエシタ小字集落の南部にある小さな独立峰である。麓から12mほどの高さになっているので、人工の塚にくらべると、かなり高い。

ナガツカとは何か。字面通りなら、「長い塚」であるが、この小字は水平に長く伸びてはいない。そこで、鉛直方向に高く伸びていることを“長い”といているのではないか、と考えたがどうであろうか。すなわち、ナガツカとは、「高く伸びている小山」であろう。

あるいは、竜神との関わりがあってもいいような山であるが、その痕跡は見当たらない。

全国地図には、ナガツカ地名は、12ヶ所に中・大字として挙げられている。

【前田】

マエダ。

この小字は、箱川のヤシタ・イエシタ小字集落の谷底部に三ヶ所ある。

マエダとは「有力者の屋敷の前の方にある土地」を意味するのであろう。

【ムジナ洞】

ムジナボラ。

この小字は、箱川水晶山系の尾根のすぐ下の西向き傾斜地にあり、オオヒラ小字に囲まれている。

ムジナとは、アナグマの異称であるが、混同してタヌキをいうこともあるようだ。

ムジナボラとは「アナグマかタヌキが住んでいる洞」をいうのであろう。

ムジナボラ地名は、全国地図には無い。

【溝口洞】

ミゾグチホラ。

箱川に、この小字は二ヶ所ある。一つは水晶山系の尾根を含む北西向きの洞と、もう一つはずっと下流側の洞底部にある。

ミゾグチホラとは「細い流水」や「細長い窪地」をいう（語源辞典）。ここ箱川の二ヶ所の共通点をとって、ミゾグチホラとは「細長い窪地のある洞」であろうか。

全国地図には、ミゾホラ地名は載っていないが、ミゾグチ地名は17ヶ所に中・大字として記載されている。

【舟久保】

フナクボ。

この小字は、箱川の下流側にあるミゾグチホラ小字に接している。

フナクボとは「舟の舳先のような形をした窪地のある土地」をいうのであろう。

全国地図にも、フナクボ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられている。

【クルミ・久留見】

クルミ。

クルミ小字は、箱川の下流側にあるミ

ゾグチホラ小字の北隣にあり、「久留見」小字は、クルミ小字に接しており、さらに南西部の独立峰も含む地域に広がっている。これらの小字は標高 634.8m の独立峰とその山麓にある。

クルミとは何か。仮説を二つ。

①クルはクルクルのクルで「なめらかに丸い感じのするさまを表す語」(国語大辞典)で、ミはミ(廻)か。従って、クルミとは「山麓線がなめらかに丸く廻っているところ」をいう。

②クルは動詞クル(剝)から「崩壊地」をいい、ミはミ(廻)か。すなわち、クルミとは「山麓に沿って崩壊地のある所」であろうか。

全国地図には、クルミ地名が、中・大字として7ヶ所が挙げられている。

【平松】

ヒラマツ。

この小字は箱川南部の山地に三ヶ所ある。

ヒラマツとは何か。解釈を二つ。

①ヒラは黄泉平坂のヒラで「傾斜地」をいい、マツはアカマツか。すなわち、ヒラマツとは「傾斜地にアカマツが自生している所」であろうか。ありふれてはいるが。

②マツは動詞マツハル(纏)から「巻いたような地形」をいう(語源辞典)。従って、ヒラマツとは「等高線や道が巻いたように曲がっている傾斜地」か。

一般的な地名で、全国地図にはヒラマツ地名が56ヶ所に中・大字として記載されている。

【アサ畑】

アサバタ。

箱川南部の山地の二ヶ所にある小さな小字であるが、下流側の小字は、現在は最奥部の田んぼになっている。

アサバタとは何か。三説を挙げたい。

①アサバタといえば、「麻を栽培していた畑」ということになる。しかし問題もある。下流側のアサバタは常畑であったと思われるが、上流側のアサバタは焼畑しか考えられない。ここで、焼畑で麻を作ったという記録を目にしたことがないこと。焼畑で麻を栽培したことがないのだと否定しきることもしない。

②アサはアス、アズ(崩崖)の転で、バタ=ハタは動詞ハタク(叩)の語幹から「崩壊地形」をいう(以上は語源辞典)。以上から、アサバタとは「あちこちに崩崖のある所」かもしれない。

③アサバタとは「崩崖のある焼畑耕作地」かもしれない。

全国地図には、アサバタ地名が1ヶ所にあり「朝畑」の字が宛てられている。

【鎌取場】

カマトリバ。

この小字は箱川水晶山系の阿智村境の尾根の北側にある。

カマトリバとは何か。思いつきの中に、カマトリバ←カマトギバと転訛したのではないかというのがある。カマトリバとはカマトギバ(鎌研場)で、泉のある所で鎌を研いだのではないかと想像するのも楽しい。しかし「ギ→リ」の音韻変化がありうることを確認できなければ、単なる思いつきにすぎない。

ではカマトリバとは何を意味するのか。二説を挙げておく。

①カマは「えぐったような崖地」でトル←トロの転で「湿地」をいう(以上は語源辞典)。以上から、カマトリバとは「えぐられたような崖があり、自然湧水もあるところ」か。下流側の隣にはシミズヤマ(清水山)小字がある。

②カマ←カミ(噛)・マ(間)と転じた語といい、トルにはタヲリ(峠)の意がある(以上は語源辞典)。従って、カマトリ

バとは、「尾根に噛み取られたような鞍部がいくつもある土地」と考えることはできないだろうか。

全国地図には、カマトリバ地名はひとつも記載されていない。

【清水山】

シミズヤマ。

この小字は箱川の水晶山山系にあり、カマトリバ小字の下流側になる。

シミズヤマとは、字面の通りで、「自然湧水のある山地」を意味する。

全国地図には、シミズヤマ地名は、中・大字として17ヶ所が挙げられている。

【日影】

ヒカゲ。

この小字は箱川の水晶山系にあり、シミズヤマ小字の西隣に位置する。

ヒカゲとは、「日当たりのいい土地」としておく。全体的に見れば、北向き傾斜地にあり、日当たりは良くないようにも思えるが、側稜の尾根が二本、北向きに並んでいて、谷間はともかく、尾根付近の日当たりはいいはずである。

全国地図にはヒカゲ地名が中・大字として78ヶ所に挙げられており、うち57ヶ所が「日影」、9ヶ所が「日蔭」、6ヶ所に「日陰」の字が宛てられている。

【若林】

ワカバヤシ。

この小字も、箱川の水晶山系の北向き傾斜地にあり、東隣にはヒカゲ小字がある。

ワカバヤシとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ワカは動詞ワカル(分)の語幹で、「分岐した所」をいう。すなわち、ワカバヤシとは「尾根が分岐している林地」をいうのであろうか。

②ワカは形容詞ワカイ(若)の語幹で「みずみずしい」意から「湿地」を示すとい

う。従って、ワカバヤシとは「湿地にある樹木の茂っているところ」か。

【とび沢・飛沢】

トビサワ。

これらの小字は箱川南部の山地にあり、カマトリバ小字やワカバヤシ小字の西隣に位置する。

トビサワとは何を意味するのか。語源辞典に従って三説を挙げる。

①トビは動詞トブ(飛)の連用形が名詞化した語で、「崩壊地形」をいう。すなわち、トビサワとは「崩壊地のある谷」をいう。下流側には大崩壊地がある。

②トビはドブ(泥)と関係して「湿地」をいうこともあるらしい。トビサワとは「湿地の目立つ谷」であろうか。この小字の上流部にも谷川が流れており、自然湧水の豊かであることがわかる。

③トビはタカ科の鳥であるトビ(鳶)で、トビサワとは「鳶が棲息している谷」も考えられる。

全国地図には、トビサワ地名は中・大字として3ヶ所に記載がある。

【大入】

オオイリ。

この小字も箱川南部の阿智村境にある。オオイリとは何か。これも語源辞典に依りながら、解釈を二つ。

①オオ←ヲ(尾根)と転訛したもので、オオイリとは「谷が尾根まで入り込んだところ」を意味するか。

②オオ←アフ(アブ)の転訛した語で「崖」をいう。すなわち、オオイリとは「谷の奥で崩崖のあるところ」をいうか。

全国地図には、オオイリ地名は載っていない。

【とふげ】

トウゲ。

箱川最南部の阿智村境にある。

トウゲは峠で、峠道もある。

【後洞】

ウシロボラ。

この小字も箱川南部の阿智村境に近い山地にある。

ウシロボラとは、「中心部からみて後方の山地にある谷」をいうのであろう。

全国地図には、ウシロバラ地名も記載が無い。

【日カゲ山】

ヒカゲヤマ。

三ヶ所に箱川のヒカゲヤマ小字はある。ウバガフトコロ小字やイエノウエ小字の北東側に谷に市する。

ヒカゲヤマとは、「日当たりのよくない山地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ヒカゲヤマ地名が13ヶ所で、中・大字として挙げられている。

【関本】

セキモト。

この小字は、箱川の下平にある。

セキモトとは何か。はっきりしない地名である。根拠は無いが、語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①セキは関所のことかもしれない。セキモトとは「関所の下の方の土地」をいうのであろうか。村境であるから、関所があっても不思議ではない。しかし、その痕跡があるのかどうか。

②セキはセキ（堰）か。すなわち、セキモトとは「上流側に用水路用の堰のあるところ」か。これもあったかどうか、確認できないでいる。

全国地図には、セキモト地名は、5ヶ所に中・大字として挙げられている。

【道合】

ミチアイ。

この小字は、箱川下平の四つ辻にある。

ミチアイとは「辻」を意味する。この辻で道饗が行われ、最近まで厄除けが行われてきたのではないだろうか。

道饗とは「道の、ある地域の境い目となっているところなどで、疫神や悪霊がはいり込まないように食物を饗すること」（国語大辞典）である。

全国地図には、ミチアイ地名が中・大字として2ヶ所に記載されている。

【八通田】

ヤトオリダ。

この小字は、箱川の下平の中心部にある。現在もほとんどが水田になっている。

ヤトオリダとは何を意味しているのか。これも難しい地名であるが、二通りの解釈を示したい。

①ヤはヤチ（菴）のことで「湿地」をいい、トオリダは「途中に畦のない田んぼ」をいうのであろう。すなわち、ヤトオリダとは「湿地にある長く通った田んぼ」をいう。田の草取りの大変な田んぼである。

②ヤトオリダはヤト（低湿地）・ヲリ（折）・ダ（処）で（以上は語源辞典）、「曲流点のある低湿地」をいうか。近くを箱川が流れており、曲流している。

全国地図にヤトオリダ地名は記載が無い。

【早稲田】

ワセダ。

この小字も、箱川の下平にあり、今でも水田になっている。

ワセダとは「早稲をつくる田」（広辞苑）である。神事にかかわるような田んぼであったかもしれない。

全国地図には、ワセダ地名は、9ヶ所で、中・大字に挙げられている。

【箱川前】

ハコガワマエ。

この小字は、箱川下平の中心部にある。

ハコガワマエとは、どういう意味なのだろうか。

ハコガワマエのハコガワは何か。少な

くとも小字の中にハコガワはない。とすれば、この小字の後側にあるカイト小字に箱川に関わる何かがあったと考えたくなる。それは姓か屋号か分からないが、固有名詞ではあろう。

つまり、ハコガワマエとは「箱川という有力者が住んでいたところの前の方」ということになりそうだ。こう考えるのはどうであろうか。

全国地図には、ハコガワマエ地名は無いが、ハコガワ地名は4ヶ所にあつて、すべてに「箱川」の字が宛てられている。

【三通田】

ミトオリダ。

この小字も箱川下平のワセダ小字とミナミダ小字の間に挟まれている。

ミトオリダとは何か。二説を挙げる。

①ミは接頭語で美称か(語源辞典)。トオリダはヤトオリダ小字と同じ。従って、ミトオリダとは「途中で畦のない通した田んぼのある所」であろうか。

②ミトオリダ←ミトリダと転じた語で、「収穫が一定していない田んぼで見取検見をした所」をいう。見取検見とは「江戸時代、収穫高が一定しないため、納米高を定めにくい土地を、毎年坪刈して納米高を定める」(広辞苑)こと。早か水害で収穫が一定でなかったのであろう。

全国地図には、ミトオリダ地名もミトリダ地名も記載されていない。

【南田】

ミナミダ。

この小字も、箱川下平のミトオリダ小字の南隣にあり、いまでもほとんどが水田になっている。

ミナミダとは、「(下平の中心またはカイト小字から見て)南の方にある田んぼ」をいうのであろう。

全国地図には、ミナミダ地名は15ヶ所に、中・大字として記載がある。

【沼田】

ヌマダ。

この小字は箱川下平南部にあり、箱川の流に接している。

ヌマダは「泥ぶかい田」(広辞苑)で、乾田にはならない田んぼである。

全国地図には、ヌマダ地名は、中・大字として12ヶ所に記載があり、その全てに「沼田」の字が宛てられている。

【保田下】

ボタシタ。

この小字は、箱川下平にあり、カイト小字の下流側、箱川左岸沿岸にある。

ボタとは北設楽郡・下伊那郡の方言で「田畑の畦」をいう(国語大辞典)。ボタシタとは「幅のある畦の下側にある土地」をいう。

ボタシタ地名は、全国地図には無い。

【あ田か】

アダカ。

この小字は箱川下平の南部にあり、箱川左岸沿岸に位置する。現在は住宅地と一部が水田になっている。

アダカとはア(接頭語)・タカ(高)で「高所」を意味する(語源辞典)。ここでのアダカは「ちょっと高い土地」をいう。伊那谷南部の各地にあるが、同様な意味に考えられている。

全国地図には、アダカ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられている。

【向田】

ムカイダ。

この小字は箱川下平南部にあり、現在は水田もある。

ムカイダとは、字面の通りで、「向かい側にある田んぼ(所)」であろう。何の向かい側かといえば、それは下平集落の中心地、すなわちカイト小字があるところとしたい。

全国地図にも、ムカイダ地名は多く、

4 1ヶ所に、中・大字として記載があり、うち3 6ヶ所で「向田」の字が宛てられている。

【桜ヶ洞・桜ヶ洞日影】

サクラガホラ・サクラガホラヒカゲ。

これらの小字は、箱川の下平南部にある。

サクラガホラとは何か。語源辞典に依り二説を挙げる。

①サクラガホラはサ（接頭語）・クラ（刳）・ガ（格助詞）・ホラ（洞）で、「崩崖のある谷」をいう。クラは動詞クル（刳）の連用形が転訛した語。サは語調を整える接頭語。

②サクラはバラ科の桜で、サクラガホラとは、「桜が自生していた谷」をいうかもしれない。

サクラガホラヒカゲ小字は箱川氾濫原に垂直に開口している谷にある。現在はほとんどが田んぼになっている。

サクラガホラヒカゲとは①「崩崖のある日当たりのいい洞」か、あるいは②「桜が自生していて日当たりのいい洞」であろう。

全国地図には、サクラガホラヒカゲ地名はもちろんのこと、サクラガホラ地名も載っていない。

【大ナシ】

オオナシ。

箱川南部の阿智村境にある大きな小字である。

オオナシとは何を意味するのか。

ナシ←ナラシ（平）と転訛したもので、「平坦地」、「緩傾斜地」をいう（語源辞典）。すなわち、オオナシとは「広い緩傾斜地のあるところ」を意味する。現在、そこには住宅地もあり、田んぼや畑もある。

全国地図には、オオナシ地名は1ヶ所に中・大字として記載されており、「大梨」

の字が宛てられている。

【新田】

シンデン。

箱川の下平南部にあり、中を箱川が流れている小さな小字である。

シンデンとは「新開の土地」（国語大辞典）で、田畑だけでなく、屋敷地も含めた新開地をいうようだ。江戸時代に開いた土地であるのは、やはり箱川の治水の難しさがあって開発が遅れたのであろう。

全国地図には、シンデン地名は非常に多く、中・大字として5 7 2ヶ所に記載があり、うち5 6 1ヶ所に「新田」の字が宛てられている。

【とびのす】

トビノス。

この小字は箱川下平南部の阿智村境にある。尾根の峰の北側に延びた側稜とその谷になっている。

トビノスとは、「タカ科の鳶が棲息していて巣のあるところ」を指すのであろうか。

全国地図には、トビノス地名は、4ヶ所が中・大字として挙げられている。

【川バタ】

カワバタ。

この小字は箱川とその支流に囲まれた川原にある。現在は畑と田んぼになっている。

カワバタはカハ（川）・ハタ（端）で、文字通り、「川の傍の土地」を意味するものと思われる。

全国地図には、カワバタ地名は、6 9ヶ所が中・大字として挙げられている。ありふれた地名であろうか。

【大久留見・大ぐるみ】

オオグルミ。

これらの小字は箱川下平南部の箱川上流の谷にあり、広い面積をもっている。

オオグルミとは何か。語源辞典に依り

ながら二説を挙げる。

①クルミは動詞クルム（包）の連用形が名詞化した語で「ぐるりを囲まれた地形」をいう。従って、オオグルミとは「箱川やその支流の谷に大きく取り巻かれた高所」としたい。「大ぐるみ」小字には阿智村境の尾根の峰が谷に大きく取り巻かれており、「大久留見」小字も側稜の先端部を支流が巻くように流れている。

②クルミはクル（転）・ミ（水）で「川などの曲流点」を示す。以上から、オオグルミとは「川が大きく曲がっている所」を意味するのかもしれない。ここでは箱川とその支流が大きくうねっている。

全国地図には、なぜかオオグルミ地名は記載が無い。

【下山】

シモヤマ。

この小字は箱川下平の最南部にあり、阿智村境の山地になっている。

シモヤマとは何を意味するのか。語源辞典を参照にして、解釈を二つ。

①シモとは「中心から離れた部分」をいう。すなわち、シモヤマとは「箱川または箱川下平の中心部から離れた山地」をいうのであろうか。

②シモは「箱川の下流の方」を意味するのかもしれない。とすれば、シモヤマとは「(箱川の) 下流の方にあるある山地」をいうのかもしれない。

全国地図には、シモヤマ地名は多く、68ヶ所に中・大字として挙げられており、うち66ヶ所で「下山」の字が宛てられている。

【中くび】

ナカクビ。

この小字は、箱川下平南部の阿智村境の側稜の峰にある。

ナカクビとは何か。

ナカはナカ(中)で、「鞍部と鞍部の間」

をいうか。クビはクビ(首)で、峰を人の首に見立てたものであろう。ナカクビとは「人の首のように高く突き出た峰のある所」をいう。

全国地図には、ナカクビ地名は1ヶ所に中・大字として挙げられており、「中首」の字が宛てられている。

【カイ附】

カイツケ。

この小字は箱川下平の阿智村境にある。カイツケとは何か。語源辞典に依りながら解釈を二つ。

①カイはカヒ(峽)で「山と山との間の谷間」をいう。ツケはツク(付)の連用形が名詞化した語。以上から、カイツケとは「谷間に近い土地」をいうか。峰部分と峽の部分が少し離れているのが気になるが、同じ小字内にあるので、成り立つと考えたがどうであろうか。

②カイはカキ(欠)の転で「崩崖」をいい、ツケはツカの転で「高所」のこと(以上は語源辞典)。すなわち、カイツケとは「崩崖もあり、高い峰のある土地」は考えられないであろうか。

全国地図には、カイツケ地名は1ヶ所にあり、「貝付」の字を宛てている。

【カシ山】

カシヤマ。

この小字はカイツケ小字のある尾根の東側傾斜地にある。

カシヤマとは何か。二説を挙げる。

①カシは動詞カシグ(傾)の語幹で「傾斜地」をいう(語源辞典)。すなわち、カシヤマとは「傾斜地になっている山地」であろうか。

②カシヤマは字面の通りであれば、「ブナ科の常緑樹である檜の自生している山」になる。材は堅くて弾性があり、器具材・建築材・炭材に用いられるというが、地名になるほど大切な材とも思えないがど

うであろうか。

全国地図には、カシヤマ地名は21ヶ所に中・大字として挙げられている。

【下畑田】

シモハタダ。

この小字は、箱川下平の南部にある。小さな小字で、現在は主に田んぼになっている。

シモハタダとは「(箱川の)下流の方にある耕作地」をいうのであろう。

全国地図には、シモハタダ地名は、2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【向畑】

ムカイバタ。

この小字は箱川下平南部にあり、箱川右岸の傾斜地とその麓にある。

ムカイバタとは、「(下平中心部から見て)向かい側にある畑」を意味するのであろう。

全国地図にはムカイバタ地名は、中・大字として5ヶ所に挙げられており、その全てに「向畑」の字が宛てられている。

【五百目】

ゴヒャクメ。

この小字は箱川下平の阿智村境の尾根から箱川の氾濫原に達する細長い小字になっている。

よく分からない小字である。竜東地区のように面積を表しているのであればお手上げの状態になる。重量であれば、500目は2kg近いので、収穫量ではなくて、種子の量を表していると思われるがどうであろうか。

全国地図には、ゴヒャクメ地名が1ヶ所に、中・大字として挙げられていて、「五百目」の字が宛てられている。これを理解するのも難しい。

【八王地】

ハチオウジ。

この小字は竹佐の阿智村境にあつて、

シンリン・オオハタなどの小字がある丘陵にある。

ハチオウジは、近江の日吉山王や祇園牛頭天王、あるいは稲荷神に関わるどれかの八王子であるといわれている。竹佐の八王子はどれなのかははっきりしない。

【大洞】

オオボラ。

箱川下平の北部にあり阿智村境に位置する。2ヶ所に、この小字はある。小さなクロイワ小字を挟んでいるが、かつては繋がっていたものと思われる。県道田中・乱橋線に沿った大きな面積をもっている。

オオボラとは、字面の通りで「大きな谷になっている所」を意味する。

全国地図には、オオボラ地名は、20ヶ所に中・大字として挙げられている。ボラ地名の割に多いのは、瑞祥地名であること、簡単な地名であるためであろうか。

【マセグチ】

マセグチ。

この小字は箱川下平の北部にあり、箱川の支流が流れている。

マセグチとは、マ(真)・セ(瀬)で、マは「強意」の接頭語、セは「瀬になった所」をいい、グチ(口)は動詞クチル(朽)の連用形が名詞化した語で「湿地」をいう(以上は語源辞典)。以上から、マセグチとは、「流水があつて周辺が湿地になっているところ」であろうか。

マセグチ地名は、全国地図には、6ヶ所が中・大字として採り挙げられている。

【箱川原】

ハコガワハラかハコガワラか。

この小字は箱川の阿智村境と竹佐境にある。広い面積を有し緩傾斜地になっている。

ハコガワとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①ハコガワハラは「箱形に見立てた広い

台地と台地を削って四方に流れる谷川のある土地」をいうのであろうか。

②ハコはハケの転じた語で、「崖地」をいう（語源辞典）。すなわち、ハコガワハラとは「何本も谷川に沿った崖地のある平原」を意味するか。

【梅ヶ洞】

ウメガホラ。

この小字は、「箱川原」小字の近くに、二ヶ所ある。

ウメガホラとは何をいうのであろうか。二説を挙げておく。

①ウメはウメ（埋）で「砂などが堆積した地」をいう（語源辞典）。従って、ウメガホラとは「崩壊して埋まったところのある小さな谷」をいうのであろう。

②ウメガホラとは「梅が栽培されている小さな谷」も全くないとはいえないかもしれない。古くに日本に渡来してきた梅である。しかもおめでたい名称でもあるので、可能性はあるか。

全国地図には、ウメガホラ地名は記載が無い。

【横吹】

ヨコフキ。

箱川の県道田中・乱橋線と箱川の流に挟まれた側稜の東向きの傾斜地にある。

ヨコフキとは何か。

この側稜は南北方向に延びており、この側稜に向って吹く風は、南～南東の巽の風である。この小字の横から吹きつけてくるのでヨコフキと呼んだのではないだろうか。

全国地図には、ヨコフキ地名は載っていない。

【六蔵山】

ロクゾウヤマ。

この小字は、箱川のハコガワハラ小字やオオボラ小字に混じって、二ヶ所にある。

ロクゾウとは固有名詞であろう。

ロクゾウヤマとは「六蔵所有の山地」であろうか。

従って、全国地図には、ロクゾウヤマ地名は無い。

【大京】

ダイキョウ。

この小字は、県道田中・乱橋線と箱川が交叉する点にある。

ダイキョウとは何か。これがよく分からない。仏教関係の地名と思われるが、国語大辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ダイキョウはダイキョウ（大教）で「仏教」をいう。ダイキョウとは「仏教に関係する行事などが行われた場所」であろうか。御堂寺からは500mほど離れている。

②ダイキョウはダイキョウ（大経）で「その宗派で依用する大部の経典」を意味する。すなわち、ダイキョウとは「経典を保管していたところ」かもしれない。

全国地図には、ダイキョウ地名は、1ヶ所、中・大字として記載があり、「大恭」の字が宛てられている。

【家ノ上・家ノ裏】

イエノウエ・イエノウラ。

これらの小字は、箱川のヨコフキ小字に囲まれている。

これらの小字のイエは、このヨコフキ小字にあった屋敷と思われる。これらの小字の間にあるヨコフキ小字には今でも居住地になっている。

【北垣外】

キタガイト。

この小字は、箱川のダイキョウ小字の北西隣にある。

キタガイトとは「北の方にある屋敷跡」であろう。南の方にあるカイト小字からみて、キタと表現したのであろうか。

【井堀】

イオリあるいはイホリ。

これらの小字は箱川とその支流の流域にある。

イオ(ホ)リとは何か。二説を挙げる。

①イオリはイオリ(庵)で、「簡素な庵室」をいう。イオリとは「簡素な庵室があったところ」をいうのであろうか。この付近には、仏教関係の小字があちこちにある。

②イホリはイホリ(井掘)で、「川の浸食でえぐられたような所がある土地」をいうのかもしれない。

全国地図には、イホリ地名が1ヶ所に、イオリ地名は4ヶ所に中・大字として挙げられている。

【へり田】

へりタ。

この小字は箱川氾濫原の右岸にある。

へりタとは「(箱川の)川の縁にある田んぼ」であろう。

全国地図には、へりタ地名もへりダ地名も載っていない。

【サルコ平・サルコヒラ・猿子平・さる子平】

サルコヒラ。

これらの小字は、箱川氾濫原とその西側の側稜にある。

サルコヒラとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①サルコヒラはサル(崖)・コ(処)・ヒラ(平)。サルは動詞サル(曝)に関連してサラ・サリ・サレと同じで「崖地」をいう。コは接尾語、ヒラは黄泉平坂のヒラで「傾斜地」をいう。以上から、サルコヒラとは「崖地にある傾斜地」を意味するか。

②サルコ(猿子)は「猿楽」のことで、ヒラは「傾斜地」をいう。すなわち、サルコヒラとは、「猿楽の芸能集団がいた、あるいは宿泊していた場所のある土地」

かもしれない。

全国地図にサルコヒラ地名は記載が無い。

【正月祭】

ショウガツマツリ。

この小字は、箱川氾濫原の右岸にある。

ショウガツマツリとは何か。これも分かりにくい小字である。

「正月祭」とは、「神社の前庭で行われる稲作の予祝儀礼」だという(民俗大辞典)。しかし、九州南部に多い神事だというのが気にかかる。しかし方言周圏論のように、神事も広がっていったとすれば、ここ箱川で予祝の神事が行われていたとしても不思議ではない。

もう一つ、「正月祭」がある。奈良県南部では煤取日のことをいう。12月13日である。しかし、これは地名にはなりにくいのではないかと判断して、採らないことにした。

全国地図にはショウガツマツリ地名は記載が無い。

【だい】

ダイ。

箱川氾濫原とひとつ上の段丘からなる小字である。

ダイとは「段丘」を意味するのであろうか。

全国地図にはダイ地名が149ヶ所にも中・大字として挙げられている。うち131ヶ所に「台」の字が宛てられている。

【どふこう田】

ドウコウダ。

この小字は箱川氾濫原の左岸にあり、現在も水田になっている。

ドウコウダとは何を意味するのか。三説を挙げておきたい。

①ドウコウはドウコウ(耨耕)で「主に鍬を用いた耕作」だという(広辞苑)。犁耕に対応した耕作。よってドウコウダと

は「鍬中心で耕作している田んぼ」となるが、具体的にはよくわからない。

②ドウコウはドウコウ（堂講）で、「ホトケをまつる堂を中心とする宮座組織で正月行事の修正会・おこないなどに関係することが多い」という（民俗大辞典）。これも奈良県南部・和歌山県が中心。以上から、ドウクオダとは「収穫物を堂講を支える費用に宛てる田んぼ」をいうのであろうか。

③ドウコウ←トウコウ（踏耕）と濁音化したものか。踏耕とは「家畜あるいはまれに人間が足で踏むことによって、湛水した田の攪拌耕や床締めによる漏水防止を行う農耕の技術」であるという（民俗大辞典）。以上から、ドウコウダとは「踏耕を行っている田んぼのある所」をいう。

全国地図には、ドウコウダ地名はひとつも無い。

【二反田】

ニタンダ。

この小字は、箱川氾濫原とひとつ上の段丘からなる。現在は居住地と畑になっている。

ニタンダとは「面積が二反歩ある土地」をいうのであろうか。小字発生当時は、田んぼだったかもしれない。

全国地図には、ニタンダ地名は、16ヶ所に中・大字として挙げられている。

【橋詰】

ハシヅメ。

この小字は、箱川氾濫原で左岸にある。

ハシヅメとは何か。語源辞典を見ながら二説を挙げる。

①文字通りであれば、ハシヅメとは「橋のたもと」だから、ここに橋が架けられていたことになる。だが対岸が急傾斜地になっているので気になる。

②ハシヅメはハシ（端）・ヅメ（詰）で「端の行き止まり」をいう。すなわち、ハシ

ヅメとは、対岸が急傾斜地で「西端が行き止まりになっているところ」を意味するのかもしれない。

全国地図には、ハシヅメ地名が、中・大字として33ヶ所にも記録されている。

【中はり】

ナカハリ。

久米の中村境にある小字で、側稜の間の谷になっている。現在は住宅地や水田・畑になっている。

ナカハリとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ナカ（中）は「側稜と側稜の間」をいい、ハリはハリ（張）で「張り出した所」のこと。以上から「張り出した側稜の間の土地」をいうか。語順が逆のような感じもするが、あり得る解釈か。

②ハリはハリ（墾）で「開墾地」をいう。すなわち、ナカハリとは「側稜と側稜の間の開墾地」であろうか。

全国地図には、ナカハリ地名は載っていない。

【三王田】

サンノウダ。

久米の中村境にあつて、ナカハリ小字の南西隣にある。現在は水田と果樹園が多い。

サンノウはサンノウ（山王）であろう。山王信仰は大津市の日吉社（日枝社）を中心に展開された。無仏時代の愚かな衆生を解脱に導き、また病悩を癒やすとされ、各地に勧請されていった。しかし山王権現といわれるように神仏習合の色濃く、明治維新で消滅することになったのであろう。久米の小字に残っただけでも幸いとすべきか。

サンノウダとは「山王権現を祀っていた場所」であろうか。

全国地図には、サンノウダ地名は記載されていない。

【馬場之平】

ババノタイラ。

この小字はサンノウダ小字の南隣にあり、段丘上の平坦地になっている。現在は信菱電機になっている。

ババノタイラとは何か。三説を挙げる。

①ババ（馬場）といえ、馬の調練所であろう。久米ヶ城とは少し離れているが、ここまで馬に乗ってくることは、これも調練としてありうる。以上から、ババノタイラとは「馬の調練所になっている平坦地」であろう。

②ババには「山上の平坦地」の意もある（語源辞典）。すなわち、ババノタイラとは、「段丘上の平坦地」をいうか。

③ババはハマ・ハバ・ママ・マブと同様に「崩壊地形」をいう（語源辞典）。ババノタイラとは、「崩壊地のある山上の平坦地」をいうのかもしれない。

全国地図には、ババノタイラ地名は記録されていない。

【はば・はば道上】

ハバ・ハバミチウエ。

これらの小字も、久米の中村境にある。

ハバとは、ここでは「緩傾斜地」をいうのであろうか。長野県の方言だという（語源辞典）。

ハバミチウエとは、「道路より高いところにある緩傾斜地」であろうか。

全国地図にはハバ地名が、252ヶ所にも中・大字として挙げられているが、うち247ヶ所に「馬場」の字が宛てられているのが意外である。

【山越】

ヤマコシ。

久米の中村境に近い所にある小さな小字である。

ヤマコシとは、「山道の峠を越えた所」を意味するのであろう。

全国地図には、ヤマコシ地名は9ヶ所

にあつて、中・大字として記録されている。

【妙げん】

ミョウゲン。

久米の中村境にある小字である。

ミョウゲン←ミョウケン（妙見）と濁音化したものであろう。

ミョウゲンとは「妙見様をお祀りしてあつた所」であろうか。

妙見信仰は北極星・北斗七星を神格化した妙見菩薩に対する信仰で、七星のなかの破軍星は戦勝祈願と結びつき武士の信仰を集め、一方で馬の牧に関係して広がったといわれている。

この小字にも久米ヶ城との関わりが見られる。

全国地図には、ミョウケン地名は中・大字として32ヶ所に記載がある。うち17ヶ所は「妙見」の字を宛てている。

【原田】

ハラダ。

この小字は、久米の中村境にある。現在は果樹園が主で田んぼもある。

ハラダとは「平坦地に近い緩傾斜地（あるいは田）」を意味するのであろう。

ハラダ地名は、全国地図には中・大字として74ヶ所も挙げられており、そのうち73ヶ所で「原田」の字が宛てられている。

【日や希田・日やけ田・日ヤケ田】

ヒヤケダ。

久米のあちこちにある小字である。

ヒヤケダとは、「水の涸れ易い、旱魃に弱い耕作地」をいうのであろう。

全国地図には、ヒヤケダ地名は1ヶ所だけ中・大字として挙げられている。意外に少ない。

【家ノ前・家ノ下・家ノ裏・家下】

イエノマエ・イエノシタ・イエノウラ・イエシタ。

これらの小字は、久米にも多い。イエ

は「有力者の屋敷」をいい、そのイエのどちら側にあるかを示す小字である。イエ小字群である。

【峠】

トウゲ。

久米の中村境と西平の側稜末端部にある。全国地図にもトウゲ地名は88ヶ所が、中・大字となっており、少なくない数になっている。

トウゲとは「山の坂道を登りつめた所。山の上りから下りにかかる境」(広辞苑)をいう。峠付近をトウゲということもあるかもしれない。

【道上・道下】

ミチウエ・ミチシタ。

これらの小字も傾斜地のある久米には多い。

いずれも字面の通りで、ミチウエは「道路の上の土地」になるし、ミチシタは「道路の下の土地」をいう。

全国地図には、ミチウエ地名は13ヶ所、ミチシタ地名は21ヶ所に中・大字として記載されている。

【ハウシメン】

この小字は久米の中村境にあり、クボタ小字やヨコマクラ小字に接している。

ハウシメンとは何をいうのか。恐らくは、ハウシメン(法師免)であろうと思われるがどうであろうか。すなわち、「僧侶に給与された免田」をいうか。貢租を免除された田んぼであろうか。

全国地図には、ハウシメン地名は記載が無い。

【久保田】

クボタ。

この小字も久米には多い。

クボタとは「窪地になっている土地(田んぼ)」を意味する。

【堂ノ下・堂ノ後】

ドウノシタ・ドウノウシロ。

これらの小字は、久米のミョウケン小字と光明寺の近くにある。

ミョウケン小字に近い「堂ノ下」小字のドウは現在は無いが、かつては存在していたと思われる日枝社のことをいい、光明寺近くのドウは光明寺を指していると思われる。

【今生洞】

コンジョウボラ。

この小字は、久米のミョウケン小字に隣接している。

コンジョウボラとは何をいうのか。難しい地名であるが、三説を挙げる。

①コンジョウ←ゴンジョウ(厳浄)と清音化した語で、「おごそかで汚れのないこと」をいう(国語大辞典)。従って、コンジョウボラとは「厳かで汚れの無い洞」をいうか。この小字には日枝神社が深く関わっているように思われる。

②コンジョウ←ゴリショウ(御利生)と撥音便化した語か。すなわち、コンジョウボラとは「神から恩恵を受けることのできる洞」か。

③コン←コウ(荒)の転で、ジョウは「～になった所」をいう(語源辞典)。以上から、コンジョウボラとは「荒れ地になった洞」をいうか。現在でも崩崖があり、あちこちに崩れ地があったことも考えられる。

全国地図にはコンジョウボラ地名は記載が無い。

【大稲葉・稲葉尻・稲葉くろ】

オオイナバ・イナバジリ・イナバクロ。

これらの小字は久米北平の山地にあり、東～南東向きの傾斜地にある。

イナバは「稲干場」のこと。稲はぎを使用する前には、南向きの傾斜地になっている草原に稲を干していた。

オオイナバは「広い稲干場」をいうか。

イナバジリとは「稲干場の末端部」を

いう。

イナバクロは「稲干場の縁の土地」であろう。

伊那谷南部には多い小字名であるが、全国地図では、例えばイナバジリ地名は記載されていない。

【なき尻・なぎ尻・なきノ前・なきの前】

ナギジリ・ナギノマエ。

これらの小字は、久米の各地にある。

ナギは動詞ナグ（薙）の連用形が名詞化した語で「山などのくずれた所。崖」をいう、西多摩・山梨・下伊那・静岡榛原・北設楽の方言だという（国語大辞典）。

ナギジリとは「崩壊地の末端部のあるところ」をいう。崩壊した土砂がまだその小字内にあることをいう。

ナギノマエとは「崩壊地の前方の土地」をいう。崩壊した土砂はこの小字にはほとんど届いていないことを意味しているか。

全国地図には、ナギジリ地名もナギノマエ地名も載っていない。

【三ツ田】

ミツダ。

久米北平の森下沢川左岸にある小字。

ミツダとは何か。二説を挙げる。

①ミツダとは字面の通りで「三枚の田んぼになっている所」をいうのであろうか。田んぼ一枚が大きすぎるような気がするが、中畦を作れば対応はできるのではないだろうか。

②ミツ←ミズ（水）と清音化した語で（語源辞典）、ミツダとは「湿地にある田んぼ」をいうか。語が重複しすぎか。

全国地図には、ミツダ地名は、1ヶ所の中・大字として挙げられている。

【八丁田】

ハッチョウダ。

この小字も久米北平の森下沢川の左岸にある。

ハッチョウダとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①ハッチョウダとは「小字の長い辺が8丁（872m）あるか、面積が8町歩（8万㎡）ある土地」となるが、現在の土地はほぼ1割ぐらいしかない。しかし、小字発生時にはそれくらいの大きさであったと想定できないこともないと考えたがどうであろうか。

②ハッチョウ←バッチョウ←バンジョウ（番匠）と転訛したという解釈もある（語源辞典）。すなわち、ハッチョウダとは「大工職に給与された免田」をいう。免田とは「荘園制のもとで荘官・地頭や手工業職人などに与えられた年貢課役免除の田地」（広辞苑）をいう。

全国地図には、ハッチョウダ地名は2ヶ所の中・大字として挙げられており、いずれも「八丁田」の字が宛てられている。

【横枕】

ヨコマクラ。

この小字は久米の谷底部にあり、クボタ小字とコンジョウボラ小字に挟まれている。

ヨコマクラとは何をいうのか。二説を挙げる。

①ヨコマクラとは「横にした枕、またそのような地形」をいう（国語大辞典）。このヨコマクラもそうした地形に見えるが、どこにでもありそうな地形で、この解釈には躊躇する面もある。

②ヨコマクラとは「地形の都合上、地割りの幹線に並行した区分できなかった部分」をいう（語源辞典）。この解釈の方が納得できそうな気がする。その場合、地割の幹線は東西方向になるだろうか。

この小字も伊那谷南部では、各地区にありそうだが、全国地図にも、ヨコマクラ地名が、18ヶ所中・大字として記録されており、うち17ヶ所は「横枕」の字

が宛てられている。

【オノ神】

サイノカミ。

久米のサイノカミ小字は森下沢川の左右両岸に三ヶ所ある。

サイノカミとは「邪霊の侵入を防ぐ神。行路の安全を守る神。村境などに置かれ、近世にはその形から良縁・出産・夫婦円満の神ともなった」（広辞苑）という。

村境とは中村境ということになるが、少し離れている感じがなくてもない。小字発生当時、森下沢川が集落の境をなしていたことはなかってであろうか、とも思う。

全国地図には、サイノカミ地名は29ヶ所にあり、中・大字として記載されている。

【流洞】

ナガレボラ。

この小字は、久米北平のオヤマヅカ小字の南側の洞にある。

ナガレボラとは何か。二説を挙げる。

①ナガレとは「なだらかな傾斜の長く続く地形」（国語大辞典）という。青森の方言とあるのが、やや気になるか。すなわち、ナガレボラとは「なだらかな傾斜の続く谷」を意味するのであろうか。

②ナガレルには「(物などが)水などに運ばれていく」という意味がある（国語大辞典）。ナガレは動詞ナガルの連用形が名詞化した語。以上から、ナガレボラとは「土石流が流れたことのある谷」であらうか。

全国地図には、ナガレボラ地名は記載が無い。

【お山塚】

オヤマヅカ。

久米北平の北部山地に、この小字はある。

オヤマヅカとは、「神聖な塚のある山地」

をいうのであろうか。

村誌には「御山塚は通称雨乞連嶺の松林中にある塚で・・・封土を現存し、頂上に若宮・富士・天伯大神を祀る祠がある。昔、行者が殺されてここに埋めた所、祟ったので村人は若宮様として祀ったという伝承がある」。一種の山伏塚伝説であらうか。

全国地図には、オヤマヅカ地名は記載されていない。

【北谷】

キタダニ。

この小字は久米北平に三ヶ所ある。

キタダニとは何をいうのだろうか。二説を挙げる。

①キタダニとは「北の方にある谷」であるが、基準は北平集落のことか、あるいは光明寺か、はっきりしない。

②キタはキダハシ（階）をいう。とすれば、キタダニとは「階段状の傾斜地になっている谷」で、この解釈はすっきりしている。

全国地図には、キタダニ地名は中・大字として、39ヶ所に記録されており、全てに「北田」の字が宛てられている。

【廻り田】

マワリダ。

この小字は久米北平の森下沢川右岸にある。現在は、水田と畑地が半々ぐらいになっている。

マワリダとは、マワリ（廻）・ダ（処）で、「河川、山裾などの屈曲した所」をいう（語源辞典）。すなわち、マワリダとは「川の屈曲している場所のある所」を意味するのであろう。ここでは森下沢川に支流が合流しており、双方ともに屈曲している。

全国地図には、マワリダ地名は1ヶ所に、中・大字として挙げられており、「廻り田」の字が宛てられている。

【上日陰・日陰・下日陰】

カミヒカゲ・ヒカゲ・シモヒカゲ。

これらの小字は、久米北平の森下沢川の左右兩岸にある。

ヒカゲが「日当たりのいい所」なのか「日当たりの悪い所」なのか微妙なところがある。

ヒカゲ小字は森下沢川の氾濫原にあり、南側には山稜があるが、「日当たりのいい場所」ではないだろうか。

カミヒカゲ小字は二ヶ所にある。一つは森下沢川右岸の北向き斜面にあるので「日当たりの良くない場所」であるが、もう一つのカミヒカゲ小字は左岸の南向き緩傾斜地にあるので、「日当たりのいい所」となる。同じカミヒカゲ小字でも日当たりについては正反対の土地になっている。

シモヒカゲ小字は左岸の氾濫原になっているので、「日当たりのいい所」になっているものと思われる。

全国地図には、ヒカゲ地名は78ヶ所にも、中・大字として挙げられている。

【沼尻】

ヌマジリ。

久米北平の森下沢川氾濫原にある小字で、現在はほとんどが荒れ地になっている。

ジリは副詞ジリジリの「ゆっくり。少しずつ」という意から「緩傾斜地」をいうか（語源辞典）。すなわち、ヌマジリとは、「緩傾斜地で湿地になっている所」をいう。

全国地図には、ヌマジリ地名は16ヶ所に中・大字として挙げられており、全てに「沼尻」の字が宛てられている。

【細田】

ホソダ。

この小字は、久米北平の森下沢川左岸に二ヶ所ある。いずれも緩傾斜地になっ

ていて、現在は一部に水田がある。

ホソダはホソ（細）・ダ（処）で、「細長い所」をいう。すなわち、等高線を辿ったときに、緩傾斜地であるために細長い場所になっていることをいうのではないだろうか。

全国地図には、ホソダ地名は35ヶ所にあり、いずれも中・大字として記載され、「細田」の字が宛てられている。

【藪腰・藪ノ越・藪下・藪越・藪ノ下】

ヤブコシ・ヤブノコシ・ヤブシタ。

久米のヤブ小字群は、主に光明寺付近に多い。

全国地図には、ヤブノコシ地名もヤブコシ地名もヤブシタ地名も載っていないのに、伊那谷南部にヤブ関係小字が多いというのは、伊那谷の特徴かもしれない。

ヤブというのは、単に「低木・草・竹などが手入れもされず乱雑に生い茂っている所」（国語大辞典）ではないのではないか。この地域ではあまり聞き慣れない神名であるが、藪神となんらかの関連があるのではないだろうか。

藪神とは、民俗大辞典によれば、社殿などで祭祀される神に対して、神格が低い雑神という意味も込めて、荒神・地神・御子神などを藪神と称する。祭場を毀損するなど不敬行為をはたらくと、疾病など激しい祟りを発現する祟り神とされる場合が多い。また藪神には地主神的な性格が共通して認められるという。

藪神の祭場がヤブであろうと思われる。

ヤブコシ・ヤブノコシとは「ヤブの近くの場所」をいい、ヤブシタは「ヤブの下側の場所」をいうのであろう。

【堂久保】

ドウクボ。

この小字は久米北平の光明寺の近くに三ヶ所ある。

ドウクボとは、「御堂の傍の平坦地、あ

るいはちょっとした窪地」をいう。

全国地図には、ドウクボ地名は3ヶ所
に中・大字として挙げられている。

【大入】

オオイリ。

久米北平の北西部の境界地にある。南
向きの傾斜地になっている。

オオイリとは「広大な奥地」を意味す
るか。

全国地図には、オオイリ地名は記載が
無い。

【稲葉】

イナバ。

久米の八幡宮北の谷底部にある。

イナバは繰り返し出てきているが、「稲
干場」をいう。

【森下】

モリシタ。

この小字は久米の中村境にあり、シャ
グチダイラ小字の下流側になる。

モリシタとは、「お宮のある樹木の茂っ
た場所の下側の土地」をいう。森は神の
降下してくるところである。

全国地図には、モリシタ地名は35ヶ
所に中・大字として記録されている。

【寺下】

テラシタ。

久米にはテラシタ小字が複数あるが、
現在の所は一ヶ所、久米寺の近くにある
小字だけ、小字図に載せることができた。

テラシタとは文字通りで「お寺の下
方の土地」をいう。

【坊ヶ入】

ボウガイリ。

この小字は久米の光明寺の近くに二ヶ
所ある。

ボウガイリとは「僧坊のある山の奥地」
をいうのであろうか。

全国地図には、ボウガイリ地名は記録
が無い。

【西ノ入】

ニシノイリ。

この小字は、久米の竹佐境の山地に二
ヶ所ある。

ニシノイリとは、字面の通りで、「(久
米の)西の方に入った山の奥地」をいう。

全国地図には、ニシノイリ地名は、1
2ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【林尻】

ハヤシジリ。

久米の光明寺に近くにある小さな小字
である。

ハヤシジリといえば、「樹木の生えてい
る林地の末端部」であるが、小さな小字
であるため、これ以上のことは分からな
い。

全国地図には、ハヤシジリ地名は1ヶ
所にだけ記載されている。

【京ヶ山】

キョウガヤマ。

この小字は、久米のボウガイリ小字を
挟んで両側にある。

キョウガヤマとは「経典が埋められて
いた山」をいうのであろう。

全国地図には、キョウガヤマ地名は載
っていない。

【鷺尾洞】

ワシオボラ。

この小字はキョウガヤマ小字の北東隣
にある谷となっている。

ワシオボラとは何を意味するのか。二
説を挙げる。

①ワシオボラとは、谷の形を鷺の尾に見
立てたものであろうか。

②ワシは動詞ワシル（走）の語幹で「横
に長く延びた地形」をいい、オはヲ（尾）
で「山裾の末端部」をいう（以上は語源
辞典）。すなわち、ワシオボラとは「山裾
の末端部である谷が長く延びていると
ころ」を意味しているものと思われる。

全国地図には、ワシオボラ地名は記載が無い。

【中尾】

ナカオ。

この小字は森下沢川が開析した谷の南側の側稜にある。久米北部公会堂がある。

ナカオとはナカ(中)・ヲ(尾)で、「谷と谷の間にある側稜」を意味するのであろう。森下沢川と釜屋川が開析した谷の間にある山稜が、この小字になっている。

全国地図には、ナカオ地名は、中・大字として148ヶ所に挙げられている。

【五百面】

ゴヒャクメン。

この小字は森下沢川が屈曲する右岸にある。

ゴヒャクメンとは何か。よく分からない小字であるが、とりあえず二説を挙げておく。

①ゴヒャクメン←ゴヒャクメと転じたのであろうか。「五百目」であれば、「播種量が500匁である土地」であらうか。現在は住宅地になっているが。

②ゴヒャクとは「五百羅漢の略」であるという(国語大辞典)。ゴヒャクメンとはゴヒャクメン(五百免)で、「五百羅漢造立のために免租になっていた耕作地」であらうか。五百羅漢像は禅宗寺院に多いが、江戸中期以降は羅漢像のなかに親兄弟や夫など身近な死者の面影を探し求める風習が生まれ、五百羅漢像の造立が流行したという(仏教民俗辞典)。

全国地図には、ゴヒャクメン地名は記載されていない。

【宮明免】

キュウミョウメンか。

この小字は森下沢川右岸にあり、ゴヒャクメン小字の下流側になる。現在は住宅地になっている。

呼び方もはっきりしない小字で全くわ

からないが、あえて一つだけ仮説を挙げておきたい。

キュウミョウ(給名)という語がある。

「国衙領や荘園で年貢を納める義務はあるが、それ以外の雑公事の類いの負担は免除された名田。郷司や下司・公文など現地の管理者に与えられた」(広辞苑)という。

以上から、キュウミョウメンとは「給明で課役が免除されている田地」をいうのであろうか。

全国地図には、キュウミョウメン地名もキュウミョウ地名も記載が無い。

【石塚】

イシヅカ。

久米にはイシヅカ小字が三ヶ所にある。

いずれも「開墾または耕作中に出てきた大小の石を寄せ集め、積まれたのが小高くなったもの」(村誌)であるという。

【井口】

イグチ。

久米の森下沢川右岸にある。現在は大部分が荒地になっているが、水田や畑もある。

イグチとは「川から田地へ引く用水の取り入れ口」をいうのであろう。

全国地図には、イグチ地名は、中・大字として12ヶ所に記載がある。

【野添】

ノゾエ。

この小字は中尾段丘の北麓にある。森下沢川の氾濫原になる。

ノ(野)は比較的平らな地形で小高いため水がかりが悪く、荒地や雑木林になっているところをいうのであろう。

ノゾエとは「平地の少し高くなったところ」を意味するものと思われる。

全国地図には、ノゾエ地名は中・大字として31ヶ所に挙げられており、すべてに「野添」の字が宛てられている。

【角田】

スミダ

この小字は久米の森下沢川右岸にあり、現在はほとんどが荒地になっている。

スミダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①スミ（各）は「曲がり角」をいい、ダはダ（処）。スミダとは「森下沢川が縁を曲流しているところ」をいうか。

②スミダとは、ス（砂）・ミ（廻）・ダ（処）か。すなわち、スミダとは「砂地で川が屈曲しているところ」か。

全国地図には、スミダ地名は5ヶ所にある。

【久保】

クボ。

久米の中尾丘陵の北麓にある小さな小字である。

クボとは「窪地」をいう。

全国地図には、クボ地名は、中・大字として265ヶ所にも記載がある。

【恋ま勢・恋ませ】

コイマセ。

この小字は、久米の中尾丘陵の北向きの傾斜地に二ヶ所、堂ノ上丘陵の北向き傾斜地に三ヶ所分布している。

コイマセとは何を意味しているのだろうか。分からない小字であるが、不安ながら二説を挙げたい。

①コイは動詞コユ（越）の連用形コエの転訛した語で、コシ（越）と同義であるといい、マセはマ（真）・セ（瀬）で「瀬になった所」をいう（以上は語源辞典）。まとめると、コイマセとは「瀬を越えた場所」をいう。それがどういうことなのかは不明である。中尾丘陵の場合の瀬は森下沢川であり、堂ノ上丘陵の場合は釜屋川ということになる。

②コイは動詞コユ（臥）の連用形で「転ぶ」意から、「斜面」をいう（語源辞典）。

マセはマセ（馬柵）で「放牧場などで馬が外に出ないように横木を渡して作った柵」（国語大辞典）をいう。すなわち、コイマセとは、「放牧場の柵のある斜面」であろうか。

全国地図には、コイマセ地名は載っていない。

【く祢そへ】

クネゾエ。

この小字は、久米の中村境に近い低地にあり、現在は田んぼになっている。

クネゾエとは何か。これも二説を挙げる。

①クネは「土手」をいう（語源辞典）。クネゾエとは「土手に沿った低地」をいうのだろうか。この土手は猪垣かもしれない。

②クネは「竹などを編んだ垣根」（国語大辞典）をいう。すなわち、クネゾエとは、「垣根に添った所」か。あるいは、コイマセ小字に絡んだ牧場に関わっているとも考えられる。

全国地図には、クネゾエ地名は中・大字として、1ヶ所に挙げられている。

【柿ヶ坪】

カキガツボ。

この小字は、久米の中村境にある。曲流する森下沢川右岸になる。

カキガツボとは何か。

カキは動詞カク（欠）の連用形の名詞化した語で「浸食地形」をいい、ツボは動詞ツボム（窄）の語幹で「窪地」をいう（以上は語源辞典）。従って、カキガツボとは「浸食されたところのある窪地」であろうか。森下沢川の堤防が決壊したこともあったのかもしれない。

全国地図には、カキガツボ地名はひとつも記載が無い。

【東ノ間】

ヒガシノマ。

この小字は、久米北平の東部で中村境にあり、現在は荒地と水田になっている。

ヒガシノマとは何か。

ノマはヌマ（沼）が転訛した語で「湿地。沼地」をいう（語源辞典）。すなわち、ヒガシノマとは、「東の方にある湿地」を意味するのであろう。基準になるのは北平の中心地か、光明寺か。

全国地図には、ヒガシノマ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「東野間」の字が宛てられている。

【上ノ原】

ウエノハラ。

この小字は久米北平の東部にある。

ウエノハラとは、「高い所にある平坦地」を意味するのであろう。中尾丘陵の東の末端部の頂上部が広い平坦地になっている。

全国地図には、ウエノハラ地名は81ヶ所も中・大字として挙げられている。

【平林】

ヒラバヤシ。

この小字は、久米北平のウエノハラ小字の南東隣にある。丘陵先端部の傾斜地になっている。

ヒラバヤシとは何か。ヒラは黄泉平坂のヒラで「傾斜地」をいい、ハヤシ（林）は「樹木の生えているところ」である。すなわち、ヒラバヤシとは「樹木の生えている傾斜地」をいう。植林地の可能性もある。

全国地図には、ヒラバヤシ地名は、中・大字として41ヶ所に挙げられている。

【井下】

イノシタ。

久米北平のウエノハラ小字に囲まれていて、現在は住宅地になっている。

イノシタとは何か。念のために二説を挙げたい。

①イノシタといえば、一般的には「流水

の下側」をいう。道路に沿った上流側には今でも水田はあるが、イノシタ小字まで流れていたのかどうかは、はっきりしない。

②そこで念のために、もう一つの仮説を提示したい。イノはイ（接頭語）・ノ（野）で「少し高くなっている平坦地」をいう（語源辞典）。ウエノハラ小字のことをいう。以上から、イノシタとは「少し高くなっている平坦地の下の方の土地」か。

全国地図には、イノシタ地名は載っていない。

【榎坪】

エノキツボ。

この小字は久米北平の東部にあり、中尾丘陵の北東山麓になる。

エノキツボとは何を意味するのか。三説を挙げておきたい。

①ノキは伊那郡や水窪で「家の裏手の土地」をいう（国語大辞典）。エはエ（家）で、ツボは動詞ツボム（窄）の語幹で「窪地」をいう（語源辞典）。以上から、エノキツボとは、「家の裏手の窪地」をいうか。この小字の西側の道路に添って住宅が並んでいる。それらの家々の裏手のことをいうのかもしれない。

②エノキはエ（江）・ノキ（抜）で、近くを流れる森下沢川の土手が切れたことがあったかもしれない。すなわち、エノキボラとは「川が溢れだして崩れたことのある窪地」をいうか。

③エノキはニレ科の落葉高木で、自生していたのかもしれない。榎は一里塚や道祖神の傍に植えられる神聖な樹であり、若葉は食用になり、果実は子どもたちが好んで食べたという。エノキツボとは「榎が自生していた窪地」か。

全国地図には、エノキツボ地名は記載されていない。

【家ノ木】

イエノキ。

久米北平の道を挟んでウエノハラ小字の下側にあり、現在は住宅が並んでいる。

イエノキはイエ(家)・ノキ(軒)で「家の軒下になっている土地」をいうのであろう。

全国地図には、イエノキ地名も載っていない。

【保た添】

ホタゾイ。

この小字は、久米北平の中村境にあり森下川右岸になっている。

ホタゾイとは何か。ホタは「土手」のこと(語源辞典)。ホタゾイとは「土手に添った土地」をいうか。ホタは森下沢川の堤防か自然堤防をいうのであろう。

全国地図には、ホタゾイ地名も記録されていない。

【洞口】

ホラグチ。

この小字は、久米北平の上ノ原舌状台地の麓にある。

ホラグチとは何を意味するのか。

ホラには「山などの崩れたところ。崖」の意もある(国語大辞典)。グチはフチ(縁)に通じ、「端。へり」をいう(語源辞典)。

以上から、ホラグチとは「崖地の縁になっている場所」をいうのであろうか。

全国地図には、ホラグチ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【洞田】

ホラタ。

この小字は、金屋川が開析した谷底部にある。現在も大部分が水田になっている。

ホラタとは「谷のなかにある田んぼ」を意味するのであろうか。

全国地図には、ホラタ地名は1ヶ所が、中・大字として記録されており、「洞田」の字が宛てられている。

【平畑】

ヒラハタ。

この小字も、久米北平の上ノ原舌状台地の南麓の傾斜地末端部にある。

ヒラは黄泉平坂のヒラで「傾斜地」をいい、ハタはハタ(端)で「末端部」をいうのであろう。

以上から、ヒラハタとは「傾斜地の末端部」を意味するのであろう。

全国地図には、ヒラハタ地名は、12ヶ所に中・大字として挙げられており、うち11ヶ所は「平畑」の字が宛てられている。

【林ノ下】

ハヤシノシタ。

この小字も、久米北平の上ノ原舌状台地の南側傾斜地の末端部にある。

ハヤシノシタとは「樹木の生えている土地の下側」をいうか。

全国地図には、ハヤシノシタ地名は記載が無い。

【矢臺】

ヤダイ。

この小字は、久米北平の上ノ原舌状台地の南東側傾斜地にある。

ヤダイも分かりにくい地名。ヤはイハ(岩)の約で「小石まじりの地」を、ダイは「台地」をいう(以上は語源辞典)。従って、ヤダイとは「小石まじりの台地」を意味するか。

ヤダイ(夜台)には「永眠する所」の意もあるが(国語大辞典)、この小字付近には墓地は無い。

全国地図にはヤダイ地名は3ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【坂所】

サカドコロ。

この小字は久米の釜屋川の谷底部に2ヶ所ある。かつては繋がっていたものと思われる。

サカドコロとは、「坂道に入るところ」を意味するものと思われる。ぴったりとした解釈ではないが、他には考えつかない。

全国地図には、サカドコロ地名は見当たらない。

【いんで】

インデ。

この小字は、久米の釜屋川周辺に四ヶ所ある。

インデとは何か。二説を挙げる。

①インデ=ユンデ（左手）は「犬追物の時、左方に犬を受けてその犬の左を射ること」という（国語大辞典）。騎射の練習だという。従って、インデとは「騎射の練習をする場所」であろうか。

②インデーインデン（隠田）と転訛したのであろう。インデン=オンデンで、「中世・近世に、国家や領主に隠して租税を納めない田地」をいう（広辞苑）。つまり、インデとは「隠田のあるところ」をいう。一ヶ所に現在、水田のないところがあるので気になるが、小字発生時には四ヶ所が繋がっていた可能性もある。

全国地図には、インデ地名は記載されていない。

【社口・社口平】

シャグチ・シャグチダイラ。

これらの小字は、久米の堂ノ上丘陵の東側斜面に横並びしている。

シャグチとは何を意味しているのか。二説を挙げたい。

①シャはシャ（社）で「お宮」をいい、グチ=クチ（口）で「出入口」をいう。以上から、シャグチとは「お宮への参拝路のあるところ」か。上方の台地上にはドウノウエ（堂ノ上）小字になっており、神社の存在をうかがわせる。

②シャクチ←ジャクチと転じた語で、ジャク（寂）は「山などの崩れた所」をい

う（語源辞典）。関東で多く使われているというが、伊那谷でも使われた可能性はある。ジャ・ザレ・ゾレと通じるので。従って、シャグチとは「崩れた場所のある所」を意味するのかもしれない。

シャグチダイラのダイラは「山の中腹から麓のあたり」をいう（国語大辞典）。すなわち、シャクチダイラとは①「お宮の参道がある傾斜地の中腹から麓のあたり」をいうか、②「崩れ地のある中腹から麓のあたり」を意味するのであろう。

全国地図にシャグチ地名は無い。

【福面】

フクメン。

この小字は、久米の堂ノ上丘陵の北東麓にあり、釜屋川流域の平地と傾斜地にある。

フクメン（福面）には「神仏への供物や貴人の食膳に息がかからないように顔面を覆い包む」（広辞苑）という意味があるが、地名とは繋がりにくいので、ここでは、採り挙げないことにする。

では、フクメンとは何をいうのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①フクは動詞フクル（脹）の語幹で「（河流、山裾などの）脹らんだ所」をいい、メンはべ（辺）の転じた語。以上から、フクメンとは「（釜屋川の）河が大きく曲流している辺り」をいうのであろうか。ただし、小字名発生時に、果たして釜屋川が現在のような流路であったかどうかは不明である。

②フクはフケ（沮）の転訛した語で「湿地」をいう。すなわち、フクメンとは「湿地になっている面」をいうか。

全国地図にはフクメン地名は無い。

【坂尻】

サカジリ。

この小字は、久米の上ノ原丘陵の南西部山麓にあり釜屋川右岸になる。

サカジリとは、字面の通りで、「傾斜地の末端部になる平坦地」であろうか。

全国地図には、サカジリ地名は中・大字として、4ヶ所にあり、いずれも「坂尻」の字が宛てられている。

【三月田】

ミツキダ。

この小字は、久米の堂ノ上丘陵北麓で釜屋川右岸の低地にある。現在は荒地の部分が多い。

ミツキダとは何か。

ミツキダはミ(水)・ツキ(付)・ダ(処)で、「(釜屋川の)川沿いの地」をいうのであろう。

全国地図には、ミツキダ地名は記録されていない。

【後口】

ウシログチ。

この小字は、久米の上ノ原丘陵の南西側傾斜地にある。

ウシログチとは文字通りに解釈すれば「後側にある出入口」になる。基準になるのは寺社であろうが、現在、上ノ原丘陵にあるお宮といえ、氏神らしい祠はあるが、これが北東向きになっていることは考えにくい。少し遠くなるが、南の谷を越えた堂ノ上丘陵にあったお宮(久米八幡社であろうか)であれば、辻褄は合うがどうであろうか。

全国地図には、ウシログチ地名は載っていない。

【砂田】

スナダ。

この小字は、久米の上ノ原丘陵の南西側山麓で、釜屋川が中を流れている。

スナダとは、字面の通りで、「砂地の田んぼがある所」をいう。

全国地図には、スナダ地名は16ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「砂田」の字が宛てられている。

【なきの上】

ナギノウエ。

この小字は、久米の中尾丘陵(上ノ原丘陵)の南側斜面にある。

ナギノウエとは「崩壊地の上のところ」をいう。ナギは動詞ナグ(薙)の連用形が名詞化した語である(国語大辞典)。

【宮づるね・宮ツルネ】

ミヤヅルネ・ミヤツルネ。

久米のミヤノシタ小字の東西の両側にある。西側の「宮づるね」小字には、久米の八幡社が鎮座する。

ミヤヅルネとは「お宮のところにある尾根」をいうのであろう。丘陵の頂上部は平坦になっていて、側稜が延びている。それをツルネと呼んだのであろう。

全国地図には、この地名は無い。

【宮ノ後】

ミヤノウシロ。

この小字は、久米の宮ノ下丘陵の北側の急傾斜地にある。

ミヤノウシロとは、「お宮の裏側になる北側の土地」である。お宮とは久米八幡社のこと。

全国地図には、ミヤノウシロ地名は、中・大字として3ヶ所に挙げられている。

【町張】

マチハリ。

この小字は、堂ノ上・宮ノ下丘陵の北麓で釜屋川の対岸の谷底部にある。

マチハリとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①マチは「区画された田地」で、ハリ(張)は「張り出した所」をいう。すなわち、マチハリとは、「田地が張り出したようになっている所」をいうか。田んぼが山稜の方へ張り出して、山麓線が引き込んだように凹んでいる。

②マチはマチ(襜)で袴の内股部分のことで「山間のかくれ地」をいう。ハリは

ハ（端）・リ（接尾語で「場所」を示す）で、縁をいうか。以上から、マチハリとは「谷底部の縁にある山間のかくれ地」をいうのであろうか。

全国地図には、マチハリ地名は記録されていない。

【さつま】

サツマ。

この小字は、釜屋川の谷底部にあり、現在は水田地帯になっている。

サツマとは何を意味するのか。語源辞典に依りつつ二説を挙げる。

①サツ←サシと転訛したもので、「真っ直ぐに伸びた状態」をいい、マ（間）は「場所」をいう。以上から「畦畔などが真っ直ぐに延びているところ」をいうのであろうか。やや甘いかな。

②サツ←サトの転じた語で、「山。谷」に対して「山麓。平野部」をいい、マはヌマ（沼）の上略形。すなわち、サツマとは「山麓の平野部にある湿地」をいうか。

全国地図にはサツマ地名は、中・大字として3ヶ所が挙げられている。

【折敷面】

オリシキメン。

久米の釜屋川の谷底部から北側の斜面に上りかかった緩傾斜地とその北東方向の二ヶ所にある。

オリシキメンとは何をいうのか。二説を挙げる。

①オリ（降）は「傾斜地」をいい、シキはス（砂）カ（処）で「砂地」をいい、メン（面）はベ（辺）の転訛した語（以上は語源辞典）。従って、オリシキメンとは「傾斜地で砂地の辺り」をいうのであろうか。

②オリシキは動詞オリシク（折敷）の連用形が名詞化した語で「木の枝や草などを折りにとって敷く」ことをいう（国語大辞典）。メン（面）は「区画」のこと。以

上から、オリシキメンとは「枝や草を折って敷き詰めた区画のある所」をいう。つまり刈敷田のことをいうのではないだろうか。しかし、北東側のオリシキメン小字については当てはまらない解釈になるが、小字名発生当時にはこれら二つの小字が繋がっていたとすれば、成立する。

全国地図には、オリシキメン地名は無い。

【狐洞】

キツネボラ。

この小字は久米の中尾・上ノ原丘陵の南側斜面にある。

キツネボラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①キツネボラとは、字面の通りで「狐が棲息している洞」であろうか。

②キツネ←キツレ←クヅレ（崩）と転訛した語で、「崩壊地形」を示すという。以上から、キツネボラとは「崩崖のある洞」であろうか。急傾斜地があつて、崩れやすい場所ではある。

【堂ノ北】

ドウノキタ。

この小字も久米の中尾・上ノ原丘陵の南側斜面にある。

ドウノキタとは「御堂の北の方にある土地」をいう。御堂とは中尾・上ノ原丘陵にある久米の八幡社を指しているのであろう。

全国地図には、ドウノキタ地名は記載が無い。

【仲田洞】

ナカタボラ。

この小字は久米の中尾・上ノ原丘陵の南側傾斜地にあるキツネボラ小字に囲まれている。

ナカダとは、一般的には「中心になる所」を意味するが、この小字の位置で、

何の中心になるのかははっきりしないので、この解釈は採らないことにする。

ナカダ←ナ（接頭語）・カタ（肩）と転じたもので、カタ（肩）は「山や丘の頂上からやや下の傾斜度の変わる部分」をいう（語源辞典）。従って、ナカダとは「丘陵の中腹部にある小さな谷」を意味するのであろう。

全国地図には、ナカタボラ地名は載っていない。

【石原坂】

イシハラザカ。

この小字も久米の中尾・上ノ原丘陵の南側の傾斜地にあり、ワシオボラ小字に囲まれている。

ハラはハラ（原）で「山腹」をいうか。イシハラザカとは「山腹にある小石まじりの坂道」をいうのであろうか。

全国地図には、イシハラザカ地名も記載が無い。

【岡田】

オカダ。

この小字は釜屋川氾濫原の微高地に二ヶ所あり、現在はいずれも居住地になっている。

オカダとは「乾田で二毛作が可能な、いい田んぼ」を意味するものと思われる（語源辞典）。まだ上流側の洞に、今なお水田があることから、単なる畑ではないと考えられる。

全国地図には、オカダ地名が中・大字として64ヶ所に挙げられており、うち「岡田」の字が宛てられているのは62ヶ所に及ぶ。

【千原・ちはら・チハラ】

チハラ。

これらの小字は、釜屋川上流部の谷にある。

チハラとは何か。二説を挙げておく。

①チハラ（茅原）で「チガヤの多く生え

た所」（広辞苑）である。チガヤとは、イネ科の多年草で、各地の草地や荒地に群生する。高さは60cmほどになる。花穂はツバナといい、子どもの頃はよく食べた記憶がある。以上から、チハラとは「イネ科のチガヤがよく生えていた所」をいうのであろうか。

②チはミチ（道）の上略形（語源辞典）。ハラは「山麓付近の緩傾斜地」としておきたい。以上から、チハラとは「あちこちに道が通じている山麓付近の緩傾斜地」をいうかもしれない。

全国地図には、チハラ地名は、中・大字として16ヶ所に挙げられている。

【戌山】

イヌヤマ。

この小字は釜屋川の氾濫原にあり、現在は水田になっている。

イヌヤマとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①イヌはイ（接頭語）・ヌ（沼）で、「湿地」をいい、ヤマは「耕作地」のこと。以上から、イヌヤマは「湿地にある耕作地」をいうか。

②イヌ（戌）は十二支で西北西の方角をいう。すなわち、イヌヤマとは「（お宮のある「堂ノ上」小字からみて）西北西の方にある耕作地」とも考えることができる。

全国地図には、イヌヤマ地名は、8ヶ所に中・大字として記載がある。

【十王前】

ジュウオウマエ。

この小字は久米の釜屋川氾濫原にあり、八幡社丘陵の北麓になる。

ジュウオウマエとは「十王堂があった場所の前の方」をいう。

十王堂と称し、中に閻魔や十王・奪衣婆を配した堂が墓地や村境、寺の入り口に建っていることが多い。従って、十王

堂があったのは、この小字の北西方向にあるチハラ小字群の中と思われる。

全国地図には、ジュウオウマエ地名は記録されていない。

【鳥手・とりで・取手】

トリテ・トリデ。

これらの小字は釜屋川右岸の久米八幡社のある段丘面にある。

トリテとは何を意味するのか。語源辞典に依りつつ三説を挙げる。

①テ(デ)は、いずれも「場所」を示す接尾語。ト(処)の転訛した語ともいう。

トリはトリ(西)で十二支の「西」を意味する。従って、トリテ(デ)とは、「西の方にある土地」をいう。すなわち久米の八幡社からみての方向であろう。

②トリは動詞トル(取)の連用形が名詞化した語で「切り取られたような地形」をいう。すなわち、トリテ(デ)とは「浸食作用を受けた土地」であろうか。

③トリートロと転じたもので、「緩傾斜地」をいう。すなわち、トリテ(デ)とは、「緩傾斜地」を意味する。

全国地図には、トリテ地名は無いが、トリデ地名は5ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【千原道下】

チハラミチシタ。

この小字は久米の釜屋川が開析した谷の北側側稜にある。チハラ小字群の中にある。

チハラミチシタとは、「チハラ小字群の中の道路の下側の土地」をいうはずであるが、ミチがはっきりしない。

【屋敷前】

ヤシキマエ。

この小字は久米のチハラ小字群の中にある。

ヤシキマエとは「有力者の屋敷の前方の土地」をいうのであろう。しかし、そ

の屋敷がどこにあったのかは、はっきりしない。

【鳥ノ子山】

トリノコヤマ。

この小字は久米の光地洞の堤の北方にあるテラサカ小字を挟んだ両側にある。

トリノコヤマとは何か。二説を挙げておきたい。

①トリノコとは「鳥のたまご。特に鶏のたまご」をいう(国語大辞典)。トリノコヤマとは、字面の通りで、「卵に似た峰のある山」をいうのであろうか。山頂付近を卵に見立てたか。

②トリノコヤマはトリ(取)・ノコ(拭)・ヤマ(山)。トリは動詞トル(取)の連用形が名詞化した語で「切り取られたような地形」をいい、ノコは動詞ノゴフ(拭)の語幹の清音化で「崩壊地」をいう(以上は語源辞典)。従って、トリノコヤマとは、「崩崖のある山地」を意味するか。

全国地図にはトリノコヤマ地名は、1ヶ所、中・大字として挙げられており「鳥子山」の字が宛てられている。

【光地洞】

コウジボラ。

久米の光明寺の南方にあり、釜屋川上流部の谷底部の突き当たりになる。五ヶ所にあるが、ほぼ纏まっている。

コウジボラとは何を意味しているのであろうか。よくわからないながらも、語源辞典によりながら、三説を挙げておきたい。

①コウジ←コシと転じた語で、コシは動詞コス(漉)の連用形が名詞化したもので「水が湧き出る所」をいう。以上から、コウジボラとは「湧水のある洞」か。

②コウジ←コウチ(荒地)と転じた。コウジボラとは「荒蕪地になっている洞」をいう。茅原になっていたのかもしれない。

③コウジ←コウチ（高地）と転じたか。すなわち、コウジボラとは「周辺より少し高い場所」をいうのかもしれない。

全国地図には、コウジボラ地名は、記載されていない。

【寺坂】

テラサカ。

この小字は久米の光地洞小字に混じって二ヶ所にある。

テラサカとは、字面の通りで、「寺院まで登る坂道」をいう。寺院というのは光明寺である。

全国地図には、テラサカ地名が、10ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「寺坂」の字が宛てられている。

【堤ヶ入】

ツツミガイリ。

この小字は光明寺の南方の山地にある。

ツツミガイリとは「堤の上流部」を意味する。堤は貯水池であるが、ここでは下流側にある光地洞の大きな貯水池を指しているのであろう。

全国地図には、ツツミガイリ地名は記載が無い。

【京ヶ坂屋下】

キョウガサカヤシタ。

この小字は久米のキョウガヤマ小字の南西側の洞にある。

キョウガサカヤシタとは、字面の通りで、「京ヶ山をかすめる坂道にある屋敷の下の方の土地」をいうのであろう。

全国地図には、キョウガサカ地名さえ記載が無い。

【丸山】

マルヤマ。

久米にはマルヤマ小字が二ヶ所にあるが、一つは光明寺の南方にある。

マルヤマとは「頂上部分が丸くなっている山」をいう。この場合、その“丸い山”がどれなのか、はっきりしない。

マルヤマ小字内には無いが、西の方にある標高 674.3m の独立峰である藤平山をいうのか、それとも小字内にある側稜の末端部の小高い所をいうのか、はっきりしない。

いずれにしても、山の神が鎮座する山を指しているのであろう。マルヤマ小字は多い。全国地図には、なんと352ヶ所にマルヤマ地名が、中・大字として挙げられている。

【藤平山】

トウヘイヤマ。

この小字は久米の光明寺の南西方の山地にある。

トウヘイヤマとは何か。二説を挙げる。

①トウヘイは固有名詞か。とすれば、トウヘイヤマとは「藤平が所有する山」ということになる。

②トウは「山頂」をいい、ヘイは「平」の字をあてて音読したもの（以上は語源辞典）。従って、トウヘイヤマとは「頂上部が平らになっている山」をいう。その通りの地形になっているが、「トウ＝山頂」をいうのは、四国・九州であるのが気になる。

全国地図には、トウヘイヤマ地名は無いが、フジヒラヤマ地名は、1ヶ所、中・大字として挙げられており、「藤平山」の字が宛てられている。

【屋下・家ノ前・家ノ下】

ヤシタ・イエノマエ・イエノシタ。

これらの小字は久米の中村境かそれに近い所にかたまっている。

いずれも、有力者の屋敷を基準にして、その土地の位置を示しているものと思われる。近くには、「妙げん」小字や「堂ノ上」小字はあるが、これらの寺社に関わる有力者が住んでいたのであろうか。

【秋葉山】

アキバヤマ。

この小字は、久米の最西部で、竹佐境にある。

アキバヤマとは何か。二説を挙げる。

①アキバヤマといえは、「火伏の神である秋葉権現を祀っていた山」ということになる。しかし、この山中で祀られていたのかどうか、疑問もある。

②アキバはアギ(上)・バ(場)の清音化した語で、「高所」をいう(語源辞典)。つまり、アキバヤマとは、「高い山」をいうのであろうか。標高698.4mで、この近くでは最も高い山になっている。

全国地図には、アキバヤマ地名は13ヶ所に中・大字として記録されており、その全てに「秋葉山」の字が宛てられている。

【葉山久保】

ハヤマクボ。

この小字は、久米の竹佐境に近い山地にある。

ハヤマクボとは何を意味するのか。語源辞典に依りつつ二説を挙げる。

①ハヤマとは「人里近くの浅い山」をいう。すなわち、ハヤマクボとは「窪地もある人里近い山」ということか。

②ハヤマはハヤ(早)・マ(間)で「激しい」の意から「急斜面」をいうこともある。従って、ハヤマクボとは、「急斜面や窪地のある所」を意味するか。

全国地図には、ハヤマクボ地名は記載が無い。

【大久保】

オオクボ。

久米西部の「秋葉山」小字の山頂から東に下る傾斜地にある、あまり大きくない小字である。

オオクボとは何か。これも語源辞典を参照しながら二説を挙げる。

①オオはヲ(峰)の転じた語で、「山の尾根」をいう。オオクボとは、「尾根に近い

窪地のある所」であらうか。

②オオはアヲ(青)の転訛した語で「湿地」をいう。オオクボとは「自然湧水のある窪地」をいうか。

オオクボ地名は、全国地図には337ヶ所と非常に多い。しかし、その多くはここ久米のオオクボとは意味が異なっているように思われる。

【前田】

マエダ。

この小字は久米の光明寺の南の方に3ヶ所あり、現在も一部は水田になっている。

マエダとは、「(光明寺の)前の方にある田んぼ」をいう。光明寺の前の方は南側で、傾斜地の下りになっている。

マエダ地名は、全国的にも、非常に多い。

【お山坂】

オヤマザカ。

光明寺の南の方の小さな小字で2ヶ所にある。

オヤマとは「山を丁寧という語。また、山の尊敬語。信仰の対象とする場合などにいう」(広辞苑)。従って、オヤマザカとは「お寺のある山に登る坂道」をういのであろう。

全国地図には、オヤマザカ地名は記載が無い。

【洞口】

ホラグチ。

この小字は久米光明寺の南の方にある。ホラグチとは、字面の通りで、「行き止まりになっている谷への出入口」をいう。

全国地図には、ホラグチ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「洞口」の字が宛てられている。

【高越】

タカゴシ。

この小字も久米光明寺の南の方に、2ヶ所ある。いずれも谷底部からみれば、

ちょっとした高みになっている。

タカゴシとは、「わずかの高地になっている場所の付近」であろうか。コシ(越)には「側。そば。付近」の意味がある(語源辞典)。

全国地図には、タカゴシ地名は記録されていない。

【今洞】

イマボラ。

久米の光明寺の南方で、ハヤマクボ小字の付近にある、小さな小字である。

イマボラとは何か。分かりにくい地名であり、じっくりしないが、二説を挙げる。

①イマは「新しい」の意か。イマボラとは、「崩壊などがあって新しくできた洞」であろうか。

②イマは形容詞イマシ(忌)の語幹で「忌むべき所」をいう(語源辞典)。すなわち、イマボラとは「忌むべき洞」となるが、実状については未確認。

全国地図には、イマボラ地名は1ヶ所だけ、中・大字として挙げられており、「今洞」の字が宛てられている。

【宝ノ木田】

ハウノキダ。

久米光明寺の南西方向の洞にある。

ハウノキダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ハウはハフ・ハブの転訛した語で「傾斜地」をいう(語源辞典)。キダはキダハシ(階段)のことと思われる。従って、ハウノキダとは「階段状になっている傾斜地」であろうか。

②ハウは動詞ホホケル(蓬)の語幹から「ほつれ乱れた様子」すなわち「崩壊地形」をいう(語源辞典)。以上から、ハウノキダとは「崩崖もある階段状の土地」をいうのかもしれない。

全国地図には、ハウノキダ地名は記録

が無い。

【日カゲ田・日かげ・日蔭畑・日陰・上日陰・下日陰・日か希田】

ヒカゲ・ヒカゲダ・ヒカゲバタ・カミヒカゲ・シモヒカゲ。

これらの小字は、久米の中尾丘陵と北側の森下沢川の谷にある。

ヒカゲについて、国語大辞典は①「日光の当たらない所」には「日陰・日蔭」の字を宛て、②「日の光。ひなた」には、日影」の字を用いている。

しかし、小字の場合は漢字で区別することはできない。「カゲ」とか「かげ」では判断できないからである。

これらの久米のヒカゲ小字群をみても、日当たりのいい所に「上日陰」や「日陰」があり、多くは「日当たりのいい所」ではないかと思われる。

全国地図をいっても、78ヶ所に中・大字として挙げられているヒカゲ地名の中で、「日影」の字が宛てられているのは57ヶ所、「日陰(蔭)」は10ヶ所となっていることも頷ける。

【善門畑】

ゼンモンハタ。

この小字は、久米光明寺南方の山地の傾斜地にある。小さな小字である。

ゼンモンはゼンモン(禅門)とも考えられるが、光明寺が禅宗であったことはないようなので採り挙げない。

ゼンモンハタハゼン(前)・モン(門)・ハタ(端)であろうか。前門は「前の門。おもてもん」(広辞苑)である。従って、ゼンモンハタとは「光明寺の表門の端にある土地」を意味するか。

全国地図には、ゼンモンハタ地名は載っていない。

【阿弥陀前・阿弥陀ノ脇】

アミダマエ・アミダノワキ。

これらの小字は、久米光明寺の南西方

向に側稜をひとつ越えた小扇状地にある。

村誌には「(光明寺の) 境内下段南部に阿弥陀堂があって、重要文化財になっていい阿弥陀如来像を安置してあったが、現在跡方(ママ)がない。恐らく天保以後に焼失したのであろう」とある。その阿弥陀堂があった場所であろう。

阿弥陀堂の前と脇の土地からみて、阿弥陀堂は東面していたのであろう。

全国地図には、アミダマエ地名もアミダノワキ地名も記載されていない。

【西ヶ久保】

ニシガクボ。

この小字は久米光明寺南方の久米川左岸の南東向き緩傾斜地に二ヶ所ある。

ニシガクボとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ニシは動詞ニジル(躓)の語幹の清音化で「崩壊地」をいう。すなわち、ニシガクボとは、「崩崖のある窪地」をいうのであろうか。

②ニシは動詞ニジム(滲)の語幹の清音化した語で、「湿地」をいう。つまり、ニシガクボとは「自然湧水のある窪地」をいうか。

全国地図にはニシガクボ地名は記録されていない。

【家ノ本】

イエノモト。

この小字は久米の久米川左岸の扇状地にある。

イエノモトとは「有力者の屋敷の下の方」をいう。

全国地図には、イエノモト地名は、中・大字として、1ヶ所にだけ記載がある。

【きらら】

キララ。

この小字も久米の久米川左岸の扇状地であり、イエノモト小字の上側になる。

キララとは何か。二説を挙げる。

①キララは雲母のこと。すなわち、キララとは「雲母のある所」ということになる。花崗岩地帯であれば、少し雲母が多ければ目立つのであろう。

②もしかしたら、キララとは「きらびやかな有力者の屋敷」のことかもしれない。可能性は大きくは無いが、挙げておきたい。

全国地図には、キララ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【井戸尻】

イドジリ。

久米の久米川左岸の扇状地にあり、キララ小字の西隣になる。

イドジリとは、「湧水である泉の末端部になっている所」であろう。

全国地図には、イドジリ地名は、中・大字として、5ヶ所に挙げられている。

【神田林ノ越】

ジンデンハヤシノコシ。

この小字は久米の久米川左岸の扇状地最奥部にある。現在は一部が畑になっており、住宅もあるが、田んぼは無い。

ジンデン←ジンデでシミ(浸)・デ(出)の意で「湧泉」をいう(語源辞典)。従って、ジンデンハヤシノコシとは「樹木が群がり生えている所の近くで、自然湧水のあるところ」を意味する。湧泉はここからイドジリまで流れているのであろう。

【たいたり】

タイタリ。

この小字も、久米の久米川左岸にある扇状地の最奥部にある。

タイタリとは何か。タイはタ(接頭語)・キ(泉)で、タは単に語調を整える接頭語、タリは動詞タル(垂)の古い連用形が名詞化した語である(以上は語源辞典)。従って、タイタリとは「泉が垂れ流れている土地」をいうのであろう。

全国地図には、タイタリ地名は記載が

無い。

【南ヶ洞】

ミナミガホラ。

久米の南西端で竹佐境にあり、広大な面積を有する小字である。

ミナミガホラとは何か。二説を挙げる。

- ①ミナミガホラは字句通りに解釈すれば、「南の方にある洞となっている所」となる。しかし、正確には南西方向であるところにひっかかりはあるが、大まかに見て、南の方といえないこともない。基準になっているのは光明寺であろう。
- ②ミナミハ、ミ（接頭語）・ナミ（波）で「波打ったような地形」をいう（語源辞典）。であれば、ミナミガホラとは、「波打ったような地形になっていて、洞のある土地」の意もありそうだ。

全国地図には、ミナミガホラ地名は記録されていない。

【ジゐ畑・ジイバタ】

ジイバタ。

久米光明寺南西部の扇状地に二ヶ所ある。北側の小字は傾斜地、南側の小字は畑になっている。

ジイバタとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

- ①ジイ←シイの濁音化した語で、動詞シフ（癩）の連用形が名詞化した語で「機能が損なわれた状態」つまり「(砂地など)地味の痩せた地」をいう。以上から、ジイバタとは「地味の痩せた畑(集落の端)」であろうか。
- ②シイはシ（石）・キ（泉）で「泉の湧く小石まじりの地」をいう。すなわち、ジイバタとは「自然湧水のある小石まじりの畑(集落端部)」を意味するのかもしれない。

全国地図には、ジイバタ地名もジイハタ地名も記録が無い。

【井ノ上】

イノウエ

この小字は久米南西部の扇状地にあるアミダノマエ小字の東隣にある。

イノウエとは、「自然湧水がながれてくる小川のほとり」をいうのであろう。

全国地図には、イノウエ地名は56ヶ所に、中・大字として記載されている。

【木ノ下】

キノシタ。

久米南西部の扇状地にある。現在は建物と水田になっている。

キノシタとは、字面の通りで、「目立つ樹木のあったところ」であろうか。

全国地図には、キノシタ地名は、中・大字として34ヶ所に記載されている。

【横山・向横山】

ヨコヤマ・ムコウヨコヤマ。

久米の西部にある。久米川左岸には「横山」小字が二ヶ所に、右岸には「向横山」小字が三ヶ所にある。小字の中には飛び地と思われるような小さな小字もあり、地形はわからないところもある。

ヨコヤマとは「横たわる山。横に長く続いた山」(広辞苑)である。側稜の尾根が続いている所をいうのであろう。

ムコウヨコヤマは、「ヨコヤマ小字の対岸にある土地」をいうのであろう。

全国地図には、ヨコヤマ地名は96ヶ所が中・大字として挙げられており、うち94ヶ所に「横山」の字が宛てられている。

【馬坂】

ウマサカ。

この小字は、久米川の支流が南側から本流に流れ込む場所にある。長い谷になっていて、現在、上流側は水田で下流側には複数の居住地がある。

ウマサカは馬が上り下りする坂道ではあるまい。「馬でも使える坂道」としても無理か。

では、ウマサカとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ウマ←ウメと転じたもので、「砂などが堆積した地」をいう。すなわち、ウマサカとは、「土石流などで土砂が堆積している坂道」であろうか。

②馬の牧があった可能性はある。サカは「境界」をいう。従って、ウマサカとは「馬の牧場があった竹佐との境界地」であろうか。

全国地図には、ウマサカ地名が3ヶ所、中・大字として挙げられており、うち2ヶ所には「馬坂」の字が宛てられている。

【つぼ尻】

ツボジリ。

久米の久米川左岸に、二ヶ所ある。

ツボジリとは何か。これも、語源辞典を参考にしながら二説を挙げる。

①ツボは動詞ツボム(窄)の語幹から「窪地」をいい、ジリは形容詞ジルイの略で「水気の多い状態」をいう。以上から、ツボジリとは「湿地になっている窪地」か。

②ジリは副詞ジリジリの「少しずつ」という意から「緩傾斜地」をいう。すなわち、ツボジリとは「緩傾斜地にある窪地」をいうか。

全国地図には、ツボジリ地名は中・大字として2ヶ所にある。

【米山】

ヨネヤマか。コメヤマの可能性もあるが、この場では成立しにくいと判断。

久米南部にあり、西部山地側稜の尾根が光明寺南部に突き出ている先端部の傾斜地にある。

ヨネヤマとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ヨネはヨナと同じで「砂」を意味する。ヨネヤマとは「砂地になっている山地」をいうのだろうか。

②ヨネはヲネ(尾根)の転訛した語で、ヨネヤマとは「側稜が突き出ている山地」かもしれない。

【城山】

ジョウヤマ。

久米のジョウヤマ小字は何ヶ所にもあるが、いずれも久米ヶ所本城かその外城に関わる施設があったところであろう。

【田ノ入】

タノイリ。

この小字は、久米南部の久米川右岸の山地に三ヶ所ある。これらの小字はいずれも傾斜地にあり田んぼは無いが、一ヶ所だけ谷底部を含んだところがあり、そこにはほんのわずかの水田が現在でもある。

タノイリとは、「田んぼの奥地」をいう。すなわち、田んぼに引く水の水源地を意味しているものと思われる。

全国地図には、タノイリ地名は9ヶ所に、中・大字として記録されている。

【百山】

ヒャクヤマ。

久米南部の久米川右岸の山地にある、小さな小字である。

ヒャク←ビャクと清音化した語で、「山崩れ」をいう。千葉・八王子・神奈川・山梨の方言であるという(以上は国語大辞典)。従って、ヒャクヤマとは「崩れ地のある山地」を意味する。

全国地図には、ヒャクヤマ地名は1ヶ所だけであるが、中・大字として記載され、「百山」の字が宛てられている。

【押場】

オシバ。

この小字も久米南部の久米川右岸の山地に、二ヶ所ある。

オシはオシ(押。推。圧)で「押し出された地形」をいう。すなわち、オシバとは「押し出されたような地形になって

いるところ」であろう。

全国地図には、オシバ地名も1ヶ所だけであるが、中・大字として記載があり「押場」の字が宛てられている。

【堀田洞】

ホッタボラ。

この小字も久米南部の久米川右岸に、三ヶ所あるが、うち二ヶ所は小さな小字になっているので、由来・解釈は大きなホッタボラ小字について考えていきたい。

大きなホッタボラ小字は久米川に開口する支流が開析した比較的幅のある谷になっている。現在は、ほとんどが荒地になっていて、ごく一部に畑がある。

ホッタとは「新たに開かれた土地」(国語大辞典)である。すなわち、ホッタボラとは、「新たに開かれた土地のある洞」を意味する。

それは、語源辞典がいうように「隠田」であった可能性もある。

全国地図には、ホッタボラ地名は載っていない。

【渡り瀬】

ワタリセ。

この小字は久米南部の久米川右岸にある。

ワタリセとは「徒渉点になっている浅瀬」を意味する。

全国地図には、ワタリセ地名は記載が無い。

【金座平】

キンザダイラ。

この小字も久米南部の久米川右岸の山地にある。久米ヶ城に近い比較的小さな小字である。

キンザ←キン(金)・サ(砂)と濁音化した語で、「金色をした砂のある場所」を意味する。ダイラ(平)は「山の中腹から麓のあたり」をいう(国語大辞典)。

以上から、キンザダイラとは「山の中

腹部分にあり、金色をした雲母が混じっている砂のあるところ」をいうのでであろう。久米川対岸の左岸にはキララ小字がある。

全国地図には、キンザダイラ地名は記載が無い。

【つく田】

ツクダ。

久米南部の久米川左岸の沿岸にある。現在は水田と畑になっている。

ツクダとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ツクダ(佃)というのは、「中世、荘園領主の直営田」だというのが、はっきりしないこともあるが、可能性はあるので挙げておきたい。

②ツクは動詞ツク(漬)の連用形が名詞化した語で「水につかる所」をいう。従って、ツクダとは「水に漬かりやすい水田のあるところ」を意味するものと思われる。

全国地図には、ツクダ地名は14ヶ所に中・大字として記載されている。

【川原・河原】

カワラ。

久米の南部、久米川の左右両岸に複数の、これらの小字が分布している。

カワラとは「川沿いの平地」(広辞苑)をいう。

全国地図には、カワラ地名は、126ヶ所も中・大字として挙げられている。

【戸井ノ口】

トイノクチ

久米南部の鍋屋川と久米川の間平坦地にある。

トイノクチとは「灌漑用の水の取り入れ口」をいうか。久米川から取り入れた井水を流しているように思われる。

全国地図にはトイノクチ地名は、中・大字として、13ヶ所に採り挙げられて

いる。

【中沼】

ナカヌマ。

久米南部の久米川左岸の扇状地の中心部分にあり、現在は水田になっている。

ナカヌマとは「(扇状地の) 中ごろにある湿地」を意味している。

全国地図には、ナカヌマ地名は8ヶ所の中・大字として記録されている。

【くるミ田】

クルミダ。

この小字も久米南部の久米川左岸の扇状地にある。

クルミは動詞クルム(包)の連用形が名詞化した語で、「谷底の小平地」をいう。すなわち、クルミダとは「谷底の小平地にある田んぼ」を意味するのであろう。

全国地図には、クルミダ地名は中・大字として2ヶ所に挙げられている。

【家ノ下水上】

イエノシタミズカミ。

この小字は、久米の南部、久米川左岸の扇状地にあつて、まとまった水量の流水が流れ出るところにある。

イエノシタとは「有力者の屋敷の下の方」をいう。有力者の屋敷は、イエノモト小字にあつた屋敷であらう。ミズカミは「流水の上流で水源になっているところ」か。

以上から、イエノシタミズカミとは「有力者の屋敷の下の方にあり、纏まった水量の流水が流れ始めるところ」をいうのであろう。

【南澤】

ミナミサワ。

この小字は久米南部の光明寺南側の洞底部の南端部にある。

ミナミサワとは、「(光明寺の) 南にある谷川」を意味するか。“南”の基準は、光明寺か、あるいはその南にあつて光明

寺とミナミサワの間にある「堂」小字群を指すのかははっきりしない。

【井戸入・井戸入向】

イドイリ・イドイリムカイ。

これらの小字は久米南部の久米川の左右両岸にある。イドイリ小字が左岸に、イドイリムカイ小字が対岸の右岸にある。

イドは「イ(井)に同じ」(国語大辞典)という。従つて、イドイリとは「井水の取り入れ口のあるところ」をいい、イドイリムカイは「イドイリ小字の向かい側にある土地」を意味する。

全国地図には、イドイリ地名は記載されていない。

【大桜】

オオザクラ。

久米南部の久米川左岸の扇状地最末端部に、この小字はある。

オオザクラとは何か。二説を挙げる。

①自生の大きな桜があつて、有名だったのかもしれない。オオザクラとは「桜の大樹があつたところ」をいうか。

②サクラのサクは「窪くて長く平らの所」をいい、ラは「場所」を示す接尾語(以上は語源辞典)。オオは美称か。従つて、オオザクラとは「長くて平坦な土地」をいうのであろうか。

全国地図には、オオザクラ地名は5ヶ所の中・大字として挙げられている。

【畑田】

ハタダ。

この小字も久米南部の久米川左岸の扇状地最末端部にある。

ハタダとは何か。二説を挙げておきたい。

①ハタダはハタ(畑)・ダ(処)で、「畑になっている所」をいう。

②ハタダはハタ(端)・ダ(処)で、「(扇状地の) 最末端部の土地」をいうのであろうか。

全国地図には、ハタダ地名は12ヶ所
に中・大字として記載されている。

【多屋】

タヤ。

この小字は久米南部の久米川左岸の沿
岸にある。

タヤとは何か。語源辞典に依りながら
三説を挙げる。

①タヤ←タエ（絶）の転訛した語で「崩
れ地」をいう。つまり、タヤとは「崩れ
地のあるところ」をいうのであろうか。

②タヤはタ（田）・ヤ（菴）で、「湿地で
水田になっているところ」か。

③この地域では聞いたことはないが、も
しかしたら、タヤはタヤ（他屋）で「月
経・出産時に穢れを忌んで籠もる小屋」を
意味するのかもしれない。だとすると、
タヤとは「他屋があったところ」となる。
村誌にある「(久米ヶ城の) 姫様が“つき
やく”の折御出になって静養したところ」
というのは、これであらうか。ただ、村
誌にある桜本は大桜のことかもしれない
が、現在は水田になっていて桑園ではな
い点に疑問が残る。

全国地図には、タヤ地名は74ヶ所が
中・大字として挙げられている。

【駄科山】

ダシナヤマ。

この小字は二ヶ所にある。いずれも久
米南部の久米川右岸の山地にある。一つ
は久米ヶ城山稜の北側の裾部分に、もう
一つは東方の山地にある。

ダシナヤマとは何を意味するのか。語
源辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①ダシは動詞ダス（出）の連用形が名詞
化した語で「押し出されたような地形」
をいい、ナは「場所」を示す接尾語。以
上から、ダシナヤマとは、「(尾根が) 押
し出されたようになっている山」をいう
か。側稜の尾根が突き出るように久米川

の方へ延びている。

②ダは単に語調を整える接頭語で、シナ
はシナ（階）で「階段状の地形」をいう
のであろうか。すなわち、ダシナとは「階
段状の山」の意か。緩い傾斜地だと階段
状に見えるのであろうか。

全国地図には、ダシナヤマ地名は記載
が無い。

【大ジクテ】

オオジクテ。

久米南部の久米川右岸の久米ヶ城山稜
にある。

オオジクテとは何か。オオは美称か。
ジクテは「山地の草生湿地をいう」(国語
大辞典)。以上から、オオジクテは「山地
の草原で湿地になっているところ」を意
味する。北向きの緩傾斜地になっている。

全国地図には、オオジクテ地名もジク
テ地名も記載が無い。

【鷹居リ】

タカオリ。

この小字は、久米の久米ヶ城山稜の山
頂と北に下る尾根筋に、二ヶ所ある。

タカオリとは何を意味するのか。二説
を挙げたい。

①オリは動詞オル（居）の連用形が名詞
化した語で、タカオリとは「鷹の生息地」
を意味するのではないだろうか。久米ヶ
城の間近にあり、鷹狩りに使う鷹には関
心が集まっていたのかもしれない。

②タカは形容詞タカシ（高）の語幹で「高
い所」をいい、オリはオリ（降）で「坂
道」をいう（語源辞典）。以上から、タカ
オリとは、「高い所から下る坂道のあると
ころ」を意味するのかもしれない。この
坂道は久米ヶ城へ出入する道の一つだっ
たのだろうか。

全国地図には、タカオリ地名は1ヶ所
に、中・大字として挙げられており、「高
下」の字が宛てられている。

【藏屋敷】

クラヤシキ。

この小字は久米ヶ城山稜の二つのタカオリ小字に挟まれている。

クラヤシキとは何か。大阪や江戸へ諸大名がつくった藏屋敷ではない。この久米の藏屋敷は領主か惣村が救荒用あるいは何らかの備蓄用に用意した倉庫と管理する屋敷をいうのであろう。

従って、久米のクラヤシキとは「穀物などを備蓄したり一時的に管理したりする倉庫と管理者の住む屋敷のあった所」をいうのであろう。しかし、なぜこの久米ヶ城丘陵の中腹部に倉庫をもってきたのかは、よくわからない。

全国地図には、クラヤシキ地名は中・大字として7ヶ所に記録されている。

【ちけ田】

チケダ。

この小字は久米ヶ城の北東裾部に二ヶ所ある。

チケダあるいはチケについては辞書類には記載が無い。

チケ→ジゲの音韻変化があるので（方言大辞典）、チケ←シケと転訛したのではないかと考えたがどうであろうか。シケは動詞シケル（湿気）の連用形が名詞化した語とする。タはタ（処）であろう。傾斜地で水田は考えられないからである。

以上から、チケダは「自然湧水のある傾斜地」であろうか。

当然であるが、全国地図にチケダ地名は記載されていない。

【扇洞】

オウギボラ。

この小字は久米の久米川右岸にあり、久米川の曲流部になっている。

オウギボラとは、「扇に見立てた地形になっている洞」であろう。この場合は、久米川の谷を「洞」としている。

全国地図には、オウギボラ地名も載っていない。

【田中・田中入】

タナカ・タナカイリ。

タナカ小字は久米の久米川左岸の氾濫原にある小さな小字である。タナカイリ小字は反対側の久米川右岸の傾斜地に三ヶ所ある。

タナカとは、字面の通りで「田んぼの中にある土地」をいうのであろう。現在は住宅地になっている。

タナカイリとは、「（久米川本流から）山地の奥へ入ったところ」をいうのであろう。

【林石】

ハヤシイシ。

この小字は久米の久米川左岸沿岸にある。橋詰橋のあるところ。現在は田んぼになっている。

ハヤシイシとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①イシは「小石まじりの土地」。すなわち、ハヤシイシとは、「木立になっていた小石まじりの土地」か。この小字発生時の様子であろうか。

②ハヤシには「原野」の意もある（語源辞典）。すなわち、ハヤシイシとは「小石まじりの原野」だったかもしれない。

全国地図には、ハヤシイシ地名は記録が無い。

【く柵下】

クネシタ。

この小字は久米八幡宮丘陵の南側の谷底部にあり、県道親田・中村線に接している。現在は住宅地になっている。

クネは「土手」（語源辞典）のこと。従って、クネシタとは「土手の下側の土地」を意味する。丘陵の麓で、二方向を山麓と道路に囲まれた緩傾斜地になっていたのであろう。

全国地図には、クネシタ地名は1ヶ所だけ中・大字として挙げられており、「久根下」の字が宛てられている。

【東】

ヒガシ。

久米八幡社の南側の谷は久米川が開析したのであるが、この谷の東部に、大きいのと小さいのと、二つの小字になっている。

ヒガシとは、「東の方にある土地」をいう。基準にしているのは、久米の中心地か、久米八幡社であろう。

全国地図には、ヒガシ地名が196ヶ所も中・大字として挙げられている。瑞祥地名でもあるのか。

【戀田】

コイダ。

久米の堂ノ上丘陵の東部にあり、その西端は県道親田・中村線に接している。

コイダとは何か。語源辞典に依りながら三説を挙げる。

①コイは動詞コユ（越）の連用形コエの転訛した語。従って、コイダは「越えたところ」をいう。何を越えたのか。「堂ノ上」にあった御堂か、あるいは中村境をいうのであろう。

②コイは動詞コユ（臥）の連用形で「転ぶ」意から、「崩崖」をいう。すなわち、コイダとは「崩崖のあるところ」をいう。

③コイはコ（小）・井（井）で「小川」をいうか。コイダとは「小川が流れているところ」をいうのかもしれない。

全国地図には、コイダ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられているが、宛てられている字は「小井田」となっている。

【林下】

ハヤシタ。

久米の堂ノ上丘陵の南麓にある小さな小字である。

ハヤシタとは「樹木の群がり生えて

いるところの前の方の土地」をいう。樹木の群がり生えている所は神聖な土地でもある。御堂のあった場所に近いのであろう。

全国地図には、ハヤシタ地名は載っていない。

【弥九郎】

ヤクロウ。

この小字は、久米南部の久米川開析谷の東部にある。現在は、ほとんどが田んぼになっている。

ヤクロウとは何か。固有名詞ともとれるが、固有名詞が単独で小字名になっているのは知らないので、他の解釈を示したい。

ヤクはヤグイ（弱い）、ヤグサイ（汚い）などから「湿地」の意もあるのではないか、また、ロウ←ロの長音化した語で「漠然と場所を示す接尾語」である（以上は語源辞典）。従って、ヤクロウとは「湿地になっているところ」をいう。

全国地図には、ヤクロウ地名は記載されていない。

【堂ノ上・堂ノ前・宮ノ下】

ドウノウエ・ドウノマエ・ミヤノシタ。

これらの小字は、久米の堂ノ上丘陵にある。同じ丘陵の西方には久米の八幡社がある。

ドウノウエとは「御堂の上の土地」をいい、ドウノマエとは「御堂の前方の土地」をいい、ミヤノシタとは「御堂の下の方の土地」をいう。

基準になる“御堂”がどこにあったのだろうか。現在、西の方にある八幡社がここにあったのか、それとも他の神社か寺院があったのか。よくわからない。

【大地ヶ久保】

ダイチガクボ。

この小字は、久米南部の中村境の山地にあり、小さな飛び地もある。

ダイチはダイチ（台地）か。台地とは「平野および盆地のうち一段と高い台状の地形」（広辞苑）をいう。久米川開析盆地の東側にある山地の尾根の平らな部分を指すのであろうか。

すなわち、ダイチガクボとは「台地状の尾根に囲まれた窪地のある所」を意味するものと思われる。

全国地図には、ダイチガクボ地名は無い。

【菊菜原】

キクナハラ。

この小字は久米南部の中村境にある山稜である。山頂は平らになっていて、東側は傾斜地である。

キクナハラとは何か。二説を挙げる。

①キクナとは「食用になる草」であろうか。キクナ＝シュンギクで、日葡辞書にあるので、小字発生時には栽培されていたと思われるが、果たして栽培種が地名になりうるのかどうか、という疑問があったので、「キクナを含めて食用になる草」としたが、どうであろうか。以上から、キクナハラとは「食用になる草の野原がある土地」か。

②キク←クキ（岫）と転じた語で「山頂」をいう。ナ←ノ（助詞）と転訛したもの。従って、キクナハラは「山頂もある野原」をいうのであろうか。

全国地図には、キクナハラ地名は記載が無い。

【東ノ山・東山】

ヒガシノヤマ。

この小字は、久米南部の中村境にある。ヒガシノヤマとは、字面の通りで、「（久米中心部からみて）東の方にある山地」を意味する。

全国地図には、ヒガシノヤマ地名は2ヶ所、ヒガシヤマ地名は128ヶ所で、中・大字として記載されている。

【まき・槇山】

マキ・マキヤマ。

これらの小字は久米川左岸沿岸にある小さな小字である。

マキとは何か。二説を挙げる。

①マキは「牧場」をいう。現在の小字では小さすぎるので、この小字は「牧場の入口」あるいは「牧場の管理所」があった所かもしれない。牧場は東に続くヒガシノヤマ・ヒガシヤマにあったとすれば、辻褄は合う。

②マキは動詞マク（巻）の連用形で、「河流の渦巻」をいう（語源辞典）。マキとは「渦を巻いて流れる川のありところ」か。川とは久米川をいう。

全国地図には、マキ地名は84ヶ所に、マキヤマ地名は13ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【六治蔵】

ロクジゾウ。

この小字は、久米八幡社丘陵の南向き急傾斜地にある。

ロクジゾウは「六地藏」であろう。六道の入口にはそれぞれの地藏がいて、次の世に生まれるとき、どこで生まれても救ってもらえるという信仰で、寺の入口・墓・辻や境界地に建てられていることが多いという（仏教民俗辞典）。

この久米のロクジゾウ小字の北端には四つ辻があり、「オノ神」小字も付近に3ヶ所ある。

全国地図には、ロクジゾウ地名は、中・大字として14ヶ所に挙げられている。

【ほこ・ほこ下】

ホコ・ホコシタ。

これらの小字は、久米川左岸の谷底部にある。

ホコ←ボコ（凹）と清音化した語で「窪んでいる所」を意味する（語源辞典）。ホコは「窪地になっている場所」をいい、

ホコシタは「ホコの下の方」をいうのであろう。双方とも、現在は水田になっている。

全国地図には、ホコ地名もホコシタ地名も載っていない。

【神田】

ジンデン。

この小字は、久米の久米川左岸にあって、久米川が開析した谷底部に二ヶ所ある。

神田は「神社に付属してその収穫を祭祀・造営などの諸費にあてる田。古代、律令制では不輸租田とした」（広辞苑）とある。以上から、ジンデンとは「神社領で、米の代金を祭祀・維持に宛てた田んぼで、租税が免除されていた」のであろう。神社とは久米の八幡社のことと思われる。

全国地図には、ジンデン地名は15ヶ所にあり、いずれも「神田」の字が宛てられている。

【深田】

フカダ。

この小字は久米の久米川開析谷の底部に、二ヶ所ある。

フカダとは、広辞苑にあるように「泥の深い田」をいう。

全国地図には、フカダ地名は15ヶ所に中・大字としてあげられており、いずれも「深田」の字が宛てられている。

【西見田】

ニシミダ。

この小字は久米八幡宮丘陵の南麓で、久米川開析谷にあり、現在は水田になっている。

ニシミ←ニジミと清音化した語で、ニジミは動詞ニジム（滲）の連用形が名詞化した語で「湿地」を意味するものと思われる。以上から、ニシミダとは「湿地になっているところ」をいう。

ニシミダ地名は、全国地図には記載が

無い。

【かもん田】

カモンダ。

この小字も久米の久米川開析谷の底部に、二ヶ所あり、現在は田んぼになっている。

カモンダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①令制で宮中の掃除や設営に関わった職制をカモンと呼んだ。それにあやかってカモンを自称したものもいたかもしれない。土地の人ではないと思われる。以上から、カモンダとは、「カモンが所有する田んぼ」を意味するのであろうか。

②カモン←カミ（神）と転訛した語で、カモンダとは、「神の田、すなわちジンデン（神田）」を意味していたかもしれない。

全国地図には、カモンダ地名は載っていない。

【三通田】

ミトオリダ。

この小字も久米の久米川左岸沿岸にある。

ミトオリダ←ミトリダと転訛したのであろうか。ミトリ（見取）とは「江戸時代、収穫高が一定しないため納米高の定めにくい土地を毎年坪刈して、納米高を定めること」（広辞苑）をいう。

従って、ミトオリダとは「見取田」をいう。

全国地図には、ミトオリダ地名もミトリダ地名も記載がない。

【新九田】

シンクダ。

この小字は、久米の久米川開析谷底部にある。

シンクダとは何か。二説を挙げる。

①シンク←ジnk（神供）と転訛した語で、「神前への供物。神饌」をいう（広辞苑）。以上から、シンクダとは「神前に供

える米を収穫する田んぼ」であろうか。
②シンクージングウ（神宮）と転訛したか。神宮とは「神をまつる宮殿」を意味する（国語大辞典）。すなわち、シンクダとは「神社が所有する田んぼ」を意味する。つまりジнден（神田）をいうか。

全国地図には、シンクダ地名は記録が無い。

【才内】

サイウチ。

この小字も、久米の久米川左岸沿岸にあり、現在は水田になっている。

サイウチとは何か。語源辞典に依って二説を挙げたい。

①サイはサ（語調を整える接頭語）・キ（井）で「水のある所」をいい、ウチーフチ（縁）と転じたもの。以上から、サイウチとは、「川に沿った土地」をいうのか。

②ウチはウチ（打）で「切り取られたような地形」をいう。すなわち、サイウチとは「川辺で崩崖のあるところ」をいうのかもしれない。

全国地図には、サイウチ地名は記載されていない。

【橋詰】

ハシヅメ。

この小字は久米の久米川左岸にあり、現在も久米川橋が掛かっている。

ハシヅメとは「橋のたもと」をいう。

【家ノ前道上】

イエノマエミチウエ。

この小字は、久米八幡社丘陵の南麓にある。

イエノマエミチウエとは「有力者の屋敷の前方で、道路の上になる土地」をいうのであろう。有力者の屋敷があったのは、ミヤノシタ小字かキタガイトイエノワキ小字であろうか。

【氏神ノ元】

ウジガミノモト。

この小字は、宮ノ下丘陵の南向きの斜面の中腹から麓までのところにある。

ウジガミノモトとは何か。語源辞典に依りながら、解釈を二つ。

①モトはモト（旧）で、ウジガミノモトとは、「以前に氏神様が祀られていた所」をいうか。今、どこに山神が祀られているのかは分からない。あるいは一族の転居などで、わからなくなってしまったか。

②モトはモト（下）で「山の麓」をいう。すなわち、ウジガミノモトとは「氏神様が祀られていた山の麓」をいうのであろうか。

全国地図には、ウジガミノモト地名は記載が無い。

【外垣外家ノ脇】

ソトガイトイエノワキ。

この小字は、宮ノ下丘陵の南向き傾斜地の中腹にある。

この場合のソトとは「お宮の境内の外側」を意味するのであろうか。であれば、ソトガイトイエノワキとは「境内の外にある有力者の屋敷の脇のところ」をいうのであろう。

【塚本】

ツカモト。

この小字は宮ノ下丘陵の南側斜面の中腹部にある。

村誌によれば、ここには円墳があり石室も残っているが、削られたり埋まったりして室内に入ることはできないという。

従って、ツカモトとは「円墳のある辺り」をいうのであろう。

全国地図には、ツカモト地名は中・大字として11ヶ所が挙げられている。

【林越】

ハヤシコシ。

この小字は久米の各地にある。

ハヤシコシは次のような解釈のどれかに当てはまると思われる。

- ①「樹木の群がり生えた斜面の麓あたり」
- ②「樹木の群がり生えたところの付近」
- ③「自然湧水のある樹木の群がり生えたところ」

全国地図には、ハヤシコシ地名はひとつもない。伊那谷南部の特徴であろうか。

【下輪】

シモワ。

この小字は久米の久米川右岸沿岸に、二ヶ所ある。

シモワとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①シモ（下）は「低地」をいい、ワ（曲）は「川が曲がっているところ」をいう。すなわち、シモワとは「川が曲流しているところにある低地」をいう。

②シモは動詞シモル（滲）の語幹で「湿地」をいう。従って、シモワとは「湿地で、川が曲流している所」をいうか。

全国地図には、シモワ地名は記載されていない。

【山ノ入山ノ尻】

ヤマノイリヤマノシリ。

ヤマノイリ小字もヤマノシリ小字もあるが、BLUEMAPでは地番が見つからない。

ヤマノイリヤマノシリ小字は、久米南部の久米川右岸沿岸にある。

ヤマノイリヤマノシリとは、「山への出入口」を意味するものと思われる。その山は入会権の問題もあるので、東へ向かう中村から上川路に向かう山地ではなく、西に向かう久米南部の山地であろう。

【吉原】

ヨシハラ。

この小字は久米南部の久米川右岸沿岸にある。

ヨシハラは「葦の生い茂った原」をいう（広辞苑）。ここ久米のヨシハラも「葦の生い茂ったところもある土地」をいうのであろう。

ヨシハラ地名は、全国地図に、中・大字として31ヶ所に挙げられており、うち28ヶ所に「吉原」の字が宛てられている。

【こつた】

コツタ。

この小字は久米南西部の久米川右岸沿岸の氾濫原にあり、現在は田んぼになっている。

コツタ←コッタ←コヒタと促音便化しながら転訛したものであろうか。先に扱ったコイダ（戀田）と同じことになるが、コイダの解釈では通らないところもあるので、新たに考えることにした。先のコイダ（戀田）の解釈も見直した方がいいかもしれない。

なお、促音便については、「連用形語尾のチ・ヒ・リがタ行音の助辞テ・タリなどに連なる直前で起こるものが最も多い」（国語大辞典）といわれている。

コツタとは何か。語源辞典によりながら三説を挙げたい。

①コヒは動詞コユ（肥）の連用形コエの転訛したもので「地味の肥えた状態」をいう。すなわち、コッタとは「肥えた土地（田んぼ）」をいう。

②コヒはコ（単なる接頭語）・ヒ（樋）で、「水路。川」をいう。従って、コッタとは「川沿いの田んぼ（土地）」かもしれない。

③コヒ←コヒジ（泥）と転じた語で「泥地。湿地」をいう。コッタとは「湿地にある田んぼ」または「湿地」であろうか。

全国地図には、コッタ地名は1ヶ所に中・大字として挙げられており「乞田」の字が宛てられている。

【ボタ下】

ボタシタ。

この小字は、久米南東部の久米川右岸の氾濫原に、二ヶ所ある。

ボタシタとは何か。二ヶ所で、多少ニュアンスが違っているので、解釈を二通り挙げておきたい。

①上流側のボタシタ小字について。ボタは「田畑の畦」をいう。下伊那郡、愛知県北設楽郡の方言であるという（以上は国語大辞典）。従って、ボタシタとは「田んぼの畦の下の方にある土地」をいう。

②下流側のボタシタ小字について。ボタとは「田畑のふちの斜面の草生地」をいう。飛騨、北設楽群の方言（以上は国語大辞典）。すなわち、ボタシタとは「田んぼの縁になっている傾斜地の下の方にある土地」をいう。

ボタシタ地名は、全国地図には載っていない。ボタについても広辞苑には記載がないので、ボタ・ボタシタ地名は三遠南信地方の特徴的な小字かもしれない。

【家ノ廻リ】

イエノマワリ。

この小字は、久米南西部の山稜の南西末端部の傾斜地にある。

イエノマワリとは、「有力者の屋敷の周辺部にある土地」をいうのであろう。有力者の屋敷跡と目される土地は側稜の中腹部平坦地になっており、現在も住宅地になっている。

イエノマワリ地名は、全国地図には記載が無い。

【井下】

イシタ。

この小字は久米南東部で久米川の左右両岸にある。

イシタとは、「井水や川の下方面にある土地」をいう。上流側のイシタのイは井水であり、下流側のイは久米川と思われるが、確かではない。

全国地図には、イシタ地名は中・大字として2ヶ所に挙げられている。

【下輪ボタ下】

シモワボタシタ。

この小字は久米南東部にあり、シモワ小字とボタシタ小字に接している。

シモワボタシタとは「(久米)川が曲流す場所にある湿地で、畦の下側の土地」を意味するものと思われる。

【井ノ口】

イノクチ。

この小字は久米南東部の久米川右岸で、橋詰橋のところにある。

イノクチとは「井水の取り入れ口」をいう。当然ながら、久米川からの取り入れである。

全国地図には、イノクチ地名は中・大字として35ヶ所に記載されている。

【竹野下】

タケノシタ。

この小字は久米の南東部、久米川右岸の谷底部にあり、現在は水田になっている。

タケノシタとは何か。二説を挙げる。

①タケノシタとは「竹藪の下方の土地」をいうか。竹藪には特別な意味があるのかどうか。もしかしたら藪神との関わりもあるのかもしれない。

②タケはダケと同じように「崩崖」の意がある（語源辞典）。すなわち、タケノシタとは、「崩崖のある急傾斜地の麓」を示しているのだろうか。

全国地図には、タケノシタ地名が中・大字として33ヶ所に載っている。

【西竹】

ニシタケ。

この小字は、久米南東部の久米川氾濫原にあって、タカノシタ小字の上流隣になる。現在は、水田と畑がほぼ半々になっている。

ニシタケとは何を意味するのか。三説を挙げたい。

①ニシは動詞ニジル（躰）の語幹が清音

化した語で「崩崖」をいい、タケは「高くなった所」をいう（以上は語源辞典）。すなわち、ニシタケとは「崩壊地もある微高地」か。

②ニシタケとは「タケノシタ小字の西の方の土地」を指しているのかもしれない。

③ニシは動詞ニジム（滲）の語幹が清音化した語で「湿地」をいう（語源辞典）。従って、ニシタケとは「湿地になっている微高地」をいうのかもしれない。

全国地図には、ニシタケ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられている。

【戸井ノ口】

トイノクチ。

この小字は久米の久米川開析谷の底部に二ヶ所ある。

トイはトヒ（樋）で「水路。川」をいう（語源辞典）。従って、トイノクチとは「井水の取入口」を意味しているものと思われる。

全国地図には、トイノクチ地名は13ヶ所に中・大字として記載がある。

【田中河原】

タナカカワラ。

この小字は、久米の久米川右岸沿岸にある。

タナカカワラとは「周辺が田んぼで川沿いの平地」をいうのであろう。

【大畑・大畑土手】

オオハタ・オオハタドテ。

これらの小字は久米の久米ヶ城丘陵の北端部にある。

まずオオハタとは何か。二説を挙げる。

①ハタは「焼畑」をいうのであろうか。傾斜地で常畑はちょっと考えられない。オオハタとは「大きな焼畑」であろうか。現在のオオハタ小字は大きくは無いが、近くにあるオオハタドテを考えると、小字名発生当時にはもっと広がったのではないだろうか。

②オオはアオ（青）の転じた語で「湿地」をいい、ハタはハタ（端）で「末端部」のこと（以上は語源辞典）。従って、オオハタとは「丘陵の末端部で自然湧水のあるところ」をいうか。

オオハタドテとは「オオハタ小字周辺の崖地」をいうのであろう。

【町はり】

マチハリ。

この小字は、久米の最西部にある洞の扇状地の末端部分にある。現在は等高線上に住宅が並んでいる、その一部分になっている。

マチ（町）は「建物が集まっている場所」をいい、ハリ（張）は「張り出している所」をいう（語源辞典）。つまり、マチハリとは「建物が集まっている扇状地が張り出した所」をいうのであろう。

【鳶木シ】

ガンキシか、あるいはハウキシもあり得る。

この小字は、久米ヶ城丘陵の北麓に近い急傾斜地にあり、久米川右岸になる。

ガンキシとは何か。二説を挙げたい。

①ガンは「山の崩れた所」をいい、キシは「岩壁」をいう（以上は語源辞典）。従って、ガンキシとは「山崩れのある岩壁」をいうか。

②キシには「みずぎわ」の意もある（国語大辞典）。すなわち、ガンキシとは「崩れ地のある水際の土地」をいうのかもしれない。

全国地図には、ガンキシ地名は登録されていない。

【きだはし】

キダハシ。

この小字も、久米ヶ城山稜の北側中腹の緩傾斜地にある。

キダハシはキダハシ＝キザハシで「階段」をいう。すなわち、キダハシとは

「階段状になっている土地」をいう。

全国地図には、キダハシ地名もなぜか記載が無い。

【山（ノ）神・山神洞・山神下・山ノ神平】

ヤマ（ノ）カミ・ヤマガミホラ・ヤマガミシタ・ヤマノカミダイラ。

これらの山神小字群は、久米ヶ城丘陵の北～東向き傾斜地のあちこちに分布している。

ヤマガミは「山を守る神。山を支配する神」（広辞苑）であるが、民俗大辞典には「山に宿り、山林ならびにそこに棲息する生物を領有するとしんじられた神霊の総称。（中略）一般では山の神の名で小祠・磐座・大木または特徴のある樹木を依代としてまつているほか、幣帛または常磐木をもって山中の随所でまつる」とある。

ヤマガミダイラは「山神を祀る緩傾斜地」をいう。後は字面の通りと思われる。

全国地図には、ヤマガミホラ地名は記載が無い。

【新屋敷】

シンヤシキ。

この小字は、久米ヶ所丘陵の北東向き傾斜地の中腹で、緩傾斜地にあり、現在も居住地になっている。

シンヤシキとは、広辞苑にあるように、「新たに開墾した屋敷地」をいうか。

全国地図には、シンヤシキ地名は、中・大字として64ヶ所に挙げられている。

【峰ノ平・峰ノ平山】

ミネノタイラ・ミネノタイラヤマ。

ミネノタイラ小字は三ヶ所、久米ヶ所山稜の北東向き傾斜地の中腹にある。緩傾斜地になっている。ミノノタイラヤマ小字は側稜の尾根末端部に当たる。

ミネノタイラ小字のミネはミネ（峰）ではない。では何を意味するのか。語源

辞典を参照しながら二説を挙げたい。

①ミネはミ（水）・ネ（音）ではないだろうか。すなわち、ミネノタイラとは「（久米川の）川音が聞こえる緩傾斜地」をいうと考えるのはどうであろうか。すぐ近くにはトドメキ小字があるのが支えになる。

②ミネはミ（美称の接頭語）・ネ（根）で、「（尾根の）根元にある緩傾斜地」というのは無理であろうか。

ミネノタイラヤマは、ほぼ字面の通りで「尾根の末端部にある緩傾斜地」を意味するのであろう。

【ひら】

ヒラ。

この小字は、久米に二ヶ所ある。一つは久米ヶ城丘陵北東の山麓に近い傾斜地に、もう一つは久米ヶ城丘陵の尾根に近い東向きの傾斜地にある。

ヒラは黄泉平坂のヒラで、「山稜中腹の傾斜地」をいう。

全国地図には、ヒラ地名は44ヶ所に中・大字として記載されている。

【宮づる衾・宮ツルネ】

ミヤヅルネ・ミヤツルネ。

これらの小字は、久米の八幡宮のある堂ノ上丘陵にあり、ミヤノシタ小字を挟んで、東西の二ヶ所にあり、いずれも丘陵の狭窄部にある。

ヅルネ＝ツルネ（蔓畝）であろう。「蔓のように長く伸びて連なった小高いところ」をいう（国語大辞典）。

つまり、ミヤツ（ヅ）ルネとは、「お宮と尾根続きになっている場所」をいう。お宮とはミヤノシタ小字内にあったと思われるが、それは現在、西側にある八幡社を指すのか、それとも別のお宮なのかは未確認。

【く衾ぎは】

クネギワ。

久米ヶ城丘陵の東側にあり、中腹の北向き傾斜地にある小さな小字である。

クネは「山腹で峰のような形の所」をいう(国語大辞典)。愛知県北設楽郡の方言だという。このことから、クネギワとは「崩壊地が垣根のように見える場所」をいうのであろうか。

全国地図にクネギワ地名は記載が無い。

【山ノ田】

ヤマノタ。

久米ヶ城丘陵の北東部の中腹にある小さな小字である。

ヤマノタとはヤマ(山)・ノタ(野田)であろうか。ノタ(野田)は「湿地」のこと。従って、ヤマノタとは「山地にある湿地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ヤマノタ地名は、中・大字として13ヶ所が挙げられている。

【石田】

イシダ。

米ヶ城丘陵の北東部中腹の北東向き傾斜地にあり、ヤマノタ小字の上隣になる。イシダとは「小石まじりの土地」のこと。

全国地図には、イシダ地名は80ヶ所にあり、うち79ヶ所で「石田」の字が宛てられている。

【とかき】

トカキ。

久米ヶ所丘陵北東部の側稜の中腹にある小さな小字である。

トカキとは何か。トは意味の無い接頭語だという(語源辞典)。トカキとは「崩壊のあった場所」を意味するものと思われる。

全国地図には、トカキ地名は記載されていない。

【棚田・タナダ】

タナダ。

これらの小字も、久米ヶ城丘陵の北東部北東向きの山腹にある。

タナダとは字面の通りで「階段状になっている土地」をいう。

全国地図には、タナダ地名は11ヶ所が中・大字として挙げられている。

【さく里】

サクリ。

この小字は久米ヶ城丘陵の北東末端部にある。

サクリとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①サクは動詞サクル(抉)の語幹で「えぐる」の意、リ(里)は「場所」を示す接尾語。以上から、サクリとは「えぐられた場所のある土地」をいう。

②サは語調を整える接尾語で、クリとは「崖」をいう。すなわち、サクリとは「崖地」を意味する。

全国地図には、サクリ地名は載っていない。

【鷹巣入】

タカスイリ。

この小字は、久米ヶ城から北と北東に延びる二本の尾根の間の谷にある。

タカスイリとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①タカは「高いところ」をいい、スはス(砂)で「砂地」をいう。以上から、タカスイリとは「高い山地に入ったところで、砂地になっている土地」をいうか。

②タカスとは「鷹が棲息しているところ」をいう。従って、タカスイリとは、「谷に入りこんだ場所で、鷹が棲息しているところ」を意味するか。

全国地図には、タカスイリ地名は一つも記載されていない。

【とと免き】

トドメキ。

この小字は久米ヶ城丘陵の東北部の中腹にある。

トドメキとは「(久米川の)川音が届く

場所」を意味する。洪水時には大きな川音が轟いたのであろうか。

全国地図には、トドメキ地名は、1ヶ所だけ中・大字として記録されている。

【那義ノ脇】

ナギノワキ。

この小字は、久米ヶ城の北東部にあり、麓に近い。

ナギノワキとは「崩壊地近くの土地」をいう。隣にサガリ小字があるので、これが崩壊地と思われる。

【サガリ】

この小字も久米ヶ城丘陵の北東部にあり。ナギノワキ小字の隣になる。

サガリは語源辞典には「下がった地形」で「傾斜地」をいうとあるが、たんなる傾斜地というより、「崩壊したばかりの場所」とした方が適切なのかもしれない。

全国地図には、サガリ地名は、8ヶ所の中・大字として挙げられている。

【下垣外・石塚下垣外】

シモガイト・イシヅカシモガイト。

この小字は久米ヶ城丘陵の北東部山麓に近いところにある。

シモヤシキとは「下の方にある有力者の屋敷跡」を指し、イシヅカシモガイトとは「石塚の近くにあるシモガイトの分家跡」をいうのであろうか。

全国地図には、シモガイト地名は、中・大字として7ヶ所に記録されている。

【加門やしき・嘉門屋敷】

カモンヤシキ。

これらの小字は、シモガイト小字の南東隣にある。いずれも山稜末端部の小平坦地にある。

カモンは単なる固有名詞なのか、職制を自ら名乗っているだけの名前なのか、はっきりはしないが、カモンヤシキとは「カモンという名の有力者の住居跡であらうか。

全国地図には、カモンヤシキ地名は記載が無い。

【ひっこ山】

ヒッコヤマ。

この小字は、久米ヶ城丘陵の北東方向の中腹部に2ヶ所ある。

ヒッコヤマとは何をいうのであろうか。難しい地名である。ヒッコヤマ←ヒキコヤマの促音便化した語であらうか。ヒキは動詞ヒク（引）の連用形が名詞化した語で「徐々に低くなる状態」をいい、コ（処）は接尾語で「場所」を示す（以上は語源辞典）。

以上から、ヒッコヤマとは「緩傾斜地になっている山地」をいうのであろう。

全国地図には、ヒッコヤマ地名は記録が無い。

【向山】

ムカイヤマ。

この小字は久米ヶ城丘陵の北東部の中腹部にある。

ムカイヤマとは「向かい側にある山地」をいうのであろう。基準になっているのは北側の谷を越えた所にある堂ノ上丘陵ではなかろうか。

ムカイヤマ地名は、全国地図には、中・大字として、104ヶ所にも挙げられている。

【岩掛】

イワカケ。

この小字は、久米ヶ城丘陵の北東部の中腹部にある。

カケは動詞カク（欠）の連用形が名詞化した語で、イワカケとは「岩が崩れ落ちたことのある所」をいうのであろう。

全国地図には、イワカケ地名が1ヶ所の中・大字として記載されている。

【イリ・いり・大いり】

イリ・オオイリ。

これらの小字は久米ヶ城丘陵の北東中

腹部に集中している。

イリは動詞イル（入）の連用形が名詞化した語で、「谷の奥。沢の上流部」をいう。長野県・愛知県北設楽郡の方言であるという（国語大辞典）。

オオイリは「面積の広い沢の上流部」をいうのであろう。

全国地図には、イリ地名は22ヶ所の中・大字として記載があるが、オオイリ地名は無い。

【坂頭】

サカガシラ。

この小字も久米ヶ城丘陵北東部中腹にあり、イリ小字群に囲まれている。

サカガシラとは、字面の通りで、「谷川の最上流部」を意味すると思われる。

全国地図には、サカガシラ地名は記載が無い。

【七廻り】

シチマワリ。

この小字も久米ヶ城丘陵の北東部中腹にあり、オオイリ小字に接している。

シチマワリとは、「願掛けや災厄除けのために、七ヶ所の要所を廻るか同じルートを七回まわる」ことを指すものと思われる。

桐林にはウスイナナマワリ（臼井七廻り）という小字がある。「臼井〇〇」という場所が七ヶ所にあり、それを廻る行が行われたいたものと思われる。

ここ久米のシチマワリがどのように行われていたのかは、不明である。

シチマワリ(ナナマワリ)については、わずかに国語大辞典にのみ「七度めぐること。また幾度もめぐること」とあるだけで、他には語源辞典類を含めても記録がない。全国地図でもシチマワリ地名やナナマワリ地名は一つも無い。あるいは、伊那谷南部の特徴的な地名かもしれない。

【平林】

ヒラバヤシ。

この小字は久米ヶ城丘陵の北東部の中腹にある。側稜の尾根を含む傾斜地になっている。

ヒラバヤシのヒラは黄泉平坂のヒラで「傾斜地」をいい、ハヤシは「樹木の群がり生えた所」（広辞苑）を意味する。従って、ヒラバヤシとは「樹木の群がり生えている傾斜地」を意味するものと思われる。

【中嶋】

ナカジマ。

久米南部の久米ヶ城丘陵の北東部山麓近くの傾斜地にある。

ナカジマとは、「一部周辺より少し高くなっている所を島に見立てたもの」であらう。

全国地図にはナカジマ地名は中・大字として262ヶ所も挙げられており、非常に多い。

【上垣外】

ウエガイト。

この小字は久米川右岸、久米ヶ城丘陵の北東山麓に近い傾斜地にあり、ナカガイト小字やシモガイト小字が近くにある。

ウエガイトとは、「中垣外や下垣外より少し高い所にある屋敷跡」であらうか。これら、上・中・下の垣外にあった屋敷は本家分家で繋がっていた屋敷と思える。

全国地図には、ウエガイト地名は、2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【白谷】

シロタニ。

この小字は、久米ヶ城丘陵の東部山地に二ヶ所ある。

シロタニとは何か。解釈を二通り。

①シロタニとは字面の通りで「白い砂の谷」をいうか。花崗岩の白砂をいうのであろうか。

②シロは動詞シロク（「散らかす」）の語

幹で「崩壊地形」をいうことがあるという。しかし中国地方の方言だというのが気になる(語源辞典)。これがあり得るとすれば、シロタニとは「崩崖のある谷」という、当たり前すぎる地名になる。

【峰頂山】

ミネチョウヤマ。

この小字は、久米ヶ城丘陵の南東部伊豆木境の近くに三ヶ所ある。

ミネチョウヤマとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

- ①ミネチョウヤマとは、文字通り、「尾根筋の長い山地」か。三ヶ所ともほぼ当てはまるように思えるがどうであろうか。
- ②ミネは「尾根筋」をいい。チョウはチャ(潰)・フ(～のある所)を意味する。チャにはチャブス(潰)の意があるとするのは関東南部だという(以上は語源辞典)。従って、ミネチョウヤマとは「崩崖のある山地で尾根筋に当たる場所」をいうのであろうか。

全国地図にはミネチョウヤマ地名は無い。

【よし原】

ヨシハラ。

久米ヶ所丘陵の東部にあり、洞に沿った長い小字になっている。

ヨシハラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

- ①ハラは「未墾の入会草刈地」をいう。ヨシハラとは「葦の生えている所もある入会草刈地」であろうか。
- ②ヨシには「湿地」の意味もある。葦の生えている所だからか。ハラには「山腹」の意もある。以上から、ヨシハラとは、「山腹で湿地になっている所」をいう。近くにはヤマノカミ小字も複数あるので、あるいは「神聖な地」という意味も含まれているかもしれない。

【橋木山】

ハシキヤマ。

この小字も久米ヶ城丘陵の東部の中腹にある。

ハシキヤマとは何を意味するのか。敢えて二説を挙げる。

- ①ハシキヤマとは字面の通りで「橋にする材木を伐り出していた山」であると、地元ではいう。ここから南隣のヨシハラ小字の谷を流したのであろうか。
- ②ハシはハシ(端)で「丘陵の末端部」をいい、キはキ(牙)で「尖った場所」の意(以上は語源辞典)。従って、ハシキヤマとは「丘陵の末端部で高い峰のある山地」をいうこともあり得る。ここには標高594.4mの周辺より高い峰がある。

全国地図には、ハシキヤマ地名は1ヶ所に中・大字として記載があり、「箸木山」の字が宛てられている。

【くほ山】

クボヤマ。

久米ヶ城山稜の東部末端部にある。

クボヤマとは、文字通り「窪地のある山地」であろう。ここは小さな洞になっている。洞を窪地としてののであろう。

全国地図には、クボヤマ地名は7ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「久保山」の字が宛てられている。

【崖山】

ガケヤマ。

この小字も久米ヶ城丘陵の東部末端部にあり、クボヤマ小字の西隣になる。

ガケヤマとは、字面の通りで「峻しくそばだった場所のある山地」をいう。小字発生当時にあったかどうかはわからないが、現在せもそれらしい場所が残っている。

全国地図にはガケヤマ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「崖山」の字が宛てられている。

【結田山】

ユイタヤマ。

この小字も久米ヶ城丘陵の東部末端部にあり、クボヤマ小字の東隣になる。

ユイタヤマとは何か。ユイダといえば「労力を出し合って共同で田を耕すこと」(広辞苑)をいうが、田んぼのないこの傾斜地では成立しない。

語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ユイはユ(水)・キ(泉)の形の同義反復で「泉の水がある所」をいう。わずかながら湧水があったと思われる。以上から、ユイタヤマとは、「泉の湧く場所のある山地」をいうか。

②ユヒ←ユビ(指)と同じく、オヨブ(及)が語源で、原意は「(何かに届くために)張り出す」意、すなわち「張り出した台地や崖」などに命名しているという。以上から、ユイタヤマとは「泉が湧いている、側稜末端の張り出した部分」をいうのであろうか。地図ではその通りの様子を見ることが出来る。

全国地図には、ユイタヤマ地名は載っていない。

【とつく】

トツクと読むのかどうか。

この小字は久米ヶ城丘陵の東部側稜の末端部にある。

トツクとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①トツはトツ(凸)で「物の表面が部分的に出っぱっていること」(広辞苑)で、クは「場所」を示す接尾語(語源辞典)をいう(語源辞典)。すなわち、トツクとは「尾根が延びているところ」をいうのであろうか。

②語源辞典によれば、トツクはト(利で「峻しい地形」)・ツ(水)・ク(場所)となっている。すなわち、トツクとは「峻しい地形になっており、泉もある所」であらうか。

全国地図にはトツク地名は記載が無い。

【かんざ林】

カンザバヤシ。

この小字は、久米ヶ城丘陵の東部末端部の平坦地にあり、ヤマノカミホコラ小字とヨシハラ小字に挟まれている。

カンザバヤシとは何を意味するのか。カンザ←カミ(神)・ザ(座)と撥音便化した語であろう。カンザバヤシとは「神が鎮座する樹木の群がり生えている場所」であろう。神は「山の神」思われる。カミザには「宮座」の意とすることも考えられるが、宮座以前のことと判断した。

全国地図には、カンザバヤシ地名は載っていない。

【白なぎ】

シロナギ。

この小字は久米ヶ城丘陵東部の側稜にあり、尾根と南側傾斜地になっていて、近くのシロタニ(白谷)小字は、シロナギ側稜の北西側の洞にある。

シロナギとは「花崗岩地帯の白っぽい岩の崩壊地」をいうのであろう。

全国地図には、シロナギ地名は記載されていない。

【山かげ・山蔭無】

ヤマカゲ・ヤマカゲナシ。

これらの小字は久米ヶ城丘陵東部、伊豆木境にある。

ヤマカゲは、広辞苑には「山裾で陰になること。また、その場所」とある。この小字は伊豆木境の側稜の北側の洞にあり、その通りの地形になっている。従って、ヤマカゲとは「洞で尾根の陰になる場所」をいう。

ヤマカゲナシとは、「山陰がない、日当たりのいい場所」を意味する。この小字はヤマカゲ小字の北隣にある。

全国地図には、ヤマカゲ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられているが、宛て

られている字は全て「山影」になっていて、このヤマカゲと由来が異なっているのかもしれない。なお、ヤマカゲナシ地名は全国地図には無い。

【瀧原】

タキハラ。

この小字は、久米ヶ城丘陵の伊豆木境の上流部にある。尾根筋に近い急傾斜地になっている。

タキハラとは何を意味するのか。意外と難しい地名である。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①タキハラを文字通りに解釈すれば、「流の急な谷川のある入会草刈地」ということになる。しかし、尾根に近い場所で、流水があるのだろうかという疑問がある。

②タキには「山腹の急傾斜地」の意があり、この小字には当てはまるのであるが、熊本の方言であるという。それでもタキハラとは「山腹の急傾斜地にある入会草刈地」であるとする考えも挙げておきたい。

全国地図には、タキハラ地名は、中・大字として9ヶ所が挙げられている。

【蟻子山】

アリゴヤマ。

久米ヶ城址の東側傾斜地にある。

アリゴはこの地域の方言でアリ（蟻）のこと。アリゴヤマとは何を意味するのであろうか。

村誌には山本青木のアリゴヅカ小字について「赤蟻のこしらえた蟻の塔がいくつもあったことからおこった字名である」としている。アリゴヤマとは「赤蟻の塔のある所（山地）」であらうか。

【かじが城】

カジガジョウ。

この小字も久米ヶ城址の東側傾斜地にあり、アリゴヤマ小字の西隣になる。

カジガジョウとは何をいうのか。二説

を挙げたい。

①カジガジョウとは「久米ヶ城の外城の一つで、主に鍛冶職人が居住していたところ」としたい。やや無理気味か。

②カジは動詞カジル（搔。嚙）の語幹で「引っ搔かれたような地形」をいう（語源辞典）。すなわち、カジガジョウとは「崩崖のある外城」をいうか。

全国地図には、カジガジョウ地名は載っていない。

【中ノ城】

ナカノジョウ。

この小字は久米ヶ城址に中にある。

ナカノジョウとは「久米ヶ城の中心になっていたところ」を意味するのであろう。

全国地図にはナカノジョウ地名は、中・大字として4ヶ所に記載があるが、うち3ヶ所に「中乃条」の字が宛てられている。

【なりこ山】

ナリコヤマ。

この小字は、久米ヶ城址の東側傾斜地にある。深い谷の先端部に当たる。

ナリコヤマとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ナリは動詞ナル（鳴）の連用形が名詞化した語で、コは「場所」を示す接尾語。以上から、ナリコヤマとは「(川) 音の響く山地」となる。

②コはコウの約で「川」をいう。すなわち、ナリコヤマとは「川音のする山地」をいう。

全国地図には、ナリコヤマ地名は記録されていない。

【細ほら・細洞】

ホソホラ。

この小字も久米ヶ城址の東側傾斜地にあり、深い谷にも懸かっている。ナリコヤマ小字の下流側になる。

ホソホラとは「細長い洞」をいうのであろう。谷は深ければ深いほど細く見えるのではないだろうか。

全国地図には、ホソホラ地名もホソボラ地名も記載は無い。

【水ノ出口】

ミズノデグチ。

久米ヶ城社の北東側傾斜地の谷にある。

ミズノデグチは「川の最上流部で流水の始まる場所」をいうのであろう。利用できる水が出ているところは城にとっては重要な場所であったに違いない。

全国地図には、ミズノデグチ地名は記載が無い。

【コン小洞】

コンコボラ。

久米の中村境に近い山地にある。

コンはコミ（込）の転訛した語で「狭間」をいう（語源辞典）。すなわち、コンコボラとは「山の狭間にある小さな洞」をいうのであろうか。

全国地図には、コンコボラ地名は記載が無い。

【山コセ】

ヤマコセ。

この小字は久米北平の森下沢川沿岸にある。

ヤマコセとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ヤマには「平地の林」の意もあり、コセはコ（小）・セ（瀬）か。すなわち、ヤマコセとは「小川の流域で林になっている所」か。

②コセはコ（川）・セ（瀬）で、ヤマコセとは「山地にある流水」をいうか。

全国地図にはヤマコセ地名は記載が無い。

【小丸山】

コマルヤマ。

この小字は光明寺の東にある。

コマルヤマは「丸山のある場所」をいう。コは単なる接頭語か。標高 622.5m の独立峰がある。これが丸山であろう。神聖な場所とみたい。

全国地図には、コマルヤマ地名は中・大字として4ヶ所に挙げられており、いずれも「小丸山」の字が宛てられている。

【矢台川端】

ヤダイカワバタ。

久米の東端で中村境になっており、境界を森下沢川が流れている。

ヤダイはヤ（菴）・タヒ（平）で、「湿地の野原」をいう（語源辞典）。すなわち、ヤダイカワバタとは、「（森下沢）川の沿岸で湿地の野原」をいうのであろう。

もちろん全国地図には、ヤダイカワバタ地名は載っていない。

【わこの前】

ワコノマエ。

この小字は久米の久米川が開いた谷の西端部にある。堂ノ上丘陵の南側山麓になる。

ワコノマエをは何を意味しているのか。三説を挙げたい。

①ワコは「身分の高い人の男の子ども」をいう（国語大辞典）。この小字の裏側である北方の丘陵には八幡宮が祀られている。八幡宮は応神天皇が祭神になっている。ワコノマエとは「応神天皇のワコである仁徳天皇を祀っている場所の前の方の土地」と考えるのは無理か。八幡宮の境内に若宮でもあれば、この説が浮上するが、どうであろうか。

②ワコ←ワカ（若）の転じた語で、「みずみずしい」から、「湿地」を意味する（語源辞典）。ワコノマエとは「湿地の前の方の土地」をいうか。もたついている感じがする。

③ワカ←ハカと転訛したもので、「崩崖」をいう（語源辞典）。ワコノマエとは、「崩

崖の前方にある土地」をいうのかもしれない。

全国地図には、ワコノマエ地名は記載が無い。

【はんノ木入】

ハンノキイリ。

この小字は、久米の久米ヶ城祉山稜の北東部山麓に近い傾斜地にある。

ハンノキイリとは何か。二説を挙げる。

①ハン←ハニと転訛した語で、「黄赤色の粘土」をいい、ノキ←ヌキ(抜)と転じたもので「崩壊地形」のこと(以上は語源辞典)。すなわち、ハンノキイリとは「粘土質の土地で崩壊地のある、沢の上流部」を意味するか。

②ハンノキはカバノキ科の落葉高木。焼畑では植栽されていたこともある。ハンノキイリとは「榛の木が自生している沢の上流部」をいうのか。

【ひら】

ヒラ。

久米ヶ城祉丘陵東方の傾斜地にある。

ヒラとは黄泉平坂のヒラで「傾斜地」を意味するのであろう。ヒラを「山の一面。山の斜面」の意として使用しているのは、八王子市・山梨・諏訪・岐阜・静岡・北設楽郡などの広範囲に及ぶ(国語大辞典)。

【とちがほら・栃ヶ洞・とちが洞】

トチガホラ。

これらの小字は、久米の伊豆木境とその付近に合計9ヶ所ほどある。

トチガホラとは何か。二説を挙げたい。

①トチは動詞トヅ(閉)の連用形トヂの清音化した語で、「山などが取り囲んでいる所」をいう(語源辞典)。すなわち、トチガホラとは「尾根などに囲まれた洞地」をいうのであろう。この解釈が当てはまらない小字もあるが、小字発生以後に分断さらたためと思われる。

②あるいは、トチとは商物のトチノキに関係している可能性もある。30mほどにもなる落葉高木で、種子は食用に、材は楽器や工芸用に用いられているという。トチガホラとは、「トチノキが自生している洞」をいうのかもしれない。